

伊奈石の採石・加工と多摩川流域の 流通についての研究

The Study of Stonecutting for Ina Stone and of Trade for Ina Stone
Artifacts in the Tama River Region

1 9 9 5 年

十 菱 駿 武
伊奈石研究グループ

伊 奈 石

— 伊奈石の採石・加工と多摩川流域の 流通についての研究 —

The Study of Stonecutting for Ina Stone and of Trade for Ina Stone
Artifacts in the Tama River Region

1995年3月

伊奈石研究グループ

伊 奈 石

— 伊奈石の採石・加工と多摩川流域の流通についての研究 —

目 次

例 言	1
I 伊奈石調査研究の目的といきさつ	樽・十菱 3
II 調査研究の経過	十菱・唐沢 6
III 五日市の自然史・地質・自然環境と伊奈石	樽 13
IV 五日市と横沢入の歴史環境	十菱・石井 23
V 伊奈石石切り場遺跡	十菱・樽 30
VI 伊奈石採集遺物の概要	山梨学院大学考古学研究会 43
VII 伊奈石石造物の流通分布と造立年代	内山・唐沢 57
VIII 伊奈石と古文書	107
1. 伊奈石関係近世文書について	石井 107
2. 網代家文書について	樽 120
IX 伊奈村・横沢村の地名・伝承	中村 122
X 信州高遠石工と伊奈石工	唐沢・樽 125
XI 伊奈石雑感	148
下島、船田、鈴木、大森、福田、栗原、岸、岡本、名越、伊藤、北嶋、小宮山、綱島	
XII 各地の石切り場遺跡と石工	十菱 156
XIII ま と め	十菱 167
XIV 秋川流域エコミュージアム構想と五日市のまちづくり提言	樽 172
参考文献	175
資料編	179
図 版 1～46	203

例 言

1. 本書は、東京都西多摩郡五日市町横沢、三内、高尾、網代、日の出町平井に所在する伊奈石石切り場遺跡群とそこから産出する伊奈石の石造物の流通の歴史に関する調査研究報告書である。
2. 伊奈石の調査研究は、1992年12月～1993年3月の秋留台地域調査研究会伊奈石研究グループによる全労済環境研究助成「圏央道と秋留台計画」横沢入地区の遺跡・文化財調査を1年目に取り組んだ。次いで1993年度・1994年度の2年間にとうきゅう環境浄化財団 多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査・試験研究助成「伊奈石の採石・加工と多摩川流域の流通についての研究」（研究助成金1,996,000）を受けて、伊奈石研究グループ（研究代表者十菱駿武）が1993年4月から1995年4月まで行った五日市町・日の出町を中心とする多摩川流域および全国的な、伊奈石調査の学術研究が展開された。
3. 調査研究参加者
秋留台地域調査研究会 伊奈石研究グループ 樽 良平（八王子実践高校教諭・調査総括、地質学・自然史）十菱駿武（山梨学院大学教授・調査担当者、考古学・歴史学）石井道郎（郷土史家・五日市町文化財保護審議会副会長・地方史・伊奈石工史）唐沢慶行（立川第五小学校・秋川市立前田小学校・写真記録・環境調査）船田雅男（菅生高校教諭・植物学・環境調査）宮下 力（秋川高校教諭・生物学・環境調査）下島 彬（桑都民俗の会）内山孝男（立川第一小学校・第七中学校教諭）中村清作（写真家・絵本作家）福田教将（増戸小学校・小宮小学校教諭）三輪茂雄（同志社大学教授）北垣聰一郎（樞原考古学研究所員）春日太郎（高遠郷土研究会会長）渡辺広勝（テラ・インフォメーション・エンジニアリング）内山玲史・安藤節子・岡田周子・唐澤大輔（五日市の自然を大切にすまちづくりを考える会）大森雄二・鈴木和子・伊東節子（秋川の自然に親しむ会）沖倉利枝・土方安子（主婦）丹羽伸行・和田弘行・斉藤 勉・伊藤 誠（山梨学院大学考古学研究会OB）堀内博雄・伊東文次郎・名越恵志・楠山和幸・綱島勝利・岩田潤也・百瀬潤一・小池 令・北嶋宏一・竹野直己・米津俊尚・若狭国雄・荻原 毅・小宮山博彦・高安美樹・天川和子（山梨学院大学考古学研究会学生）十菱俊英（穎明館高校生）
4. 伊奈石の調査研究にあたっては次の個人・機関にご指導とご協力をいただいた。厚く感謝を表する。
秋川市教育委員会、秋川流域自然保護団体協議会、秋留台地域調査研究会、畔上能力、厚木市教育委員会、五日市町伊奈石採掘遺構調査会（渋江芳浩、宇佐美哲也、松島 満）、五日市町教育委員会、五日市町横沢入地区自然環境調査検討委員会、伊吹町教育委員会（高橋順之）、伊吹町町史編纂室

(福永円澄)、上野原町教育委員会、植松又次、塩山市史編纂室、青梅市教育委員会、大阪府埋蔵文化財協会、大坪庄吾、大和田一紘、小野石材株式会社、小山田了三(山梨学院大学教授・技術史)、春日太郎(高遠町郷土研究会)、環境プロデュース、菊池 実(群馬県埋蔵文化財調査事業団)、北垣聡一郎(榎原考古学研究所・城郭石垣史)、久世仁士(泉大津市織編館)、梶 国男、久保田繁男、栗原良一、小金井神社、後藤和民(創価大学教授・博物館学)、五味洋治(東京新聞記者)、酒井喜久子(アサヒタウンズ記者)、相模湖町教育委員会、佐久間貴士(大阪府教育委員会)、三内石材店、J R 東日本五日市工事事務所(加藤隆、駄道元博)、鈴木淑夫(山梨学院大学教授・岩石学)、瀬川裕市郎(沼津市歴史民俗資料館)、全労災、前場石材店、金色山大悲願寺、高遠町郷土館、立川市歴史民俗資料館、田野倉石材店、多摩中央信用金庫多摩文化資料室(原 嘉文)、角田謙朗、帝京大学山梨文化財研究所、とうきゅう環境浄化財団、東京都教育庁文化課、東京ホテル会議、都政新報(三上真一郎)、長崎県大瀬戸町歴史民俗資料館、西多摩新聞、西多摩自然フォーラム、日本石仏協会、野口義一、橋口尚武、萩原三雄、服部敬史、八王子歴史教育者協議会、樋口孝治、日の出町教育委員会、松原村教育委員会、兵庫県教育委員会、比留間 博(クオリ・民俗学)、廣井敏男(東京経済大学教授・生態学)、藤野町教育委員会、文化財保存全国協議会、文化庁記念物課、戸田村造船資料館、前田清志(玉川大学教授・産業考古学会幹事長)、真野みつこ、三田鶴吉、三輪茂雄、八巻与志夫、山梨学院大学考古学研究会、山梨郷土研究会、山梨県考古学協会、山梨県史編纂室、山梨県埋蔵文化財センター、吉野清一、吉山 寛、渡辺広勝(テラ・インフォメーション・エンジニアリング)

5. 本報告書の図・表・写真の編集・執筆は伊奈石研究会(1995年度より伊奈石研究グループ改称)が会員宅・増戸会館・山梨学院大学考古学研究会で行い、十菱駿武、樽 良平、石井道郎、唐沢慶行、内山孝男、中村清作、樽トキ、堀内博雄、北嶋宏一、小宮山博彦、萩原 毅、綱島勝利等が執筆した。文責を分担の項に記した。
6. 伊奈石研究グループが採集した遺物・記録した図面・写真・石造物調査カードなどの資料は五日市自然史資料室(樽良平主宰)などで保管している。
7. 五日市町は秋川市と合併し、1995年9月1日より「あきる野市」となっているが、本報告書の行政地名・所属等は3月現在の「五日市町」「秋川市」を用いている。

I 伊奈石調査研究の目的といきさつ

樽 良平・十菱 駿武

伊奈石は、秋川流域の東京都西多摩郡五日市町横沢・伊奈を中心に分布する硬質粗粒砂岩である。この伊奈石は室町・戦国・安土桃山・江戸時代に採石され、五輪塔・板碑・石仏・墓石・石臼・手水鉢等として、南武蔵や多摩川流域に流通された。多摩の産業の一つであった伊奈石の名は、信濃伊那郡から来た江戸城改修に関わった石工の伝承にもとづく。伊奈の石切り業は江戸前期には横沢村・伊奈村を中心に栄えたが、江戸中期には衰退し、近代まで細々と続き昭和戦前まで石材運搬のトロッコがあった。今は横沢入に石切り場遺跡が残るのみである。

伊奈石についての研究は、『五日市町史』（石井・県1976）、「多摩郡伊奈の石工」（片山1968, 1971）、「伊奈石のあらまし」（下島1986）、「五日市盆地の新第三系」（樽他1981）、などがあるが、民俗学・文献史学の研究に留まり、採石地の総合研究は皆無であった。

横沢入地区は東京都西多摩郡五日市町横沢に所在する。五日市丘陵の一部、天竺山（標高314m）などの山々に囲まれた沢地である。横沢入の南西から北東にかけて、伊奈石と呼ばれる伊奈砂岩部層の幅70～100mの地層が走っている。横沢入地区は雑木林・照葉樹の植物、キツネ・タヌキ・ムササビ・サンショウウオ・ゲンジボタルなどの多種の動物が生息しており、豊かな自然環境の土地である。この100haのうち63haの土地にJR東日本が主体となり五日市町が主導する850戸の高水準住宅地開発が計画されている。

しかし、横沢入地区には遺跡が2ヶ所しか知られておらず、伊奈石の石切り場も伝承で正確にはつかまれていなかった。そこで横沢入地区の遺跡分布を先行的に確認するとともに、伊奈石の歴史・技術・流通などの研究のために、3年間の予定で自主的な学術調査に取り組むことになった。（十菱）

樽は1950年頃より五日市に自然史博物館を造ることを願っていた。それは、五日市が博物館としての条件を備えていると考えていたからで、周囲の関係者らには機会あるごとに提案して来ていた。

1983年11月1日五日市町郷土館が設立され、その第1回目の五日市町歴史講座の中でこの話をしたことがきっかけになり、その後、この提案は具体化し、当時の栗原町長をはじめとする町当局、町議会も全員賛成で1985年6月8日都立自然史博物館誘致促進委員会（仮称）が発足した。この委員会は今も継続している。委員会は東京都へ働きかけたり、各地の自然史博物館を視察したり、当時の大森昌衛地質学会会長を招いて勉強会を行ったり、動き始めた。

一方、樽は、1985年4月23日、体験学習をもととした東京都自然史博物館（仮称）設立案を作成して、町、町議会、都文化課等、関係者に配り、働きかけてきた。この頃、逼迫していた町財政を考慮して場所を初後沢の一部に限り、敷地面積を最小限にして提案した。

当時、まだ横沢入開発の話は全くなかったので、博物館ができたのちに横沢入などを取り込み周辺へ広げる考えであったが、これは誤算であった。最初から横沢入を含む五日市丘陵全域を提案すべきであったと反省している。

このとき、すでに廃止されていた大久野線の線路敷地買収の話が持ち上がり、町は、博物館に必要な最少面積を国鉄から買い入れた。

五日市側のこのような動きに対し、他市町でも誘致運動をしようとしたが、五日市の自然条件には対抗できないということで身を引いたという話も聞いている。

これに対し、東京都文化課は、1985年8月29日、自然史博物館整備検討委員会を奥富清委員長以下7名で発足させ、10回のうち6回まで「自然史とは何か」を検討することに終始したとのことで、国立も自然科学博物館があるのだから都立自然科学博物館としたり良かろうというものであった。

また、その位置については、西多摩の五日市では距離的に不便であるということであったが、交通の便が良くて人が集中する所であったなら、これほど良く整った自然が今まで残されてはいなかったであろうし、このような場所で自然にふれるからこそ体験学習が可能なのだということを忘れてはならない。それに都心から電車で1時間余という距離は、手頃な行程の場所として推すことができる。 (樽)

「五日市の自然を大切にすまちづくりを考える会」は横沢入地区の環境調査保護活動を1990年以来続けてきたが、1992年秋とうきゅう環境浄化財団主催の見学会に参加した関係者との間で、横沢入の天竺山に伊奈石採石跡があることが知られた。樽と十菱の間で伊奈石の採石場跡を綿密に歩いてみようということになり、秋留台地域調査研究会で分布調査に取り組みはじめた。

1992年度の分布調査で遺跡・自然環境の概要がつかめたので、1993年度から上記財団に申請して、伊奈石の採石場・加工場の全容を非発掘でつかみ、考古学・歴史学・民俗学・地質学・工学的な総合調査研究を行い、あわせて秋留台・多摩川流域での伊奈石石造物の分布を調べ、伊奈石流通圏を明らかにすることにした。 (十菱)

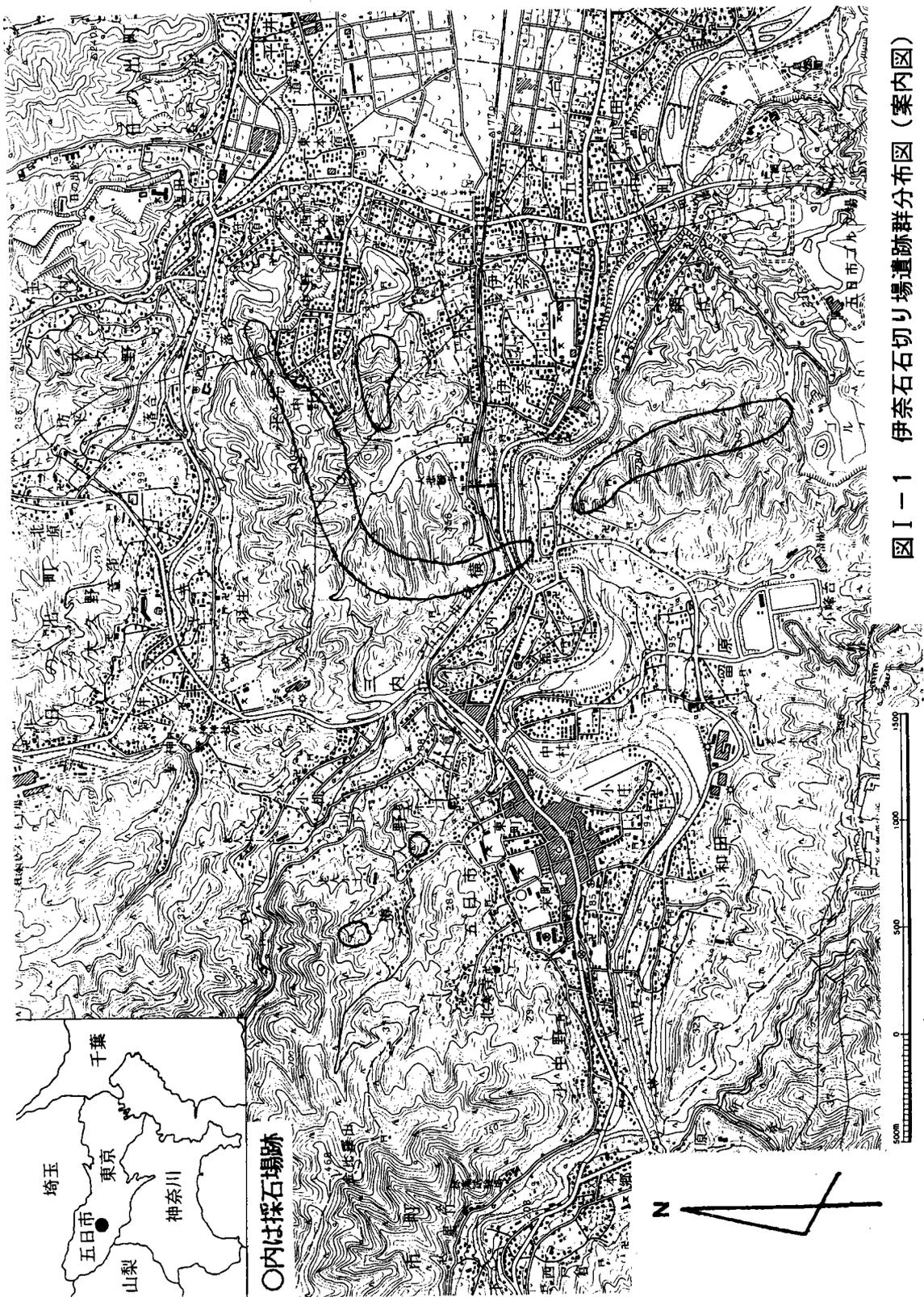


図 I - 1 伊奈石切り場遺跡群分布図 (案内図)

Ⅱ 調査研究の経過

十菱 駿武・唐沢 慶行

1992年度

1992年12月26日から、かねて「五日市の自然を大切にすまちづくりを考える会」が自然環境調査をしてきた横沢入地区の全体調査から始め、冬休み・春休み・休日を利用して、秋留台地域調査研究会に対する全労済環境研究助成「圏央道と秋留台計画」を得て、横沢入地区の遺跡・文化財調査に取り組むことになった。

まず、富田ノ入の加工場テラスの発見をし、天竺山東の石切り場竪坑、露天掘、ズリ場の略測をし、また石垣で囲まれたテラス、山神社の石碑、石臼未成品・墓石未製品・矢穴加工品を発見した。

1993年度

伊奈石の採石・流通の調査研究については、秋留台地域調査研究会伊奈石研究グループ（以下伊奈石研究グループ）が、1993年度・1994年度にとうきゅう環境浄化財団の助成研究を受けた。1992年度以来の横沢入地区の文化財についての分布調査の成果と、五日市町教育委員会の伊奈石採掘遺構調査会が1993年7月～12月に実施した伊奈石分布調査で、伊奈石石切り場遺跡の概要は確認されている。

1993年度には横沢入の伊奈石石切り場遺跡群の分布調査とテラス・石山ノ池の竪坑の代表例の清掃・測量を行い、伊奈石製品の表面採集を行った。また三内の亀ノ甲下の矢穴石の測量・型取り、高尾の法光院跡から南東へ延びる高尾、網代の山と沢をくまなく踏査し、大規模な露頭掘りやズリ、テラスを新発見した。

1994年度

1994年度には五日市町、日の出町の遺跡分布調査を行うとともに、秋川流域から流通拡大した伊奈石石造物を求めて、東京都・神奈川県・山梨県・埼玉県の寺院・神社等の石造物を調査した。石造物調査の方法は、石質・色調・粒度・風化度・包有物（石英の有無）などを肉眼で判定し、伊奈石・七沢石・底沢石など類似する石の標本と対比してルーペ観察をして伊奈石製かどうか判定した。そして伊奈石製の石造物のみを調査カードに略測し、写真撮影や銘文や位置を記録した。しかし伊奈石製品は恐らく数万点を超えるものと推定され、全域の詳細調査には10年以上要すると思われるため、伊奈石流通分布圏の外縁とみられる多摩川下流域の大田区、川崎市や、五日市街道沿いの秋川市、福生市、昭島市、立川市、そして秋川上流の桧原村から浅間峠を越えた山梨県上野原町、神奈川県藤野町などを綿密に歩いた。さらに相模川流域の相模原市、厚木市も見したが、七沢石分布圏であるため伊奈石石造物は全くみられなかった。江戸市内についても墨田区、江東区、港区、文京区の社寺を歩いたが、大悲願寺と関係の深い

寺でも、伊奈石がほとんどであった。

さらに石工と石切り場遺跡について、神奈川県、山梨県、長野県高遠町、滋賀県曲谷石、大阪府和泉砂岩、長崎県滑石製ホゲツ石鍋遺跡などの現地と資料館、石工に当たり、全国的な視野で、伊奈石の特徴と石切り場遺跡と石工技術の異同を明らかにした。

伊奈石研究グループは、1994年8月～1995年3月にこれらの結果に加えて古文書・絵図・地質の補足調査を随時行った。

学習・環境保全活動

2年間の調査中に、石切り場遺跡の見学会や、伊奈石と伊奈石工についての文化講演会を5回以上催し、歴史愛好家や自然保護関係者が多数集まった。とくに伊奈石工の子孫が参加され、家のルーツや地域史の掘り起こしに大きく寄与できた。

また、横沢入地区の環境と文化財の保全については伊奈石研究グループとして、遺跡発見の届出と確認調査の要望を1993年4月に五日市町・東京都教育委員会、文化庁に行った。この結果、横沢入地区の石切り場遺跡については、五日市町が設けた伊奈石採掘遺構調査会（加藤晋平団長）が1993年7月～11月に分布調査を行なった。調査は、環境保全と文化財保護を推進してきた伊奈石研究グループとは連絡なしに進められ、先行する我々の調査を下敷きにしたにも関わらず、学問的なプライオリティ（先取権）を無視する報告書がだされていることはまことに遺憾である。

一方、横沢入の大部分の地権者であり、町の誘致により宅地開発計画を進めてきたJR東日本は、「五日市町横沢入地区自然環境調査検討委員会」（広井敏男委員長）を設け、1994年5月～1995年1月に調査と委員会審議を行った。十菱、唐沢、宮下らはこの委員会に参加し、横沢入の自然・文化財の価値について発言するとともに、自然と共存できる開発計画の事例を視察した。「報告書」（横沢入地区自然環境調査検討委員会1995. 1）では伊奈石遺跡群と「エコミュージアム構想」が明記されている。計画アセスメントに近い先行的な取り組みを試みたJR東日本五日市工事事務所と環境プロデュースの努力は多としたい。横沢入の開発計画については、1995～1996年にかけて、宅地開発と環境保全の方向が決まろうとしており、予断を許さない。

伊奈石研究グループは1995年4月「伊奈石研究シンポジウム」を催して、伊奈石の学問的意義について深めた。これらの結果をもとに1995年4月～7月、本報告書編集作業を行った。（十菱）

伊奈石調査日録

921226	伊奈石石切り場跡調査 横沢入
921231	伊奈石石切り場跡調査 横沢入
930104	岐阜県恵那市博石館、石切り場見学
930106	伊奈石石切り場跡調査 横沢入
930131	伊奈石石切り場跡調査 横沢入
930207	伊奈石石切り場跡調査 横沢入
930213	セスナ飛行調査、撮影（秋留台地域調査研究会） 15名
930214	石切り場跡調査 横沢入富田ノ入奥テラス測量 富田ノ入奥石切り場跡→天竺山石り切場跡→同下ズリ踏査 8名
930228	伊奈石石切り場跡調査 横沢入
930307	第2回秋留台シンポジウム 秋川市中央公民館 テーマ「秋留台開発で豊かになるのか」 参加72名
930314	横沢入下ノ川環境調査 2名 水温測定・カワニナ分布状況観察・カジカ発見
930320	三輪氏他調査視察 横沢入
930321	伊奈石調査 横沢入宮田
930322	横沢入草堂ノ入・宮田レーダー探査、東京都教育庁文化課馬場学芸員横沢入視察
930330	伊奈石調査 天竺山（中村）、日の出団地上（福田、唐沢）
930331	伊奈石調査
930401	東京都環境保全局自然保護部長、環境影響評価部長、都市計画局市街地開発課長と会談（都庁） 文化庁文化財保護部記念物課課長補佐、文化財調査官と会談、JR東日本と会談（国会議員会館）
930404	研究会打合せ
930405	遺跡発見届提出 → 五日市町・東京都、プレス会見
930418	第3回秋留台シンポジウム 秋川市中央公民館 テーマ「流域の開発計画と自然」十菱：伊奈石 参加63名
930507	
）	都政新報15回連載「21世紀の秋留台像めざして」 7名
930625	

930605	大学ワングル関東連合会石切り場案内、石臼未成品採取搬出（樽、福田、中村）
930615	長崎県大瀬戸町 ホゲット石鍋製作遺跡調査
930703	第3回東京ホテル会議 五日市町ファインプラザ、横沢入フィールドワーク
930711	石切り場跡現地見学会・天竺山竪坑矢穴連続痕発見 参加35名
930722	とうきゅう財団助成授与式
930731	三重県 松阪城石垣矢穴資料調査
930804	三内橋下秋川河川敷石切り場跡調査（測量、撮影、矢穴レプリカ採取）
930805	”
930806	”
930807	八王子市西笑院 伊奈石、七沢石石造物流通調査
930817	伊奈石調査 日の出町 宝光寺、平井川伊奈石露頭、薬師堂、平山氏館跡確認
930820	日の出町 子安不動尊石造物調査、隣家搗臼転用つくばい調査、 日の出農協裏沢調査（採石跡無）、川久保家墓調査
930826	文化庁要請（文化財保存全国協議会） 都を通じて文化財・自然の実態把握、調査、体制を作るよう指導との回答
930828	水郷水都全国会議多摩大会フィールドワーク（バスツアー）横沢入見学 20名 桧原村本宿 吉祥寺墓石・五輪塔、春日神社石造物見学
930903	山梨県 甲府城石垣矢穴調査
930904	共産党国会議員団横沢入自然・伊奈石石切り場遺跡視察10名
931027	国分寺恋ヶ窪公民館伊奈石見学会実地踏査
931113	
931118	山梨県甲府市 黒平 矢穴石調査
931120	国分寺恋ヶ窪公民館伊奈石見学会 40名、増戸中学校2年PTAにスライド紹介 20名
931127	第10回草の根運動交流集会バスツアー横沢入見学 45名
931212	伊奈石流通圏調査 川越市 喜多院－松平大和守廟所灯籠、時の鐘－礎石 養寿院－灯籠、蓮馨寺－無縫塔
940103	横沢入釜ノ久保・天竺山西沢・愛宕神社南沢・三内神社下社分布、石造物調査 2名
940130	府中サケの会 横沢入見学（案内 福田）

	伊奈石石造物流通圏調査 武蔵村山市中藤 長円寺
940206	横沢入オオムラサキ越冬幼虫分布調査（西多摩自然フォーラム）
940216	伊奈石石造物流通圏調査 小平市桜堤付近五日市街道沿道（唐澤）
940304	上野寛永寺 分布調査（樽－伊奈石未確認）
940305	伊奈石研究会（増戸会館）
940313	日本野鳥の会奥多摩支部探鳥会 横沢入観察 40名
940319	伊奈石石造物流通圏調査 東久留米市 八幡町2丁目楊柳沢御殿跡石造物群、米津寺 南沢氷川神社－伊奈石臼挽唄あり
940320	草土文化社関係観察グループ 横沢入来訪 15名 案内 6名
940327	横沢入トウキョウサンショウウオ分布調査（西多摩自然フォーラム）
940328	滋賀県大津市 穴太石垣調査
940329	伊奈石調査 高尾地区 ～31 3日間 伊奈の石工ルーツ調査 長野県飯田市（樽）
940401	伊奈石調査 高尾地区 ～3 3日間
940409	野川フォーラム 横沢入来訪
940417	文化講演会（増戸会館）「伊奈石をめぐる」講師十菱
940421	横沢入地区自然環境調査検討委員会
940423	伊奈石流通圏調査 立川・福生・八王子・昭島・秋川：内山個別～941203 26日
940503	伊奈石調査 高尾城山 13名 テラス7か所、古道2か所 矢跡石臼未成品1外・石臼半製品4搬出、確認遺物15
940504	伊奈石調査 五日市町樽地藏、小机福寿院入口石造物、日の出町大久野五輪塔
940505	伊奈石調査 日の出町平井、秋川市瀬戸岡・野辺
940508	横沢入地区自然環境調査検討委員会・現地見学（池ノ入・中央湿地・宮田東沢）
940526	都職労 横沢入訪問 案内岡田
940529	「秋留台の自然」出版記念講演 「秋川谷の三億年」講師樽
940610	大阪府阪南市ミノバ石切り場、弥生博物館調査
940614	三重県志摩民俗資料館調査
940618	都教組・八王子歴教協「江戸の石造物と伊奈石」現地見学会 横沢入見学懇談会 20名
940627	伊奈石流通圏調査 山梨県 丹波山村加茂神社、小菅村田元・川池箭弓神社 小永田・橋立（伊奈石未発見）

940725	伊奈石流通圏調査 山梨県 大月市光照寺・覚宝寺・行願寺・猿橋心月寺 都留市円通院（伊奈石未発見）
940806	横沢入地区自然環境調査検討委員会 ～7 2日間
940808	伊奈石調査大悲願寺文書 絵図他 撮影
940808	ふるさと五日市文化講演会「古文書から見た伊奈石」講師石井
940809	伊奈石流通圏調査 日の出町平井福嶋家・平井宗劔寺高遠石工銘拓本取 松原村時坂島崎家・時坂峠地藏堂
940810	伊奈石流通圏調査 神奈川県伊勢原市 七沢石調査
940811	伊奈石流通圏調査 町田市：福生寺・町田市立博物館・牧野家墓地・大泉寺 他
940812	伊奈石流通圏調査 八王子市滝山城址・青梅市即清寺
940817	高遠出稼石工調査 長野県上伊那郡高遠町：高遠町文化センター 三峯川石切り場跡・春日氏聞き取り
940818	“ 高遠町 春日氏宅石工出稼ぎ文書閲覧・勝間・遠照寺 駒ヶ根市大久保蓮台場・観音寺（十王）
940819	“ 高遠町 水上・黒沢・高遠城跡・桂泉院・北原石材・郷土館 辰野町入沢底（双体道祖神）
940825	神奈川県鎌倉市 国宝館・頼朝墓 鎌倉石調査
940903	伊奈石研究会（増戸会館）
941002	伊奈石分布調査 秋川市多西地区：樽個別 ～941218 6日
941008	伊奈石流通圏調査 松原村 藤原・笛吹・笹平、山梨県 上野原町桐原・西原
941009	“ 松原村 数馬・笛吹・笹平、藤野町、上野原町桐原・犬目
941103	ストーンフェア（千葉市）
941211	大阪市 大坂城石垣、滋賀県伊吹町 曲谷石工・丁場 調査：十菱 ～12 2日間
950104	伊奈石石造物流圏調査 埼玉県秩父市
950122	伊奈石流通圏調査 秋川市多西地区：樽個別 ～950527 9日
950219	伊奈石研究会（増戸会館）
950310	静岡県戸田町 伊豆石丁場調査
950312	伊奈石研究会（増戸会館）
950318	伊奈石流通圏調査 大田区六郷 北野神社・六郷神社・宝珠院・宝幢院・安養寺

950319	“	川崎市	一行寺・平間寺・大楽院・西明寺・泉澤寺
		江東区	弥勒寺・閻魔堂・富岡八幡
950320	伊奈石石造物整理、実測		
950321	伊奈石流通圏調査	川越市	喜多院・日枝神社・浮島神社・川越城本丸御殿 市立博物館・護国神社・氷川神社・八坂神社・東明寺 広済寺・養寿院・時の鐘・蓮馨寺・三明寺・延命寺
950321	伊奈石流通圏調査	飯能市	清泰寺・観音寺・能仁寺・無量寺・寶蔵寺
950322	伊奈石石造物整理、実測		
950326	伊奈石研究シンポジウム 現地見学 参加35名		
950401	伊奈石研究シンポジウム 増戸会館 参加70名		
950402	伊奈石研究シンポジウム (増戸会館) 参加70名		
950403	伊奈石石造物整理 ～6 4日間		
950407	伊奈石研究会 (小中野)		
950416	伊奈石石造物調査 五日市町盆掘地区		

Ⅲ 五日市の自然史・地質・自然環境と伊奈石

樽 良平

1. 地質からみた伊奈石

我々は1992年より3年間、伊奈石について総合調査を行ってきた。そのうち、この項では地質に関連する部分について、地質学的見地から伊奈石の岩質や地層の分布等について考察することとする。伊奈石は、五日市周辺の新生代第三紀中新世の時代に海底に堆積した粗粒の砂岩を指すが、この一帯に分布して石材として利用されたものすべてを、広義の伊奈石と規定することとする。今まで伊奈石は、横沢入周辺に見られる亜角礫の石英粒を含む凝灰質粗粒砂岩層のみが対象として考えられていたが、今回の調査で他の砂岩層からも大量に採掘されていることが判明した。

これらの伊奈石を次の3種に分類する。

- (1) 従来から考えられていた、横沢入周辺の伊奈砂岩部層には含まれた凝灰質粗粒砂岩を狭義の伊奈石と名付ける。
- (2) 網代城山周辺から北側の高尾及び横沢入下ノ川東沢と東の砂沼奥に分布する横沢砂岩泥岩部層中の粗粒～中粒の砂岩を高尾石と名付けることとする。
- (3) 基盤に近い幸神礫層や小庄泥岩部層には含まれた薄い砂岩層に、採石した跡が樽地区で3ヶ所見つかかり、この他にもあると思われる。これらのものを樽石と仮に名付けることとする。

2. 五日市周辺の地質の概要

次に伊奈石層を取り巻く五日市周辺の地質について簡単に述べる。

関東山地の南東縁部にあたる五日市は、五日市盆地を取り囲むように中、古生代の地層が分布し、盆地中央から東には新生代の地層が分布している。しかも、化石を豊富に含んでいるため、それぞれの地層の時代が確認できるので、古くから地学志向の人が多く訪れて有名な地域となっている。

以下時代を追って簡略に説明する。

(1) 古生代石炭紀および二畳紀の地層

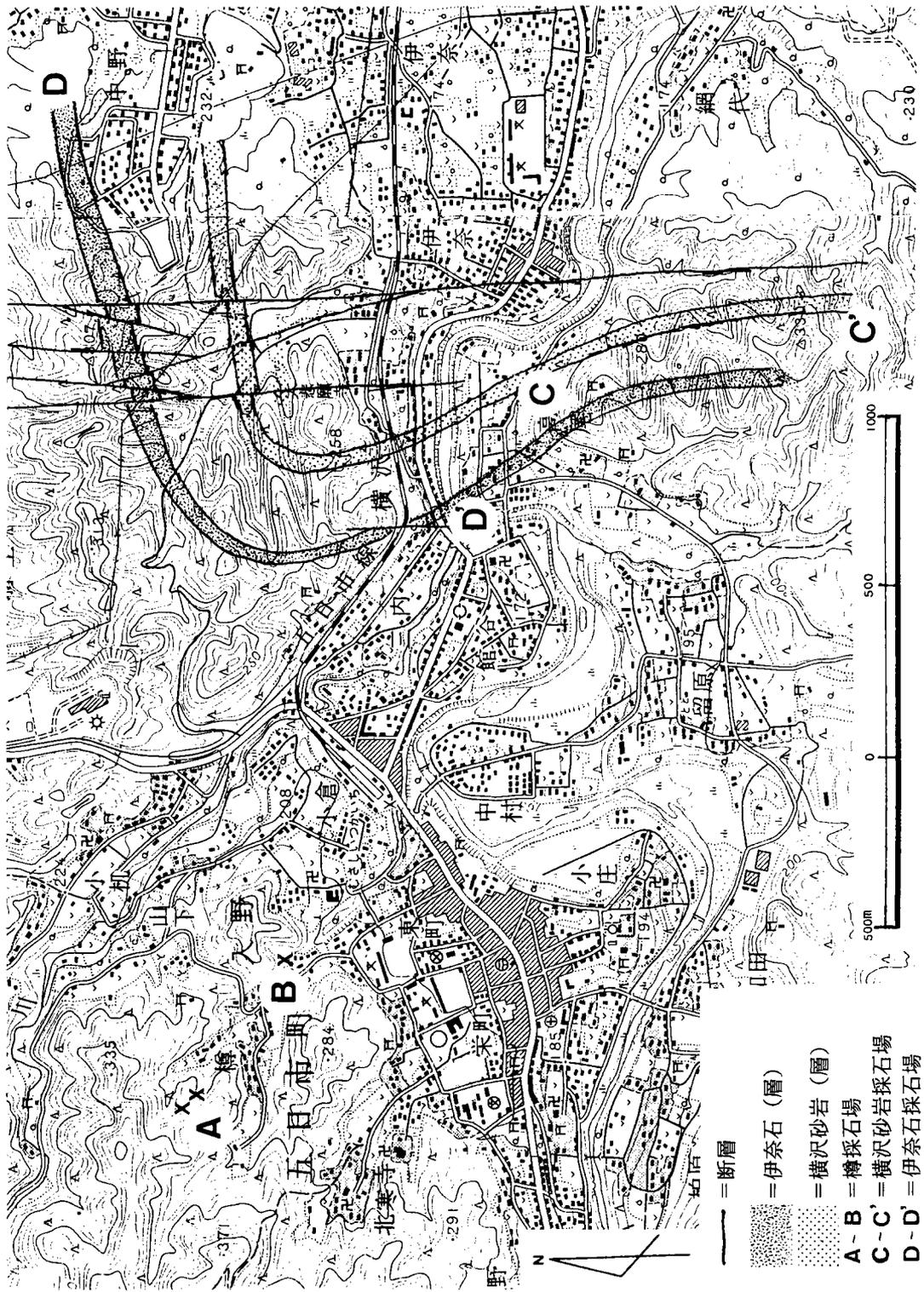
盆地北部～北西部に中生代層と複雑に入り組んで分布し、砂岩、チャートを主体に頁岩、輝緑凝灰岩、礫岩、石灰岩などからなり、化石は主に石灰岩中より発見されている。

産出される化石はフズリナ、ウミユリ、サンゴ、腕足類などである。

走向は全体として西北西－東南東で南西方に向かって地層が若くなる。

(2) 中生代三畳紀層－ジュラ紀層

従来考えられていた古生層の中に三畳紀の地層の分布がかなり多く見られるということが、最近の微化石の研究によって確かめられている。日の出町岩井の砂岩中からは、三畳紀の代表的化石、



図III-1 伊奈石切り場分布図

エントモノチスが発見され、石灰岩の団塊からはアンモナイトの化石が報告されている。

ジュラ紀層は盆地周縁から北西部に分布する鳥の巣層群で、この地層の分布としては日本の東端に当たる。砂岩、チャート、礫岩、頁岩、石灰岩などからなり、とくに石灰岩中からは、鳥の巣動物化石群であるストロマトポラ類のコケムシ、石灰藻、六射サンゴ、シダリスなどが密集して産出する。

以上、古生代石炭紀－中生代ジュラ紀までの一連の地層は、秩父系として一括してよばれる。この地域での地層の走向－傾斜は一般に西北西－東南東で北に傾斜している。また、断層は西北西－東南東方向のものが多く、これにほぼ直交するものもあるが、特に東端部では南北に走る断層が多く見られる。

(3) 中生代白亜紀層

五日市盆地の南にほぼ東西に走る五日市－川上構造線と呼ばれる大断層がある。この断層は長野県川上村まで続く規模のものである。この断層の南側から相模川にかけては小仏層が分布している。この地層には化石がほとんど見られず、地層が激しくもまれていたため、昔は先カンブリアの地層ではないかと云われたこともあったが、調査の結果白亜紀の地層であることがわかって来た。この地層は砂岩、粘板岩が主で、チャートや礫岩も散見される。

以上が五日市盆地を取り巻く先第三系の地層で、一般に走向は西北西～東南東で断層もほぼこれに一致している。また、五日市盆地を形成している新第三紀層も、基盤の先第三系の影響と思われる西北西～東南東方向の断層と、これに直交するような南北方向の断層が東部ほど多い傾向がある。

(4) 伊奈石を含む新生代第三紀中新世の地層（五日市町層群）

五日市盆地から東に開いた湾状に分布する地層で、五日市町層群と呼ばれる。更に東の関東平野側には上記のすべての地層をおおって新第三紀鮮新世の五日市砂礫層（上総層群）が分布している。

(5) 五日市町層群の地質

五日市盆地の第三系に関する研究は昔から数多くあるが、その主なものとしては、鈴木（1888）藤本（1926）金子（1955）菅野・新井（1964）五日市盆地団体研究グループ（1981）などがある。このうち五日市盆地団体研究グループの研究報告をもとに話を進めることにする。

(6) 五日市盆地第三系の地質概要

① 秋川層

A 五日市盆地を形成する新第三系の堆積盆地は、中期中新世に陥没によって始まり後期中新世～前期鮮新世に褶曲形成の運動があった。

B 地質構造は二つの向斜軸と二つの背斜軸をもち、褶曲している。この褶曲形成の要因は基盤の昇降運動である。

五日市町層群は下位より、秋川層と網代層に区分される。

秋川層はその岩相から下位より、幸神礫岩部層、小庄泥岩部層、羽生凝灰岩部層、館谷泥岩部

層、高尾凝灰岩部層、伊奈砂岩部層、横沢砂岩泥岩部層に区分され、これらは整合に重なる。全体の層厚は1,000～2,400mである。

C 各部層における岩相について

a 幸神礫岩部層

淘汰不良の亜角礫～亜円礫よりなる礫岩層で、秋川層の基底礫岩層であり、基盤を不整合におおっている。

本部層は、礫岩層が主体であるが、上部では砂岩層をはさむようになり、1m～2mの砂岩と礫岩の互層となり、うすい炭層をはさむ。

礫種は基盤の秩父系由来の砂岩、チャートなどである。砂岩は中粒～粗粒砂岩で、樽ではこの砂岩を採掘している。樽石である。

b 小庄泥岩部層

本部層は、主に泥岩よりなり、層間異常構造が発達する地層で、層厚が800mにもなるところがある。

黒色泥岩を主とし、上部になるにつれ泥岩、砂岩の互層となる。砂岩は細粒～中粒砂岩で、中粒のものではかなり固結している。

C 羽生凝灰岩部層

主に酸性の凝灰岩よりなり、盆地の北部だけに分布していて層厚も薄い。青緑色の極細粒～粗粒凝灰岩と珪質泥岩の互層で、一部で青灰色の細粒～中粒砂岩をはさむ。

d 館谷泥岩部層

黒色泥岩を主体とし、化石を多産する。1～2mの細粒砂岩、砂質泥岩の互層のところもある。

e 高尾凝灰岩部層

青緑色凝灰岩と珪質泥岩との互層で、盆地北部から南部にかけてS字状に分布する。

凝灰岩を主体とし、泥岩の薄層をはさむ。凝灰岩は細粒～粗粒、ときには泥質凝灰岩も見られる。凝灰岩は灰緑色、青緑色、灰白色、青灰色、緑灰色などの色調がみられ、細粒で硬質なものはチャートと見誤るものもある。

f 伊奈砂岩部層

淘汰不良の凝灰質砂岩を主とし、層厚は100m以内で、あまり変化しない。盆地北部から南部まで、よく連続して分布するが、南縁部で網代層に不整合におおわれ、分布は明らかでない。

粗粒～細粒砂岩を主体とし、薄い泥岩をはさんでいる。砂岩の新鮮部では青緑灰色で、全体としては凝灰質である。粗粒から細粒砂岩へ、さらに泥岩へと、厚さ10m程度の単位でくり返しが数回認められる。

この層の粗粒砂岩の部分が伊奈石として採掘され、加工された石造物は武蔵南部一帯に流通

している。

g 横沢砂岩泥岩部層

砂岩泥岩の互層で五日市町層群中央部に分布する。全体として細粒砂岩と泥岩の数cm～数mの互層だが、高尾の一部では粗くて厚く、向斜軸部では風化が進んでいる傾向がある。最上部では礫質となる。この砂岩も南部と東部で伊奈石として採掘されている。これを高尾石と呼ぶこととする。

② 網代層

秋川層を不整合でおおう角礫岩層で、粗粒砂岩、泥岩をはさむ。層厚は700m+で盆地東部で五日市砂礫層に不整合でおおわれている。

3. 伊奈石の採掘をめぐって

今回の伊奈石調査をした結果、伊奈石は産出層から、現在のところ三つに分けられる。しかし、この三つは岩質が著しく似ていて、風化した石造物では見分けがむづかしい。

横沢入から切り出された伊奈石は、伊奈砂岩部層に含まれる粗粒砂岩である。伊奈石の分布は図Ⅲ-2中にみられるように、日の出団地北側から西へのび、横沢入では北尾根を通り谷の奥で南に曲がり、天竺山東側で南に大きくわん曲して西尾根近くを南下し、三内で秋川を横断して高尾山^{たかおやま}の西側を尾根伝いに南にのびている。(地質図、地形図参照)

また、横沢砂岩泥岩部層は、伊奈砂岩部層の上に堆積した地層で、伊奈砂岩部層にはほぼ平行して東側に分布する地層であるが、その一部に10m前後の中粒砂岩を挟み、一部で厚く発達する傾向にある。

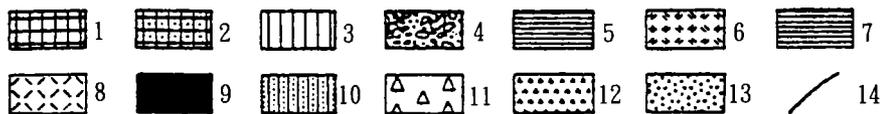
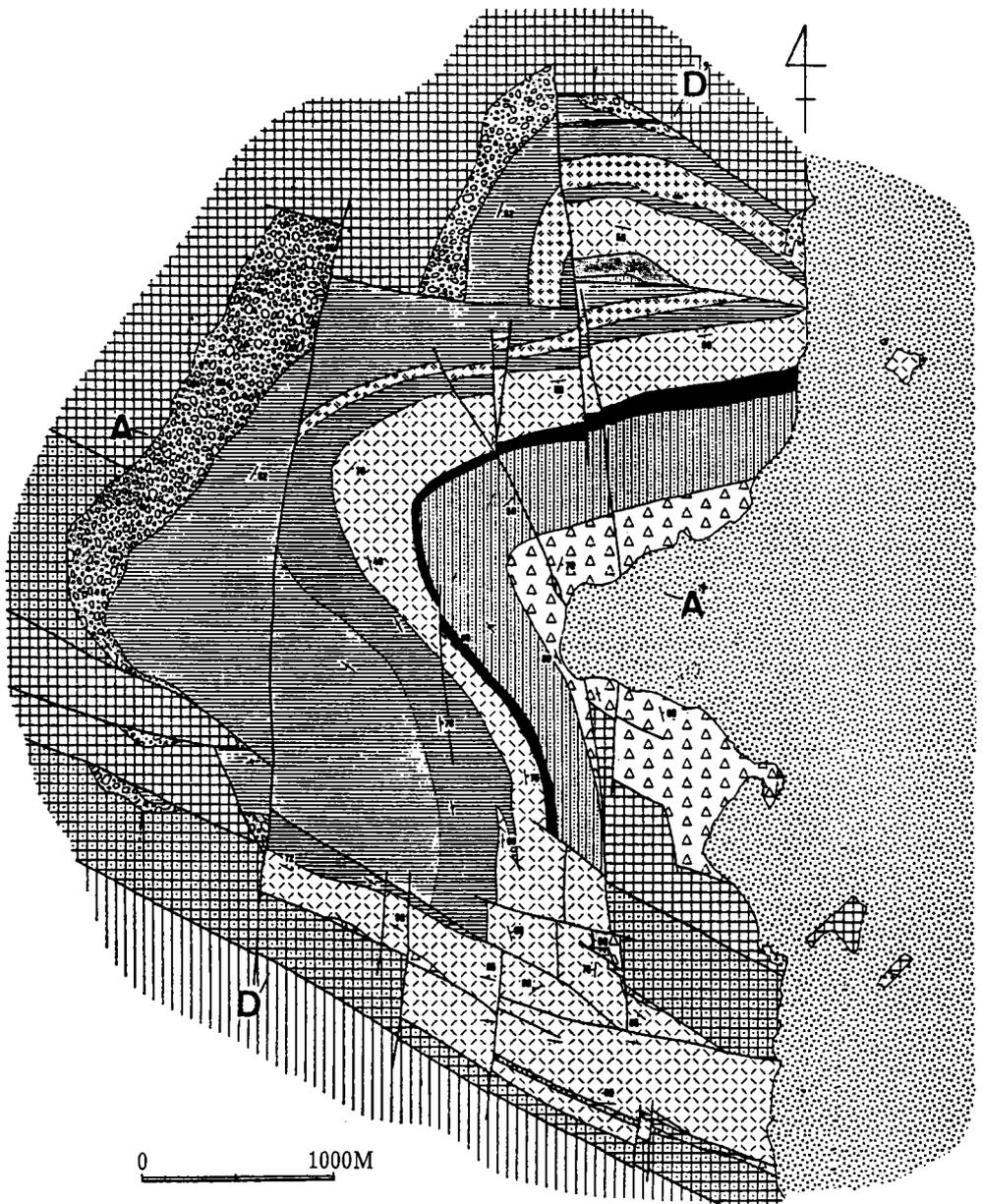
横沢入から秋川まで伊奈石を採掘してきた石工たちは、秋川を横断してから、高尾山では東裾の砂岩層を南へ向かって、網代の城山周辺の砂岩を採掘している。この砂岩は地形図I-1にも示すとおり横沢砂岩泥岩部層である。また、横沢入東部の砂沼の沢奥でもこの砂岩層を採掘している。

たぶん秋川まで伊奈石層を追いかけてきた石工たちは高尾山西側を通る伊奈石の露頭を見つけることができずに、東裾の砂岩層を掘って行ったものと考えられる。従って採掘時期も横沢入より後の時代になると思われる。

網代城山の北側の谷は途中に滝もあり急峻で、重い石の搬出は大変な労力であったと思われるのに、ここの高尾石が採掘され、高尾山西尾根の伊奈石には手もつけられていないことから、上記の理由が推察されるのである。

また大悲願寺の古文書に「伊奈石の出入一件」があり、この中で寺領の石臼運上(税金)や採掘権等をめぐって争いがあることから考えても、石の採掘は横沢入の岩層を追うばかりでなく、高尾や城山北谷へ発展して行ったのではないだろうか。

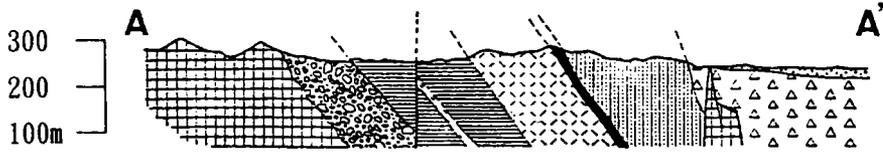
また五日市町入野の樽にも、小規模な砂岩の採掘跡を3カ所発見したが、これも多分石工たちが周辺の山や里を石を求めて歩き廻った痕跡であろうと想像される。



1 : 秩父古生層, 2 : 鳥ノ巢層群、3 : 小仏層群, 4~10 : 秋川層 (4 : 幸神礫岩部層),
 5 : 小庄泥岩部層, 6 : 羽生凝灰岩部層, 7 : 館谷泥岩部層, 8 : 高尾凝灰岩部層,
 9 : 伊奈砂岩部層, 10 : 横沢砂岩・泥岩部層), 11 : 網代層,
 12~13 : 五日市砂礫層 (12 : 下部層, 13 : 上部層), 14 : 断層

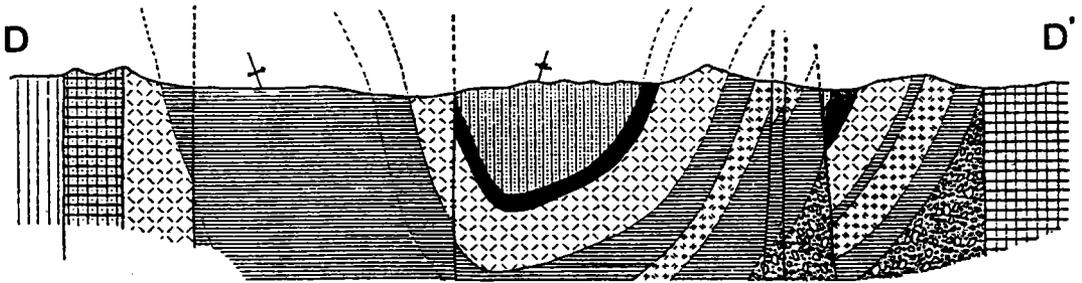
図Ⅲ-2 五日市町層群地質図

このことは、流通している石造物にも見られ、横沢入の伊奈石とは違った伊奈石製品が見受けられることからもうかがえる。製品の年代から見て末期の製品が多いことから、高尾の伊奈石（高尾石）の切出しは横沢入より後に盛んになったものであろう。



A : 五日市町小机西部

A' : 五日市町北伊奈



D : 八王子市上川町

D' : 日の出町玉の内

図Ⅲ-2 五日市町層群地層断面図

五日市盆地団体研究グループ (1981)

4. その他の石材について

(1) 七沢石（礫岩）

神奈川県丹沢山系のふもとに名刹日向薬師のあるところとしても有名な七沢温泉郷がある。この温泉郷の奥の鐘ヶ嶽の山腹に、七沢石を採掘した石切場の跡が点在する。

七沢石は江戸時代の中頃から、やはり伊那谷の高遠石工によって大量に切り出された。

七沢石の地層は、伊奈石と同じ新生代新第三紀に海底にたまった凝灰質の地層で、その中で主に礫岩が利用されている。含まれている礫が黒色泥岩が主でやわらかいために打ち割ったとき、礫粒だけが出っばったり、へこんだりすることもなく、凹凸のない面が作りやすいので、当時としては盛んに利用されたものであろう。

その流通範囲は北相模から南武蔵にまたがり、伊奈石をしのぐほど広範囲に分布しているが、秋川流域では伊奈石に押されてかあまり多くは見かけない。色は暗緑色であるが風化すると赤褐色となる。硬さは伊奈石とほぼ同程度だが、図版2でも判るように伊奈石よりややしまりに欠け、風化して剝離しやすいところなどは伊奈石によく似ている。

(2) 底沢石（凝灰岩）

このほか中央線相模湖駅周辺から産出する底沢石があるが、硬すぎるためか採石量が少なく、製品の分布も一部の地域に限られている。古第三紀層の相模湖層群に挟まれた砂岩を用いている。藤野石とも呼ばれているようである。

(3) 房州石（鋸山の砂岩）

また東京湾に面した千葉の鋸山の石は凝灰岩に近い暗緑色の砂岩で、やわらかく加工し易いので東京湾岸の墓石などに見られるが、風化し易いため広範囲には流通しなかったようである。

(4) 伊豆石（玄武岩・安山岩）

このほかに、船で伊豆半島から江戸へ運ばれてきた伊豆石がある。

これは堆積岩ではなく、噴出したマグマが冷えて固まった火山岩で、玄武岩質のものと安山岩質のものがある。

玄武岩質のものは色が黒く、割った面にガスの抜けた小さな穴が見られる。安山岩質のものは全体が灰色で、風化すると中に白い長石の結晶が見えたり、更に風化が進むとくぼみができたりしている。風化は上の堆積岩ほどではなく、硬さもあって長持ちするが、それだけに加工には難があったようである。しかし流通範囲はかなり広く、江戸市中はもちろん千葉、神奈川、東京、埼玉におよび、また青梅、秋川など多摩地域でも見かける。

(5) 川原石

多摩川や秋川の上流域から流されてきた転石（川原石）を利用したものがある。秩父系の砂岩が多く、まれにチャートや石灰岩も使われている。もう一つは秋川上流域に分布する石英閃緑岩である。いずれも硬くて加工が大変なため、石の一面のみに加工を施したもので、普通自然石と呼んでいる。

5. 五日市の自然環境

関東山地と関東平野の境に位置する五日市は、豊かな自然に恵まれて多くの都民の憩いの場として親しまれてきた。そこに流れる秋川は上流部の山地では3億年～1億年前の古生代～中生代の地層を深く刻み、五日市盆地では新生代第三紀の地層の中を蛇行して東の壁を貫き、第三紀末の地層を削りながら東流する。いわば秋川は3億年の歴史の中を流れ下っていることになる。

地質の項で述べたように、五日市の地質はせまい範囲の中に古生代から現在まで、それぞれの地質時代を連続と刻んだ地層が入り乱れ交錯して分布していて、地質構造はきわめて複雑である。そのためか、そこに棲む生物にも今なお影響していると考えられる点が多い。

そのうちいくつかを挙げると、植物ではシダ類が10年ほど前に新種が発見され、そのほかにも希少種が何種か見られるという。

また動物ではナガレタゴガエルをはじめ、トンボ、カワゲラ類など新種や希少種が生息しているとの情報を入手している。

これらの因果関係について、五日市の地質や地質構造、地層の分布などによる、複雑な地形も絡んでつくり出された独特の自然環境が、影響を与えているのではないかとの見方をしている専門家もいて、今後の課題として尚調査の必要を訴えている。

よく云われていることであるが、日本列島を横断する有名なフォッサマグナ（糸魚川－静岡構造線）を境にして東と西とでいろいろな動植物の種に相違が見られるということからも、五日市の地質の多様性が地形や環境に変化を与え、現在の動植物へ影響するであろうことは十分に考えられることである。

したがって、これからも五日市で新種の動植物が発見される可能性の期待ももたれる。

ここ30年来、日本は経済最優先の政策が行われ、全国いたるところで開発という名のもとに、人間以外の生物の生命とすみかを考えず踏みにじてきて、今もそれを続けている。人も他の生きものたちと同じ地球上に生まれ、それらの生きものたちに支えられて、今生きていることを忘れてしまっている。これ以上開発を続けていけばやがてはそのしっぺ返しを受けることは必定である。

五日市周辺にも開発の波はじわじわと寄せてはいたが、山や丘陵は最近まで開発の手をまぬかれてきて、充分とは云わないまでも自然が残されていたので、上記のような新種あるいは希少種の発生や生存が可能であった。また近年の上流域の林相の変化は秋川の水量を半減させ、水質の悪化を招き、そこに棲む昆虫や魚の生存をおびやかし、それらは減少の一途をたどっている。

しかし他の地域に比較するなら、まだ自然環境を回復するのに間に合う条件を備えている。その本拠となるのが横沢入である。

横沢入は多摩丘陵その他の地域と違って周囲の丘陵上に家がなく、それらの人的汚染源は稜線の外にあって生活雑排水などの人的汚染が最小限に押えられているため、自然環境はよく保たれている。特にこの点を強調しておきたい。もし、この中に汚染源となる家が一軒でも建てられたなら、たちど

ころに横沢入全域が汚染されて現在の自然環境は急速に失われてゆくであろう。今こそ横沢入を拠点とし、この場所を有する五日市が中心となって秋川流域の自然の回復と保全を真剣に考える最後のとき（場）であると思う。

そして46億年の地球の歴史の最後に生まれた人類が、この地球上を死の世界にしてしまわないためにも、横沢入を自然のすばらしさ、奥深さ、不思議さ、命の尊さを学ぶ場としていきたい。

IV 五日市と横沢入の歴史環境

十菱 駿武・石井 道郎

【原始・古代】

五日市町の歴史は、縄文時代に始まるが、秋留台では秋川市前田耕地遺跡で旧石器時代後期の槍先形尖頭器などが発見されているので、秋川流域には集団的な居住があったものとみられる。

縄文時代の遺跡も30カ所記録され、敷石住居跡が7カ所ある。土器は早期より晩期にわたっているが、主として中期（勝坂・加曾利E）、後期（堀之内・加曾利B・首谷・安行I、II）、晩期（安行IIIc）が多い。

留原遺跡や網代遺跡は中期の集落跡で、五日市高校遺跡は後期・晩期の集落跡の代表である。大悲願寺の東平遺跡も縄文前期・中期の集落跡である。

弥生時代には遺跡はないが、日の出町岳ノ上遺跡では弥生中期の集落跡があり、雑穀畑作や水稲耕作も始まっていたようである。

古墳時代に入ると網代遺跡から鬼高式の甕、高尾遺跡からは鬼高II式の甕が出土している。遺跡としては、秋川市瀬戸岡古墳群に類する積石塚古墳が山田で発見されている。

奈良・平安時代の律令制下、秋川流域は武蔵国多摩郡小川郷と呼ばれた。当時の官牧の1つ、小川牧は秋川の下流域、秋川市小川にあったといわれているが、五日市地方も小川牧の地続きとして、中央権力による官牧の支配の影響を受けたと推測される。五日市の中央部にある阿伎留神社は、小川郷の神社として延喜式内社多摩郡8座の筆頭に記載されている。なお、武蔵国に多かった渡来人は秋留台にも多く移り住んだと見え、渡来人系の姓が残っている。

（十菱）

【中世・近世】

秋川流域の武士たちは武蔵七党のうち、西党に所属していた。「吾妻鏡」の建久元年（1190）源頼朝上洛参内の供奉者の中に、秋川流域ゆかりの西党の武士、小川・平山・小宮・二宮等、小武士団の名が見える。また建久2年、横沢に大悲願寺が建てられたが、創設者は鎌倉幕府の御家人、平山季重であった（同寺寺伝）。これら在地武士団の内、のちまで名をとどめたのは小宮氏で、江戸期当地方は小宮領と呼ばれた。

南北朝・室町時代14・15世紀に入ると、秋川流域の地侍は、武州南一揆と呼ばれる集団に所属していた。南一揆は西党の流れをくむ中小武士団の地縁的集団であったが、秋川流域に1拠点があったことがわかる。彼らは相互に依存関係を持ちつつ自衛のため、鎌倉公方・関東管領等、時の権力と結びつつ機敏に行動し、激動する中世の時代を乗り切ってきたが、上杉禅秀の乱（1416年～1417年）を最盛期として、やがて解体してゆく。当地方の有力寺院、光厳寺・瑞雲寺・広徳寺・王林寺等は南一揆の最盛期で

あった14・15世紀に創建されている。

この地域は伊奈石製の板碑の中心地であり、応永2年(1395)の年紀を持つ塩地藏堂板碑を初め、伊奈石板碑約50基は室町時代の15世紀のものが多く、武州南一揆との関わりが考えられる。

武州南一揆が解体した後、五日市は小田原後北条氏の支配するところとなった。とくに永禄初期、滝山城(八王子市)の大石定久の養子となった北条氏照が同城に入城すると、五日市の戸倉城が定久の居城となった。北条氏は氏照の五日市支配開始の準備として、弘治2年(1556)に小和田の広徳寺など、有力寺社の領地を安堵して直轄領に組み入れた。網代氏が拠っていた網代城は、戸倉城とともに氏照の支城網の一翼を担い、また鎌倉街道には伝馬制度が設けられ、伊奈宿は平井宿とともに伝馬の中継点として重要性が増した。

戦国期の五日市谷は甲州古街道口に面し、甲斐国武田氏に対する軍事的拠点の一つであった。天正18年(1590)八王子城が落城すると戸倉城も開城し、ここに五日市の北条氏支配は終わった。

江戸時代は天領に属し、武州山之根筋小宮領と呼ばれていた。時により、部分的に大名や旗本の支配地になる等、何度か支配形態が変化している。江戸時代の村では、高尾村(石高81石余)、三内村(115石余)、横沢村(42石余)、網代村(55石余)、伊奈村(652石余)など16か村があった。古甲州道の要所であった伊奈村と五日市村には中世末から定期市が開かれていたが、江戸初期には江戸近郊の山村で産出する木炭を集積し売買する炭市が五日市と伊奈とで競合するようになった。しかし延宝～享保年間には伊奈村の市は衰え、かわって五日市村が炭市を独占するようになり、五日市から江戸へ通う交通路は五日市街道と呼ばれるようになった。(石井)

江戸時代後期の地誌『新編武蔵風土記稿』(1822)『武蔵名勝図会』(1823)および明治初期の地誌『皇国地誌・西多摩郡村誌』には、伊奈石に関わる記述が諸所にある。

【伊奈村】：往古信濃国伊奈郡より石工多く移り住みて専ら業を広くせし故に村名となせり。天正18年御入国の後江戸御城石垣等の御用をつとむと云えり。されど今は其職を業となす者無し。(風土記稿)

：石工 7、80年前まではこの地に石工住すること多く、近郷の平井、大久野または網代村などの山間より細工石を切り出して、玉川を六郷まで筏に乗せてくだし送り、又、近郷の石碑その外の細工物を彫りけるが、近来は絶えてその業をするものなきとぞ。往古この地へ信州伊奈郡の人來たりて開墾せしゆえ、伊奈村と号せし由。又、石工もかの地より來たりて、岩走神社を祀りしと云う。(名勝図会)

：名称 往時近衛天皇の仁平2年(1152)壬申7月、信濃国伊奈郡より石工12人、此の地に來たり秋留の原を開拓して一村を開き、其の故郷の郡名を取りて村に号つけたりと云えり。(皇国地誌)

：民業 該村開拓の創より石工を業として、慶長年間徳川氏江戸城修築の際、数名の石工

築城石工の用を鞭達し、其の間いづれも苗字を称し双刀を帯することを許可されたり。晩今までよって石工を以て工業とするものありて、その营造するところの石臼は村名をおいて最名産たりしが、現時はことごとく休業にして空しくその名産の名を残すのみなり。今近傍横沢村に工業石工の者偶存するのみなり。(皇国地誌)

【横沢村】：切り石 大悲願寺境内後の山中より出る。石工が細工につくる石なり。(名勝図会)

【平井村】：切り石 字中野の清水入という辺より切り出す。この性よろし。(名勝図会)

【大久野村】：切り石 平井村字清水という辺より出す。その性よろし。古えは伊奈より多く切り出せしなり。(名勝図会)

このように「伊奈石」「伊奈臼」と呼ばれた特産物が、五日市町伊奈、横沢、日の出町平井、大久野から産出していたことを記しているが、その内実は不明であった。そして19世紀中葉には石工も、石切りも過去の産物となっていたことがわかる。

明治11年(1878)郡区町村編成法により神奈川県西多摩郡が生まれ、明治13年(1880)五日市町が誕生した。さらに、明治22年市制町村制が施行され現在の五日市町に当たる区域は小宮村、戸倉村、五日市町、三ッ里村、明治村、増戸村となった。その後、東京府に編入され、小宮村、戸倉村、五日市町、増戸村へと統合され、昭和30年(1955)合併により現在の五日市町になった。

横沢入の遺跡(図IV-1)

阿弥陀堂遺跡

横沢入の草堂ノ入419番地に所在。草堂ノ入の沢入口の一段高い桧の植林地である。地形的に水田より人工的に高いことと、この地の地中レーダー探査で約4mの範囲に版築状の面と溝状落ち込みを発見したことによる。江戸時代1736(享保20)年の大悲願寺文書詫び証文に「僧堂の入は昔死人を焼く焼き場で、谷の入口に阿弥陀堂があり、葬堂の入が正しい。」と記されている。この記録から阿弥陀堂の位置はこの土地以外にはなく、小規模な堂があったものと推定した。(十菱)

大悲願寺裏山遺跡

横沢入の東平、草堂ノ入の大悲願寺裏山尾根部標高280mに所在する。金毘羅社の祠がある尾根頂部が平場と周囲に人工的な掻き下ろしがあり、約80×30mの砦または狼煙台と思われる。裏山に伝承はないが、秋川を南に望む立地から中世戦国時代の戸倉城と網代城を結ぶ小規模な砦と思われる。



图IV-1 横沢入地区遺跡分布图

大悲願寺遺跡

横沢の東平、西沢、前畑に所在し、裏山裾から大悲願寺境内地の東西550m×南北300mにひろがる。裏山裾に段切り状遺構があり、青磁などの陶磁器片や土師質土器が発見されている。大悲願寺に関わる中世城館跡・社寺跡と考えられている。周知の遺跡No.25。

東平遺跡

横沢の東平の畑地東西200m×南北200mの範囲に分布する。縄文土器（黒浜・勝坂・加曾利E・加曾利B式土器）・石鏃・礫器・打製石斧・石錐・剝片、土師器五領式が採集されており、縄文時代前期・中期・後期・古墳時代前期・平安時代の遺物包含地である。横沢川に面した台地上の集落跡で、遺存状態も良好と思われる。周知の遺跡No.26。

前ノ畑遺跡

横沢の西沢愛宕神社南斜面の前ノ畑にひろがる。縄文後期土器と近世陶磁器が少量散布する。

炭窯跡

横沢入の富田ノ入と釜ノ久保にあった。

山の神祠跡

宮田の山すそに横沢村絵図で1カ所みられる。伊奈石の石工たちの守り神である山の神信仰にもとづく。遺構の所在は不明だが、祠の下部遺構や供物などの跡がみられる可能性がある。

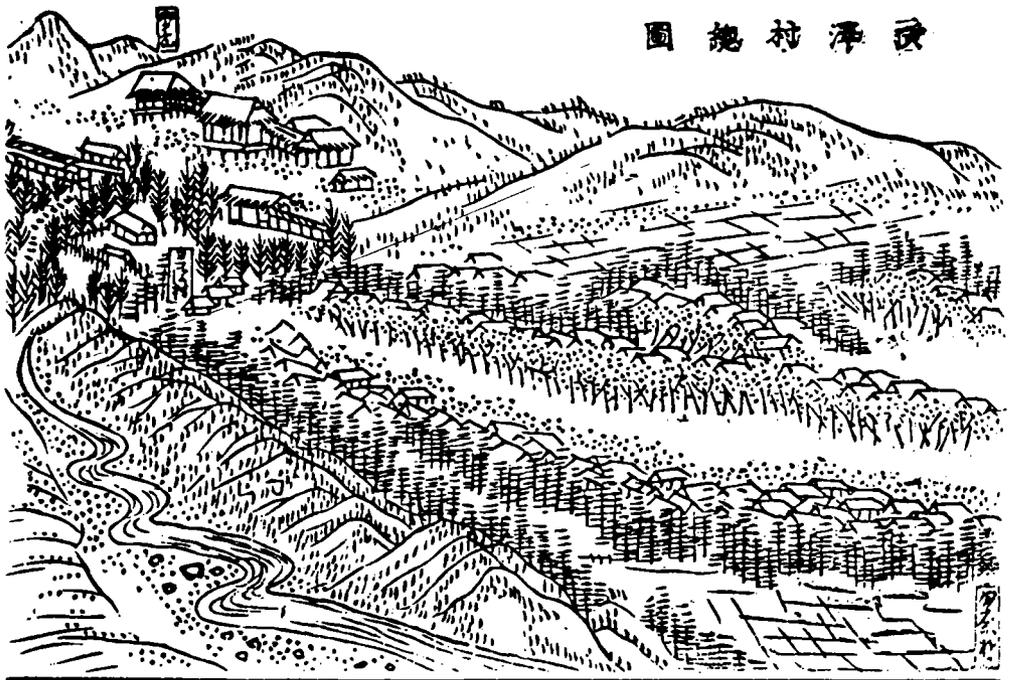
防空壕跡

宮田に4カ所、富田ノ入に3カ所、下ノ川に5カ所、釜ノ久保に2カ所、荒田ノ入3カ所、砂沼4カ所以上南に開口していた幅2m長さ8m以上の掘り込みがある。1944年～1945年の太平洋戦争に陸軍航空廠によって掘られた防空壕跡である。防空壕跡は文化財保護法では遺跡に取り扱われない場合もあるが、五日市の近代史の記録としてきちんと調査されるべきである。

横沢入の地名(図Ⅳ-3)

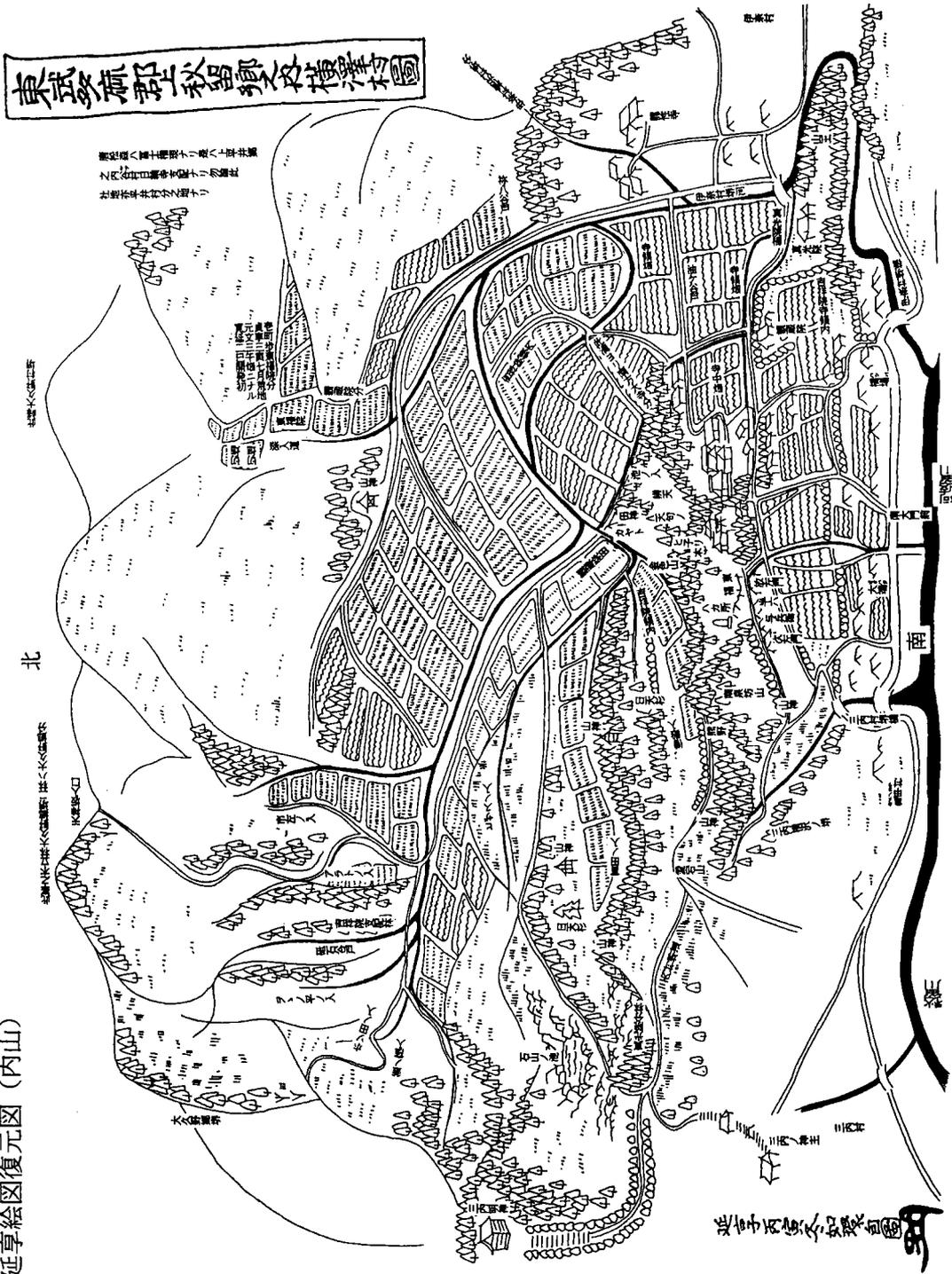
大悲願寺文書の中に江戸時代の横沢入の村況を記録した絵図を発見した。「東武多麻郡上秋留郷之内横澤村図」(縦47cm横65cm)は1746(延享3)年冬に如環が描いた彩色図である。新義真言宗の金色山大悲願寺の第24代住職如環は高尾村出身で、経巻木版本の出版、仁王門・鐘楼の改修、寺伝の編纂に功績をなした。横沢村図には、大悲願寺(吉祥院)を中心に村境・寺領畑・支配林・塔頭分の畑が描かれている。富田ノ入には石山ノ池が描かれており、当時天竺山東尾根を石山と呼んでいたこと、当時から堅坑の窪地に水が溜まって池になっていたことが分かる。また荒田ノ入には「砥石谷戸」の地名があり砥石に使える石があったこと、「横沢川」「唐松森」「弁天池」「山神」の位置も良くわかる。

また江戸時代後期の地誌「新編武蔵風土記稿」の横沢村では、村の北を「横沢入」といい、「清水」が横沢入から湧出して村内の水田を潤して秋川に流れること、村内は民家23戸であったことを記録している。「武蔵名勝図会」では、伊奈村の石工について「7、80年前まではこの地に石工住すること多く近郷の平井、大久野または網代村などの山間より細工石を切り出して、近郷の石碑その外の細工物を彫りけるが、近来は絶えてその業をするものなきとぞ。往古この地へ信州伊奈郡の人來たりて開墾せしゆえ、伊奈村と号せし由。また、石工もかの地より來たりて、岩走神社を祀りしという。」横沢村では「切石 大悲願寺境内後の山中より出る。石工が細工につくる石なり。」と記している。江戸時代に横沢入の石山が伊奈村の石工によって盛んに加工されていたことを証明する史料である。(十菱)



図Ⅳ-2 横沢村総図(新編武蔵風土記稿)

延享絵図復元図 (内山)



図IV-2 横沢村絵図復元図 (延享4年 大悲願寺所蔵文書)

V 伊奈石石切り場遺跡

十菱 駿武・樽 良平

伊奈石石切り場遺跡は遺跡・遺構が五日市町横沢入、三内亀ノ甲下秋川河原、高尾、網代、入野樽、伊奈砂沼、日の出町平井、大久野に分布している。

横沢入地区(図V-1)

分布調査の結果、天竺山東尾根に知られていた富田ノ入の石切り場堅坑以外に、伊奈石と呼ばれる青灰色の粗粒砂岩が伸びている地層には必ず人工的な石切り場の遺構が、横沢入地区の東西1.6km、南北1.4kmの広範囲に広がることを確認された。

その範囲は富田ノ入、釜ノ沢、釜ノ久保、荒田ノ入、宮田、下ノ川の尾根筋から山腹、沢筋にまたがっている。とくに宮田から下ノ川にかけては、伊奈砂岩部層が南傾斜で広がっているために伊奈石の遺構は南北180mに広がっていた。遺構の種類は堅坑、露頭掘りなどの採石坑、山の斜面や尾根を半月状・長方形に平場を整地したテラス、山の斜面から裾にかけて広がるズリ場などである。

天竺山東尾根と宮田東沢の長径96m短径38m深さ7mのすり鉢形の堅坑(採石坑)2カ所や露頭掘り(山腹を斜め横に削った採石遺構)などの採石坑44カ所、石を積んで平場とした石工の作業場と見られるテラス96カ所以上、碎石の投棄場であるズリ場14カ所以上、石を運搬した古道4カ所などの遺構がある。

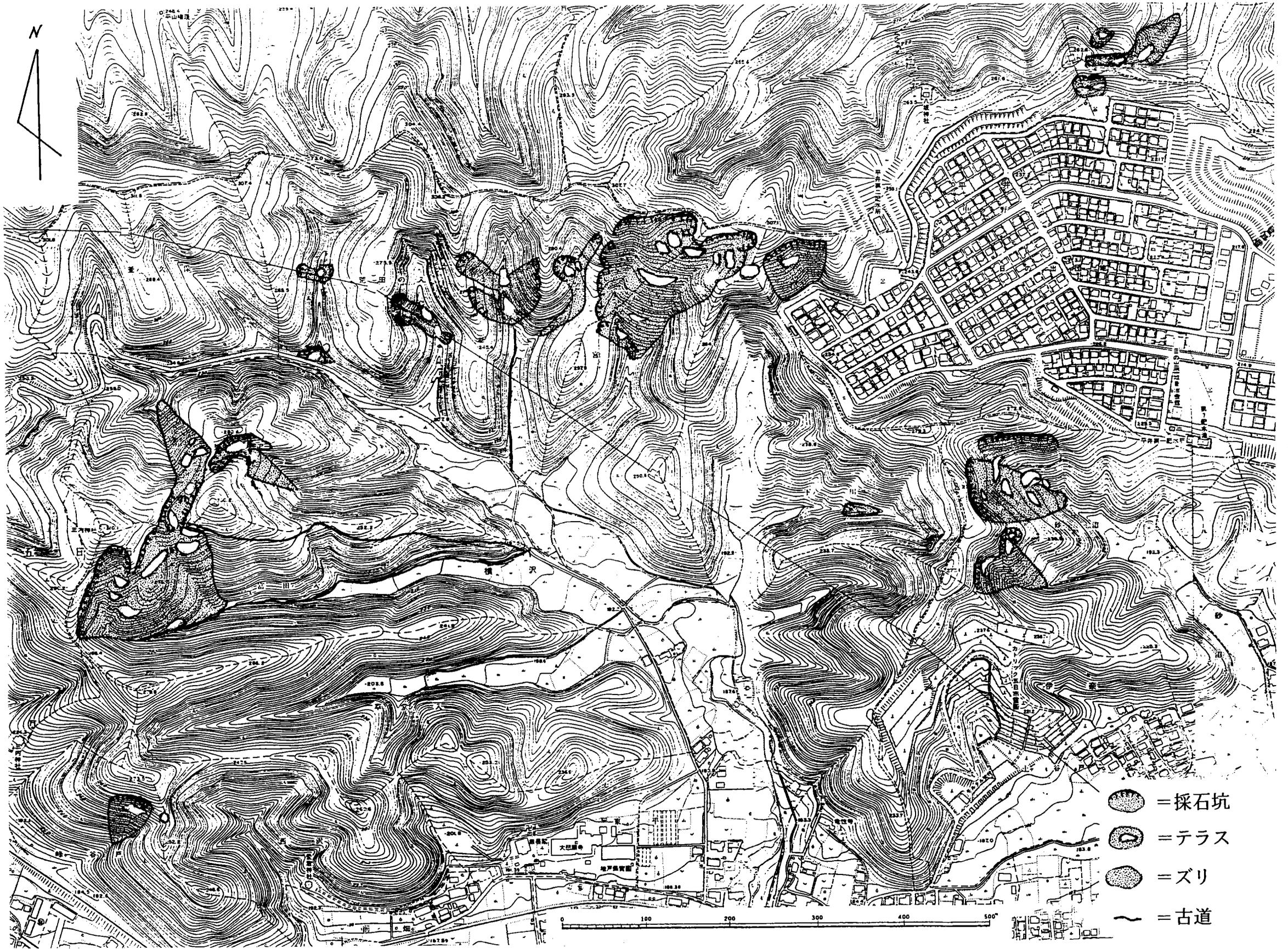
さらに下ノ川東沢から砂沼の沢奥に分布する伊奈石は、層位・岩質からみて高尾石である。この高尾石が横沢入の谷で見られないのは、向斜軸に近接し、その上縦横に走っている断層のため圧砕され、風化が進んでしまったためと思われる。

これが砂沼まで行くと、図V-1で見られるように露頭掘3カ所、テラス9カ所以上、堅坑1、谷の裾に広がるズリ場などが見られる。(樽)

【富田ノ入・天竺山東尾根遺構群】(図V-2)

天竺山から東と南に伸びる尾根と山腹に、標高300~265mの位置に堅坑4カ所以上が残されている。北東から南西方向に長さ140m幅40m深さ8~10mにわたり、石山ノ池堅坑では水が貯まり、トウキョウサンショウウオ、ホトケドジョウが生息している。石山ノ池堅坑の北西壁は伊奈砂岩部層をえぐり取って垂直に切り立っており、南東壁は数段のテラス状になり、全体としてすり鉢状になっている。堅坑内には矢穴痕のある20cm前後の屑石(コップ)が集積しているし、堅坑壁面には幅12cm深さ12cm前後の逆台形の矢穴が24個連続する岩壁が発見された。

堅坑の北東側の中段には伊奈石塊を積んだ石垣でつくられた、径5mのテラスには「山神社」と鋭く

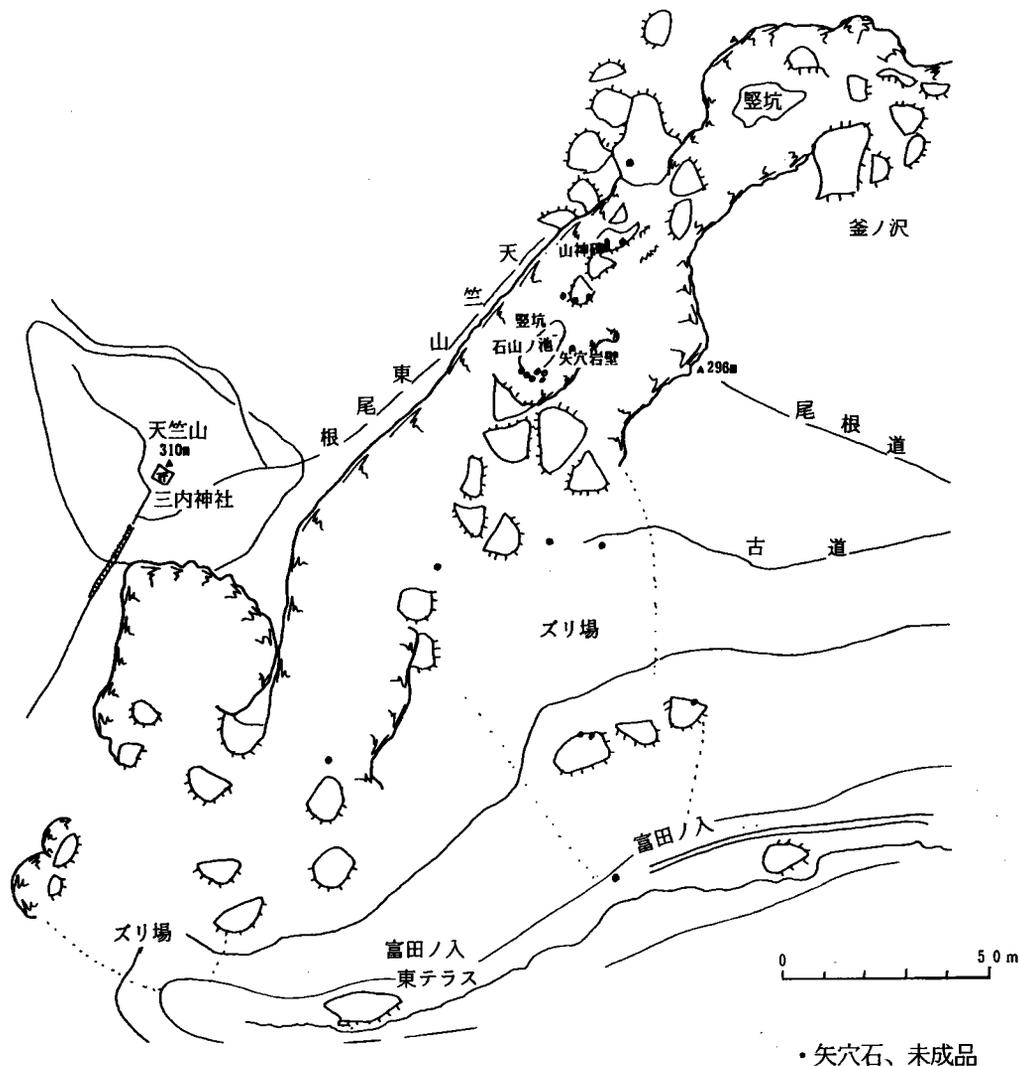


図V-1 横沢入地区 伊奈石石切り場遺構分布図

彫り込まれた70cm×40cmの伊奈石の石碑が所在している。この山神社碑は記年も銘文もないが、江戸時代のもものとみられ、石工の守り神として立てられたとみられる。

さらに北東側の横沢川釜ノ沢に面するテラス（23×15m）では石臼未成品を発見した。また釜ノ沢につき出た竪坑（50×30m）では五輪塔未成品を発見した。

富田ノ入・天竺山東尾根ではテラスは46カ所前後あり、伊奈石製品の粗加工やズリの集積場に使用されたものとみられる。これらの石切り場遺構から富田ノ入北斜面に向かってズリが押し出され、沢底まで達している。また釜ノ沢側へもズリが集積しており、幅50m長さ80m厚さ数mで沢に向かって押し出されているために、自然地形の約30°位の斜面が45°以上の急斜面となりマウンド状に地ぶくれしている部分もある。



図V-2 富田ノ入・天竺山東尾根の石切り場遺構群 概念図
 (伊奈石調査会1993と本分布調査による)

富田ノ入最奥のテラス（図V-3）は18×7mの平坦面があり、南側にコの字状の石垣がある。石垣は伊奈石の30～50cm大を野面積みしたものである。このテラスは野口義一氏の記憶によると、昭和初期までトラックを入れて碎石を積み出す搬出する場であり、テラスと石垣の築造は近代と判断される。テラスの面で採集した陶磁器も近代の有田焼染付であり、聞き取りと矛盾しない。

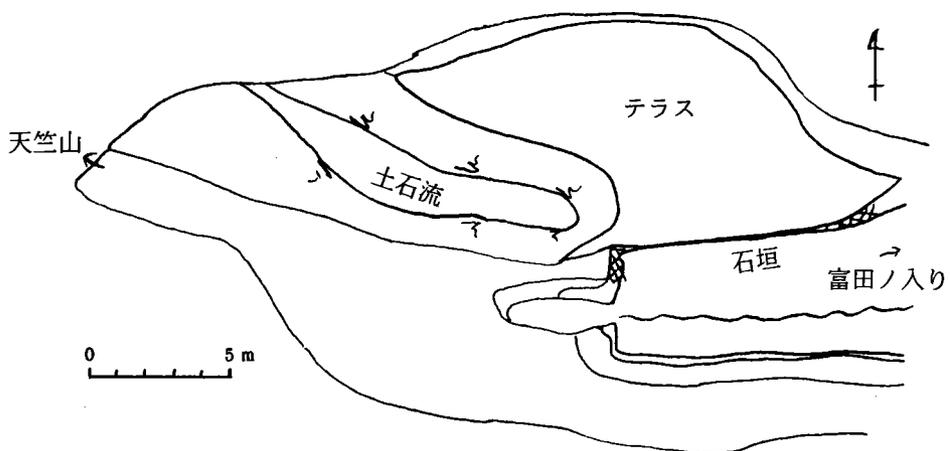
富田ノ入・天竺山東尾根遺構群からの石材の搬出路と考えられるのが、竪坑の南東側を富田ノ入側に沿って下る斜路の存在である。この古道は幅0.9～1.8mで横沢入看板まで延長300mほど続いており、途中防空壕で断ち切られていることから太平洋戦争時より古い道であることは確実である。また近代に薪炭林などの管理のために利用されていたきこり道は天竺山東尾根の尾根道となっていて、これより中腹を約15°位の勾配で古道は下っている。このことから富田ノ入の古道は木ぞりや地車に載せた石材を搬出した江戸時代の作業道である可能性が濃いと考えられる。

【釜ノ久保遺構群】

横沢川に沿う林道の北側の釜ノ久保の沢には小規模な露頭掘りの採石坑が4カ所あり、テラス1カ所が沢奥にある。釜ノ沢から東方へ曲がる伊奈砂岩部層を山腹で点々とえぐったものである。

【荒田ノ入遺構群】

荒田ノ入の西沢と東沢に露頭掘りの採石坑10カ所とテラス9カ所がある。沢の奥や入り口にテラスをつくり、斜面の山腹をえぐる小規模な石切り場である。ズリの押し出しは南方に流れているが少量である。荒田ノ入西沢では堤状の石垣があり、石臼の未成品が積まれており、江戸時代の遺構である可能性が高い。



図V-3 富田ノ入奥のテラス見取図

【宮田西沢遺構群】

宮田から北方と北東方へのびる狭い沢の西側と東側及び東に入り込んだ沢の中腹に、露頭掘りの採石坑14カ所、テラス11カ所があり、本沢中央は10×10m以上の広いテラスがある。更に沢下方へ伸びるズリ場がみられる。採石坑は標高270～240mに、東西に伸びる伊奈砂岩部層をえぐり取ったもので、大きな採石坑は20×20mの規模があり、その下方にズリを集めて平らにした小規模なテラスがある。矢穴石もみられるが少量である。宮田西沢の遺構も江戸時代頃とみられる。

宮田西沢の北東側の沢の入り口をふさぐようにして、幅5m高さ2mの堤状のズリの集積があり、この堤は宮田西沢の東腹をスロープで下っていく地形が観察できる。この堤状の地形は、聞き取り調査によって、近代に伊奈石の碎石を搬出したトロッコ道ということが判明しており、江戸時代の石切り場遺構とは直接の関係はない。

【宮田東沢遺構群】 (図V-4)

横沢入北東部の尾根(唐松山 標高305m)の標高300mから、宮田の東沢奥標高220mまでの、南斜面に広がる石切り場遺構群である。大規模な竪坑2カ所と露頭掘りの採石坑15カ所とテラス31カ所前後、ズリ場3カ所が南北幅200mに広がっている。横沢入北東部では厚さ30mの伊奈砂岩部層がずれて30°位の斜面に広く露出しているため、石切り場遺構の範囲が広いものとみられる。唐松山尾根の竪坑は60×50m深さ12m位のすり鉢状になっており、東西に走る伊奈砂岩部層の伊奈石を採掘している。この竪坑の南西部には40m×20mの広いテラスが階段状に築成され、矢穴石がズリの中に散見する。矢穴石は幅18cm、深さ12～15cmの逆台形の断面となっており、天竺山東尾根遺構の矢穴石に比べると大型の矢穴が多く、幅3～6cmの小型矢穴は全くない。テラス中段では石臼未成品、大型の矢穴石が採集されている。ズリ場は尾根の南斜面に幅80m長さ170m厚さ数mで押し出されており、宮田東沢の奥の湿地にまで届いている大規模なものである。

宮田東沢の中腹の露頭掘り採石坑は、尾根部の竪坑からのズリによって覆われているので、露頭掘りは試験掘りの役割をもっているのかもしれない。

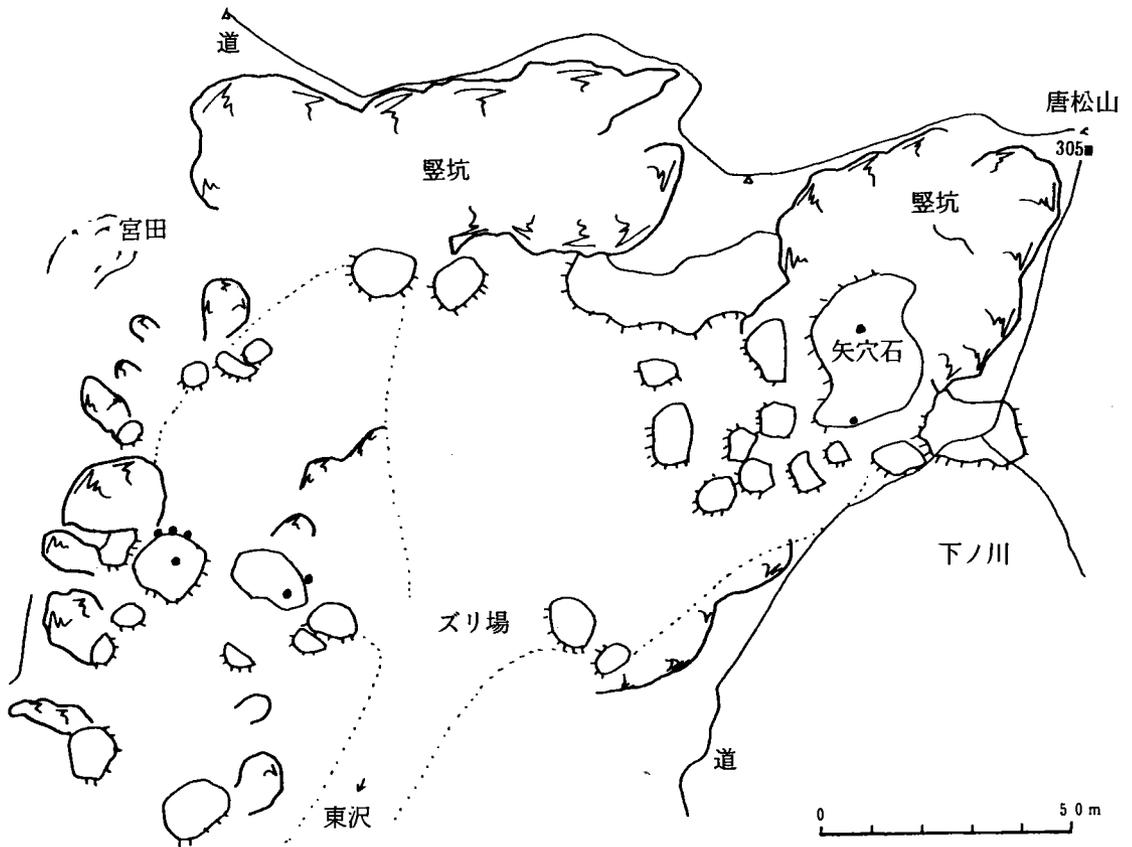
宮田東沢の石切り場遺構群は、大型矢穴石がみられる点、延享4年の「横沢村絵図」に採石の痕跡が描かれていない点から、室町時代から江戸時代前期の、天竺山東尾根の石山ノ池遺構に比べてより古期の石切り場である可能性が考えられる。少なくとも、石山ノ池南テラスでは近代の削岩機ドリル痕のある伊奈石塊があるが、宮田東沢の採石坑・テラスでは江戸後期の小型矢穴石や近代のドリル痕のある石は全く見られず、江戸後期以前に廃絶した石切り場であると推定される。

【釜ノ久保・宮田の遺構】

横沢入の横沢川と横沢小机林道に沿って、5～6カ所の平場があり、伊奈石のズリ石や石垣で平場が造成されている。いくつかの平場は近代のトロッコ採石業に伴う石の集積場・作業場である可能性があ

る。宮田のテラスについては地中レーダー探査をして数mの人工的築成があることを確認した。沢の水田面にも石切りに伴う遺構が広がる可能性が高い。

採石坑やテラスの表面には、石臼未成品、五輪塔未成品、矢穴石、ズリ（伊奈石の碎石片）が多数発見できた。石臼は径33～36cm高さ15～20cmの円盤形で、上臼の窪みや供給孔の開けかけの未成品である。五輪塔は20cm角の直方体の石で、火輪未成品である。矢穴石は幅18～15cm、12～9cm逆台形またはU字形で、大形のは戦国～江戸時代初期の矢穴、中形の矢穴は江戸時代中～後期の矢穴と思われる。このほかにテラスでは石切りに関わる工具類などの遺物は採集されていない。



・矢穴石、未成品

図V-4 宮田東沢・唐松山の石切り場遺構群 概念図
(伊奈石調査会1993と本分布調査による)

【下ノ川東沢】

沢奥の中央底部にズリと崖錐が混り、溜っているが、この中に矢穴やノミあとのズリが見られたが、露頭は見つからなかった。多分沢底に一部のぞいていたものや、そこにあった転石を利用したもので採掘していないようである。この沢とその南の^{ねはち}祢八谷戸の奥はかなり地層が圧砕されているので加工に良い石は得られなかったのではないだろうか。この石は岩質からも高尾石である。

【砂沼の奥 南谷と北谷】

砂沼の砂岩層は、泥岩との互層で数mの砂岩層が2～3層重なっている。しかも地層全体が圧砕され、ブロック状になっているところを掘り取っているようである。しかも採掘時期が古いのか、砂岩層の上に泥層が崩落していて、層状に露出しているところは少なかった。ズリも多く大規模に採掘している。連続した露頭堀4カ所、10×15mの堅坑1カ所、テラス9カ所が確認された。岩質は高尾石である。

(樽)

【平井字中野の遺構群】 (図V-5)

横沢入地区から東側の日の出団地北側の尾根続きに広がる石切り場遺構である。日の出団地北側の横沢字下ノ川に接する南斜面にズリ場があって、比較的大きな伊奈石塊が押し出されている。さらに日の出団地3号公園北側の南斜面から、大久野字落合の尾根の南北には4カ所以上の採石坑とテラス3カ所が広がっている。大きい堅坑は径20m深さ5m位で、中型の矢穴石が採集できる。また日の出団地4号公園から3号公園にかけての崖面には伊奈砂岩部層が露出しており、掘削用の鉄ロッドが残っているが、これは、この団地造成の際の遺物である。昔、ここでは伊奈石の採掘が昭和初期まで行われていたと、地元の古老が語っていた。

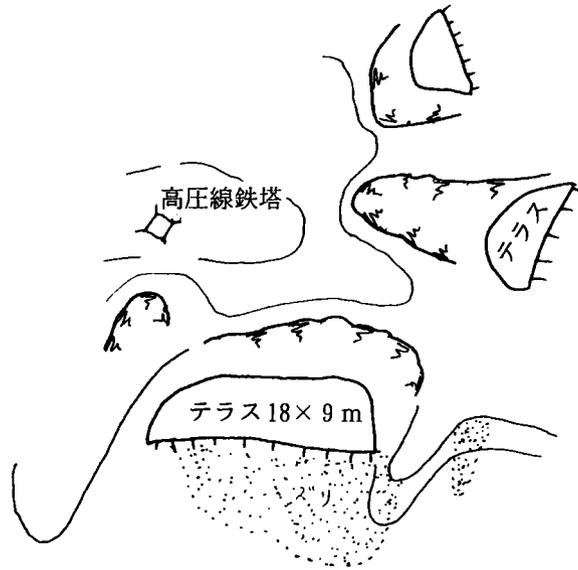
日の出町平井字中野から大久野字落合にかけての平井氏館跡までの山中には、伊奈砂岩部層の上に五日市礫層・ローム層が覆っているため、採石遺構はみられない。

これら平井と大久野の石切り遺構は江戸時代後期以前から近代にかけての遺跡と推定される。

【三内の遺構】

三内神社奥宮のある天竺山から南方に、伊奈砂岩部層は南北に伸びている。しかし草堂ノ入奥と峰ヶ谷戸の間の尾根両側にも自然的な伊奈石片が散布するが、人工的な採石坑が発見できていない。地元の栗原良一氏の話では台風のと看崖崩れがあったとのことである。その南尾根にある愛宕神社奥の院南斜面の山林に巾40mほどの露頭堀が見られた。ズリは谷底まで埋めている。

そして五輪坂を下りて、五日市街道南側の三内字亀ノ甲下の秋川河原に小規模な石切り場がある。川原の北岸に幅50m露出した伊奈砂岩層に対して、中型(幅9～12cm 厚さ4～6cm 深さ6～9cm)の矢穴を連続してあけた矢穴のある岩盤が4個以上露出している。河原の伊奈石は風化していないために硬く



図V-5 平井の石切り場遺構 見取図

割り取りにくいいため、矢穴をあけたものの、石切りができずに放置されたものとみられる。年代的には三内亀ノ甲下の石切り場は江戸時代中期～後期とみられる。

【高尾 法光院跡の遺構】

秋川南岸の河原から廃寺となった法光院跡にかけての北崖面に伊奈砂岩層が走っており、矢穴石が散布している。矢穴は中型・小型のもので、未成品はみられない。大悲願寺文書の「法光院伊奈石売却一件訴状」によれば、宝暦10年（1760）の近年に石工が大勢掘り崩して石臼に売却していたとのことであるから、法光院の石切り場遺構は江戸時代中期のものともて良いだろう。

【高尾・網代地区の遺構群】（図V-6、7）

秋川南岸にそびえる高尾山から網代城山にかけての尾根東側に分布する石切り場遺構群である。この採石は狭義の伊奈石ではなく、高尾石と仮称する横沢砂岩泥岩部層を目的としていて、標高280～200mの山腹から沢にかけて、南北1.2km、幅400mにわたっている。

高尾山の北東の瀬戸北沢に小規模なテラス2カ所とズリ場がある。高尾字瀬戸中沢には沢の湧水点に近く小規模なテラス1カ所とズリ場がある。この瀬戸中沢のテラスには10数点の石臼未成品が転石の中にまじっているのを発見し、採集した。

高尾の境沢を南に入る狭い沢の山腹の瀬戸南沢には大規模な露頭掘りの採石坑が2カ所とテラス2カ所がみられる。採石坑は80m×50m深さ20mにわたり、沢の両斜面の尾根筋から下をえぐり掘っている。テラスは径50m以上に広く、石塔未成品、そして江戸後期の陶磁器と寛永通宝を採集した。

境沢の本沢から奥までの40m以上にわたって、大規模な露頭掘りの採石坑と、南北両側にテラス4カ所があり、石塊・石臼未成品が転がっている。

網代の城山沢にも4カ所の露頭掘り採石坑とテラス4カ所、ズリ場が広がる。城山北沢のテラスは13×6mの三日月形のテラスで、急斜面に築造している。テラスで発見した矢穴石は幅12cm深さ8cmの逆台形の中型矢穴である。境沢と城山沢は秋川に注ぐ小さな谷川筋になっているが、沢に入りこむためには現在は道も途だえており、石工の石材搬出は横沢入地区に比べて難儀を極めたに違いない。

網代の湯場沢の網代温泉奥の沢まで、高尾石は分布しており、湯場沢の南腹に2カ所の露頭掘りとズリ場が広がっている。湯場沢の採石遺構は境沢や城山沢に比べると小規模である。

これら高尾・網代の石切り場遺構群の年代については、①石臼未成品がほとんどであること、②江戸後期の陶磁器・銅銭をテラスで採集したこと、③網代家文書の文化5年(1808)「石工商売願い上げ状」によると、五日市村の市兵衛が網代村散地の臼石を採石し出したということで、網代の石切り場が江戸時代後期(19世紀前半)に比定されること、などから、江戸時代後期およびそれ以前からの石切り場遺構と推定される。

横沢村の良質な伊奈石は大悲願寺の管理や伊奈石工の廃業によって江戸後期には廃絶していたが、高尾・網代の石切り場は江戸後期にも石臼採石の操業中であったのである。(十菱)

【入野樽の遺構】(図版24)

現在、発見されているのは3ヶ所、共に露頭掘りである。字樽北ノ入A(五日市町入野945)2ヶ所、字樽滝沢B(入野839)1ヶ所で、小規模の4～5mの石切り場とテラスを持つものである。風化した岩は緑灰色の中粒砂岩だが、横沢入や高尾のものよりやや硬質である。

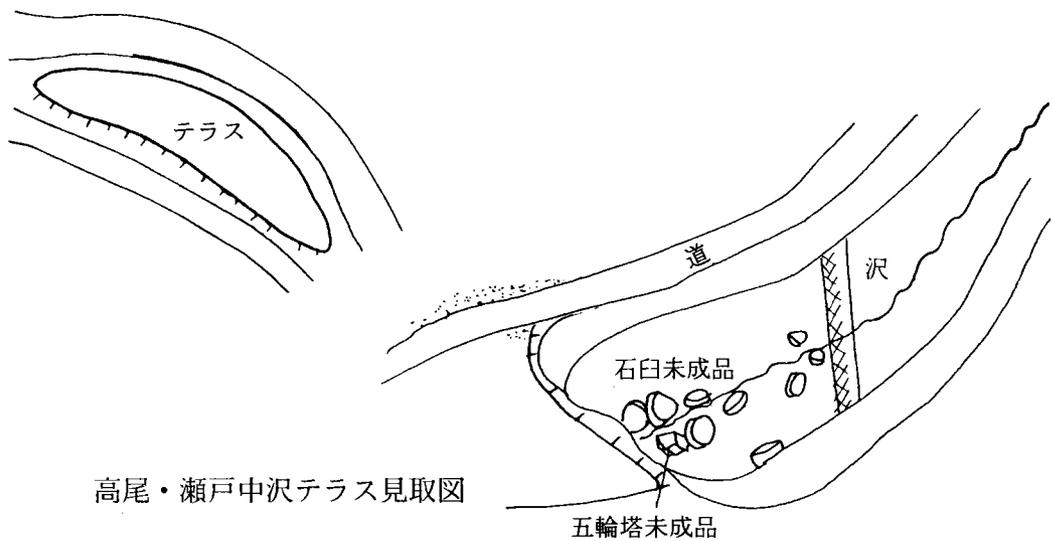
樽北ノ入(図I-1 A)下の石切り場:長さ4m、高さ1m足らずの露頭掘りで、テラスを含めて8×10m。ズリはさらに10mほど下にちらばり、その中に矢穴石(60×50cm)が1個見つかった。矢穴の幅6cm深さ8cmが4穴ある。

樽北ノ入(図I-1 A)下の石切り場から50mほど上部で尾根に近いところにはほぼ同じ程度の石切り場がある。露頭掘りの高さ1.5mゆるい傾斜面なので、竪坑状に少し掘り下げたようになっている。テラスはその外に4m×3mほどのものがある。

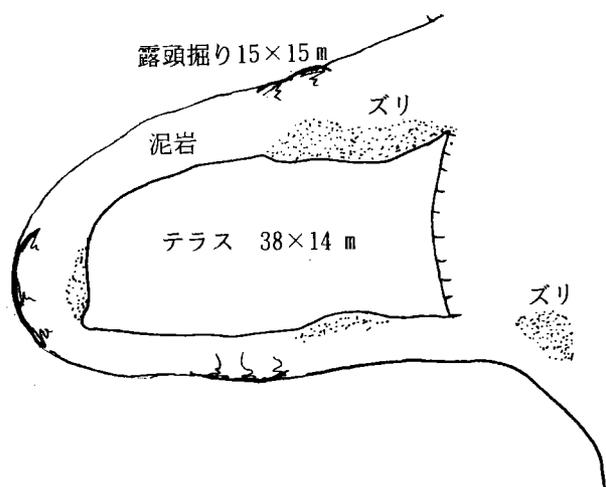
2つの石切り場の北側の小高い場所に八幡神社をまつた小社が昔あったので、この山を八幡山といっているが、その小社をすえた石に矢穴跡が見つかった。40cm×50cm位の対角線状に3つずつ矢穴が6コあり、幅6cm～7cm最大深さ8cmであった。

入野樽から小倉に通ずる滝沢(図I-1 B)の小道ぎわに、幅5m高2mほどの露頭掘りがあり、ズリは道の反対側の畑の土手上にすててある。昔、荒砥を取ったと古老は云っていた。

20年ほど前まで道に面して平らな1mほどの岩が出ていてそこは陽当たりが良いので野良仕事のときの茶飲み場となっていた。矢穴は見つかっていない。(樽)

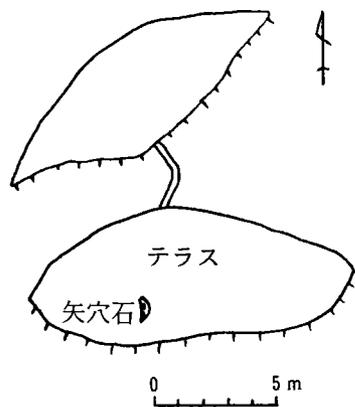


高尾・瀬戸中沢テラス見取図



高尾・瀬戸南沢テラス

矢穴石 網代・城山北沢テラス



図V-7 高尾・網代の石切り場遺構 見取図



図V-6 高尾・網代地区 伊奈石切り場遺構分布図

VI 伊奈石採集遺物の概要

山梨学院大学考古学研究会

北嶋 宏一・小宮山博彦

荻原 毅・綱島 勝利

伊奈石遺跡群の採集遺物を遺跡別で見ると、横沢入地区で35点、高尾地区で22点、網代地区で2点、日の出町平井地区で3点、三内秋川河原亀ノ甲地区で1点、伝世品11点が採集された。

横沢入地区からは、石臼未成品4点、矢穴石28点、石塔未成品1点、地輪1点、加工石1点、ノミ跡1点が採集された。

石臼未成品は直径30～39cm×高さ18～20cmの円盤状で、上臼が1点、下臼が1点、矢穴跡がみられるのが1点である。いずれも半割で、上臼の窪みがある第1工程のものがあり、中にはノミ跡が見られるものがある。横沢入石山池北テラスの石臼未成品(Y-16)は直径39cm×高さ20cmの円盤状であり、半分に割れたため廃棄されたものと見られる。矢穴石は径7～67cmと大小さまざまであり、矢穴は幅6cm～14cm×深さ7cm～15cmでいずれも逆台形である。石塔未成品(Y-2)は幅40cm×高さ29cm×奥行27cmで、墓石の石塔と見られる。五輪塔の火輪未成品(Y-3)は幅28.5cm×高さ14.5cm×23cmで、上部は四角錐状に斜めに整えられた途中でえぐられたものと見られる。加工石(Y-35)は幅22cmで、幅3cm位の平タガネによるノミ跡が斜めに7本入っている。

高尾地区からは、石臼未成品16点、矢穴石5点、火輪1点が採集された。

石臼は直径27～38cm高さ13～30cmの円盤状で、上臼の窪みが見られるものが1点ある。ノミ跡も2点見られる。矢穴石は径18～32.5cmで、矢穴は幅4cm～6cm×深さ5.5cm～7cmの逆台形かU字形である。五輪塔の火輪未成品は幅24cm×高さ14.5cm×奥行23cmである。

網代地区からは、石臼未成品1点、矢穴石1点が採集された。

石臼未成品は直径39cm×高さ23cmの円盤形で上臼の窪みが見られる。矢穴石は径19cmで矢穴は幅3cm×深さ3cmである。

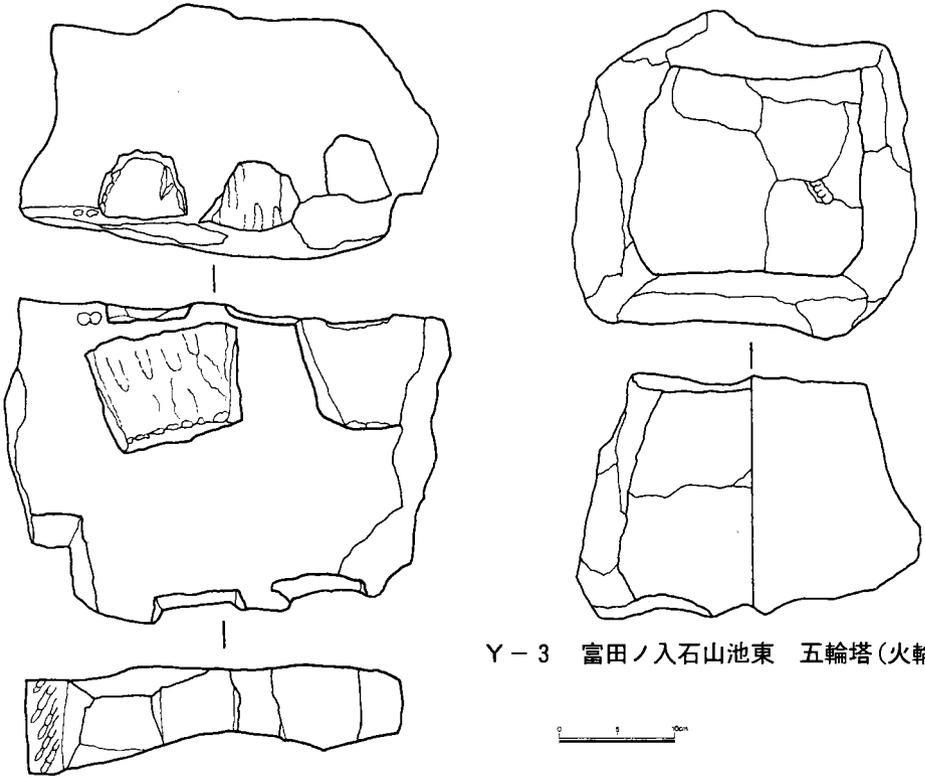
日の出町平井地区からは、石臼2点、矢穴石1点が採集された。

石臼(廃棄品)は直径32～33cm×高さ7～11.5cmの円盤状で上臼1点下臼1点である。上臼には供給孔や芯棒穴、把手溝が開けられ、主溝、副溝も彫られており、下臼下面には固定するための溝があり、完成品である。矢穴石は径29cmで矢穴は幅6.5cm×深さ6cmである。

秋川河原三内亀ノ甲地区からは矢穴石1点が採集された。矢穴石は径48cmで矢穴は幅6cm×深さ7cm×厚さ4cmである。

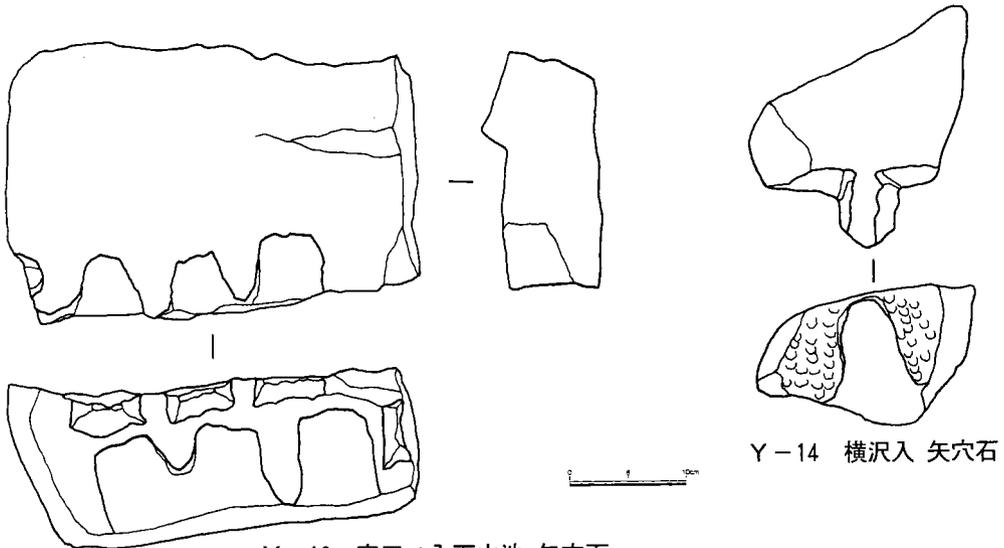
伝世品(民俗資料)は、代々五日市町の中島家、山下家、水哉荘等に伝えられ利用されていたものを寄贈を受け、伊奈石製品として記録したものである。石臼6点、茶臼2点、手洗鉢2点、墓石台座1点がある。

中でも (D-10) の茶臼 (下臼) は直径26.5cm×高さ14.5cmの円盤状で、八分画の主溝に細かい副溝がある。また (D-8) の墓石台座は直径29.5cm×高さ12cmの円盤状であるが、これは元々石臼 (上臼) であったものが墓石台座として再利用されたものであり、珍しいものである。 (北嶋宏一)



Y-3 富田ノ入石山池東 五輪塔 (火輪) 未成品

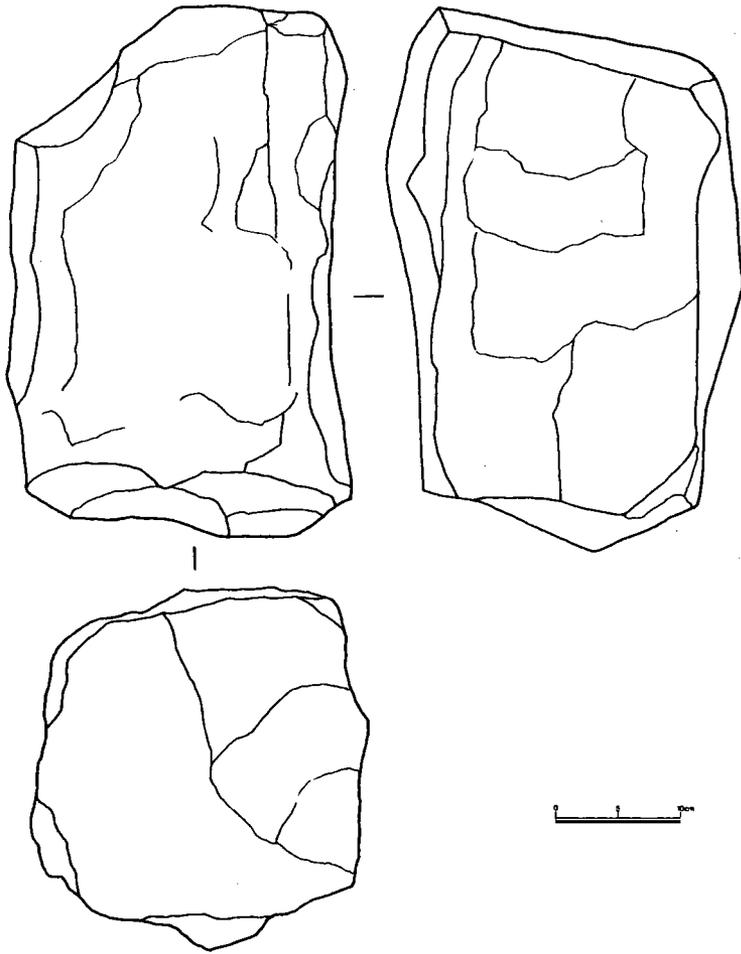
Y-6 宮田東沢テラス 矢穴石



Y-10 富田ノ入石山池 矢穴石

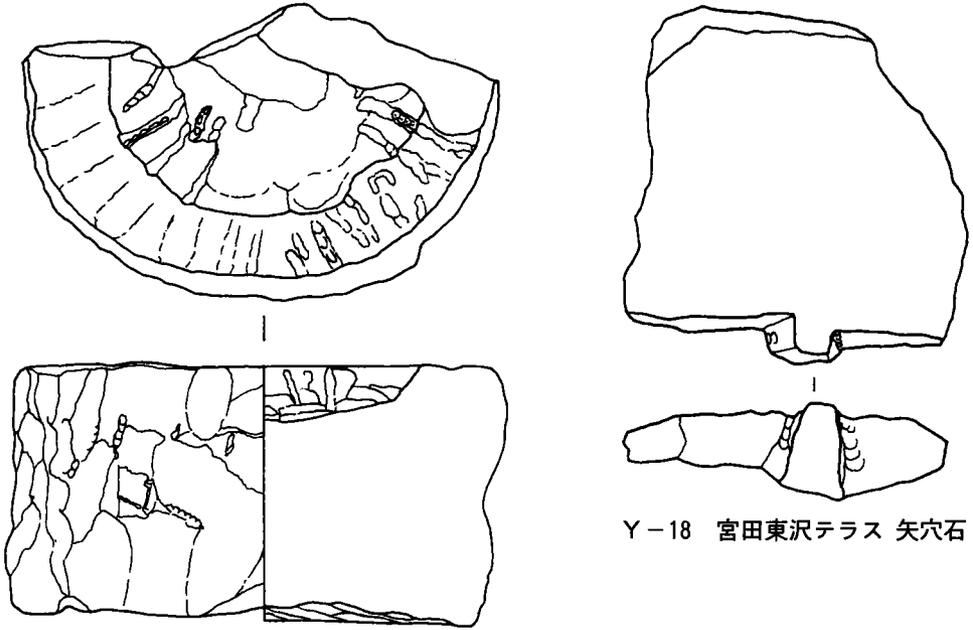
Y-14 横沢入 矢穴石

図VI-1 横沢入伊奈石製品実測図



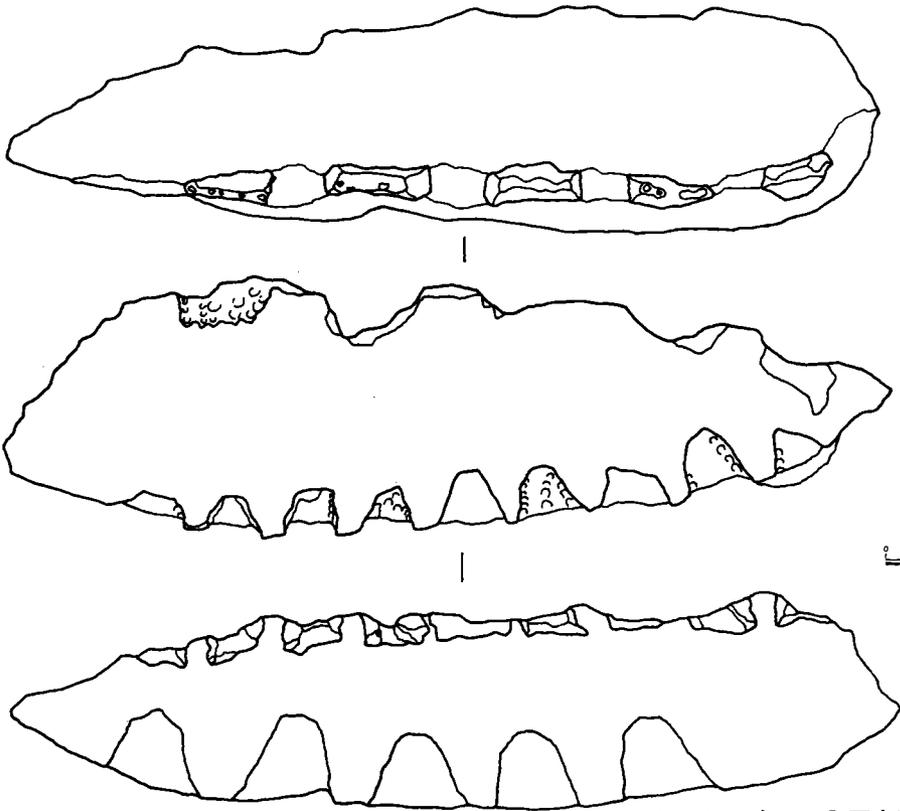
Y-2 富田ノ入石山池東 石塔未成品

図VI-2 横沢入伊奈石製品実測図



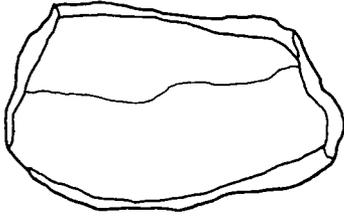
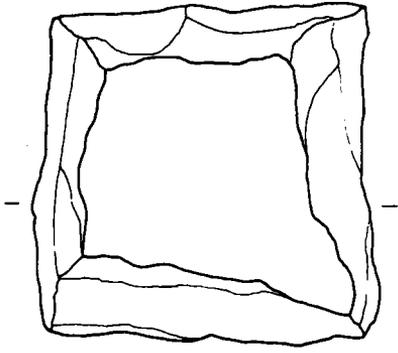
Y-15 富田ノ入石山池東 石臼未成品

Y-18 宮田東沢テラス 矢穴石

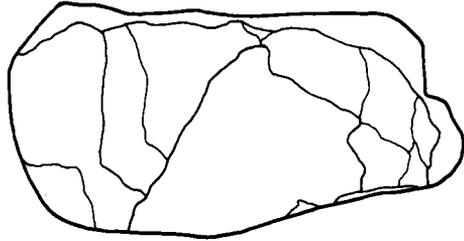
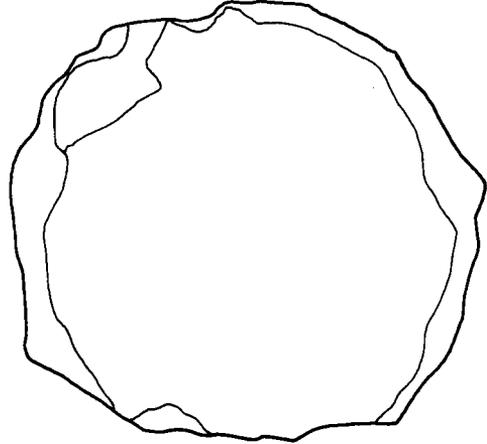


Y-34 富田ノ入石山池 矢穴石

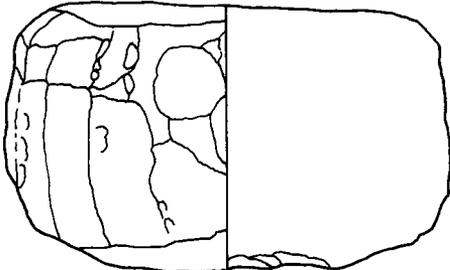
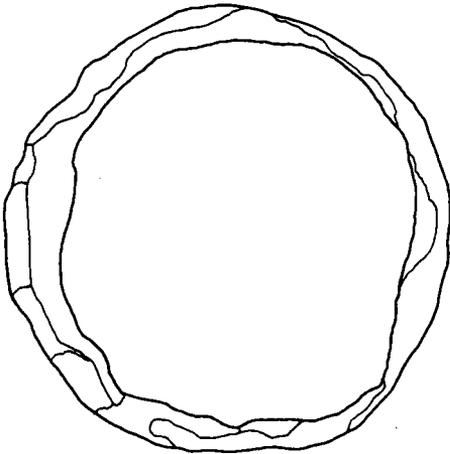
図VI-3 横沢入伊奈石製品実測図



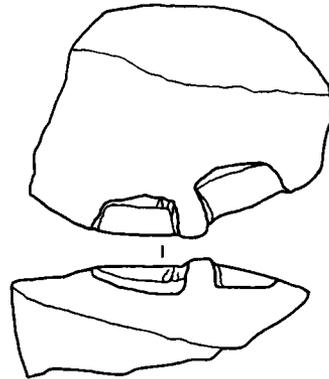
T-5 高尾瀬戸中沢テラス 五輪塔(火輪)未成品



T-11 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品



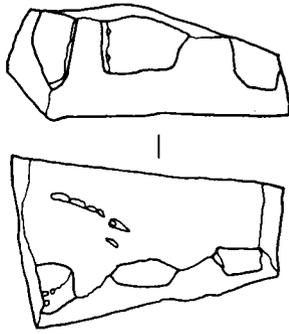
T-6 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品



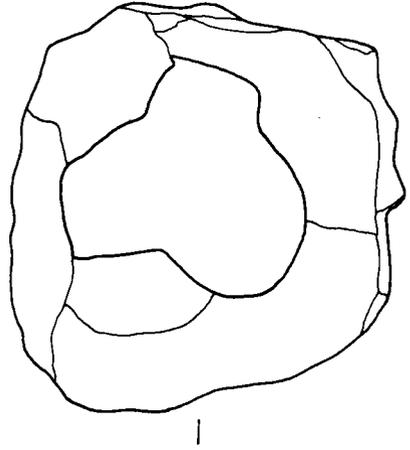
T-15 高尾法光院 矢穴石



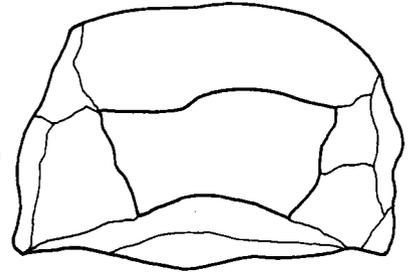
図VI-4 高尾伊奈石製品実測図



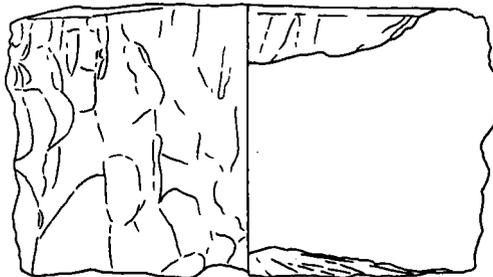
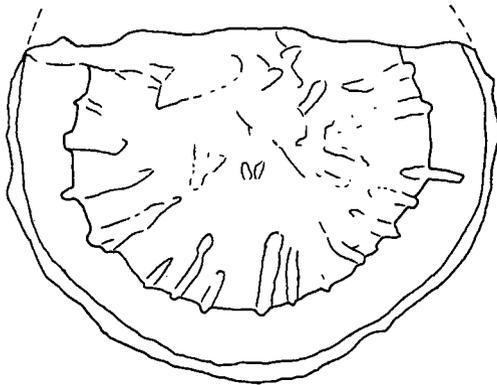
T-16 高尾法光院 矢穴石



T-18 高尾瀬戸中沢テラス
石臼未成品



高尾伊奈石製品実測図

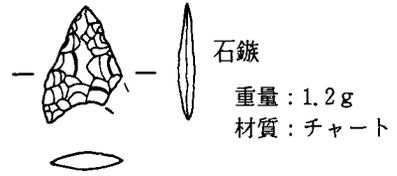


A-1 網代城山沢 石臼未成品 (上臼)

図VI-5 網代伊奈石製品実測図



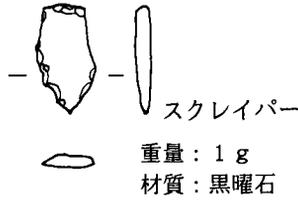
石鏃
重量：1 g
材質：チャート



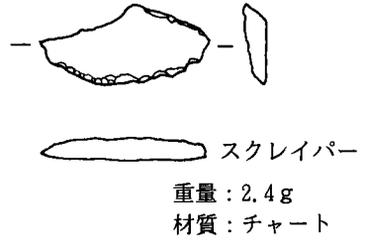
石鏃
重量：1.2 g
材質：チャート



石鏃
重量：1.2 g
材質：チャート

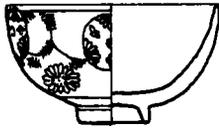


スクレイパー
重量：1 g
材質：黒曜石



スクレイパー
重量：2.4 g
材質：チャート

横沢入東平遺跡採集 石器



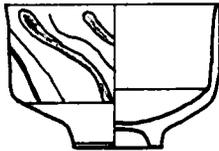
高尾境沢テラス採集 陶磁器 (近代)

高尾境沢テラス採集遺物実測図



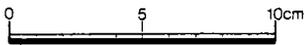
日の出町平井字道場 福嶋清宅採集 陶磁器 (近世)

日の出町遺物製品実測図



網代城山テラス採集 陶磁器 (現代)

網代城山テラス採集

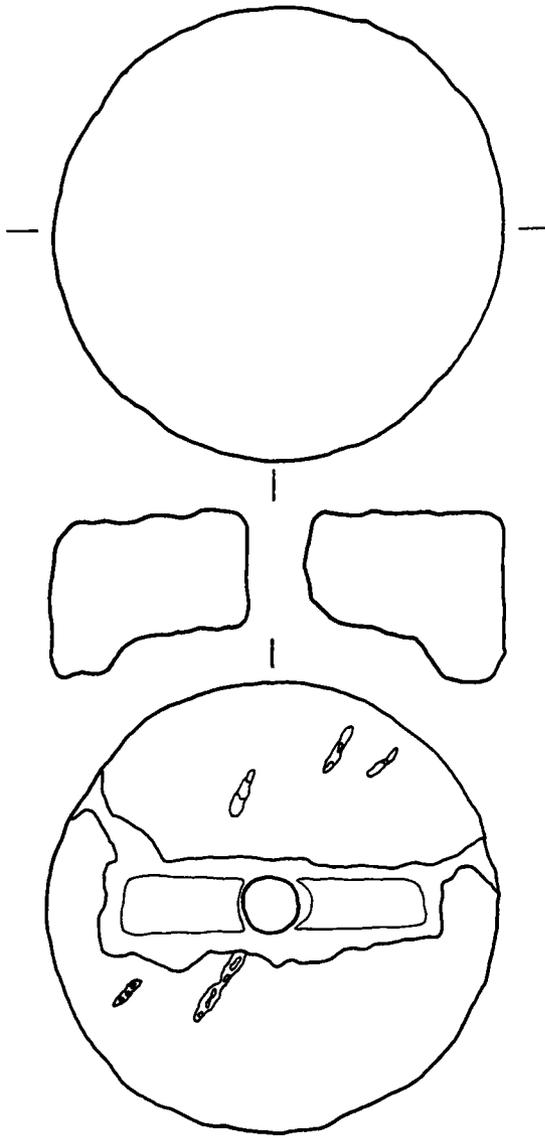


横沢入東平遺跡採集
縄文土器

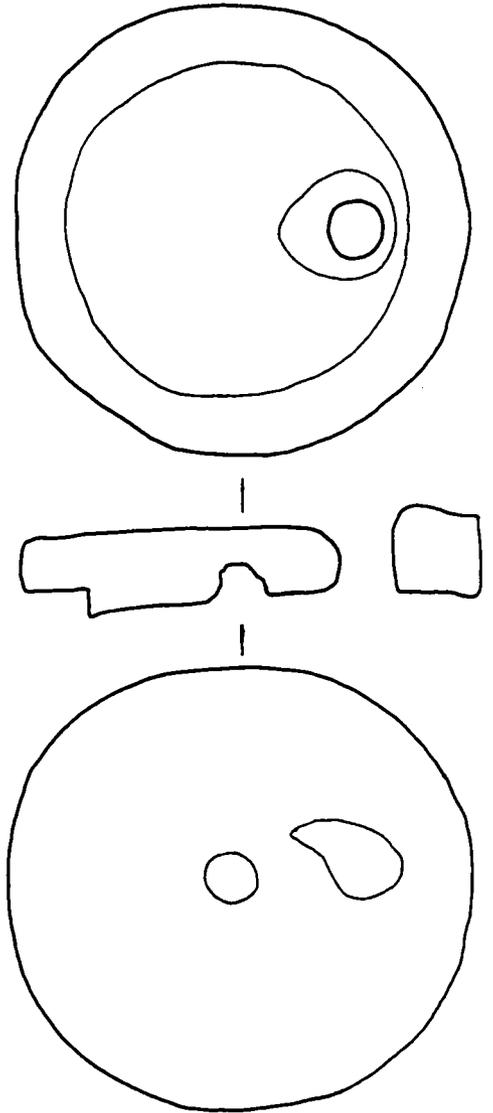


横沢入東平遺跡採集遺物実測図

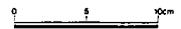
図VI-6



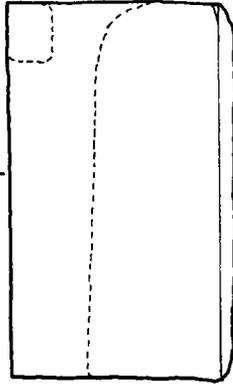
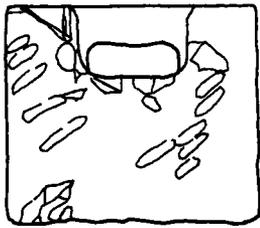
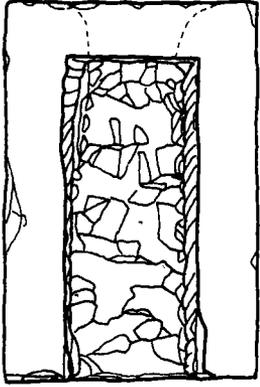
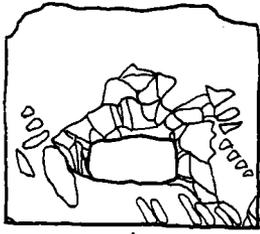
D-12 平井中野横倉家 石臼 (下臼)



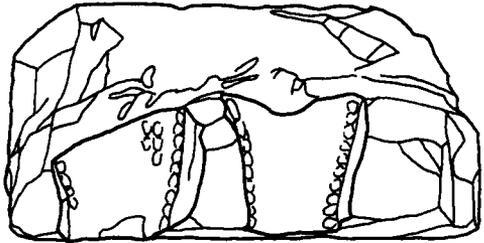
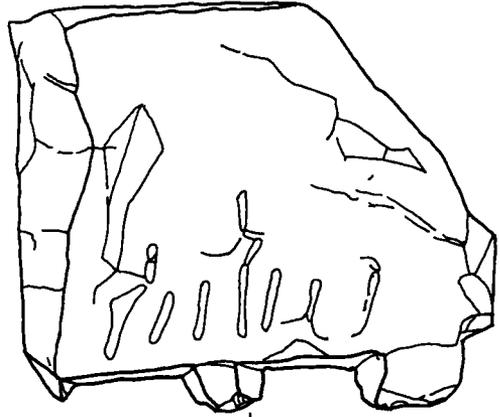
D-13 平井中野横倉家 石臼 (上臼)



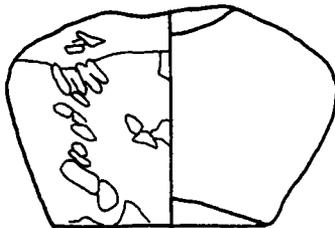
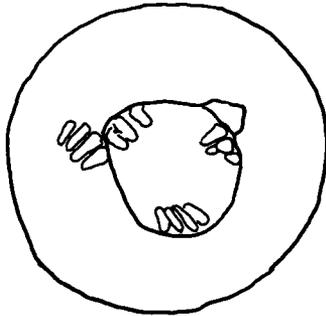
图VI-7 平井伊奈石製品実測図 (伝世品)



D-15 石祠 旗立て台
三内吉田家 伝世品
五日市町三内



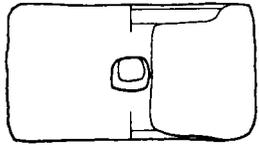
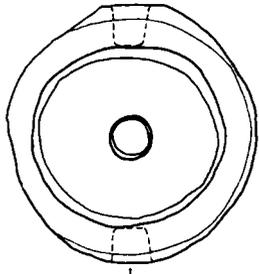
S-2 矢穴石
三内自治会館
五日市町三内



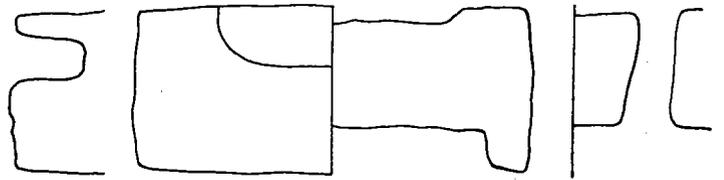
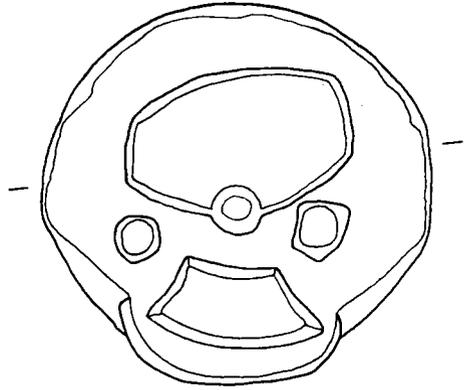
D-14 五輪塔水輪
三内吉田家 伝世品
五日市町三内



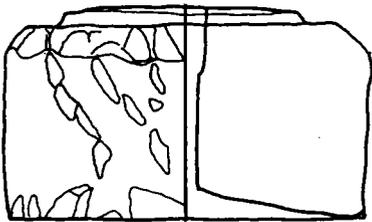
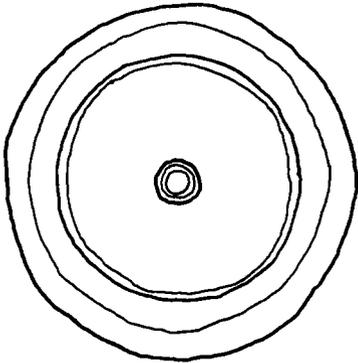
図VI-8 三内伊奈石製品実測図



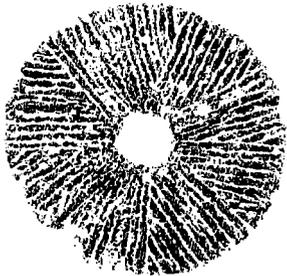
D-4 秋川市野辺山下家
茶臼 (上臼)



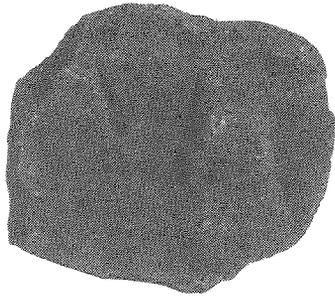
D-8 久保河原水哉荘
石臼 (上臼) 墓台石



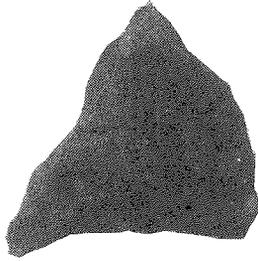
D-10 伊奈新宿唐沢氏宅付近 茶臼 (下臼)



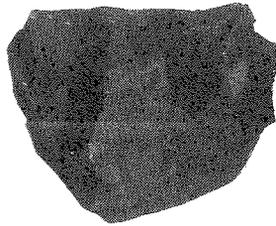
图VI-9 伝世品伊奈石製品実測图



七沢石 厚木半谷丁場テラス 矢穴石



七沢石 厚木半谷丁場テラス 矢穴石



七沢石 厚木半谷丁場テラス 矢穴石



図VI-10 厚木半谷丁場七沢石製品写真

伊奈石製品一覽表

(小宮山 博彦)

No.	採集地	名称	奥行cm	幅(直径)	高さ	重量kg	備考(単位cm)
Y-1	富田ノ入石山池	矢穴石	24	67	27	28.5	矢穴幅 6×4 5×4.5
Y-2	富田ノ入石山池東	石塔未成品	27	40	29	53	
Y-3	富田ノ入石山池東	五輪塔(火輪)未成品	23	28.5	19.5	22	
Y-4	横沢入	矢穴石	25	35.5	14.5	14.5	ノミ痕
Y-5	横沢入	矢穴石	21	23.5	13	5	ノミ痕
Y-6	宮田東沢テラス	矢穴石	20.5	37	28.5	24	ノミ痕
Y-7	荒田ノ入	矢穴石	10	21	21	4	ノミ痕
Y-8	横沢入	矢穴石	14.5	21	14	5	ノミ痕
Y-9	横沢入	矢穴石	4	7	9.5	0.3	
Y-10	富田ノ入石山池	矢穴石	23.5	36	13.5	17	矢穴幅 6×2
Y-11	富田石山池東テラス	石臼未成品	18.5	37.5	18	19	ノミ痕
Y-12	富田ノ入石山池	ノミ痕	17.5	43.5	13	9	ノミ痕
Y-13	富田ノ入石山池	矢穴石	10.5	37.5	18.5	8.5	矢穴幅 7.5 ノミ痕
Y-14	横沢入	矢穴石	18	23	12.5	3.5	大型矢穴 ノミ痕
Y-15	富田ノ入石山池東	石臼未成品	18	34.5	20	21	上臼くぼみ ノミ痕
Y-16	富田石山池北テラス	石臼未成品	39	39	20	49	
Y-17	横沢入	矢穴石	9.5	15	12.5	2	大型矢穴 ノミ痕
Y-18	宮田東沢テラス	矢穴石	25	26	9	5	大型矢穴 ノミ痕
Y-19	横沢入	矢穴石	7.5	9	4.7	0.5	大型矢穴 ノミ痕
Y-20	横沢入	矢穴石	14.5	15	4.5	1	大型矢穴 ノミ痕
Y-21	横沢入	矢穴石	12	20.5	10.5	3	ノミ痕
Y-22	横沢入	矢穴石	9	18	13.5	2	ノミ痕
Y-23	横沢入	矢穴石	9.5	25.5	13.5	2.5	矢穴幅 6.5 ノミ痕
Y-24	横沢入	矢穴石	2.4	14	11	0.3	
Y-25	横沢入	矢穴石	6.5	21	15.7	2	ノミ痕
Y-26	横沢入	矢穴石	17	18.5	8	2	
Y-27	横沢入	矢穴石	10.5	17	15	2	ノミ痕
Y-28	横沢入	矢穴石	6	22.5	21	4.5	矢穴幅 8
Y-29	横沢入	矢穴石	16	21	14	7	矢穴幅 8.5
Y-30	富田ノ入石山池	石臼未成品(矢穴)	11.5	30	20	10.5	ノミ痕
Y-31	横沢入	矢穴石	18	21	5.5	2	

No.	採集地	名称	奥行cm	幅(直径)	高さ	重量kg	備考(単位cm)
Y-32	宮田東沢テラス	矢穴石	15	35	18	5.8	
Y-33	宮田東沢テラス	矢穴石	18	22	14	3.6	矢穴幅15×14 ノミ痕
Y-34	富田ノ入石山池	矢穴石	17	67	17	18.5	矢穴幅 7×5.5
Y-35	富田ノ入ズリ場	加工石	11	22	14	6	ノミ痕幅 3
T-1	高尾城山沢	石白未成品	26	38	30	46	ノミ痕側面にあり
T-2	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	31.5	33.5	16	25	
T-3	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	28	31.5	20	21.5	ノミ痕
T-4	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	32.5	33.5	15	16	
T-5	高尾瀬戸中沢テラス	五輪塔(火輪)未成品	23	24	14.5	15.5	
T-6	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	23.5	27	13	13	
T-7	高尾	石白未成品	29.5	32.5	17.5	29.5	
T-8	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	32.5	33	17	25	
T-9	高尾瀬戸北沢テラス	石白未成品	25	35	18	22	
T-10	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	31	31.5	17.5	33.5	ノミ痕
T-11	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	19.5	28	18	16	
T-12	高尾	石白未成品	20	33	20	23	ノミ痕
T-13	高尾	石白未成品	22	32	23	30	
T-14	高尾法光院	矢穴石	8	20	19	3.5	矢穴幅 7 ノミ痕
T-15	高尾法光院	矢穴石	18	23	8	3	矢穴幅 65.5
T-16	高尾法光院	矢穴石	11	21	10	3	矢穴幅 344
T-17	高尾法光院	矢穴石	17	18	5	2	
T-18	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	27.5	29.5	19.5	27.5	
T-19	高尾城山沢	石白未成品	22	32	20.5	27	ノミ痕
T-20	高尾法光院	矢穴石	14	32.5	10.5	4.5	矢穴幅 6.5×6.5 6×6.5
T-21	高尾山	石白未成品	15	28	21.5	14	ノミ痕
T-22	高尾瀬戸中沢テラス	石白未成品	22	31	19		ノミ痕
A-1	網代城山沢	石白未成品(上白)	27	39	23	37	
A-3	網代城山沢	矢穴石	14	19	14	4	矢穴幅 3 2.5
H-1	平井日の出団地	矢穴石	17.5	29	16.5	7	矢穴幅 6×6.5
S-1	三内亀ノ甲下秋川河原	矢穴石	27	48	18	20	
S-2	三内自治会館南	矢穴石	31	36.1	18		矢穴幅10.5×9.5×4

No.	採集地 (伝世品)	名 称	奥行cm	幅(直径)	高さ	重量kg	備考 (単位cm)
D-1	高尾字中島中島家	手洗鉢	53	37	32		
D-2	高尾字中島中島家	手洗鉢	51	35	33		
	高尾字中島中島家	手洗鉢	53	53	33		D-1, D-2 を接合した物
D-3	高尾字中島中島家	石白 (上白)	17	31.5	13	10	
D-4	秋川市野辺山下家	茶白 (上白)	19	19	10.5	5.5	
D-5	秋川市野辺山下家	石白 (上白)	18.5	23	9.5	5.5	
D-6	秋川市野辺山下家	石白 (下白)		28	10	12	
D-7	高尾字中島中島家	石白 (下白)	17	32	13	10.5	
D-8	久保河原水哉荘	石白 (上白) 墓台石	29	29.5	12	15.5	石白 (上白) の再利用
D-9	入野樽小峰家	石白 (上白)	16	32	13	7	
D-10	伊奈新宿唐沢氏宅付近	茶白 (下白)	26	26.5	14.5	17.5	下白 8 分画 12 溝
D-11	入野樽小峰家	石白 (上白)		33.5	12	18.5	上白 6 分画 6 溝
D-12	平井中野横倉家	石白 (下白)	32.3	33	11.5	10	1938年まで豆腐製造用
D-13	平井中野横倉家	石白 (上白)	32	32	7	10.5	1938年まで豆腐製造用
D-14	三内吉田家	五輪塔 (水輪)	25.6	25.6	16.9		
D-15	三内吉田家	石祠旗立台	17	19	29.1		旗立溝 10.4 × 5.7 1 痕

七 沢 石 製 品

No.	採 集 地	名 称	奥行cm	幅(直径)	高さ	重量kg	備考 (単位cm)
七沢石	厚木半谷丁場テラス	矢穴石	10	16		1.5	矢穴幅 4
七沢石	厚木半谷丁場テラス	矢穴石	15	18		3.5	矢穴幅 4 × 6 7
七沢石	厚木半谷丁場テラス	矢穴石	11	14		1.6	矢穴幅 4 × 4

Ⅶ 伊奈石石造物の流通分布と造立年代

内山 孝男

産業としての伊奈石石切り加工業の実態を明らかにするため、伊奈石製の石造美術遺品の存在する地点とその数を調査した。調査方法としては、江戸期の石造物を容易に観察できる場所として寺院の墓地を中心に調査し、肉眼あるいはルーペで使用石材の石質を確認し、像高、銘文などを記録し、写真撮影をし、略図を書き、必要な場合には拓本を取った。

各自治体の教育委員会が石造物の調査を行い、その報告書を作成しているが、地域史資料ないしは民俗資料、古美術としてこれを取り扱っているため、銘文や様式等の外形的な側面については詳しく記載するが、石材についてはまったく触れていない場合が多い。したがって、石造物を使用された石材の面から探ろうとする私たちの調査においては、これらの貴重な資料も、その成果を参考資料として活用することがほとんどできなかった。そのため、与えられた情報がほぼ0の状態から調査を開始せざるを得ず、最初の1993年12月12日の川越での調査から1年半を経過した現時点でも、十分な調査が行えたとは言いがたく、既に調査した点と点を結ぶ未調査の線上に、今後より多くのポイントを打っていく必要がある。また、ある地域のある時代において、石造物にある石材が専ら使われたり、またそれが、他の時代、他の地域では使われなくなるという流行や消長、競合関係がある。従って、伊豆石や七沢石、底沢石などの他の石材の流通状況を把握することが伊奈石の流通を知ることにつながるし、要するに、南関東一円の、しかも時代ごとの、石材流通の状況が明らかになってはじめて伊奈石の流通も明らかになると言える。このような観点からの石造物の調査はおそらくは過去に先例を見ないものであり、課題の大きさに比して私たちに与えられた時間が十分ではなかったことをお断りしておきたいのである。

1. 伊奈石石造物の分布

(1) 原産地（五日市町・日の出町）

■五日市町

伊奈石原産地である五日市町の石造物と石材については『五日市の石仏』（五日市郷土館 1987）に「五日市の石造物は大別して二種の石材からなっている。一つは秋川とその支流養沢川の川石である。」「川石は硬くて加工しにくい。像塔には不向きで、いきおい文字塔に使用される。したがって、川石の産地である西部山村地帯には文字塔が多い。」「一方東部地区からは伊奈石と呼ばれる石材が出た。」「切り石として用いられ、細かい加工にも向く。」となっており、西部の山間地には自然石の文字塔が多く、東部の平地部には伊奈石製の像塔が多い。

「五日市盆堀地区の石造物と使用石材」をⅦ-1に掲げておいた。盆堀地区は五日市町の南西部、旧戸倉村の南半分、盆堀川に沿った地区である。狭い谷の両側の急斜面に耕地と人家が点在する「西部

表Ⅶ-1 五日市町盆掘地区の石造物と使用石材

墓塔は像塔のみ記録した

	伊奈石	自然石	七沢石	石英閃緑岩	安山岩	凝灰岩	粘板岩	緑泥片岩	不明	計
地蔵	16	3	6	3					1	29
馬頭観音	3	3								6
如意輪観音	6								1	7
観音	1									1
道祖神	1	1								2
庚申塔		1								1
寒念仏塔		1								1
二十三夜塔		1								1
百番供養塔		1								1
光明真言塔		1								1
顕彰碑							1			1
石狐					2					2
狛犬									2	2
灯籠									2	2
石祠						3				3
階段	1									1
五輪塔(部分含む)	10									10
宝きょう印塔	2									2
板碑								13		13
不明	1	1								2
計	41	13	6	3	2	3	1	13	6	88

表Ⅶ-2 秋川市多西地区の石造物の使用石材(秋川市文化財調査による)

墓塔は像塔のみ記録した

	江戸時代	明治以降	年代不明	合計	%
伊奈石	40	14	42	96	53.0
七沢石	7	1	4	12	6.62
安山岩	4	0	1	5	2.76
自然石	10	3	18	31	17.12
(砂岩)	5	2	11	18	
(礫岩)	2	0	1	3	
(チャート)	0	1	0	1	
(石英閃緑岩)	1	0	5	6	
(石灰岩)	2	0	1	3	
緑泥片岩	1	0	4	5	2.76
花崗岩	0	1	2	3	1.65
粘板岩	0	5	1	6	3.31
レプリカ	0	0	3	3	1.65
不明	5	4	12	21	11.60

山村地帯」である。したがって自然石の文字塔が多いが伊奈石の石造物はそれに三倍する。特に像塔の場合はほとんどが伊奈石であるといって良い。五日市町内では伊奈石製でない像塔を探すのは簡単ではない。川石、伊奈石以外の他の地域からもたらされる石材では、割合は少ないが伊豆産と思われる安山岩がみられる。江戸城の石垣のほとんどは伊豆から供給された安山岩だから、五日市の伊豆石も江戸を經由して運ばれて来たものであろう。盆堀地区の七沢石6は盆堀東平の共同墓地入り口にある六地藏で、五日市町内の七沢石石造物はきわめて珍しい。

五日市町で、最も多くの伊奈石石造物を見ることができる場所は言うまでもなく石切り場を抱える旧横沢村の大悲願寺である。中世の五輪塔、宝篋印塔、歴代住職の五輪塔、五輪地藏、江戸後期の馬頭観音、如意輪観音、地藏、などといった墓塔や供養塔などの他にも、巨大な一枚石の石橋、井戸枠、精緻に切り石を組んだ石垣等があり、歴史的価値の高い文化財に満たされた「伊奈石石造物の宝庫」であると言える。

■日の出町

宗劔寺跡	日の出町平井字中野日の出農協南
宝光寺	日の出町平井3392
川久保家墓地	日の出町大久野字落合日の出農協東
日の出町平井本宿小学校北	福島家
日の出町平井西平井橋	
天正寺	日の出町大久野2248（曹洞宗）

日の出町でも江戸期の石造物の大半は伊奈石で占められている。そもそも伊奈石の石切り場遺跡の一部が大久野境を越えて現在の日の出町域にかかっており、日の出町地自体が宅地開発以前には石切り場の跡であったと思われるから、日の出町に伊奈石が多いのも当然のことであろう。五日市町三内101の三内石材店は昭和のはじめ頃こちらがわで石材を切り出していたという。

平井字中野に宗劔寺跡とされる場所がある。新編武蔵風土記稿は宗劔寺について「平井山と号す、禪宗曹洞派にて、村内宝光寺の末なり」「開基は平井氏の人なる由云伝ふれど、その俗称などを云えず、平井院殿忍雄宗劔と云、天正十八年八月廿三日卒せり」と説明する。平井氏は中世に平井周辺の地域を支配した平山氏の一族で天正18年（1590）6月に行われた豊臣秀吉の小田原北條氏攻略の際、八王子城への道案内を努めたという平井無辺が「平井院殿忍雄宗劔」であろうと思われるが、その供養塔がこの地に残っている。伊奈石製の、塔身円柱形、台座八角柱形という一風変わったもので「平井院殿忍雄宗劔大居士 當山十二世安空□代 文政十二戊子年八月二十三日立之 信州高遠荒町石工秋山和助 秋山義兵衛」という銘文がある。（図Ⅶ-3）平井氏の菩提を弔うために旧臣や壇中によって後世に建てられたものであろう。伊奈村と高遠石工の結びつきは岩走神社の社伝によって平安期まで遡るが、「文政十二年」という江戸後期に至っても引き続き高遠石工の来ていることが知られるのである。

(2) 伊奈道、甲州道を東へ

■秋川市

秋川市草花804森山通り

秋川市草花720薬師堂

秋川市菅生菅生高校入り口

秋川市草花2767久保の地蔵

秋川市草花2965

秋川市草花496森山墓地

花蔵院 秋川市草花1740 (真言宗豊山派)

大行寺 秋川市草花3036 (真言宗豊山派)

陽向寺 秋川市草花2542 (臨済宗建長寺派)

滋勝寺 秋川市草花1811 (臨済宗建長寺派)

福泉寺 秋川市菅生629 (臨済宗建長寺派)

宝蔵寺 秋川市菅生263 (曹洞宗)

蔵守院 秋川市菅生1767 (曹洞宗)

正勝神社 秋川市菅生1819

秋川市瀬戸岡471富沢電気工事裏

珠陽院 秋川市瀬戸岡511 (臨済宗建長寺派)

福德寺 秋川市牛沼75 (臨済宗建長寺派)

法林寺 秋川市小川東212-10 (臨済宗南禅寺派)

秋川市でも石造物に占める伊奈石の割合は非常に高い。表Ⅶ-2に「秋川市多西地区の石造物の使用石材」を掲げておいた。調査した全181の石造物のうち53パーセントにあたる96が伊奈石製であった。伊奈石に続くものはここでも自然石である。埼玉県秩父産の緑泥片岩を使ったものは板碑4枚の他に縄文時代の石棒が一つ見つかっている。これは個人の墓地にあったもので、近くの遺跡から出土したものを移したのであろう。

多西地区の調査で伊奈石にかかわりのある二つの石工銘を確認した。一つは菅生の東海大学菅生高校の入り口にある「明治十五年」の道標で「横沢村石工 田野倉藤兵衛」とある。(図Ⅶ-4)「田野倉藤兵衛」は五日市横沢の大悲願寺の横で今でも石材業を営んでいる田野倉石材の先祖で、石山一件に登場する庄兵衛が老衰してその後を譲ったという藤兵衛その人であろう。詳しくは本書の第七章「伊奈石関係近世文書について」を参照いただきたい。

今一つは、同じく菅生の正勝神社にある「天保四卯年」の安山岩製の手水鉢で「信陽高遠石工 保科保正」とある。「天保」という時代は伊奈村の石工が皆廃業し一人もいなくなってしまう頃で、いったい誰が石を切り出し、細工をし、売っていたのかわからなかった。今回、石山一件日記を細読す

ることで、江戸期を通じて高遠の石工が当地に来ており、主に彼らが伊奈石の流通を担っていたらしいことがわかっている。この点についても第Ⅷ章を参照願いたい。

現在の滝山街道沿いの油平交差点に近い福德寺では、墓地入り口の六地藏（五輪地藏・光背に五輪塔を浮き彫りしたもの）および角柱状の墓塔のいくつかに七沢石のものがみられる。年号はいずれも江戸後期である。

七沢石は神奈川県厚木市七沢の山中から産出される凝灰質砂岩で、小指大の礫を含むが、この礫が硬くない泥であり、加工しやすいため南関東一円にかなり広範囲に使われた。特に軟岩系の石材としては江戸後期以降最も普通に使われたようである。いつ頃から採石が始められたか明らかではないが、厚木市域には江戸前期の作例が散見されるのでその頃であろう。軍畑の渡しで多摩川を渡り、梅ヶ谷峠を越えて坂本に出、平井を通り、山田で秋川を渡って網代に出る道筋がこのあたりを通る中世の秩父鎌倉古道であったが、武蔵と相模を南北に結ぶ道筋は他にもいくつも並行しバイパスしており、草花-雨間-戸吹を結ぶ現在の滝山街道に近い道もあった。福德寺の七沢石はこうした道を通して八王子経由でここまでもたらされたものであろう。江戸後期にはこのあたりまでは七沢石の波が寄せて来ていた。小川の法林寺では墓地内の石造物の約5割が伊奈石である。

■福生市

福生市については

内出家墓地	福生市熊川300 福生市熊川47石川酒造南
真福寺墓地	福生市熊川289（真言宗豊山派）
千手院	福生市熊川20（臨濟宗建長寺派）

の4ヵ所について調査した。睦橋通り沿いの睦橋の近くに内出自治会館があり、その隣の空き地に内出家の墓地がある。江戸期のものと思われる五輪塔が3基あるが、その東側に道路が拡幅された際に真福寺境内の石造物を整理したものと見られる石造物群が無雑作に積み上げられている。すべて伊奈石である。この中には真福寺27世玄津和上の供養塔である「玄津塔」も含まれる。この空き地もいずれ宅地化されると見られ、文化財としてのきちんとした管理が望まれる。千手院や真福寺では伊奈石石造物の江戸期の石造物に占める割合は3～5割であろう。真福寺墓地には明治や大正の年号を持つ墓石がいくつかあり、近代になってもなお他地域への伊奈石の石材供給が続いていたことを証明する。

二宮宿が発展する中世後期までは山田-引田-代継-油平-雨間-野辺-小川と進む現在の睦橋通りは江戸と伊奈宿を結ぶ「伊奈道」の本道であった。調査地点の熊川内出地区はその伊奈道が多摩川を渡る「小川の渡し」「熊川の渡し」が明治まであった交通の要衝であるから、伊奈石の遺物も濃密に残るのであろう。古い伊奈道はこの後拝島の北部を通して砂川の天王橋に出、現在の五日市街道と重なる。

■昭島市

昭島市内の調査地点は

普明寺	昭島市拝島町1-20-16 (天台宗)
竜津寺	昭島市拝島町5-1-27 (曹洞宗)
拝島大師	昭島市拝島町1-6
観音寺墓地	昭島市大神町1-5
観音寺	昭島市大神町3-6-5 (天台宗)
阿弥陀寺	昭島市宮沢町140 (真言宗豊山派)
観音寺恵日庵	昭島市中神町2-31
福厳寺	昭島市中神町499 (臨済宗建長寺派)
宝積寺	昭島市郷地町1-13-3
真覚寺	昭島市玉川町5-9-27 (天台宗)

の10ヵ所である。これらは現在の奥多摩街道沿いの寺院で、これらの墓地ではどこでも伊奈石を見ることができる(真覚寺にはない。文政年間に火災で消失し、天保末に再建したからであろう)。江戸期の石造物に占める伊奈石の割合は拝島の普明寺で3割弱であり、立川方面に向かって漸時割合が少なくなっていくようである。奥多摩街道を挟んで普明寺の向かい側にある竜津寺には貞享5年の銘を持つ宝篋印塔がある。これは完全形だが、ほぼ同時期のもので相輪の部分だけ伊豆石を継いだものが3基ある。(「伊豆石」は金子浩之氏の『生産遺跡-伊豆・石切場』(季刊考古学第53号)によれば何種類かの岩石を指し、それも時代的な変遷があるというが、ここでは玄武岩)後で述べるように、伊奈石は風化しやすいという欠陥を持つために江戸も後期となると七沢石や伊豆石にとって変わられていく。伊奈石の風化して崩壊した部分を伊豆石で後補したこれらの遺物は、江戸期におけるこの地域の使用石材の時代的な推移を、体現しているかのようである。

■立川市

立川市の調査地点は

普濟寺	立川市柴崎町4-20-46 (臨済宗建長寺派)
流泉寺	立川市砂川町2-44-1 (臨済宗建長寺派)
阿豆佐味天神	立川市砂川町5-17
	立川市柏町2-31柏町共同墓地
	立川市柴崎町2-20高橋家墓地
	立川市富士見町4-15街道沿い木堂
	立川市富士見町5-22街道沿い木祠
	立川市富士見町5-24中山橋北木堂
常楽院	立川市富士見町3-40 (臨済宗建長寺派)

立川市砂川町414天王橋

立川市錦町5-9 児童公園

立川市柴崎町1-11分水脇

立川市砂川町4 こんぴら橋

立川市砂川町1 砂川支所裏

立川市柴崎町4-21辻

立川市幸町4-16砂川九番中組

光西寺 立川市羽衣町3-20-16 (浄土宗本願寺派)

立川市栄町2-42木堂

の18ヵ所である。立川市域に入ると伊奈石造物の江戸期の石造物に占める割合は非常に少なくなり、普濟寺で1割に満たない。また上記の18ヵ所のうち10ヵ所では伊奈石はみられない。それは、おそらく、多摩川を遡る水運や陸路によって立川までは江戸に入る物資を多摩地域に輸送するルートが確保されており、これらによってもたらされる伊豆石をはじめとする各地の石材資源の量が伊奈石をはるかに上回るからである。そこで、立川をめぐる江戸期の交易について若干述べておきたい。立川までと現在の西多摩地域との、戦後まで続いた都市化のアンバランスは、甲州街道が日野の渡しを渡って対岸に移ったということにその出発点がある。檜原を越える古甲州道は中世の軍略道路であり、家康の五街道の開設によって、江戸と武蔵と甲州を結ぶ交易は圧倒的に小仏峠越えの現在の道筋に移った。各宿には問屋馬が設けられ、幕府によって常時人足25人、馬25頭を用意することが義務づけられた。こうして五街道沿いの貨物輸送は細々とした駄賃馬の輸送とは比較にならないシステムと量を備え、江戸の物資を大量にこの地域に持たらしめたのである。いま一つは、多摩川の水運である。年貢米の江戸回送に多摩川の水運を利用した流域の村々の上限が武蔵府中であることから、多摩川における川船の遡行上限を府中までとする説があった。一方、幕末の柴崎村の名主鈴木平九郎の日記に、六郷に荷を降ろした帰り船に肥料としての糠や灰を積み帰ったことが出ている。この船(真木船という)は当時は下流域で砂利運搬に使われた平田船と同型のものであり、そうであれば一度に10トンもの荷を輸送できたと思われるから、江戸後期にはこうした水運によっても江戸の物資が供給された可能性が出て来るわけである。

こうした輸送状況を背景にして、普濟寺では伊豆石と七沢石が石造物のほとんどを占め、わずかだが房州石の石塔もある。

■小平市

小平市の石造物調査は目黒区とともに使用石材についても記録している希な例である。それによると馬頭観音23体のうち、伊豆石8、小松石6、根府川石1、伊那石1、記述無し7である。「伊那石」は伊奈石であろう。その他、観音12、庚甲12、供養塔30、地藏51の中に伊奈石製のものは一つもない。これらの石造物の使用石材を多い順にあげると、小松石26、伊豆石17、御影石5、三城目石3、安山

岩3、白河石1、凝灰岩1、自然石2、となる。記述の無いものは42である。小松石は神奈川県足柄下郡真鶴産の安山岩、伊豆石は伊豆半島北部海岸沿いから産出する安山岩・玄武岩あるいは南・西海岸沿いの凝灰質砂岩、白河石は福島県白河市久田野産の安山岩である。馬頭観音の伊奈石1は花小金井南町、鈴木街道沿いにある駒形角柱の文字塔で「文政三辰年十二月二日 願主齊藤宇右エ門」という銘文がある。伊奈石が一つというのはあまりに少なすぎ、石材についての記述の無い地蔵27の中に少しはあるのではないかと、とも思われるが、前記の立川のところで述べたような、立川までは江戸の物資を供給するルートが確立していたという理由から、立川以西と江戸時代主要な交易路の一つであった青梅街道沿いの小平あたりとでは、使用石材にも江戸からもたらされるものと伊奈石との逆転現象が現れるということかもしれない。

いま一つは、伊奈石の風化しやすいという欠点である。江戸後期ともなれば、伊奈石製の江戸前期やそれ以前の石造物は既にその欠点である風化の激しさを露呈していたと思われる。一方、小平市の石造物調査に見る使用石材はほとんどが安山岩系か花崗岩系であり、要するに風化しにくい硬岩である。後で江戸市中で石造物に使われている石材について述べるが、これもほとんどが同様の硬岩である。江戸からこうした優良石材が入って来るのに伊奈石のような重大な欠陥を持つ石材をあえて使う必要はなく、徐々に取って変わられていったのであろう。

(3) 八王子道、鎌倉道を南へ

■八王子市

円 福 寺 八王子市上川町2222 (真言宗豊山派)

西 笑 院 八王子市山田1560 (臨濟宗南禅寺派)

川口～美山間路傍

戸沢観音堂 八王子市上川町

五日市地域は古く八王子の経済圏に属し「八王子在五日市」という言葉も古文書に残っている。また、『五日市町史』に、「この道(広徳寺裏の日向峰尾根通り)戸倉・乙津・檜原などから八王子へ抜ける本道で、八王子城と檜原城を結ぶ短絡路である」「戸倉以西の前記各村は大正六年に至ってもなお連署して、日向峰道の大改修を請願している」「戸倉以西が五日市を抜きにして、八王子と直結するこの請願に対して五日市の反対で実現せず」というエピソードを紹介しており、五日市と八王子がいかに古くから密接な交流があったかわかる。中世の伊奈石板碑も上川町戸沢、二分方、宮下、案下、醍醐と各地に残るくらいだから、伊奈石の石造物が八王子で見つかるのも当然である。五日市に隣接する戸吹町、上川町、川口町、美山町、小津町辺りでは石造物に占める伊奈石の割合が高い。

上川町戸沢の戸沢峠にかかる坂の手前に馬頭観音堂があり、ここにはすでに知られている伊奈石板碑が二基あるが、その堂の前に伊奈石研究上非常に重要な資料となる宝篋印塔がある。高さ2 m30cm、相輪、笠、塔身、請花、基礎という全体の上部が伊豆産と思われる安山岩、二層になった下部の台座が伊奈石製である。塔身の部分には各面に「=キリーク(阿弥陀)、=ア(大日)、=タラク

(宝生)、丸=ウン(阿闍)の金剛界四仏の種子が鋭い葉研彫りで、請花下の基礎の部分には偈文がこれも見事な彫りで刻まれている。台座には紀年名、寄進者などが記されており、向かって正面に「日本廻國 建立願主 覺阿□慧 宝筐印塔一基」向かって左面に「石工 江戸糺町與右門 下段石工伊奈村金右門 供養導師 三光院賢慶 宝曆二壬申天八月吉日」とある。(図Ⅶ-4)この塔は伊奈村の石工銘が残る今のところ唯一の遺物なのである。

多摩地域の石仏に地元石工の石工銘が見られないことは石川博司氏も指摘しており、地元の石工ならいちいち銘を刻まなくてもどこの誰さんが作ったのかわかったので必要がなかったのだろう、という推察をされている。(「石工に想う」日本の石仏第8号)。では、なぜこの塔にだけ石工銘が残るのであろうか。その理由はこの塔が珍しい合作であることにありとされる。旅稼ぎの高遠石工や広範囲に活躍し石工間の競争もあったと思われる江戸石工は自らの名を売り出す意味もあって銘を残したのだと思う。八王子石工の銘もよく見られるから彼らも多摩の他地域の石工に比べてやや格上の売れっ子だったのであろう。(五日市町域の神社の灯籠に見られる石工銘の多くは八王子石工銘である)ともかく、伊奈村の「金右門」は江戸の「與右門」に合わせたのである。

與右門の作った伊豆石の上部に合わせて金右門が下段を作った。伊豆石は江戸市中に出回っていた石材だから、與右門は当地に訪れず、江戸で仕事をし、出来上がったものがここまで運ばれてきたのであろう。当地で求めたものは與右門の技であらうか、それとも伊奈石とは違う石材であらうか。私は後者であると思う。風化の進んだ下段の伊奈石部分といまだに葉研彫りの美しい上部との差がその事を証明している。この地域において一般的な石材は伊奈石であった。しかし、一代の大事業に際して、塔を作った人々は後世まで美しさを失わない石材を求めた。つまり、この時代すでに伊奈石は優良な石材とは認識されていなかったのである。

西笑院には内田家の区画に「天正十七年」の年号を持つ五輪塔があり、伊奈石遺物の少ない16世紀を埋める貴重なものである。

■城山町

宝泉寺 城山町川尻4562 (高野山真言宗)

宝泉寺の石造物では、古いものには伊奈石が多く、江戸期のものの3~4割は伊奈石製である。わずかだが七沢石もある。そして底沢石製の石造物がかなり多い。底沢石については後の藤野のところで詳しく述べたい。

■町田市

福生寺 町田市小山町2524 (真言宗智山派)

大泉寺 町田市小山田町332 (曹洞宗)

町田の大泉寺には歴代住職の無縫塔や無縁塔の石造物群に伊奈石製のものがかなりある。大泉寺には「信州高遠石工伊藤久太郎」という銘文を持つ七沢石の石祠があり、伊奈石と伊奈村に深く関わる高遠石工がこの地域でも足跡をしるす。『町田市の板碑』(1992町田市立博物館)に伊奈石板碑が記

載されているので、確認するために訪れた福生寺で、実際に見せていただいたものは底沢石製の応永32年という銘のある阿弥陀一尊板碑であった。

■伊勢原市

清川村

煤ヶ谷985金翔共同墓地

日向洗水わかの家墓地

伊勢原市は七沢石の原産地に近く、石造物のほとんどが七沢石製である。『厚木市の民俗』（厚木市教育委員会1981）に玉川村七沢石運賃表という昭和13年の資料が出ており、ここに書かれている地名が古くから続く販路と見て良いのであるが、それには伊勢原の他に、愛甲石田、河原口（海老名）、大矢、秦野、上依知、座間、田名、鶴間、上溝、藤沢、相原、長津田、原町田、津久井、武州片倉、八王子、溝之口などの地名が見える。中でも伊勢原は最も日常的なつながりがあったと見え、『厚木市の民俗』に「弟子たちが昼休みや休日にクツ石などの小物を作り」「親方のくれる小遣いでは足りず、石材運送の人を通じ厚木や伊勢原のイシミセ（石屋）に頼んで売り」ということまで出ている。

伊奈石の場合と同じく、七沢石の開発にも信州高遠石工が大きく関わっている。古文書や石造物の銘文中に高遠石工の名があらわれているものを集めた「相州における信州出稼ぎ石工一覧」（前掲書）には実に81例が記載されており、その中の最も古いものは下荻野難波家墓地内題目碑の宝永三年（1706）で、七沢石の江戸前期開始説と符合する。この中に町田大泉寺石祠の伊藤久太郎という名は見えないが、伊藤という姓のものは幾右衛門、宇吉、甚助、新八、富蔵、友右衛門、広蔵、と多い。久太郎も彼等につながる者であったかもしれない。厚木市文化財調査報告書第13集『野だちの石造物』（1971）に鈴木茂氏は「七沢石の産出は信州高遠の石工によって始まったもので、近世末期一時中断したが、明治初期再開され中期頃より多量の採掘・産出が始まった。生産の石材はその八割が墓石でその他、石臼・敷石・石垣等に用いられていたが、石臼の販路が次第に拡大して遠く北海道方面にまで販売されるようになり、大正九年頃が最盛期であったという。」と述べている。

煤ヶ谷村の元石工細野茂氏に石工の道具を見せていただき、石工技術について話をうかがった。当地にも高遠石工銘の石造物はいくつも残っており、高遠石工の技術が煤ヶ谷の石工にも影響を与えたことは明らかである。

(4) 北武蔵へ

■青梅市

即清寺 青梅市柚木町1-4-1（真言宗豊山派）

五日市郷土館の「五日市の古道と地名」によれば、青梅と五日市の関係は「古くは比較的薄く、その密度を増したのは明治以降のことである。」となっている。また、「青梅市の石造物」（青梅市教育委員会）中の「馬方聞書」には「五日市からは向こうの馬方が来たもので、ほとんど青梅宿からこちらの馬方が出かけて行くことは無かった」とある。これは明治10年頃の状況である。細々とでも、

青梅に伊奈石が運ばれていたことは確かで、即清寺の石造物の2～3割を伊奈石が占める。即清寺の宗旨は真言宗豊山派で五日市町大悲願寺の末寺である。そこで、宗派によって石造物の使用石材に違いが見られるかどうか、という問題について述べるが、今回調査した範囲では、調査地点の伊奈石原産地からの距離、他の石材原産地からの距離や交易状況等が規定的であって、宗派による違いは特に見られなかった。しかし、同じ宗派の中で寺同士で石屋を紹介するということがあったようである。即清寺では伊奈石の他に石英閃緑岩や伊豆石も見られた。伊豆石は江戸市中から運ばれたものであるが、上成木村や北小曾木村で生産された石灰が御用石灰として江戸の町造りに活躍したことをはじめ、青梅街道による江戸表との往来は盛んに行われていたから、即清寺に伊豆石があることも不思議ではない。

即清寺の豊泉家の墓の区画の中に伊奈石板碑を発見したことは今回の調査中最も大きな収穫の一つである。伊奈石製の板碑については東京都板碑総合調査によってこれまでに47基が知られている。

『東京都板碑所在目録』（1979東京都教育委員会）に記載されている青梅市内の伊奈石板碑は、市内番号394・永享7年銘の、青梅市郷土資料館所蔵の1基のみであり、即清寺のものは見落されていたようである。青梅市教育委員会の『青梅市の板碑』に即清寺豊泉家のものとして以下の4点が記録されている。

1. 長さ37cm 幅17cm 豊泉昭家。表面磨滅。室町期。文明、応仁頃。下部固定。「応永」か。
2. 長さ23cm 豊泉昭家。断片。南北朝末。
3. 長さ14cm 幅12cm 断片。豊泉昭家。逆に固定。室町末期。
4. 長さ19cm 幅11cm 豊泉昭家。剝落片。石質よし。

石材について言及していないのでなんとも言えないが、今回確認した伊奈石板碑は寸法が1～4のいずれとも合致しないので、ここで記録されている板碑は緑泥片岩製のいわゆる青石塔婆だけなのではないかと思われる。

■飯能市

- | | | |
|-----|------------|----------|
| 清泰寺 | 飯能市中居214-1 | (真言宗智山派) |
| 観音寺 | 飯能市山手町5-17 | (真言宗智山派) |
| 能仁寺 | 飯能市飯能1329 | (曹洞宗) |
| 無量寺 | 飯能市小岩井1023 | (真言宗智山派) |
| 寶蔵寺 | 飯能市中居100 | (曹洞宗) |

飯能市では4ヶ所の寺院の墓地で伊奈石製の馬頭観音、宝篋印塔、墓塔、五輪塔など計17体を確認した。前掲「馬方聞書き」によれば青梅-成木、成木-飯能間の道は「近まわり」と呼ばれて頻繁な交易があった。伊奈石は青梅、旧成木村を中継地として飯能まで運ばれたものであろう。伊奈石の陸路での運搬を考えると、青梅市と羽村市の「馬方聞書」は重要な資料となる。人が荷車を引くこともあっただろうが、五日市から飯能への道はいくつもの峠を越さねばならず、馬の背に乗せるより他

に手が無かったであろう。現存する各村の明細帳に、農業の間、男は駄賃馬を追い、女は養蚕や機織りで稼いだことが出ている。また、延享3年、五の神村の明細帳に「馬持百姓は駄賃ヲとり馬不持百姓は日雇ヲ取り申候」とある。上層農民でなければ馬は持てなかったのであるが、こうした馬持百姓の一部はやがて市場周辺に住居を移して農業を離れ、専門的に馬力輸送を行って行くのである。馬が荷車を引くようになったのは明治10年頃からで、それ以前は馬の背に乗せる「ツケ馬」であった。しかし、峠を越える五日市から北武蔵への輸送は常にツケ馬で行われたであろう。そこから、荷を少しでも軽くするために、後は文字を彫るだけのほぼ仕上がり状態か、文字まで彫り上げるかして出したものだろう、ということも推測がつかぬのである。寶蔵寺に緑泥片岩の青石塔婆に挟まれて伊奈石板碑がポツンと一板立てられていた。これも青梅即清寺のものと同じく過去に確認された47基の中には入っていないもので、これが見つかった飯能という場所を考えると大きな発見と言わざるを得ない。伊奈石板碑は、中世に武士の間で流行した板碑の造立を、地元の石材で間に合わせた、極めてローカルなもののはずである。その伊奈石板碑が、青石塔婆原産地に近い飯能になぜ存在するのか。興味深い問題であり、今後の研究課題としたい。なお、銘文は磨滅して全く読めない。

■秩父市

金昌寺 秩父市山田1803 (曹洞宗)

音楽寺 秩父市寺尾3773 (臨済宗南禅寺派)

金昌寺にはたくさんの石仏があるが、使われている石材は秩父産の第三紀層砂岩と思われるものが多く、伊奈石は見られなかった。

■川越市

蓮馨寺 川越市連雀町7-1 (浄土宗)

養寿院 川越市元町2-11-1 (曹洞宗)

喜多院 川越市小仙波町1-20-1 (天台宗)

時の鐘

の四ヶ所を調査し、蓮馨寺で無縫塔と石灯籠台座の石垣に伊奈石が使われていることを確認した。五日市から川越に至る経路としては青梅から、青梅-成木-飯能-笹井-入間川(狭山)を経て川越に入るルートと、豊岡の馬方が豊岡-川越間、青梅-豊岡間を交互に往復していたルートの二つがあった。また、前掲「馬方聞書」の村明細帳には河岸送りの記事も出ており、成木の石灰なども江戸の中期以後、青梅街道によるよりも舟運のルートが多く利用され、市立てのあった小川村(現小平市)などは時代とともに寂れてしまった、などと書かれている。青梅-川越間の往来は頻繁に行われていたのである。当時の江戸には伊豆石や房州石などのさまざまな石材が入っており、わざわざ伊奈石を筏で多摩川河口へ降ろし、さらに浅草や千住まで運んで荒川~新河岸川をさかのぼる水運を利用したことは考えにくく、陸路の二つのルートのいずれかを運んだと思われる。北武蔵への流通を把握する上で、中継地点となる成木、豊岡、狭山は重要なポイントになるが、今回の調査期間中にこれらを調

査することはできなかった。

(5) 多摩川を下る

■大田区

- 北野神社 大田区仲六郷 4-29
宝珠院 大田区仲六郷 4-34-8 (真言宗智山派)
安養寺 大田区仲六郷 2-33-10 (真言宗智山派)
宝幢院 大田区仲六郷 2-52-1 (真言宗智山派)
東陽院 大田区仲六郷 4-6-2 (真言宗智山派)

■川崎市

- 一行寺 川崎市川崎区本町 1-1-5 (浄土宗)
平間寺 川崎市川崎区大師町 4-48 (真言宗智山派)
大楽院 川崎市中原区上丸子八幡町2522 (真言宗智山派)
泉沢寺 川崎市中原区上小田中1571 (浄土宗)

伊奈石の運搬について『五日市町史』には「重い石材をどのように運搬したかについても一切不明である。」「筏に乗せて運んだのではないかという説もある。しかし、これも確証がつかめない。」と述べている。要するに資料が少なくははっきりしたことが言えない、ということであるが、『大田区史』中巻第4章、「地水と水利・水運」には「伊奈石と玉石」という一つの項を起こして詳しく述べているので少し長くなるが引用する。「武蔵名勝図会」の小宮領伊奈村の条は、その昔、伊奈石が筏の上荷として六郷に送られたことを伝えている。「筏の終着地であった六郷・八幡塚村には、すでに貞享年間から石工（六郷神社の狛犬を彫った三右衛門）がいた可能性が高く、享保年間には、六郷の渡しをはさんで八幡塚村に二人（永井左兵衛・竹内六之助）、川崎の船場町に一人（倉本丈助）の石工が居住していたことが確認される。さらには丸子の渡しに近い上小中田村上地にも、天明～寛政期に石工（松原伝右衛門）が開業している。筏の上荷としての伊奈石は、おそらく、これらの石屋宛に送られて来たものではなかろうか。」上荷は筏の上に積む荷物の中で、「筏乗りは元締め目がとどかない川下げの途中で、しばしば上荷を頼まれることがあり、アルバイト的に、こっそり引き受けるものも少なくなかった。」という。『五日市町史』に「筏の上荷として便乗させてもらったところで量は知れている。」と書かれているのはこういうことであろう。しかし、石材を筏の上荷にすることには筏の運転上の合理性もあり、「筏は、ある程度水につかいていないと操作がしにくいので、木材が乾燥して軽すぎるような場合、筏乗りはその重しに、立川や日野あたりの河原で玉石を拾って乗せて来る。」となっている。また、こうして運ばれた川石は漬物石として多に利用されたようである。立川市の郷土史家、三田鶴吉氏が柴崎町の板谷壮二さん（故人）から聞いた伝承に「伊奈石を積んだ筏が普濟寺下の崖で転覆し、大騒ぎになった」というのがある。堤ができる前の多摩川の流れは普濟寺の下に直接ぶついていた。それは江戸時代の絵図にも残っている。その話を頼りに、昭和48

48年の残堀川の改修工事の際に、伊奈石が沈んだと思われるあたりを5～6m掘ってみたが見つからなかったとのことである。

いずれにしても、六郷河岸のあった仲六郷付近や対岸の川崎市の寺院には伊奈石製の石造物がかなり残っており、江戸期のものの約1～3割が伊奈石である。伊奈石の運搬に多摩川の筏が利用されたことは、ともかくも間違いのないことである。

■江東区

龍光院	江東区三好2-7-5	(浄土宗)
靈巖寺	江東区白河1-3-32	(浄土宗)
心行寺	江東区深川2-16-7	(浄土宗)
法乗院	江東区深川2-16-3	(真言宗豊山派)
富岡八幡宮	江東区富岡1-20-3	

■墨田区

弥勒寺	墨田区立川1-4-13	(真言宗豊山派)
法樹院	墨田区立川1-2-4	(新義真言宗)

■港区

八幡神社

天徳寺	港区虎ノ門3-13-6	(浄土宗)
長延寺	港区三田4-1-31	(真言宗豊山派)
宝生院	港区三田4-1-29	(真言宗智山派)
明王院	港区三田4-3-9	(真言宗豊山派)

伊奈石が多摩川を下って河口まで達していたことは今回の調査で確認した事実であるが、江戸市中にも出回っていたのであろうか。江戸の町造りは関東一円から資材や機能を総動員した大仕事であった。この時、伊奈の石工たちもその技術を買われて働いたことは「新編武蔵風土記稿」にも出ているが、伊奈石自体が江戸の町造りに使用された可能性もある。

江戸時代の江東地区の河岸は江戸に流入する物資を保管する倉庫の役割を果たし、筏で多摩川を下った材木も木場に回送された。筏の上荷として六郷に達した伊奈石が材木とともに本所、深川に来ている可能性もあるのではないかと見ていくつかの寺院、神社を調査したが、これらの場所では、房州石も若干混じるが、徳川家の有力大名がその石切り場を持っていた伊豆石が圧倒的で、伊奈石製の石造物を発見することはできなかった。房州石は千葉県君津郡金谷町から産出される凝灰質の粒の粗い砂岩で、天正時代から採掘されていた。なお、江戸市中の石造物は戦火の熱による劣化の見られるものが多い。

(6) 峠を越えて西へ

五日市から秋川沿いに進み、檜原本宿から時坂峠に上って、浅間尾根の尾根道を通り、さらに数

馬から鞘口峠を越えて小菅村へ出、大菩薩峠を経て甲州塩山に抜ける道筋は、小仏峠越えが甲州街道となる以前の古甲州道であった。檜原は甲斐武田氏に対する前衛に位置しており、檜原城―戸倉城―滝山城を結ぶこの道は軍略的色彩を持つが、こうしたことは別に檜原の民にとっては五日市や伊奈の市に炭を出して貨幣収入を得るための重要な生活道路でもあった。さらに檜原南谷（南秋川）と甲州郡内地域との間には幾筋もの峠道が通じており、檜原の人々が郡内炭と市との仲立ちをすることも珍しくなかったから、古くから郡内との往来は多く、結びつきは非常に強い。ここではこうした道を辿って伊奈石の分布を確認してみたい。

■檜原村

檜原村本宿字時坂時坂地藏堂

檜原村3221村立郷土資料館

貴布弥神社 笹久保、山王坂下バス停東

藤倉バス停西石仏群

藤原春日神社

涌泉寺跡 檜原村2215南

宝蔵寺 檜原村3863（真言宗豊山派）

九頭龍神社 数馬宮之橋東

檜原村2192坂本博義氏宅

北谷では五輪塔や馬頭観音、地藏、大日如来等10点、明治、大正期の墓石を数点、南谷では庚申塔、馬頭観音、無縫塔等を十数点確認した。檜原村でも自然石の文字塔を除いては伊奈石の石造物の割合は高いようである。明治、大正期の墓石が多く見られることがかえてこの地域と五日市との結びつきの強さを表現しているように思われる。

檜原の各調査地点で伊奈石とともに見られる石材は石英閃緑岩、石灰石、凝灰岩、粘板岩などであるが、檜原では河原の転石をついじ石や漬物石など古くから様々に利用しており、この地域自体が石の産地であるから、檜原原産の石材についても見ておきたいと思う。

三頭御影と呼ばれる石英閃緑岩は南秋川の最源流に当たる三頭山の八号目くらいから下の部分で出る。今回の調査では石臼や馬頭、庚申などの石塔を見たが、五日市でもこの丸石の正面を平らにして光背とし、地藏を浮き彫りしたものがいくつも見られ、一時の流行があったようである。南秋川の河原で目立つのは粘板岩である。古い石垣には粘板岩を積み上げたものが見られるが、石造物としては平たいために碑の素材として使われる。南谷の涌泉寺跡では慶長の年号のある凝灰岩の板碑型墓石を2点、坂本博義さん宅では石臼の上臼を見たがこれも凝灰岩であった。時坂地藏堂に安永6年銘の石灰石自然石の供養塔がある。小沢の障子岩のところで石灰を取るための「石灰焼き」をしたことがあるらしいことが檜原村史に出ている。

いずれにしても、檜原ではどこでも河原の転石を利用でき、従って信仰のための石造物としては自

然石の文字塔が数多く見られるが、問題はその文字をどこの誰が刻んだか、ということである。この点について、今回の調査では石工銘の入ったものを見ることができなかったので推測の域を出ないが、私はやはり伊奈を本拠地としていた高遠石工あるいは伊奈の石工が彫ったものが多いのではないかと思う。伊奈石製の墓石などの場合、炭を運んで来たついでに伊奈の石工に戒名等を伝えて注文し、次に来たときに出来上がったものを炭の帰り荷として馬の背に積んで持ち帰ったものであろう。五日市や伊奈に降りた際に出張を依頼し、石工が出かけていったこともあっただろう。檜原と五日市、伊奈とはそのような関係だったと思うのである。

■上野原町

檜原南谷と山梨県鶴川沿いの村々との間には幾筋もの峠道があり、古くから頻繁に往来があった。数馬から西原峠を越えて西原へ出る道、笛吹から大日峠を越えて西原初戸へ出る道、上川乗から栗坂峠を経て桐原へ出る道、下川乗や柏木野から矢沢峠を越す道、がそれである。元来これらの道は甲州郡内の人と郡内炭が通ってはならない道で、本宿には口留番書が設けられていたし、檜原出野組総百姓の名になる、郡内の荷物の通行を助けるようなことは決して致しません、という寛政年間の請書も残っている。ところが、実際のところはお上の思惑とは全く違って、『檜原村の石仏第三集』（檜原村教育委員会）の中に安永2年の願主「西原村中」と刻まれた馬頭観音（上川乗）や明治13年の願主「用竹、小伏、猪丸、日原」の馬頭観音（栗坂峠）を見いだす。（明治13年の方は番所が無くなった後のものだが）

馬頭観音の存在は炭を積んだ馬と人がその道を通ったことのこの上ない物証であり、郡内炭がこれらの道を通って五日市に出されたことを物語る。郡内の人々は南谷の部落に炭を売り、南谷の馬持はそれを檜原の炭のようにして五日市に運んだ。南谷の衆にしてみれば、炭焼きや山仕事よりも郡内炭の運賃を稼ぐ方が割が良かった、ということもあったようである。

（西原地区）

洞泉寺	上野原町西原309	（臨済宗建長寺派）
宝珠寺	上野原町西原4316	（臨済宗建長寺派）

（桐原地区）

軍刀利神社	上野原町桐原4166	
瑞光寺	上野原町桐原7389	（臨済宗建長寺派）
威王院	上野原町桐原10813	（臨済宗建長寺派）
地藏院	上野原町桐原2167	（臨済宗建長寺派）

（上野原地区）

竜泉寺	上野原町上野原6362	（臨済宗建長寺派）
本光寺	上野原町上野原7656	（臨済宗建長寺派）

洞泉寺、宝珠寺のある西原初戸は笛吹から笛吹峠を越える道の甲州側の出口にあたる。これらの寺

では江戸期の石造物の約2割が伊奈石製である。他の石材では底沢石が最も多く半数を占め、七沢石もかなり多い。伊奈石製のものはいずれも風化が激しく年号の読めるものが無いが、洞泉寺の宝篋印塔は笠の部分の四隅の隅飾りが直立しているところから見て、江戸期以前、室町あたりまで遡るものであろう。宝篋印塔の造立年代をその形状から推測する場合、笠の隅飾りをもってすることが多い。この隅飾りは古くは直立するが、年代が新しくなるとともに上部が外傾し、江戸中期ともなると花びらが開くように甚だしく反り返ってしまうのである。桐原地区は上川乗からの道の甲州側の出口で、現在、車道が通じているが、その昔も檜原一郡内をつなぐメインルートであった。伊奈石製の地蔵や板碑形の墓石を確認したが、全体に七沢石が多い。また、軍刀利神社の石造物は全て底沢石製であった。上野原八米の竜泉寺では無縫塔、五輪塔、宝篋印塔、石塔に伊奈石のものがあつた。

以上は檜原南谷と笹尾根を隔てた鶴川沿いの寺院を調べた結果である。七沢石、底沢石に比べて多いとは言えないが、峠を越えて伊奈石が運ばれて来ていることは確かであり、特に南秋川に距離的に近いところに伊奈石の分布が濃いようである。

(野田尻地区)

東光寺 上野原町桑久保1576 (臨濟宗建長寺派)
西光寺 上野原町野田尻849 (臨濟宗建長寺派)

(大野地区)

清泉寺 上野原町大野2332 (曹洞宗)

(犬目地区)

宝勝寺 上野原町犬目930 (曹洞宗)

■大月市

鶴川を下って甲州街道へ出、甲州街道を西へ向かう。東光寺では伊奈石製の寛文2年の地蔵を発見することができたが、その他の寺で伊奈石の石造物は見られなかった。東光寺はこれの中で最も鶴川合流点よりに位置する。これらの寺で石造物に使用されている石材の主なもの底沢石や七沢石、そして山崎石である。山崎石は甲府市酒折町産の天平時代(?)から採掘されていたとされる安山岩で山梨県下に販路を持つ。伊奈石は鶴川沿いと桂川の鶴川合流点に近い範囲には運ばれたが、桂川沿いの甲州街道の各宿場町では、より硬岩系のより産地に近い他の石材が十分に供給されており、特に江戸中期以降にはこれらの地域で求められることは無かつたようである。

*山崎石の採石は現代でも続けられており、年間10万トンを生産している。(1970年12月31日現在。

山梨日日新聞社刊『山梨県百科事典』による)

■小菅村

川池 箭弓神社
橋立 熊野神社 八幡神社

■丹波山村

加茂神社 奥多摩湖畔鴨沢橋そば

数馬から鞆口峠を越えて小菅へ出る道が古甲州道であることは前に述べた。丹波へは小菅から鹿倉尾根の大丹波峠を越えるか、檜原北谷から小河内へ出、丹波川沿いに丹波へ出た。古くから人々の往来があったことは言うまでもないが、残念ながらこの地区で伊奈石を見ることはできない。これらの地区の路傍ではどの山村でもそうであるように馬頭観音が非常に多いが、使われている石材はほとんどが石英閃緑岩である。伊奈石製の石造物が見られないのは原産地伊奈から遠く、三頭山という障壁があって輸送が困難であったことと、三頭御影がたやすく手に入ったためではないだろうか。

■藤野町

石楯尾神社 藤野町名倉4532

春日神社

雲光寺跡

御嶽神社

福王寺 藤野町沢井265 (臨済宗建長寺派)

浄光寺 藤野町吉野1584 (臨済宗建長寺派)

増珠寺 藤野町小淵1273 (曹洞宗)

上記の寺は檜原南谷の笹平から小坂志沢を遡って市道山に上り、あるいは柏木野から矢沢沿いに矢沢峠に上って、いずれも和田峠、陣馬山を経て藤野に出る道の道沿いかその近辺にある。これらの寺で数は少ないが五輪塔や宝篋印塔、無縫塔などに伊奈石のものを発見したが、やはり底沢石製の石造物が圧倒的に多い。底沢石は現在の相模湖町与瀬地域から掘り出された石英の結晶を含む凝灰質の砂岩で、伊奈石に比べると硬く、しっかりしている。底沢石について記録したものは今日全く残っておらず、文献から採石の実態をつかむことはできないが、町田市福生寺の応永の板碑が底沢石であったことから、室町までは遡るようであり、また、明治の年号をもつ石造物があることからみて近代まで採石は続いていたようである。しかし、流通した範囲は比較的狭く、原産地を中心に桂川流域の山梨県北都留郡及び神奈川県津久井郡に限られる。

2. 伊奈石の流通、まとめ

1) 以上の調査結果から、伊奈石の流通について次のように概括できる。

- ・秋留台地域一帯は伊奈石石造物が数多く見られ、また他の石材との比較でも割合が非常に高いが、江戸に向かって東上するに従って漸時割合が低くなる。特に立川を境にして量、割合とも著しく減るが、それは、立川から東側の地域には甲州街道の物資輸送によって江戸や甲州から多量の石材が供給されたからであろう。こちらの方面で伊奈石に取って変わって割合の高くなる石材は江戸からの伊豆石と甲州からの山崎石である。

- ・鎌倉道に沿った相州方面への分布を見ると、町田までは伊奈石製の石造物が見られるが、相州に入ると全く見られなくなる。こちらの方面では七沢石が優勢で、昭和初期の七沢石運賃表によって日常的な販路が八王子まで及んでいることがわかる。七沢石は江戸後期の南関東一帯における有力な石材の一つで、特に軟岩系としては最も広い分布範囲を持つ。
- ・北武蔵方面では、伊奈石は川越まで達している。輸送方法としては馬方が陸路を運んだものであろう。川越で見られる石材で多いものは伊豆石と思われる安山岩あるいは玄武岩で、江戸市中から荒川-新河岸川の水運で供給されたものだろう。また、秩父の緑泥片岩を使った石塔もかなり見られる。
- ・伊奈石が多摩川の筏の上荷として河口に輸送されたことは文書にも記載されているが、今回、実際に遺物を確認したことで間違いの無いところとなった。河口に運ばれた伊奈石が江戸市中にも出回ったかどうか、あるいは江戸の町造りに伊奈石が使用されたかどうかとなると、今回12ヵ所の寺と神社を回って見て全く見られなかったことから、否定的にならざるを得ない。江戸市中の石造物の使用石材はほとんど安山岩系か花崗岩系の硬岩で占められている。
- ・檜原でも伊奈石の石造物は多い。檜原の民は炭の帰り荷として伊奈石を馬の背に積んだのであろう。また、伊奈の石工に出張を依頼して檜原の川石に文字を刻んでもらったこともあったのだろう。笹尾根を越えて甲州郡内地域にも伊奈石石造物は分布しているが、それは鶴川沿いの村々に限られ、桂川沿いの甲州街道に沿った宿場町には伊奈石は見られない。これらの地域では七沢石や底沢石、あるいは山崎石製の石造物が多い。

2) 伊奈石の輸送について四点付言しておきたい。一点目は伊奈石の流通規模を規定する要因としての伊奈石の欠陥についてである。伊奈石は柔らかく彫りやすいが、風化し易いために、他の石材の供給地に近い地域や他の石材が供給されるルートがあったところではそれらのライバル石材を押しつけて分布を広げることができなかったであろう。この点については既に述べておいたつもりである。

二点目は輸送手段についてである。1995年4月2日、五日市町増戸会館で行われた伊奈石研究シンポジウムで発言された榎原考古学研究所の北垣聡一郎氏は、昔、貴族の乗用車であった八葉車という牛車がやがて木材を運ぶようになり、さらにそれが石材を運ぶようになる経緯について言及し、大悲願寺観音堂裏に今も立て掛けてある木製の車輪がその八葉車に類似することを指摘している。大悲願寺26世慈明の日記の文化5年7月に、江戸の車大工を呼んで車を修理させたことが出ているが、この車が本堂裏の「八葉車」かどうかは定かでない。いずれにしても伊奈石の輸送手段としての牛の存在に触れなければならない。前掲『五日市の石仏』に「江戸時代の当地区の村明細帳を見ると「牛御座なく候」とあるが、これは怪しい。」「真実は不明細である。」と述べ、牛馬供養の文字を刻んだ馬頭観音が残ることから、牛も飼われたであろうことを推測している。また、前掲「馬方聞書」に「馬のあと、これに替わって朝鮮牛を引いたことがあったが、これは砂利を運搬

するのではなく」「近隣の輸送でー」云々とあり、後期には近隣の村々の間の輸送では牛も使われたものと思われる。

三点目は、石臼についてである。これまで見てきたように伊奈石はその加工しやすさの点から見れば優秀な石材であり、有名でもあったが、伊奈石の名を高めたのはむしろ「伊奈臼」の方である。伊奈石の粗粒であることが石臼に必要とされる機能にマッチしていたと言う。そこで、伊奈臼の流通についても触れなければならないが、石臼は家庭の中に入ってしまうもので、調査する地域の住民の協力を得なければその存在を知ることができない。また、臼の使われていない今日、昔伊奈臼を使っていた家でも今はどこにあるのかわからなくなっていることが多く、これを調べることはほとんど不可能である。ただ、伊勢原市の項で、七沢石製の臼の流通について「遠く北海道方面にまで販売されるようになり」（『野だちの石造物』）と言っているように、石塔と臼の流通範囲は一致せず、概して臼の方が範囲が広そうだ、ということは言えそうである。東久留米市の民間の研究団体が市内の民話を調べた際に「臼は伊奈臼新町小麦 挽けば挽くほど粉が出る」という伊奈の臼挽き歌が記録されたらしいことを附記しておく。

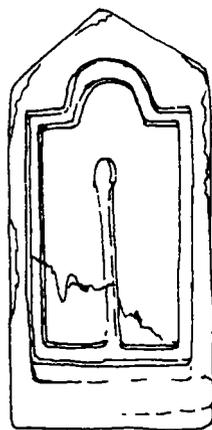
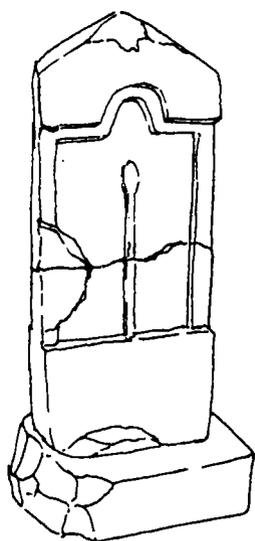
四点目は、これは前記の立川の郷土史家三田鶴吉氏から指摘されたことだが、伊奈石製の地蔵に銘文の無いものも多く見られるというのである。伊奈石は風化しやすい石材であり、銘文が見つからなければ磨滅したものと考えるのが普通であるが、そうではなく、文字を彫り込まないまま輸送した地蔵の買手がつかないか、依頼主との交渉がうまくいかずに宙に浮いてしまった、ということも考えられる。この点については今回の調査では未確認であり、氏の論を紹介するにとどめておきたい。

3. 伊奈石石造物の造立年代

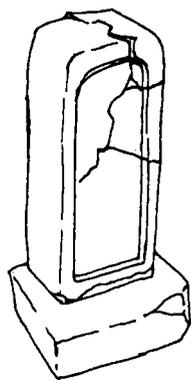
表Ⅶ-3は過去の調査で年代の記録されている五輪塔や板碑に今回調査した伊奈石石造物の造立年代を加えて、四半世紀ごとに集計したものである。伊奈石は風化が激しく年号の読めないものの方が多いが、それでも一定の傾向を推測することは可能であると思う。

墓の上に死者の菩提を供養するための石塔を建てることは平安期から行われたが、百姓や庶民が墓塔をつくるのが許されるようになるのは江戸時代以降で、それ以前は貴族、武家、僧などの上流階級に限られた。五輪塔や宝篋印塔を墓塔とすることは鎌倉から南北朝にかけて武家の間で流行し、板碑は足利時代に全盛を極めた。伊奈石板碑は造立年代が室町初期から中期に限られ、五日市伊奈を中心に西多摩地域の比較的狭い範囲に分布する。（図Ⅶ-5・6）こうした分布と年代は南一揆と呼ばれた在地領主集団の消長と重なるようである。16世紀の年号をもつ石造物は非常に少ない。これは戦国期の争乱のために、武士の間に立派な塔を建てる余裕がなくなるからであるが、八王子西笑院には天正年間の年号をもつ伊奈石の五輪塔がある。天正と言えば15年に秀吉軍によって八王子城が落城するなどこの地域も激動に揺れた時期で、この時代の石造物は珍しい。

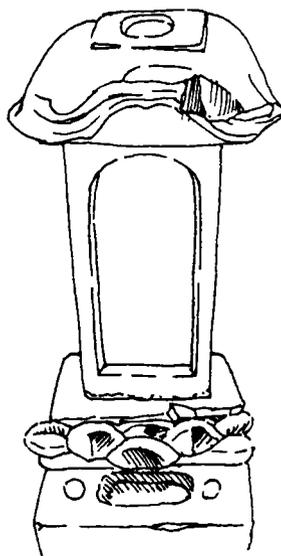
本文中の墓塔の分類と呼称は以下のようにした。



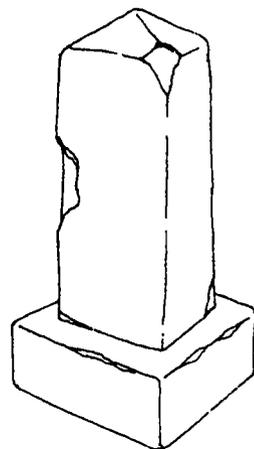
板碑形 (正面を左右二部屋に区切り、戒名を二つ並べる型式2例)



角柱形
あるいは箱形



笠付き角柱形



山角形

図VII-1 墓塔の分類と呼称

終わりに—文化財としての伊奈石石造物の適切な保護管理を望む

石造美術作品は多くの場合、野ざらしに置かれることをはじめから想定して作られているのであるから当然と言えばその通りなのだが、概して扱われ方が粗略である。守屋貞治のような大石工の作品でさえ、簡単な雨よけも無い状態で放置されていることが多い。また、道路の新設や改修の際に、昔からそこに置かれて行き交う村人の信仰を集め、古老によってその由来が語りつがれてきた石仏が、本来あるべき場所と離れた空き地などに集められ、不作法に積み上げられてしまうことも多い。

こうした廃棄物的扱いは木造の仏教美術遺品には決してないことである。この違いは基本的には木と石という材質の違いに起因するものであるが、石造美術の方が価値が低いという一般的な見方によるものであろう。しかし、それだからこそ、庶民が蓄えを出し合って造立を依頼することもでき、民間信仰の実相を生き生きと今日に伝えるのである。

さて、伊奈石の石造物だが、この分布調査の期間中に原型をとどめないまでに崩落してしまったものを私はいくつも見た。福厳寺の六地藏の中の一つは94年5月に写真撮影だけをし、その他の記録をするつもりで11月に再訪した時には数個の石塊に分解していた。

立川市栄町4-20道路脇の木堂の中に、現在、地藏として前掛けのかけられている石塊がある。立川市教育委員会「立川の野仏をたずねて」（1977立川市教育委員会）に掲載される崩壊以前の写真を見ると、これは舟形光背に青面金剛を浮き彫りした立派な庚申塔であったことがわかる。

伊奈石の原産地である五日市町でも事情は同じであって、例えば、横沢の五輪坂という坂の途中にこの坂の名称の由来となった五輪塔と五輪地藏があるが、現在、五輪塔は水輪と地輪だけになり、地藏は台座と像塔部が折れて離れ、上半部だけになってしまっている。光背部に僅かに浮き出たシルエットによって辛うじて五輪地藏であることがわかるが、これも時間の問題で、数年のうちに全体が崩壊してしまうに違い無い。

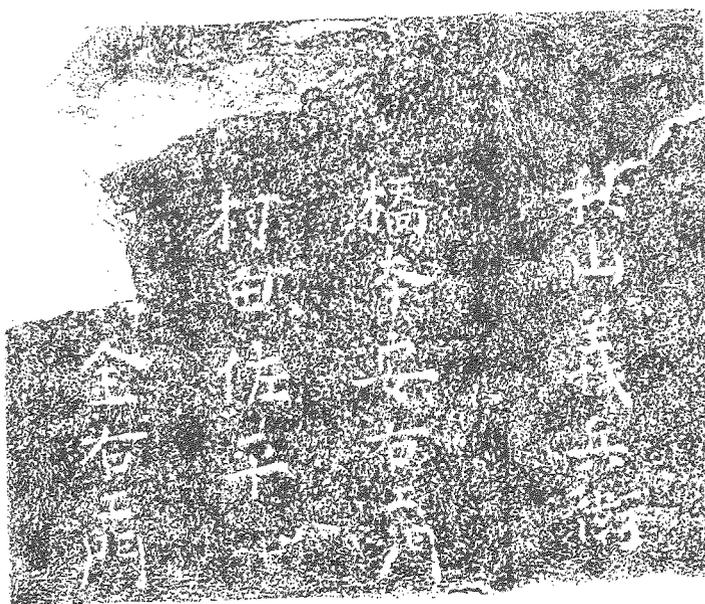
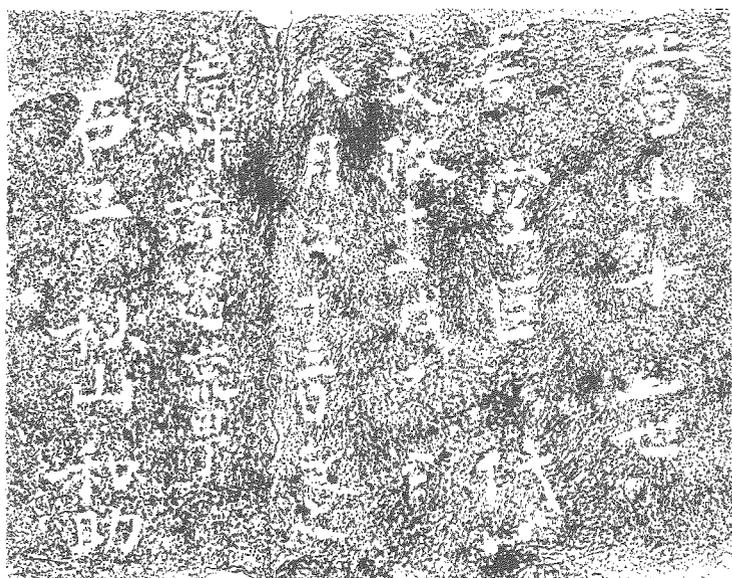
伊奈石石切り場遺跡の価値は、そこから切り出された石材で作られた石造物が、町の辻や里山の麓の小道の脇などの本来あるべきところにあって、往古の人々の心を今日に伝えることによって補完されるのである。したがって、採掘遺構自体が十分に調査され、周囲の自然環境とともに保存の措置が講じられたとしても、石造物が雨風にさらされ風化にまかされているのは片手落ちと言わざるを得ない。伊奈石風化の過程はある時期を過ぎると非常に早く進行する。江戸期の伊奈石石造物の多くが、そう遠くない将来この過程に入り、地域史資料としての銘文は年々消滅し、彫刻的価値は失われていくことが目に見えている。

伊奈石は風化しやすい石材である。目の粗い砂岩であるため水分を吸収しやすく、冬季にこれが凍り、乾燥することを繰り返すため、あるいは単に吸水と乾燥が繰り返されるだけで風化が促進する。あるいは苔と植物根による風化も作用する。はじめ、銘文や彫刻の角の部分が磨滅し、全体に丸みを帯びたぼんやりした感じになる。それが伊奈石石造物独特の雰囲気醸し出すのだが、やがて、薄くタマネギ状に表面が剥落するかブロック状に欠け、最終的には完全に崩壊する。こうした過程は、雨

ざらしになり、日光の直射を受けるような場所にあるものほど早く進行し、立派な木堂と言わず、簡単な雨よけがあれば風化が進みにくいことはいままでもない。また、長く土中に埋められ、現代になって掘り出された板碑の多くが造立時の良好な姿をとどめているごとく、下部が土中に埋まり、常に水分の供給があるような条件のものは概ね風化が遅い。少なくとも、伊奈石原産地たる五日市町域においては、必要なものから順に、年次的に、簡単な雨よけを設置する程度の措置を講じることが望まれる。また、その石質から、伊奈石石造物の修復は難しいと思われるが、こうした面の研究も必要である。いずれにしても、文化財行政当局の伊奈石の歴史的価値に対する十分な認識と理念の高さに待つよりほかないのである。

参考文献

- 五日市町史（五日市町史編纂委員会1991）日の出町史（日の出町史編纂委員会1992）立川市史（立川市史編纂委員会1969）大田区史（大田区史編纂委員会）檜原村史（檜原村史編纂委員会1981）稲城市の民俗四・多摩川中流域の川舟（稲城市教育委員1991）青梅市の板碑（青梅市教育委員会1980）青梅市の石仏（青梅市郷土博物館1974）東京都板碑所在目録（東京都教育委員会1979）福生市石造遺物総合調査報告書（福生市教育委員会1988）羽村町史資料集第1集・羽村町の板碑、石仏（羽村町教育委員会1976）小平市石造物調査報告書（小平市教育委員会1993）立川の野仏をたずねて（立川市教育委員会1977）五日市の石仏（五日市郷土館1987）町田市の板碑（町田市立博物館1992）檜原村の石仏第3集（檜原村文化財保護調査委員会1977）厚木市の民俗（厚木市教育委員会）五日市郷土館だより第41号（1993）厚木市文化財調査報告書第13集「野だちの石造物」（1971）五日市郷土館だより第43号（1994）日本の美術No.77塔（石田茂作編、至文堂1972）山梨百科事典（山梨日日新聞社1989）檜原村紀聞（瓜生卓造1977、東京書籍）江戸東京学事典（1987三省堂）日本史年表（1990東京学芸大学日本史研究室、東京堂出版）五日市町の古道と地名（並木米一1984、五日市郷土館）檜原・ふるさとの覚え書き（小泉輝三郎1980、武蔵野郷土史刊行会）風は僕の案内人・人と甲州街道と中央本線（大穂耕一郎1993、のんぶる舎）板碑入門（小沢国平1978、国書刊行会）日本石仏図典（日本石仏協会1986）全国寺院大鑑（1991全国寺院大鑑編纂委員会）墓と石塔（窪田成円1989、知道出版）墓地墓石大辞典（藤井正雄編1981、雄山閣）新版石造美術（川勝政太郎）板碑の総合研究2・地域編（坂詰秀一編1983、柏書房）多摩のあゆみ第28号（1982多摩中央信用金庫）「生産遺跡－伊豆・石切場」（金子浩之1995、季刊考古学第53号・雄山閣）「石工に想う」（石川博司1978、日本の石仏第8号・日本石仏協会）



日の出町平井字中野宗劔寺跡
平井無辺墓石

右 塔身部銘文

平井院殿忍雄宗劔大居士

上 台座部銘文

當山十二世

安空□代

文政十二戊子年

八月二十三日立之

信州高遠荒町

石工 秋山和助

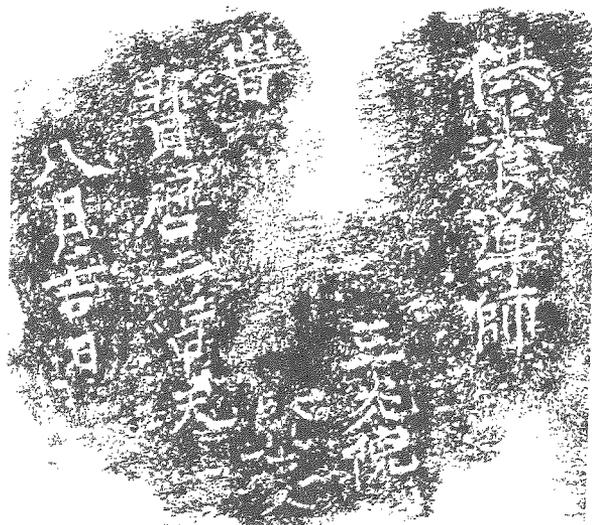
下 秋山義兵衛

橋本安右衛門

村田佐平

金右衛門

図Ⅷ-3 伊奈石石造物石工銘拓本



上 八王子上川町戸沢観音堂宝篋印塔
台座部銘文

右 秋川市菅生菅生高校入り口「源橋」
道標銘文

石工 江戸糺町

横澤村

下段石工 伊奈村

石工

供養導師 金右門

田野倉藤兵衛

三光院

賢慶

寶曆二年申天

八月吉日

賢慶

図VII-4 伊奈石石造物石工銘拓本

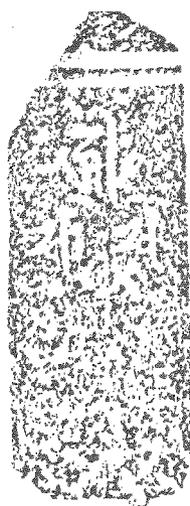
1～7は齊藤慎一1989『日の出町史文化財編』より
 8は『五日市町史』より



1. 日の出町平井2071本宿
 川久保守吉家
 阿弥陀三尊種子
 十三年 妙道禪門
 文明十七年三月二日



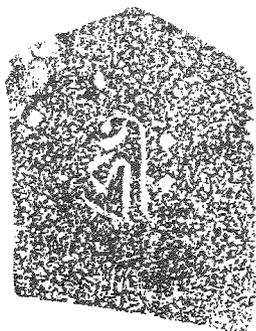
5. 日の出町大久野
 故山上茂樹氏旧蔵品
 阿弥陀三尊種子



2. 日の出町大久野7325坂本
 佐久間章家
 阿弥陀三尊種子
 延徳二年



6. 日の出町大久野
 故山上茂樹氏旧蔵品
 阿弥陀三尊種子



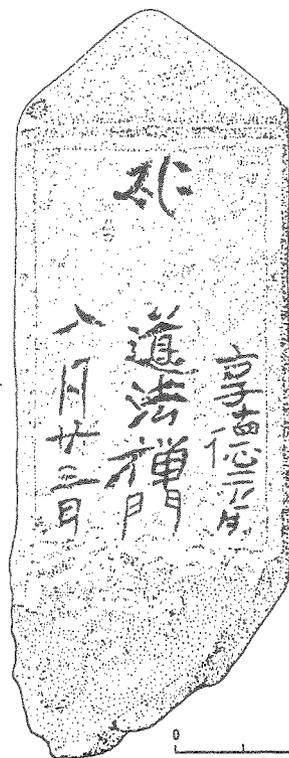
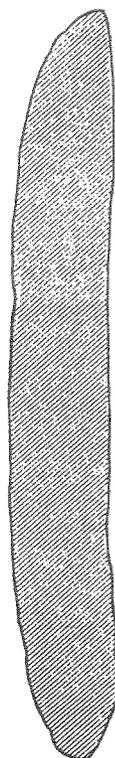
7. 日の出町大久野
 故山上茂樹氏旧蔵品
 阿弥陀一尊種子
 二条線なし



3. 日の出町大久野細尾
 田中孝家墓地
 応永初年のもの

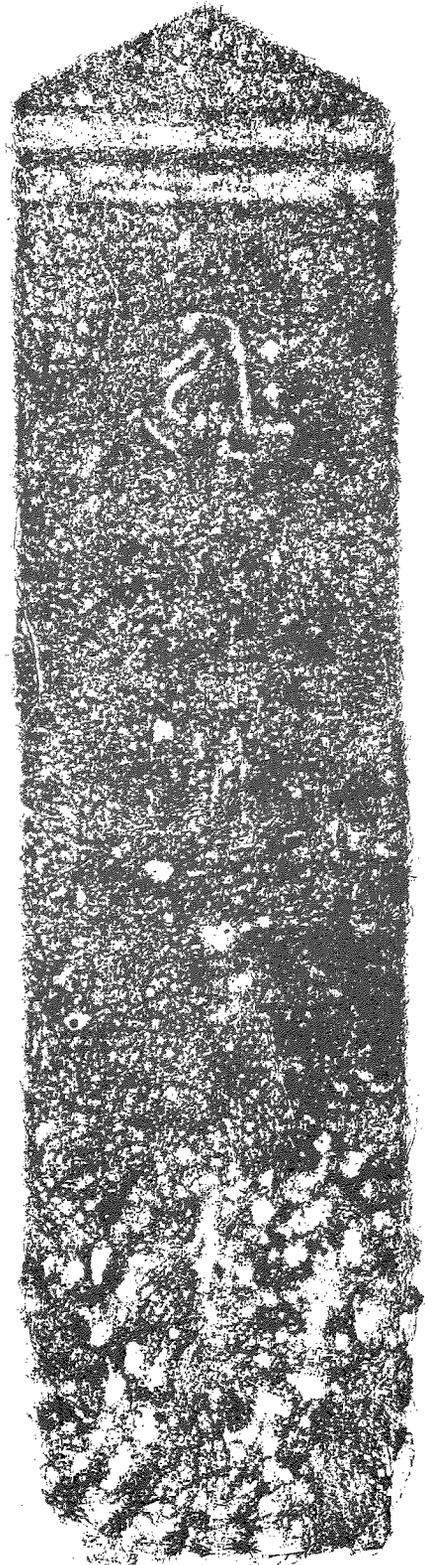


4. 日の出町大久野2072
 橋本武士家
 応永年間



8. 五日市町伊奈大日堂跡出土
 勢至一尊種子
 道法禪門
 享徳二年八月廿三日

図Ⅶ-5 伊奈石板碑拓本集成



五日市町伊奈 塩地藏堂

右 長さ五八・五 幅一四・七
阿弥陀種子

應永二年二月廿六日

左 長さ四二・〇 幅一五・〇

阿弥陀三尊種子

如吉祥尼

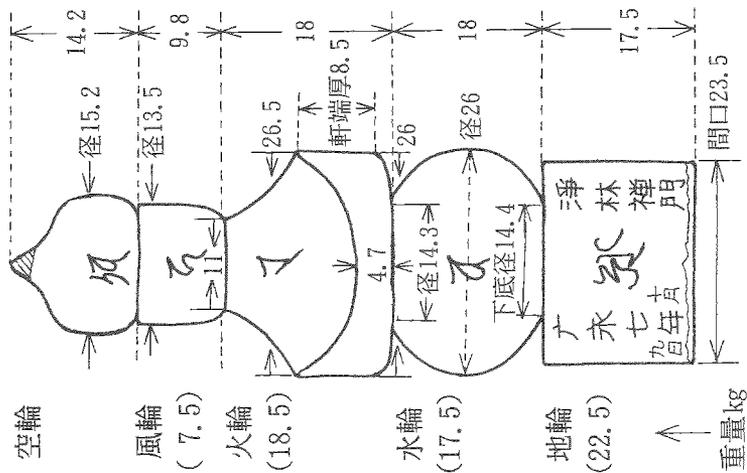
十三ヶ年

應永十七年十一月廿一日

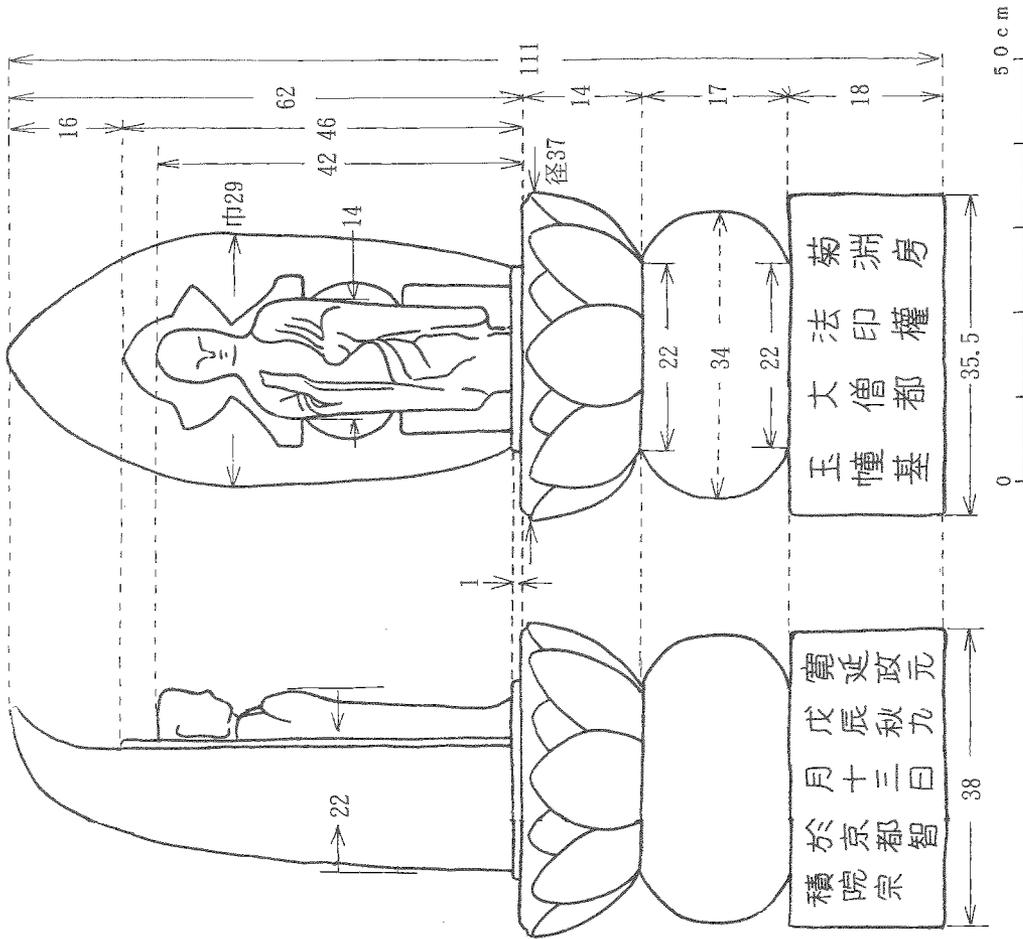
図Ⅶ-6 伊奈石板碑拓本集成

石造物見取図

秋川市志永七年銘五輪塔
秋川市野辺316 八雲神社



五日市町横沢134 大悲願寺 五輪地藏



図VII-7 伊奈石造物見取図

表Ⅶ-4 伊奈石造物の分布

唐沢 慶行 作

年 代		石 造 物 種 別	所 在 地	特 記 事 項
和 曆	西 曆			

東京都西多摩郡五日市町

不 明		五輪塔	ふるさと工房	
不 明		五輪塔 (火水)	ふるさと工房	
慶応03	1867	高麗犬	三内 三内神社下社	
明治14	1881	手水鉢	三内 三内神社下社	
不 明		茶臼 (下臼)	三内 小机 福寿院入口	庚申塔台石転用
不 明		五輪塔 (水地)	三内 小机 福寿院入口	笠 石
不 明		五輪塔 (火水地)	三内 小机 福寿院入口	宝珠・地藏台座
寛政10	1798	庚申塔	三内 小机 福寿院入口	台座チャート自然石
不 明		庚申塔 (青面金剛)	三内 小机 福寿院入口	
不 明		地藏10体	三内 小机 福寿院入口	
不 明		石臼上下	入野 樽 樽規夫氏	幸神礫層中砂岩
不 明		手水鉢H60×34×34	入野 樽 樽規夫氏	幸神礫層中砂岩
元文03	1738	念仏供養塔-上部五輪	入野 樽 路傍	不動堂跡
応永07	1400	板碑	小中野 平塚貢氏蔵	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	小中野 平塚貢氏蔵	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	小中野 平塚貢氏蔵	1979 東京都板碑所在目録
寛正04	1463	板碑	五日市高校蔵	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	小和田 宮崎修一郎氏蔵	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	館谷 菊地忠氏蔵	1979 東京都板碑所在目録
文明17	1485	板碑	横沢 大悲願寺	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	横沢 大悲願寺	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	横沢 大悲願寺	1979 東京都板碑所在目録
永享04	1432	板碑	山田 瑞雲寺	1979 東京都板碑所在目録
応永02	1395	板碑	伊奈 塩地藏堂	
応永16	1409	板碑	伊奈 塩地藏堂	
応永17	1410	板碑	伊奈 塩地藏堂	
応永□□		板碑	伊奈 旧役場跡	小林氏 1968調査
正長02	1429	板碑	伊奈 旧役場跡	小林氏 1968調査
永享09	1437	板碑	伊奈 旧役場跡	小林氏 1968調査

永享 0 9	1437	板碑	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
宝徳 0 3	1451	板碑	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
享徳 0 2	1453	板碑	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
康正 0 2	1456	板碑	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 1 1	1479	板碑	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
暦応 0 5	1342	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
明德 0 5	1394	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 0 5	1398	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 0 8	1401	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 0 9	1402	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 1 1	1404	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 2 0	1413	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 2 0	1413	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 2 1	1414	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 2 4	1417	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
正長 0 2	1429	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
永享 0 7	1435	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
永享 0 7	1435	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
永享 1 3	1441	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
嘉吉 0 2	1442	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文安 0 6	1449	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
康正 0 1	1455	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
康正 0 3	1457	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
長祿 0 4	1460	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
寛正 0 6	1465	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文正 0 1	1466	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 0 2	1470	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 0 3	1471	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 0 4	1472	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 0 5	1473	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 1 4	1482	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 1 6	1484	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 1 8	1486	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 1 9	1487	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査

延徳 0 2	1490	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
明応 0 3	1494	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
明応 0 4	1495	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
明応 0 4	1495	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
明応 0 4	1495	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
明応 0 5	1496	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
明応 0 7	1498	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
永正 0 2	1505	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
永正 0 6	1509	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
永正 0 7	1510	五輪塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
暦応□□	13**	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
延文 0 4	1395	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
永和□□	137*	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
永徳 0 2	1382	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 0 3	1396	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 0 4	1397	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永 0 6	1399	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
応永□□	1***	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
文明 0 7	1475	宝篋印塔	伊奈	旧役場跡	小林氏 1968調査
天保 1 3	1842	地藏丸彫立像 石工銘	横沢大悲願寺仁王門右脇	田野倉藤兵衛	
天保 1 4	1843	墓石 (高遠石工の墓)	網代 禅昌寺	信州高遠北原村伊藤國蔵	
嘉永 0 5	1852	手水鉢	横沢 大悲願寺	石工 藤兵衛	

東京都西多摩郡日の出町

文政 1 1	1828	平井無辺墓石	平井 中野 宗劔寺	高遠石工銘
不 明		白	平井 中野 横倉家	1938まで豆腐製造
享保 0 2	1717	青面金剛像庚申供養塔	平井 宝光寺	
元禄 1 7	1704	墓石 (舟底型)	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓
宝暦 1 1	1761	墓石	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓
安永 0 9	1780	墓石 (舟底型)	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓
天明 0 2	1782	墓石	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓
寛政 0 5	1793	墓石	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓
寛政 1 0	1798	地藏 (舟底型)	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓

享和02	1802	墓石	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓
文化08	1811	墓石	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓
大正□□		墓石	平井落合 川久保家墓地	五日市丘陵麓
享保12	1727	墓石(舟底型)	平井 本宿 福嶋家	宝永12 連銘
享保17	1732	無縫塔	平井 本宿 福嶋家	
文政10	1827	墓石	平井 本宿 福嶋家	
嘉永02	1849	墓石	平井 本宿 福嶋家	
安永10	1781	手水鉢	平井 中野 子安不動尊	五日市丘陵麓
天保06	1835	灯籠	平井 中野 子安不動尊	五日市丘陵麓
弘化04	1847	庚申塔	平井 中野 子安不動尊	五日市丘陵麓
文政01	1818	宝篋印塔台石垣	平井 宮本 常福寺	本体七沢石
寛政08	1796	青面金剛	平井 宮本 春日神社	
寛政12	1800	灯籠	平井 宮本 春日神社	総高145cm
寛政12	1800	灯籠	平井 宮本 春日神社	総高126cm
文明17	1485	板碑	平井 本宿 川久保家	1989 日の出町史文化財編
延徳02	1490	板碑	大久野坂本 佐久間家	1989 日の出町史文化財編
応永□□		板碑	大久野細尾 田中家墓地	1989 日の出町史文化財編
応永□□		板碑	大久野 橋本家	1989 日の出町史文化財編
不 明		板碑	大久野故山上茂樹氏蔵品	1989 日の出町史文化財編
不 明		板碑	大久野故山上茂樹氏蔵品	1989 日の出町史文化財編
不 明		板碑、二条線なし	大久野故山上茂樹氏蔵品	1989 日の出町史文化財編

東京都 秋川市

宝暦09	1759	墓石	小川東 法林寺	
安永05	1776	墓石	小川東 法林寺	
享和03	1803	墓石	小川東 法林寺	
□和03	1803	墓石	小川東 法林寺	
文化01	1804	墓石	小川東 法林寺	
文政03	1820	墓石	小川東 法林寺	
天保05	1834	墓石	小川東 法林寺	
弘□□□		墓石	小川東 法林寺	
安政06	1859	墓石	小川東 法林寺	
文久04	1864	墓石	小川東 法林寺	

明治 4 2	1909	墓石	小川東	法林寺	
不 明		墓石18基	小川東	法林寺	
元禄 0 2	1689	墓石 (板碑型)	小川東	法林寺	
天明 0 5	1785	墓石 (板碑型)	小川東	法林寺	
不 明		墓石 (板碑型) 21基	小川東	法林寺	
天明 0 6	1786	五輪塔	小川東	法林寺	
不 明		五輪塔 3 基	小川東	法林寺	
享保 0 8	1723	地藏	小川東	法林寺	
天保 0 3	1823	地藏	小川東	法林寺	
不 明		地藏12体	小川東	法林寺	
不 明		観音 5 体	小川東	法林寺	
不 明		如来 3 体	小川東	法林寺	
不 明		宝篋印塔	小川東	法林寺	
文政 0 2	1819	三界萬霊塔	小川東	法林寺	
文化 1 0	1813	無縫塔	小川東	法林寺	
不 明		無縫塔18基	小川東	法林寺	
不 明		馬頭観世音台座	原小宮	桜株	嘉永七寅安山岩
不 明		石祠	原小宮	桜株	63cm
文政 0 9	1826	天王様 (石塔)	原小宮とうがらし	地藏裏	奉納天王宮
不 明		石祠 (金山様)	原小宮	鈴木誠氏宅	
不 明		馬頭観音 2 基	四軒在家	道端	
不 明		観音	四軒在家	道端	34×30×10
不 明		庚申塔台座	四軒在家		
不 明		地藏 3 体	四軒在家	御堂	H90・65・71
不 明		地藏	菅生1769	蔵守院	
不 明		地藏	菅生1769	蔵守院	台座七沢石
宝暦 0 2	1752	地藏	菅生1769	蔵守院	
天明 0 7	1787	庚申塔	菅生1769	蔵守院	青面金剛像陽刻
不 明		五世廟像	菅生1749	蔵守院	
不 明		馬頭観世音	菅生1767	蔵守院	
不 明		五輪塔	菅生1768	蔵守院	
不 明		五輪塔 5 基	菅生1769	蔵守院	5 基連立
天保 1 5	1844	常夜塔	菅生1769	蔵守院	
明治 1 5	1882	道標 (源橋)	菅生	菅生高校入口	田野倉藤兵衛銘

天保04	1833	供養塔—南無阿弥陀仏	菅生谷田 警視庁火薬庫	願主 村中
明治14	1881	馬頭観音	菅生 立川ダンボール上	
天保10	1839	大口真神社	菅生1819 正勝神社	
不 明		台石2基	菅生1819 正勝神社	H80W38D38cm
文政11	1828	御神燈2基	菅生1819 正勝神社	左右同型
不 明		五輪塔2基	菅生 すってくりょう	
延享01	1744	庚申塔(笠付型)	菅生263 宝蔵寺	青面金剛像陽刻
不 明		巡回供養塔	菅生263 宝蔵寺	秩父西国坂東
寛政08	1796	庚申塔(笠付型)	菅生263 宝蔵寺	青面金剛像陽刻
不 明		五輪塔	菅生263 宝蔵寺	
明治15	1883	如意輪大菩薩 観世音	菅生263 宝蔵寺	十三世寿峯代
不 明		五輪塔	菅生629 福泉寺	
不 明		僧形着色像	原小宮 プール入口	49cm
寛政10	1798	馬頭観音	瀬戸岡471 富沢電気	寛政十龍集年
文政13	1830	観世音	瀬戸岡471 富沢電気	瀬戸岡村中
享保12	1727	八手馬頭観音	瀬戸岡511 珠陽院	巳待供養塔
明治12	1879	手水鉢	瀬戸岡511 珠陽院	草花村門前
宝永03	1706	地藏	折立 薬師堂	頭部自然石
宝暦13	1763	供養塔台石	折立 薬師堂	自然石・七沢石
天保03	1832	念仏供養塔	折立 薬師堂	蓮座—七沢石
大正06	1917	馬頭観世音	折立 笹本清一氏入口	笹本彦太郎建之
大正08	1919	馬頭観世音	折立 沿道	施主笹本荻次郎
不 明		薬師	草花720 小山光男氏	
大正12	1923	馬頭観音	草花804 横田金蔵氏	
明治25	1892	石祠(御岳宮社)	草花 森山神社裏	大口真神御符
明治25	1892	石祠(八幡宮社)	草花 森山神社裏	八幡宮
文政03	1820	庚申塔	草花496 森山墓地	青面金剛銘
明治25	1892	石祠(天王社)	草花496 森山墓地裏	天王宮
不 明		庚申塔	草花496 森山墓地	
不 明		馬頭観音	草花969 森山	丙寅霜月
文久02	1862	寒念仏	草花 森山 福寿庵	森山・花岡講中
享和02	1802	馬頭観音	草花 森山 福寿庵	寒念仏供養講中
文久01	1861	地藏	草花 森山 福寿庵	
不 明		地藏	草花 森山 福寿庵	

不	明	六地藏台座	草花	森山	福寿庵	地藏—花崗岩
不	明	爪彫薬師三尊像	草花2965		長泉寺	左弓右鉾厨子内
不	明	五輪塔 2基	草花2965		長泉寺	墓誌銘宝永7年
不	明	五輪塔 2基	草花2965		長泉寺	関口家・細谷家
不	明	宝篋印塔	草花3036		大行寺	住職墓石最古
不	明	宝篋印塔	草花3036		大行寺	H197(275)cm
安政04	1857	無礙塔	草花3036		大行寺	歳令誘引親族造
文政08	1825	寒念仏塔	草花3036		大行寺	小宮講中
明治24	1891	地藏	草花2542		陽向寺	乳造地藏
不	明	地藏 2体	草花2542		陽向寺	
不	明	庚申塔台座	草花2542		陽向寺	三猿陽刻座のみ
延宝02	1674	五輪塔 3基	草花2542		陽向寺	住職墓
安政04	1857	地藏	草花1811		慈勝寺	寒念仏供養台座
大正13	1924	すじつまり直し地藏	草花1811		慈勝寺	台座—七沢石
不	明	地藏	草花1811		慈勝寺	子聖大権現
不	明	地藏	草花1811		慈勝寺	H98cm
寛政09	1797	阿弥陀	草花1811		慈勝寺	H44cm
宝暦01	1751	馬頭観世音	草花1811		慈勝寺	H43cm
不	明	馬頭観世音	草花1811		慈勝寺	H23cm
不	明	庚申?	草花1811		慈勝寺	H25cm
不	明	寒念仏供養塔	草花1811		慈勝寺	多摩郡高瀬講
不	明	念仏供養塔	草花1811		慈勝寺	念仏千万遍供養
明治30	1897	名号塔—南無阿弥陀仏	草花1811		慈勝寺	善女講中
文久02	1862	石段 (段下右端石柱)	草花1811		慈勝寺	折立村 女講中
宝暦06	1756	台座	草花1811		慈勝寺	
天保11	1840	馬頭観音 (馬頭陽刻)	草花	ゴルフ場入口		左面—下草花村
元文03	1738	庚申塔	草花2767		久保の地藏	久保 四間在家
不	明	三界万霊塔	草花2767		久保の地藏	
不	明	地藏 2体	草花	花蔵院裏墓地		
不	明	五輪塔	草花	花蔵院裏墓地		
不	明	弁天祠	草花	花蔵院 島の祠		
不	明	山門礎石	草花	花蔵院		
文政己卯	1819	三界万霊塔	野辺450		普門寺墓地	
正徳04	1714	無縫塔	野辺450		普門寺墓地	

□永元申		無縫塔	野辺450	普門寺墓地	宝永元申1704嘉永元申1848
享保05	1720	墓石	野辺450	普門寺墓地	野島家
元文04	1739	墓石	野辺450	普門寺墓地	吉村家
寛延03	1750	墓石	野辺450	普門寺墓地	瀧島家
宝暦03	1753	墓石	野辺450	普門寺墓地	瀧島家
天明05	1785	墓石	野辺450	普門寺墓地	吉村家
天保□歳		墓石	野辺450	普門寺墓地	篠家
弘化02	1845	墓石	野辺450	普門寺墓地	宇江家
嘉永03	1850	墓石	野辺450	普門寺墓地	宇江家
安永10	1781	庚申塔	野辺450	普門寺入口	
元禄11	1698	無縫塔	野辺	薬師堂	
享保18	1733	地藏	野辺	薬師堂	
文化08	1811	観音	野辺415	三上氏	陽刻・元宝珠庵
応永07	1400	五輪塔	野辺316	八雲神社	浄林禅門
応永34	1427	板碑	上代継真成寺		1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	上代継真成寺出土		1979 東京都板碑所在目録
明応01	1492	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
長禄02	1458	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
永享07	1435	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
明応07	1498	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
文明08	1476	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
延徳05	1493	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
応永35	1428	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
永正05	1508	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
明応04	1495	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
応永30	1432	板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
永正03	1507	板碑、私年号「弥勒二年」	菅生 故山上茂樹氏蔵品		1979 東京都板碑所在目録
永和01	1375	板碑	瀬戸岡 田中家蔵		1979 東京都板碑所在目録

東京都西多摩郡 桧原村

不 明		墓石台座	笛吹 湧泉寺	組合わせの一部
不 明		地藏	時坂 地藏堂	

不 明		地藏	時坂 地藏堂	
□永□□		地藏	時坂 地藏堂	
不 明		地藏	時坂 地藏堂	
不 明		双体地藏	時坂 地藏堂	
不 明		青面金剛像庚申塔	時坂 地藏堂	
天保02	1831	墓石	時坂 島崎家	
嘉永02	1849	墓石	時坂 島崎家	
不 明		五輪塔（空火水）	桧原村郷土資料館	
大正06	1917	馬頭観世音	藤倉 路傍	

東京都 八王子市

文政07	1824	墓石	山田町 西笑院	石川家墓地
弘化 元	1844	墓石	山田町 西笑院	石川家墓地
安政06	1859	墓石	山田町 西笑院	石川家墓地
不 明		無縫塔	山田町 西笑院	向陽院歴代和尚
不 明		無縫塔	山田町 西笑院	向陽院歴代和尚
天正17	1589	五輪塔	山田町 西笑院	内田家墓地
元禄16	1703	五輪塔	上川町 円福寺霊苑	
明和04	1767	地藏萬霊塔（舟底型）	美山-川口路傍	
不 明		石臼上下（ひき割り）	高月町1062沢井勝二氏宅	6分画6溝こぼれめ
宝暦02	1752	宝篋印塔	上川町 戸沢観音堂	伊奈村石工銘
不 明		板碑 2	上川町 戸沢観音堂	
長禄04	1460	板碑、胎蔵大日種子	式分方 市川家蔵	1979 東京都板碑所在目録
永享04	1432	板碑	下案下 杉本家蔵	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑、双碑のうち1つ	醍醐 小島家蔵	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑、双碑のうち1つ	醍醐 小島家蔵	1979 東京都板碑所在目録
不 明		板碑	北平 大蔵院	1979 東京都板碑所在目録

東京都 青梅市

不 明		板碑	柚木1-4 即清寺豊泉家墓	大悲願寺末寺
永享07	1435	板碑	郷土博物館蔵	1979 東京都板碑所在目録
寛永09	1632	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺

宝永 0 5	1708	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
享保 1 1	1726	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
明和 0 2	1765	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
安永 0 2	1773	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
安永 0 7	1778	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
寛政 1 1	1799	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
寛政 1 2	1800	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
文化 0 3	1806	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
文化 0 6	1809	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
文政 0 5	1822	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
文政 0 6	1823	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
文政 1 2	1829	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
天保 0 6	1835	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
安政 0 6	1859	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
明治 2 1	1888	墓石 (明治21以降)	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
明治 2 4	1891	墓石	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		墓石24基	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		五輪塔	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		五輪塔火輪 4	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		五輪塔地輪 1	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		五輪塔空+風 1	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
安永 0 4	1775	地藏	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		地藏 5 体	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		子育て地藏	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
天保 0 2	1831	地藏立像	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
天保 0 2	1831	地藏立像	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
大正 0 8	1919	半伽地藏	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
享保 0 6	1721	寒念仏塔	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		馬頭観音?	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		観音 (一面六臂)	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
宝曆 0 9	1759	塔婆	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		塔婆	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
□宝□□		無縫塔	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺
不 明		石段一部	柚木1-4 即清寺	大悲願寺末寺

東京都 福生市

享保 0 4	1719	墓石	熊川	真福寺
享保 1 4	1729	墓石	熊川	真福寺
享保 2 0	1735	墓石	熊川	真福寺
宝暦 1 1	1761	墓石	熊川	真福寺
宝暦 1 2	1762	墓石	熊川	真福寺
天明 0 5	1785	墓石	熊川	真福寺
寛政 0 6	1794	墓石	熊川	真福寺
寛政 1 1	1799	墓石	熊川	真福寺
享和 0 2	1802	墓石	熊川	真福寺
文化 0 7	1810	墓石	熊川	真福寺
文化 0 8	1811	墓石	熊川	真福寺
文化 1 1	1814	墓石	熊川	真福寺
文政 0 5	1822	墓石	熊川	真福寺
文政 0 8	1825	墓石	熊川	真福寺
天保 0 6	1835	墓石	熊川	真福寺
天保 1 1	1840	墓石	熊川	真福寺
天保 1 4	1843	墓石	熊川	真福寺
天保 1 4	1843	墓石	熊川	真福寺
明治 0 2	1869	墓石	熊川	真福寺
明治 3□		墓石	熊川	真福寺
不 明		墓石	熊川	真福寺
元禄 1 2	1699	地藏	熊川	真福寺
不 明		地藏	熊川	真福寺
不 明		墓誌	熊川	真福寺
□保 0 2		五輪塔	熊川	真福寺
寛政 1 2	1800	無縫塔	熊川	真福寺
天保 0 2	1831	無縫塔	熊川	真福寺
寛政 0 7	1795	庚申塔	熊川47	辻
正徳 0 1	1711	墓石	熊川	千手院
享保 0 7	1722	墓石	熊川	千手院
宝暦 0 1	1751	墓石	熊川	千手院
寛政 0 1	1789	墓石	熊川	千手院
寛政 0 2	1790	墓石	熊川	千手院

文政 0 9	1826	墓石	熊川	千手院
文政 1 2	1829	墓石	熊川	千手院
明治 1 8	1885	墓石	熊川	千手院
不 明		墓石 4 基	熊川	千手院
天和 0 1	1681	墓石 (板碑型)	熊川	千手院
貞享 0 2	1685	墓石 (板碑型)	熊川	千手院
元禄 1 3	1700	墓石 (板碑型)	熊川	千手院
宝永 0 6	1709	墓石 (板碑型)	熊川	千手院
不 明		墓石 (板碑型) 4 基	熊川	千手院
明暦 0 4	1658	五輪塔	熊川	千手院
万延 0 2	1861	五輪塔	熊川	千手院
不 明		五輪塔 8 基	熊川	千手院
不 明		五輪塔 (空風)	熊川	千手院
寛政 0 2	1790	観音	熊川	千手院
天保 1 5	1844	観音	熊川	千手院
宝永 0 6	1709	無縫塔	熊川	千手院
不 明		無縫塔	熊川	千手院

東京都 昭島市

天明 0 6	1786	墓石	郷地町	宝積寺
寛政 0 9	1797	墓石	郷地町	宝積寺
文化 0 5	1808	墓石	郷地町	宝積寺
文化 0 6	1809	墓石	郷地町	宝積寺
不 明		墓石 9 基	郷地町	宝積寺
不 明		墓石 (板碑型)	郷地町	宝積寺
寛政 1 0	1798	地藏	郷地町	宝積寺
不 明		地藏	郷地町	宝積寺
寛政 0 2	1790	墓石	中神町	福厳寺
寛政 0 7	1795	墓石	中神町	福厳寺
寛政 1 0	1798	墓石	中神町	福厳寺
寛政 1 0	1798	墓石	中神町	福厳寺
文化 0 2	1805	墓石	中神町	福厳寺
文化 0 8	1811	墓石	中神町	福厳寺

不 明		墓石 9 基	中神町	福巖寺
寛政 0 5	1793	墓石 (板碑型)	中神町	福巖寺
不 明		墓石 (板碑型) 5 基	中神町	福巖寺
寛永 0 2	1625	五輪塔	中神町	福巖寺
不 明		宝篋印塔 (部分)	中神町	福巖寺
不 明		地藏 3 体	中神町	福巖寺
不 明		観音	中神町	福巖寺
天和 0 3	1683	無縫塔	中神町	福巖寺
不 明		無縫塔 2 基	中神町	福巖寺
不 明		地藏 5 体	中神町	観音寺 惠日庵
宝永 0 8	1711	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
□和 0 7		墓石	宮沢町	阿弥陀寺
天明 0 4	1784	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
寛政 0 4	1792	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
寛政 0 8	1796	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
寛政 0 9	1797	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
文化 0 8	1811	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
文化 0 9	1812	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
文化 1 0	1813	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
文化 1 0	1813	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
文政 0 4	1829	墓石	宮沢町	阿弥陀寺
不 明		墓石 12 基	宮沢町	阿弥陀寺
正徳 0 6	1716	墓石 (板碑型)	宮沢町	阿弥陀寺
寛政 0 9	1797	墓石 (板碑型)	宮沢町	阿弥陀寺
不 明		墓石 (板碑型) 8 基	宮沢町	阿弥陀寺
不 明		五輪塔 8 基	宮沢町	阿弥陀寺
文化 1 0	1813	地藏	宮沢町	阿弥陀寺
不 明		地藏 3 体	宮沢町	阿弥陀寺
明和□□		観音	宮沢町	阿弥陀寺
享保 1 4	1729	無縫塔	宮沢町	阿弥陀寺
不 明		無縫塔	宮沢町	阿弥陀寺
寛政 1 1	1799	三界萬霊塔	宮沢町	阿弥陀寺
正徳 0 4	1714	墓石	大神町	観音寺
享保□□		墓石	大神町	観音寺

寛保 元	1741	墓石	大神町	観音寺
宝暦 0 3	1753	墓石	大神町	観音寺
安永 元	1772	墓石	大神町	観音寺
寛政 0 2	1790	墓石	大神町	観音寺
寛政 0 6	1794	墓石	大神町	観音寺
寛政 0 6	1794	墓石	大神町	観音寺
寛政 0 8	1796	墓石	大神町	観音寺
寛政 1 2	1800	墓石	大神町	観音寺
享和 元	1801	墓石	大神町	観音寺
文化 元	1804	墓石	大神町	観音寺
文化 元	1804	墓石	大神町	観音寺
文化 0 4	1807	墓石	大神町	観音寺
文政 1 0	1826	墓石	大神町	観音寺
天保 1 3	1842	墓石	大神町	観音寺
安政 0 7	1860	墓石	大神町	観音寺
元治 元	1864	墓石	大神町	観音寺
延宝 0 3	1975	墓石 (板碑型)	大神町	観音寺
延宝 0 7	1679	墓石 (板碑型)	大神町	観音寺
貞享 □		墓石 (板碑型)	大神町	観音寺
宝永 0 3	1706	墓石 (板碑型)	大神町	観音寺
不 明		墓石 (板碑型) 6 基	大神町	観音寺
明和 0 3	1766	供養塔	大神町	観音寺
明和 0 6	1769	供養塔	大神町	観音寺
明和 0 8	1771	供養塔	大神町	観音寺
安永 0 2	1773	供養塔	大神町	観音寺
正徳 0 3	1713	観音	大神町	観音寺
不 明		地藏 2 体	大神町	観音寺
不 明		五輪塔 (空風)	大神町	観音寺
不 明		石碑 (梵字塔)	拝島町	拝島大師
不 明		手水鉢	拝島町	拝島大師
享保 1 1	1726	墓石	拝島町	竜津寺
延享 0 2	1745	墓石	拝島町	竜津寺
延享 0 3	1746	墓石	拝島町	竜津寺
宝暦 1 0	1760	墓石	拝島町	竜津寺

明和02	1765	墓石	拝島町	竜津寺
安永03	1774	墓石	拝島町	竜津寺
安永09	1780	墓石	拝島町	竜津寺
天明03	1783	墓石	拝島町	竜津寺
天明03	1783	墓石	拝島町	竜津寺
寛政11	1799	墓石	拝島町	竜津寺
文化09	1812	墓石	拝島町	竜津寺
不明		墓石7基	拝島町	竜津寺
安永04	1775	墓石(板碑型)	拝島町	竜津寺
不明		墓石(板碑型)2基	拝島町	竜津寺
寛政06	1794	墓石(笠付)	拝島町	竜津寺
明治32	1899	五輪塔	拝島町	竜津寺
不明		五輪塔(空風)	拝島町	竜津寺
貞享05	1688	宝篋印塔	拝島町	竜津寺
不明		宝篋印塔2基	拝島町	竜津寺
不明		地蔵2体	拝島町	竜津寺
寛政□□		観音	拝島町	竜津寺
不明		観音	拝島町	竜津寺
不明		三界萬霊塔	拝島町	竜津寺
安永04	1775	灯籠	拝島町	竜津寺
享保10	1725	墓石	拝島町	普明寺
安永03	1774	墓石	拝島町	普明寺
天明08	1788	墓石	拝島町	普明寺
寛政02	1790	墓石	拝島町	普明寺
寛政04	1792	墓石	拝島町	普明寺
享和01	1801	墓石	拝島町	普明寺
文化01	1804	墓石	拝島町	普明寺
文化06	1809	墓石	拝島町	普明寺
文政02	1819	墓石	拝島町	普明寺
文政02	1819	墓石	拝島町	普明寺
文政06	1823	墓石	拝島町	普明寺
文政□□		墓石	拝島町	普明寺
不明		墓石10基	拝島町	普明寺
不明		墓石(板碑型)2基	拝島町	普明寺

不 明		五輪塔 (空風)	拝島町	普明寺	一部宝篋印塔
不 明		五輪塔 (空風地)	拝島町	普明寺	
不 明		五輪塔 (空風火水水)	拝島町	普明寺	
明和 0 2	1765	五輪塔 (空風地)	拝島町	普明寺	
天明 0 7	1787	地藏	拝島町	普明寺	
不 明		地藏	拝島町	普明寺	
寛政 1 0	1798	観音	拝島町	普明寺	
享保 0 9	1724	無縫塔	拝島町	普明寺	
文化 0 6	1809	無縫塔	拝島町	普明寺	
不 明		石柱	拝島町	普明寺	
不 明		墓誌	拝島町	普明寺	

東京都 立川市

享保 1 7	1732	墓石	柴崎町	普濟寺	水輪部欠損
天明 元	1781	墓石	柴崎町	普濟寺	
寛政 元	1789	墓石	柴崎町	普濟寺	
寛政 0 3	1791	墓石	柴崎町	普濟寺	
寛政 1 0	1798	墓石	柴崎町	普濟寺	
享和 0 2	1802	墓石	柴崎町	普濟寺	
文化 0 5	1808	墓石	柴崎町	普濟寺	
文化 0 5	1808	墓石	柴崎町	普濟寺	
文化 0 8	1811	墓石	柴崎町	普濟寺	
文化 1 □	181-	墓石	柴崎町	普濟寺	
文化 1 3	1816	墓石	柴崎町	普濟寺	
文政 0 5	1822	墓石	柴崎町	普濟寺	
不 明		墓石 1 5 基	柴崎町	普濟寺	
元禄 1 6	1703	墓石 (板碑型)	柴崎町	普濟寺	
不 明		墓石 (板碑型) 8 基	柴崎町	普濟寺	
不 明		観音 2 体	柴崎町	普濟寺	
不 明		地藏 2 体	柴崎町	普濟寺	
天保 1 5	1844	五輪塔	柴崎町	普濟寺	
不 明		五輪塔	柴崎町	普濟寺	
明暦 0 4	1658	宝篋印塔	柴崎町	普濟寺	

不 明		庚申塔	柴崎町	普濟寺
不 明		無縫塔	柴崎町	普濟寺
不 明		常夜灯	柴崎町 4 - 22	
寛政 1 2	1800	常夜灯	錦町	児童公園
享保 1 1	1726	墓石	砂川町	流泉寺
宝暦 0 9	1759	墓石	砂川町	流泉寺
寛政 1 0	1798	墓石	砂川町	流泉寺
寛政 1 0	1798	墓石	砂川町	流泉寺
享和 0 3	1803	墓石	砂川町	流泉寺
文化 0 8	1811	墓石	砂川町	流泉寺
文化 1 5	1818	墓石	砂川町	流泉寺
天保 0 8	1837	墓石	砂川町	流泉寺
天保 1 4	1843	墓石	砂川町	流泉寺
文□ 0 9		墓石	砂川町	流泉寺
不 明		墓石 9 基	砂川町	流泉寺
享保 元	1716	墓石 (板碑型)	砂川町	流泉寺
享保 0 4	1719	墓石 (板碑型)	砂川町	流泉寺
不 明		墓石 (板碑型)	砂川町	流泉寺
寛文 0 4	1664	五輪塔	砂川町	流泉寺
寛文 0 4	1664	五輪塔	砂川町	流泉寺
寛文 0 6	1666	五輪塔	砂川町	流泉寺
寛文 0 6	1666	五輪塔	砂川町	流泉寺
寛文 1 1	1670	五輪塔	砂川町	流泉寺
不 明		五輪塔 2 基	砂川町	流泉寺
享保 0 2	1717	地藏	砂川町	流泉寺
不 明		地藏 6 体	砂川町	流泉寺
明和 0 5	1768	観音	砂川町	流泉寺
享和 0 3	1803	阿弥陀	砂川町	流泉寺
享保 0 2	1717	無縫塔	砂川町	流泉寺
不 明		無縫塔 3 基	砂川町	流泉寺
不 明		手水鉢	砂川町	阿豆佐美天神
明和 0 9	1772	墓石	柏町 2	共同墓地
天明 0 7	1787	墓石	柏町 2	共同墓地
寛政 1 0	1798	墓石	柏町 2	共同墓地

文化14	1817	墓石	柏町2	共同墓地	
天保03	1832	墓石	柏町2	共同墓地	
不明		墓石2基	柏町2	共同墓地	
不明		墓石(板碑型)4基	柏町2	共同墓地	
不明		地藏	柏町2	共同墓地	
不明		観音	柏町2	共同墓地	
宝暦11	1761	墓石(笠付)	柏町2	共同墓地	
不明		庚申塔	栄町2-40		

東京都 町田市

不明		墓石	小山町 片所	福生寺	天嶺文暁首座17世
不明		無縫塔	小山町 片所	福生寺	
不明		墓石	下小山田町	大泉寺	
安永06	1777	無縫塔	下小山田町	大泉寺	
不明		無縫塔	下小山田町	大泉寺	
不明		五輪塔空輪	下小山田町	大泉寺	

東京都 東久留米市

文化04	1807	墓石	八幡町2	石造物群	
------	------	----	------	------	--

東京都 大田区

不明		不明 W71xD51xH25cm	仲六郷	北野天神社	ノミ跡あり 異種寄せ集め
不明		地藏	仲六郷	宝珠院	
不明		線香立て	仲六郷	宝珠院	
不明		石塔	仲六郷	東陽院	
不明		五輪塔(空風水)	西六郷	宝幢院	
不明		石塔	西六郷	宝幢院	

神奈川県 川崎市

大正04	1915	観音地藏：明治48連銘	川崎区本町	一行寺	石質疑問残
正徳03	1713	観音地藏	川崎区大師町	平間寺	川崎大師
天保06	1835	地藏(台座共)	川崎区大師町	平間寺	須山家墓地内

宝暦05	1755	観音地藏	川崎区大師町	平間寺	
不明		観音地藏	中原区上丸子	大楽院	
享保17	1732	観音像：正徳02連銘	中原区上丸子	大楽院	
不明		無縫塔	中原区上小田	中泉沢寺	

神奈川県 城山町

不明		五輪塔	川尻	宝泉寺	
不明		宝篋印塔	川尻	宝泉寺	
不明		地藏（舟底型）	川尻	宝泉寺	

神奈川県 藤野町

寛文13	1673	五輪塔	吉野1584	浄光寺	
------	------	-----	--------	-----	--

山梨県 上野原町

不明		地藏	桐原7389	瑞光寺	
不明		無縫塔	上野原6362	竜泉寺	
不明		五輪塔（火水地）	上野原6362	竜泉寺	空風部宝篋印塔
天明02	1782	方柱状石塔	上野原6362	竜泉寺	
不明		宝篋印塔+五輪塔空輪	上野原6362	竜泉寺	
不明		宝篋印塔+五輪塔空輪	西原309	洞泉寺	
不明		宝篋印塔	西原309	洞泉寺	
寛文02	1662	地藏	桑久保1576	東光寺	石井家墓地
宝暦03	1753	地藏	桑久保1576	東光寺	

埼玉県 飯能市

文化07	1810	墓石	中居214-1	清泰寺	
不明		五輪塔（空風）	中居214-1	清泰寺	
天保04	1833	馬頭観世音	中居214-1	清泰寺	
不明		宝篋印塔	山手町5-17	観音寺	
不明		宝篋印塔	山手町5-17	観音寺	
不明		不明一塔頂部	山手町5-17	観音寺	
嘉永□□		墓石	山手町5-17	観音寺	

文政 1 1	1828	墓石	山手町 5 - 17	観音寺	寛保は 4 年まで
延宝 0 6	1678	墓石	飯能1329	能仁寺	
寛保 1 7	1757	五輪塔 (空風火地)	飯能1329	能仁寺	
貞享 0 3	1686	五輪塔 (空風火)	飯能1329	能仁寺	
不 明		宝篋印塔	小岩井1023	無量寺	
元文 0 4	1739	墓石	小岩井1023	無量寺	
寛政 0 8	1796	墓石	小岩井1023	無量寺	
明和 0 8	1771	墓石	中居100	寶蔵寺	
不 明		五輪塔頭部	中居100	寶蔵寺	
安永 0 9	1780	地藏	中居100	寶蔵寺	
不 明		馬頭観音	中居100	寶蔵寺	
不 明		板碑	中居100	寶蔵寺	

埼玉県 川越市

不 明		無縫塔	元町 2 - 11 - 1	養寿院	年代は灯籠本体
不 明		無縫塔	連雀町 7 - 1	蓮馨寺	
大正 1 3	1924	石灯籠台座石垣	連雀町 7 - 1	蓮馨寺	
不 明		手水鉢	小仙波町 1 - 21	喜多院	

伊奈石以外の伊奈石工・高遠石工銘石造物

享保 0 7	1722	地藏丸彫立像	五日市町山田瑞雲寺参道	匠人信州高嶋住小兵衛
弘化 0 4	1847	仙台石慰霊碑	五日市町伊奈岩走神社	石工 伊藤信吉
嘉永 0 5	1852	自然石手水鉢	五日市町小中野子生神社	香具方世話人高水佐右衛門
明治 0 9	1876	二十三夜塔	五日市町星竹善光寺入口	黒山儀三郎・田中銀蔵
明治 1 0	1877	三日月供養塔	五日市町戸倉726 小峰氏	石工 星竹寺向
明治 2 1	1888	灯籠	五日市町小庄阿伎留神社	石工 三内村小峰孫七
明治 2 8	1895	灯籠	五日市町養沢熊野神社	石工 小峰孫七
明治 3 0	1897	灯籠 (右側)	五日市町乙津神明社	石工 三内小峯孫七
明治 4 5	1912	安山岩灯籠	五日市町戸倉三嶋神社	増戸村三内石工 岸繁蔵
大正 0 2	1913	安山岩狛犬左	五日市町落合大戸里神社	八王子町元横山稲葉信栄
大正 0 5	1916	狛犬	五日市町小庄阿伎留神社	八王子町石工麻生來助刻
天保 0 4	1833	安山岩手水鉢	秋川市菅生1819正勝神社	信陽高遠石工保科保正
宝暦 0 2	1752	七沢石 石祠	町田市下小山田町大泉寺	信翁高遠石工伊藤久太郎

VIII 伊奈石と古文書

1. 伊奈石関係近世文書について

石井 道郎

(1) 文書の所在とその概要

当地に現存する伊奈石関係の近世文書は次の四家に大別される。

① 石川家文書

五日市町伊奈1127 石川尚志氏所蔵

石川家は旧伊奈村の名主家で、中世にさかのぼる旧家。世襲名は兵左衛門又は庄兵衛。所蔵文書は約4,000余点「東京都文化財」に指定され、五日市町郷土館刊行の『石川家文書目録』がある。

伊奈石関係では元禄17年、安永3年、寛政9年の門開きの誓約書（差出人 旧石工、名宛人名主・世話人・請合人）の3点がある。うち元禄分は本書に当るので資料1として収録した。なお江戸末期と推定される伊奈市の市庭の「借用者書上」があり、伊奈石（石臼と思われる）の販売者名が瞥見できる（資料解題参照）。

② 大福家文書

五日市町伊奈1553 大福ひさ子氏所蔵

大福家は旧伊奈村の名主家で、世襲名は清兵衛又は清左衛門。石川家につぐNo.2の家。所蔵文書は1300余点で、伊奈石関係文書は石川家より多い。資料2、3は同家のもので、二、三回目の門開きの本書である。当家には名主・世話人・請合人衆より座頭坊衆への「請合書」もある。

③ 宮沢家文書

五日市町伊奈1573 宮沢福次郎氏所蔵

宮沢家は伊奈村鎮守岩走神社神官。同家の先祖は仁平2年（1152）信州伊那より移住してきた12名のうちの一人といわれ、岩走神社は信州戸隠神社の祭神手力男命を分祀しているという。同家は江戸期三回にわたる石工門開き行事の世話人で、宿も主に同家を使用した。従って門開き関係の文書は「控え」が多いが概ね揃っている。資料4として収録したのは寛政9年11月、石工惣代甚九郎より石臼運上手当に金8両を提出した名主宛文書で、伊奈村における運上金の処理をめぐる基本文書である。なお大福家と同一の座頭坊衆への提出文書もある。

④ 大悲願寺文書

五日市町横沢134 住職加藤章雄氏所蔵

大悲願寺は真言宗豊山派の古刹で、開創は建久2年（1191）。江戸時代は寺領20石、末寺32寺を擁する当地区一番の大寺であった。近年東京都教育委員会の手により文化財調査が行われ20,000余点に及ぶ所蔵文書の全貌が明らかになった。所で周辺に伊奈石採掘場が圍繞している割には伊奈石関係の文書は少ない。たまたま26世住職慈明の日記（天明～文化期）中に時に石工の

動静が記載されており、門開き文書とは違った石工の生態を窺い得る。その一部を資料6、7として収録した。また末寺の高尾村法光院の住職が境内（秋川崖下）の伊奈石を信州石工に売却、採掘を許可したことに関し、檀家と紛争を生じた一件文書がある。資料8に収録した。

なお、伊奈石及び石工関係の研究は先学片山迪夫氏が『武蔵野』47号1巻「多摩郡伊奈の石工」、同50号2巻「多摩郡伊奈村“石工門開き”一件」に詳しく発表している。後掲の資料も石川家及び大悲願寺を除く、宮沢・大福両家及び「東京府民政史料」は同氏の論文より引用している。夫々当主の老齢、物故により借用困難な状況にある為でもある。資料解題もその骨子は郷土史研究の先達として親しく指導いただいた同氏の所説に負うものである。

(2) 文書資料

資料1 第一回門開き（石川家文書）

差上ヶ申一札の事

一、我々式拾壹人の者共、先祖七、八代以前、家業ニハ仕らず候えども、石屋の商売仕り候由、申伝候計ニテ、座頭坊衆出入これなく候。

これによって、毎々（前々）より左様の掛りも御座なく候、当村名主・組頭・年寄衆へ我々願入れ候ハ縦拙者共先祖石屋仕り候とも、七、八代も過ぎ候義、増して近代商売等ニも仕り候義村中の義ハ申すに及ばず、他村ニても覚え申候もの御座なく候処、訳不分明の義、迷惑ニ存じ奉り候。然れども中絶仕り候えバ、各々方御相談なされ、何分ニも訳御立、我々門開キ、座頭坊出入御座候ようニ埒明給うべく候由、頼み入り申候。若ハ左様ニ御済給い候上、外より此の人数の内ニ先年石磨（臼）作り候由、其上近キ親類又ハ縁組等いたし候由、家業ニも仕り候者ども、其外、脇より申出候もの御座候ハバ、我々引請、何方迄も罷り出、急度申分ケ仕り、埒明ケ、名主・組頭・年寄衆へハ少も御難儀掛け申すまじく候。尤も右人数の内ニ障りニもこれあるべきや、不用（門開きが不要）ニ存じ候縁者の分、不通（絶交）仕り、出入留め罷りあり候。其義ハ別紙ニ証文出し置き申候。

右の通り少も相違御座なく候間、此度我々先祖代々御改なされ、何れも御相談の上、小宮領、三田領の支配なされ候座頭坊衆へ、右相違なく、訳申披キなされ候ニ付、我々義門開キ、座頭坊出入御座候ようニ埒明け給い候段、子々孫々ニ至迄、何れへも御如在（才）（粗略）申すべきようこれなく、忝存じ奉り候。後日のため我々加判仕り、一札差し出し申候、仍て件の如し。

元禄拾七年申四月

武蔵国多磨郡伊奈村

惣右衛門 印

金左衛門 印

五郎平 印

長十郎 印

善左衛門 印

八郎左衛門 印
 次郎右衛門 印
 三右衛門 印
 次郎左衛門 印
 伊左衛門 印
 四郎左衛門 印
 六左衛門 印
 三郎左衛門 印
 金右衛門 印
 三右衛門 印
 善兵衛 印
 三左衛門 印
 佐五兵衛 印
 徳左衛門 印
 善右衛門 印
 長三郎 印

資料2 第二回門開き（大福家文書）

差出申一札の事

一、伊奈村百姓、左ニ名前印形致し候人数、先祖石切の由申伝え、座頭衆出入これなく候。

私共義近代ハ石切稼業も仕らず候えども、右名目遁れがたく候ニ付、これに依り、是までの石切縁者ハ不通致し、出入相止め候上ニて、私共義、左の人数此度門開き仕り度き段、相願ひ候処、御聞届ケ、近代稼業仕らず候趣、各々様御請合ニて門開き相済し、座頭衆出入これあり候よう御取持下され、忝候。

誠ニ此度御影故、しろうとに罷りなり候上ハ、以来村法相守り、子々孫々迄、各々様方へ不礼なる御如^{じよさい}在致すまじく候。後日の為一札件の如し。

安永三年午ノ十月廿七日

鍛冶屋平	儀兵衛	印
〃	平蔵	印
大上東	伴七	印
〃	九左衛門	印
〃	伝左衛門	印
〃	宇右衛門	印

”	勘平	印
鍛冶屋平	伴七	印
大上東	権右衛門	印
”	四郎左衛門後家	印
”	源七	印
大下東	九右衛門	印
”	五右衛門	印
鍛冶屋平	与兵衛後家	印
本町下	宇平	印
”	喜八	印
原口堂下	七郎左衛門	印
本町下宿	伝兵衛後家	印
上原口	ちよ	印
かじや平	鍋助	印

御世話人中

御請合人中

御名主中

なお大福家には旧石工20名の百姓名を前に掲げ、前記の主文と同一文を次に掲げ、差出人、当名主清兵衛、請合藤次郎、善治郎、五郎兵衛、勘兵衛、兵左衛門、藤右衛門、世話人、宮沢豊後、五左衛門、六郎右衛門、名宛人、伊奈村津具都座頭坊、川崎村綱都座頭坊、平井村立合袖都座頭坊、藤橋村同断三田都座頭坊 日付、安永3午年10月27日の請合文書がある。当名主清兵衛は大福家当主である。

資料3 第三回門開き（大福家文書）

差出申一札の事

一、伊奈村百姓左に名前連印いたし候人数、先祖石切の由申伝え、座頭衆出入これなく候。

私共義近年ハ石工稼業仕らず候えども、右名目遁れがたく候ニ付、これに依り、是迄石切縁者ハ不通致し、出入相止め候上ニて、私共義、左の人数此度門開き仕り度き段、相願ひ候処、御聞届け、近年稼業仕らず候よう御取持下され、忝く存じ奉り候。誠に此度各々様方へ不礼なる御如在致すまじく候。後日の為差出す一札。仍て件の如し。

寛政九丁巳年十一月

原口	甚九郎	印
”	弥兵衛	印

”	平六	印
”	惣左衛門	印
”	徳右衛門	印
新宿	五郎右衛門	印
”	栄蔵	印
鍛冶屋平	弥七	印
”	藤八	印
”	徳左衛門	印
上村	宇兵衛	印
”	七兵衛後家	印
”	長右衛門	印
”	要助	印
”	五郎右衛門	印
”	善右衛門	印
”	伝四郎	印
”	庄八	印
”	半蔵	印
”	金右衛門	印
”	八兵衛	印
”	久兵衛	印
”	清左衛門	印
”	半右衛門	印
”	平右衛門	印
”	善兵衛	印
”	太郎兵衛後家	印
”	治郎兵衛	印
”	与七	印
”	三四郎	印
”	平八	印
”	彦兵衛	印
”	勘兵衛	印
”	市左衛門	印
”	藤兵衛娘リフ	印

原口	嘉平	印
新宿	与七	印
”	又右衛門	印
”	こじゅう跡	印

註 第三回の門開きの人数は合計39名であるが、このうち後の4名（原口の嘉平以下）は後日書加えたものといわれる。（宮沢家文書）。

なお宮沢家文書には、名主、請合人、世話人より座頭坊衆「小宮領伊奈村座上^{みやのいち} 宮都座頭坊、三田領川崎村同 由良都座頭坊 同領大国村立会 喜代都座頭坊、同領青梅村同国野都座頭坊」へ提出した請合の一札（写）寛政9年11月付が残っている。

資料4 石臼運上伊奈村分（宮沢家文書）

差出申一札の事

一、往古己来石工稼業仕来り候内にて、証文取置候者廿老人ハ元禄拾七申年門開きいたし、其後延享三、伊奈半左衛門様御支配の時分より御運上仰せ付けられ候ニ付、石工稼業致候者にて 御上納いたし来候処、段々相休又候、安永三年、式拾人門開きいたし、残家数も少く相成り、只今石工稼業人も御座なく候ニ付、此度残りの者三十五人（註後で4人追加）門開きいたし度く、御世話人相頼み候処、御運上の義ニ付、取持なり難きの趣承り、去る安永年中門開き残金もこれあり、此の度門開き入用残金都合八両差出し候金子ヲ以て、御年貢諸役併ニ御運上御上納御世話下され候積りにて 残らず門開き出来致し候趣承知、忝く存じ奉り候。此度双方書面の者頼みニ付、私惣代致し、印形差出し候処、後日の為一札件の如し。

寛政九丁巳年十一月

石工惣代 甚九郎 印

立 合 伴 七

当年番 名 主 作兵衛 殿

御組頭 世話人 清兵衛 殿

御世話人 宮沢豊前殿

資料5 石臼運上横沢村分（^{註1}東京府民政史料）

石臼運上議定一札

当村石臼御運上ハ^{註2}寛文七未年より上納仕り来り候。尤も名受人の儀ハ太郎兵衛・庄兵衛先祖、七郎左衛門・豊次郎先祖、雄三郎・五郎右衛門先祖、清兵衛・才次郎先祖、善右衛門・太郎兵衛先祖右五人にて、老人ニ付永三十五文宛相納め候。然るニ去る^{註3}文化五年辰四月より豊次郎、五郎右衛門、才次郎右三人者ども、老衰仕り、石工渡世出来兼ね候ニ付、右三人分御運上、庄兵衛方へ引受け、

石山細工場も残らず引受け、互いニ議定書取替せ、当寅年迄老人ニて御運上相納め来り候処、庄兵衛老衰仕り、^{註4}藤兵衛老人ニてハ細工も格別出来申さず、右ニ付、御運上右三人分ハ銘々ニて御上納仕るべく候よう申し談じ候処、先年議定の趣ハ永々引受候約束故、今更老衰ニ相成り候とも、右議定異変相ならざるよう申し聞け、互ニ論争ニ及ビ、役宅迄も申出、既ニ出訴ニ相なり候趣ニ付、菩提寺立入相理解申し聞け、取扱の趣意左の通りニ候

一、金壹両 右ハ先年石工手間人相続相頼み候節預り置候分 藤兵衛 印

一、金壹分 右ハ先年石工相頼み候節、村中葉山の義ニ付、
壹両金差出し置き候分の内 村 中

一、金壹分 才次郎 印

一、金壹分 五郎右衛門 印

右両人は已来運上積金の趣

一、金壹分 右同断、尤も、太郎兵衛分御運上、是迄年々上納仕置
候えども、此度取扱の意趣として差出し申候 大悲願寺 印

右金都合式両、村役人方へ預け置き、利足を以て年々御運上、村役人方ニて上納仕るべき議定に候。尤も、豊次郎事ハ当時後家ニて、渡世も六ヶ敷間、差除き積金仲間ニ仕らず候。前書の議定仕り候上ハ、石工名受人ニハ申すニ及ばず、村役人方ニても異変仕るまじく候。後証の為取扱議定連印件の如し

天保元年寅十二月

石 工 藤兵衛 印

〃 才次郎 印

〃 五郎右衛門 印

此議の人数、各々様の御願ヲ以て、しろうとニ罷成り候上ハ 目出度

名 主 猪左衛門 印

組 頭 彦右衛門 印

百姓代 次郎右衛門 印

取扱人 大悲願寺 印

右識（議）定仕り候共、金子の儀ハ行々世話行届兼ね候節ハ、村役人難義ニ候間、此末外石工手間、来辰年より三ヶ年間差入れ、右手当金半分ハ右運上金へ相増シ、田畑相求メ右手当ニ仕るべくよう熟談仕り候。後日の為奥書仕置き候。 以上

註1 東京府民政史料には増戸村某家とあるが実は横沢村野口家文書。この野口家は文書中の名主猪左衛門家（慈明日記孫左衛門家）

註2 寛文7年は誤り

横沢村の石臼運上は慈明日記文化2年5月28日の項に代官上坂安左衛門によって5人分計

永175文が賦課（元文2年と推定）されたとある。

註3 右に同じ慈明日記（文化5. 4. 9）に石工庄兵衛が、信州石工等へ採掘権の流れるのを防ぎ運上金の一括負担を申出たように記されている。

註4 藤兵衛は庄兵衛の後継者。現在、大悲願寺仁王門西にある田野倉石材店先祖。

資料6 慈明日記 文化2年5月28日分（大悲願寺文書）

一 石山の石、今五月廿八日の夜、村内并ニ名主惣談仕り候て、三内借宅の信州石工へ売り候相談、名主方ニこれある由、これを承り候間、五月廿八日の晚口上書ニ相認め、孫左衛門方へ遣わし候。其の趣は、「先刻伝承候所、此度信州石屋江村内之石賣可レ申由、御相談有レ之候ニ付、心安き村内之義故、所存一通り申述候。

当村石山之義者、当時御運上相納候者共之株山ニ候間、其外之者之為ニ所徳ニ自由ニ他国者江賣候而ハ筋違ニ存候。当時者^{註1}村内五人者屋敷ニ付而御運上相勤候（得）共、屋敷之年貢者定通差出候故、御運上出所無レ之候間、万一御運上難レ出時者手間取之石工を入れてなり共、御運上差出可レ申筋ニ可レ有レ之候。仮令者造酒株、鮎運上之如く同様之筋ニ候。

依レ之賣候筋ニ候ハバ五人之運上出人ニ而賣候而運上無レ滞差出可レ然道理ニ候所、此方ニ而運上納置候石山^{をほかのひと}越外人より徳用ニ賣候筋無レ之候。若賣候ハバ其価金之利息を以永々運上差出候様斗而理ニ相聞江候。又冥加金^{註2}として差上候運上故、村内之衆徳用ニ成候事ニ候ハバ、其徳用之冥加金ニ徳用钱配分シ、取候方ニ而運上引請可レ然候間、右之趣御^{註3}勘弁之上、運上出方評議之上、石山之石御^{ならるべく}払可レ被レ成候、以上。

五月廿八日 当村石屋太郎左衛門分

^{註4}
御運上納主

名主 孫左衛門様

右の趣ニ申遣わし候所、惣談相止め候。^(相)右五人の運上は太郎左衛門^{此屋敷当院へ請取り候間、此屋敷ニ付き御運上を寺より納め候。}庄兵衛・金右衛門・五郎兵衛・清左衛門なり。此の五人にて御代官上坂安左衛門殿の時、村内石工拾余人の惣代ニ名前を名主迄出シ、永百七拾五文の運上を請け候所、其の後追々職人相止め候間、惣代の名前出し候五人の者、屋敷ニ付けて出し候ようニと名主孫左衛門の父半六^{はからい}の斗ニて御座候。此の時伊奈石工四拾人餘の所、是も拾八の表向ニして運上拾八人前出し候。多人数故、拾八人の名前これを失い候間、今時運上ハ地面を求め、作徳（小作料）ニて出し候なり。

註1 村内五人者屋敷ニ付

旧石工のうち屋敷持ちの者がその屋敷地に、課せられ負担した。此の屋敷地は本来の年貢と二重に徴税されることになる。

註2 冥加金

おかげをもって儲かりましたとあって、その利益の一部を差し出すのが冥加金。

註3 勘弁の上

熟考して。

註4 運上納主

大悲願寺即ち慈明をさしている。

資料7 慈明日記 文化5年4月9日より同年4月11日分（大悲願寺文書）

一 村方石屋庄兵衛九日朝以来、拙者儀石山御運上金右衛門・五郎右衛門・清左衛門の三人分引き請け候筈ニ仕り候間、右段申上げ候と申し帰り候て、委細双方書付取り替わし、三人方ニて手間取職人入れ申さず候筈ニ付き、右運上引取り候訳なり。

一 右曰運上の義、当村庄兵衛方へ大畑金右衛門・橋場五郎右衛門・水通清左衛門以上三人分、向後引請け候筈ニ書付取替わし相済まし候由、四月十一日告来り候。尤も金右衛門方へ庄兵衛より出し候書付、永々引請けの永々の文字、並ニ是迄は屋敷付ニて出し候と申す屋敷付の趣、これを除く。是ハ寺より御内意ニ付き除かせ候間申上げ候由、又庄兵衛方へ取り候書付の内ニ、然る上は手間取人は勿論、石山一件差構え申す間敷く候、と書加え、取り候事なり。

資料8 法光院伊奈石売却一件訴状（大悲願寺文書）

恐れながら口上書を以て申上候

法光院境内秋川岸川除の岩、北西の方二ヶ所、白石ニ売り申され候由ニて、近年段々掘崩し、当年ニ至り別して石工大勢入込み、夥しく掘崩し候ニ付き、私共存知付き候ハかように掘荒し候てハ、永々山ニ立帰り申すべきようご座なく候。殊ニ出水の度毎、外ニ迄押流し、境内欠込み、川付の林、後々ハ残らず流失仕り、寺下迄も欠込み申すべく（と）存じ奉り候ニ付、私共相談の上、右石御取らせ候義、御無用ニなされしかるべしと、御異見申し候所、御住持、御返答なされ候ハ、庫裏下屋修覆入用ニ致し候間、何分ニも取らせ申し候。若取らせまじく存知候ハバ、且方ニて庫裏下屋修覆急度致すべき旨、御返答御座候。これに依り、御願ひ申上候。法光院寺徳（寺の収入）ハ申上ぐるに及ばず候、古来より修覆の義、代々寺徳を以て修覆致し来り、その上、人馬等五、六人宛、代々扶持致され、山林も相応ニ立来り申候。右の寺徳、古来少しも滅消仕らず候。然る所ニ当御住持如何がなされ候や、御自身の躰ニて修覆も右の御挨拶、其意を得ず存じ奉り候（理解できない）。且亦境内の外四ヶ所の森、其外山二ヶ所、上木残らず伐り払い、鎌苅の外、黒木雑木一切御座なく候。境内二代々の御住持建立の用木として、四尺より六尺余の立木凡そ三拾本余御座候処、残らず伐払い、只今西の方樫吉本相残り申候処、右の白石段々掘崩、樫根迄六、七尺ニ掘詰め候故、葉色悪しく罷りなり候。押付枯木ニ罷り成るべしと存じ奉り候。御入院以来、差して劫も相見え申さず候。尤も寺萱替なされ候えども、村方其外、無尽萱ニて沢山御座候て、残り萱売り申され候。阿弥陀堂

(建立か)

寸立御座候えども、此入用ハ村方ハ申すに及ばず 隣郷其外領内勸化致され候。尤も寸立のみにて造作入仏等、十四、五年ニ罷成り候えども、相済み申さず候。猶又此後修覆来り候ハバ 何を御払い修覆なされ候や。且亦御出家の法義ニ御座候えハ 明年にも御出世他山もなされ候ハバあとは本尊と古寺斗りにて、又候御住持もこれあるまじく存じ奉り候。然らば則ち数ならざる拙者共先祖代々の性靈の回向僧も御座あるまじく、仏参仕り候儀も御座あるまじくと、難儀ニ存じ奉り候。右の通り竹木も御座なく候処ニ境内川除岩迄御売払なされ候儀、恐れながら逐一御吟味の上、如何ようとも仰せ付け下され候ようニ願ひ奉り候、以上。

宝曆拾年辰ノ八月日

高尾村法光院旦方

五兵衛	印
善右衛門	印
市郎右衛門	印
権右衛門	印
四郎左衛門	印
弥七郎	印
左兵衛	印
忠兵衛	印
市左衛門	印
仲右衛門	印
勘兵衛	印
留原 惣兵衛	印
〃 茂兵衛	印
〃 次左衛門	印

横沢村

御役寺様

註1 法光院は大悲願寺末、高尾村の秋川に臨む崖上にある。

この一件文書は他に法光院住職の返答書ならびに口上書があるが掲載を省略する。

資料9 石山一件日記（大悲願寺文書）

文化2年5月以降の横沢村の石山論争一件を詳細にしるした慈明の記録（一部抜粋）

一、文化五辰三月、三内借家の信州石工繁八、村役人へ願ひの由にて、当院を除き、横沢山の石を売り候相談これあり候処、当時石工業仕り候庄兵衛不得心ニ付、石運上納め候内、当院并ニ庄兵衛を除く外三人へ、繁八方より金子貳両貳分、山入前ニ山代金として、其外ニ金貳両貳分村の方へ、

是又同時相渡シ申すべく間、繁八手先の石工共、石取り候ようニ頼み入る旨、繁八並びに五日市下宿市兵衛（中人也）願ひ来り候間、此事村内の為メニ相成る故、石山売渡し申すべき旨、皆々得心、相談決し候間、其趣金右衛門 庄兵衛へ相すすめ、同心仕るべしと再三申来り候ども、庄兵衛同心これなき所、金右衛門申すよう、同心これなく候ハバ貴殿相除き 村内諸共拙者共三人の御運上株を以て、繁八等二細工致させ申すべく候。畢竟石工稼相止め候故、御運上出シ候事難儀故、（繁八への石売却を）止め難しと申ニ付、庄兵衛聞請け、左候ハバ三人の御運上拙者引請け申すべしと申すニ付、終ニ同年四月十一日ニ庄兵衛ト外三人と取替せ証文仕る筈に相なり、（中略）

右之通り御運上を庄兵衛引請候間、村方より信州繁八へ石山売り候事相止め候ニ付、猶又孫左衛門より網代村名主五兵衛へ相談、四月中旬より信州繁八等六人、網代村ニ借宅して、弁天山の南の谷の奥にて石切出し、細工始め候所、入会村（伊奈村）より相障り、これに依って、当辰年老年限りニ相止め候筈にて隱便ニ相済み候（下略）

一、信州石屋市之丞、熊吉兩人辰三月八日より、当村庄兵衛引請の御運上を以て、仙蔵諸共横沢山にて細工これを始め候、市之丞居住ハ仙蔵方ニ合宿也、是等の一件、入念毎度庄兵衛より当院へ届来り候也。

(3) 資料解題

① 門開きについて

資料1、2、3にみられる門開きとは、どのような歴史的、社会的背景から生まれ、具体的にどのような内容の行事であるかを説明する。

資料文面にみられるように、7、8代前より石工業を営んでいない旧石工系の住民を含む石工たちが、廃業を公認してもらい、その血筋を清算解消し「しろうと」になる儀式的行事といえる。そこには石工を賤業視する社会的認識が前提となっているが、これをいい立てたのは盲人達（座頭衆）であるところに江戸社会の特異性が見られる。

江戸時代、幕府は身体的ハンデキャップをもつ盲人に対する保護の立場から、正月や祝儀、不祝儀、新築祝等に際し、盲人が一般村人から施物をうける行為（社会習慣）を許容し、又金貸し業も公認した。盲人はこの特権をより権威づけ、寄付行為を確実にする為、住民の中に差別を持ち込んだようである。

盲人達の全国組織「当道座」の座法、寛永11年制定の『当道要集』によれば、「忌み筋」という差別を設け、芸能系、技術系職種35を座頭の出入りしない家としている。その中に「五輪切り」（石工の古称）が入っている。「忌み筋」を設定したのは盲人側の手段で、前述のように権威づけと、一般百姓よりの施しを確実にするためと解釈されている。（『日本盲人史』中山太郎著）

門開き行事の内容は旧石工達が、村の有力者を立会者（名主・世話人・請合人）に頼み、席を設け地域の座頭坊衆を招待馳走し、今後の出入りを要請する。その時石工達より廃業の「誓約書」を立会者に提出し、立会者は座頭坊衆へ「請合書」を差し入れる。元禄の資料によれば旧石工達

は訳がわからず迷惑しているが、致し方ないのでよろしく頼むとの文意がみえ、さらに門開き不用として参加しない仲間とは今後つき合いを断つ旨の文面があり、理不尽な差別によって石工仲間に生じた深刻な亀裂を窺うことができる。

座頭の『当道要集』が指定した「忌み筋」は穢多頭弾左衛門が自己の配下として名指した職種に共通し、座頭側でそのまま流用したものとみられる。差別される側から見れば、理不尽な話であるが、婚姻等にも支障をきたすので看過できない。慈明日記（文化4年3月）に大悲願寺の有力檀家組頭伴七の家で嫁取りに際し、嫁の兄の承諾が得られず、人別帳の作成が遅れ、村を上げて難渋する一件が書かれている。この一件の真因は（慈明は触れていないが）伴七家が昔石工頭をつとめた家系（安永3年門開きをすます）であったと推測される。

伊奈村で行われた3回の門開き参加者のトータルは80軒であるが、これをもって石工が80軒あったと即断はできない。血筋が問われるところにこの問題の特質があり、この数は分家筋も含め拡大した数値であろう。慈明日記（文化2. 5. 28）＝資料6に、伊奈村の石工数は石臼運上設定（延享3年）頃40戸程とある。これは参考にしてよい数字であろう。しかし寛政9年以降は文字通り一戸もなくなったようだ。慈明日記には信州出身の旅稼ぎ石工が、しばしば大悲願寺に出入している記述があるのに、地元伊奈村には一人の石工もいない。江戸末期と推定される伊奈市の市庭借用者の書上（断簡・石川家文書）伊奈臼の売手がすべて他村の者であったのを見ても、門開きがいかに徹底していたかがわかる。ちなみに文政期発刊の『新編武蔵風土記稿』の伊奈村の項には「今は其職（石工）を業とする者なし」と記されている。

なお伊奈石の石山を自村内にもつ隣村横沢村には門開きの関係文書もなく、その痕跡を窺わせる伝承もない。これは決して差別が存在しなかったのではなく、横沢村には差別をいいたてる座頭坊がいなかったことによるものと判断される。

② 石臼運上について

石工に対する幕府の賦課税で、その経緯・内容は資料4・5・6・7に詳しい。

運上の発生は元文2年（1737）（註1）横沢村に対し、代官上坂安左衛門が石工1名につき永35文の5名分を賦課したのに始まる。上坂代官は勘定奉行大岡忠相の有力下僚で、前々年の享保20年五日市地区や相模の津久井に「炭運上」を新設しており、石臼運上の設定も幕府の歳入増加策の一環とみることができる。

伊奈村に対しては延享3年（1746）代官伊奈半左衛門が石工18名分永630文を賦課している。慈明日記資料6によれば、横沢村には運上設定時10余名、伊奈村には40余名の石工がいたという。しかし、差別問題もからみ、石工廃業の続出する中で、誰がどのようにして運上金を負担するかが問題となっている。永35文は、通用銭の鑓びたに換算すれば約200文程度で、高額ではないが、零細な石工稼人にとっては問題である。資料6によれば、横沢村では石工の頭株5名が自分の屋敷地に上乗せして支払うことにしたとある。横沢村名主孫左衛門が村内の伊奈石を信州の出稼ぎ石

工に売却し、村の収入としようとしたのに対し、石臼運上村付の屋敷地を購入し、計らずも運上負担者の一人となった慈明は、石山は運上納入者の株山（権利をもつ山）と主張し、孫左衛門の施策に反対した。この対立は文化7年に及ぶ陰湿な感情的対立となって、さまざまな波紋を描いたことが、日記に書き出されている。（五日市町郷土館発行『大悲願寺日記 下』参照）

結局資料5の天保元年の措置が横沢村の石臼運上の最終的な処置で、これは資料4にみる伊奈村の方法と同じく、石工関係者が拠金し、その金で土地を購入、その小作料を以て運上の支払いに当てる方法で解決をみている。

註1 横沢村石臼運上元文2年設定の出典は忘却した。旧名主家野口氏が現在都内に転出したので年貢文書で確認できない。ただし、慈明日記資料6に代官上坂安左衛門のときとあり、上坂の在任は享保20～元文4の間である。

③ 出稼ぎ信州石工の動静について

資料8は高尾村法光院（大悲願寺末）の住職が境内の川除け（水防の意）石を信州石工に売却し、境内地の崩壊を恐れた檀家と対立した一件である。慈明の時代より古い宝暦期（1750年代）信州石工が多数入り込んでいたことと、同時に石資源が売買対象として評価されていたことが知られる。

次の資料9は慈明が石工問題を別記した「石山一件日記」の一部で、資料7の庄兵衛が運上3人分を肩代わりした一件の背景をより詳細に知ることができる。

また信州石工繁八が石山代金として提示した村と運上人たちに夫々2両2分計5両という金額は、伊奈石製品が結構の販路をもっていた証拠として注目に値する。

結局慈明と庄兵衛の拒否にあい、横沢村名主孫左衛門は信州石工繁八らを網代村の名主五兵衛に頼み、網代地内弁天山南の谷にて細工させることにした状況を知ることができる。所で、この場所は伊奈村の入会山で、伊奈村よりクレームがついた。この資料では一年に限り採掘を認めることとなったとあるが、「石山一件日記」を読みすすめると、一か所に限り認めるとあり、期限は付けられなかったようである。

なお資料9には庄兵衛が信州石工市之丞らを一種の手間取り石工として使用している状況が記されており、慈明－庄兵衛－信州石工市之丞と名主孫左衛門－信州石工繁八という二つの系列が浮び上がってくる。慈明側は五人分の運上を独占した形となりその権利の積極的活用を計った。その結果石山を村の資源とみる名主側との対立はぬきさしならぬものとなった。「石山一件日記」によると、名主孫左衛門は村内の取極めとして、一、石山は外部者に売らない。二、その代わり運上者の権利は細工場についての権利で石資源についての権利ではないから、庄兵衛は抱え石工をおいてはいけない。三、大悲願寺は寺用の石はいくら採ってもかまわないが、抱え石工をおいて寺用外の細工をさせることは遠慮願う。ということになったようである。石資源を活用しようと考えていた慈明は孫左衛門の意地による反撃にあった。慈明は文化7年6月「石山一件日

記」の末尾を名主以下、村人の根性の狭さを憤る言葉で閉じている。客観的にみると慈明と名主の意地争いが、伊奈石の活用を狭めたといえなくもない。

時代が下って天保元年になると、庄兵衛は老衰して、その跡を藤兵衛に譲ったことが「資料5」にみえる。この時点で運上の納入方法が変わり、当座の間、細工人の手間（石代か）の半分を運上資金に繰入れる旨が記されている。細工がオープンになっているように見うけられる。

最後に幕末期の状況を推測すると、門開きによって石工の消滅した伊奈村は別として、横沢村には藤兵衛家が残る（石材店として現存）、他はその時々信州石工が出稼ぎにやってきて、伊奈石の採掘と加工に従事したと見ることができよう。伊奈石の名の残るように、この時点ではまだ需要は根強く残っていたように見うけられる。

2. 網代家文書について

樽 トキ

恐れ乍ら書付を以って願ひ上げ奉り候

武州多摩郡網代村名主組頭百姓代申し上げ奉り候。当村散地に石臼これ有り候趣、此度伊奈友之助様御代官所同郡五日市村百姓市兵衛と申す者石工商売仕り度く、同郡横沢村名主孫左衛門立入り度々相願ひ申し候に付き、村役人とも内見仕り候處、一向こやし馬草等の差支えにも相成り申さざる場所、殊に行々は村方益にも相成り申す可き哉と存じ奉り候に付き、村方相談仕り候處一統承知仕り候。尚又、隣村入会村々へも掛合候處、是又至極承知仕り候。之に依り何卒御慈悲を以って右願ひ上げ奉り候通り御聞き済み成し下し置かれ候はば、偏に有難き仕合わせに存じ奉り候。以上

文化五辰年（1808年）四月

武州多摩郡網代村

名主 五兵衛 ㊦

組頭 庄八 ㊦

百姓代 弥兵衛 ㊦

木村治郎兵衛 様

岩下 橋治 様

網代家は、中世以来の旧家で、網代村の世襲名主家であったと聞く。長屋門の構えにも格式の高さがうかがえるが、その格式をずっと保ち続けてきた代々御当主の御努力は並大抵のものではあるまいと推察した。軒端に形の良い茶臼が見られるのも、石山を持つ名主家らしい。その昔は網代家だけの菩提寺であったという、禅昌寺の古い墓石も伊奈石の製品であることはいうまでもない。

網代家の文書は町の手で整理され、すでに目録が作られているので、目録だけを見て数点を拝借してきたが、石山の記述のある文書は意外にもこの一通だけであった。

石工商売を始めたいという市兵衛は、五日市の人と断ってあるので、他所から来た石屋ではないようである。五日市在の人でも、石工稼業を始めたいという人が居たということであろうか。また、村役が利益になるからと皮算用をしているところを見ると、石を採らせるに際しては、なにがしかの石代を納めさせたものとみられる。

IX 伊奈村・横沢村の地名・伝承

— 石工田野倉・岸氏聞き取り調査 —

中村 清作

伊奈村は、『新編武蔵風土記稿』（文政年間の編著）の「伊奈村」の項に「村名の起るところを尋ねるに、往古信濃国伊奈郡より石工多く移り住みて、専ら業を広くせし故に村名となせり」と記述がある。

横沢村は、「岩走神社の下で秋川に注ぐ沢は、北から南へ流れるのでヨコとみれば」（『五日市町の古道と地名』）横に沢が流れている。三内境にも小さな沢が北から南に流れていて、横に沢があるから横沢と地名がある。

この地域には、石工が多く活躍していた時代があり、伊奈石を切り出して墓石にしたり、石臼や井戸囲いなどにして使われた。

江戸時代、石工が「門開き」ということで廃業した記録をみると、80軒もの石工がいたことがわかる。当時の伊奈の戸数200戸の3分の1を越え、石工の村と呼ばれるほどであった。ところが、その石工がどのように仕事をしていたのか、一人一人が石屋さんみたいに作業場をかまえて仕事をしていたものなのか、それとも人夫として使われていたのかもよくわからない。

伊奈上村地区にあった私の本家は、20年ほど前まで、裏庭が伊奈石の細工場であった跡が残っていた。明治までは、石工の仕事をしていたものと思われる。

最初に横沢で石工を営んでいる田野倉正雄さんに話を聞くことができた。

「職人は一子相伝で後を継ぐ長男にしか仕事のことは話さなかったし、技術は目でぬすむという。親子でもライバルになっていた。ハンマーに使う柄も自分で山に入って木を探し、一つのことにもこだわりがあった。一人前になるには他人の飯を食わないと。私も若い頃奉公に出て修行を積んだ。

曾祖父の藤兵衛さんは「明治十年国内勲業博覧会」で内務卿従三位、大久保利通氏からいただいた賞状が残っている。渡り職人が修業にきていて彫った作品が残っているということだが、詳しいことはわからなくなっている。

大悲願寺の観音堂の庭に奉納されている手水鉢に、嘉永五年（1852）、石工藤兵衛と彫られているのが見られる。その東側には、石工石之助昭和9年（1934）作の弘法大師一千百年御遠忌報恩塔が立っている。これと向かい合うように一千百五拾年の報恩塔が昭和59年（1984）に作られた私のものがある。親子三代の石工の作品がここ大悲願寺で見ることができる。

この田野倉石材店の先祖も、江戸城築城工事の時相模の国から来ていて、伊奈の石工と知り合って、横沢の大悲願寺の西側に住むようになり今に続いているそうだ。」ということである。

隣家の吉野清一さんの話によると「石之助さんは火薬の使用許可証を持っており、火薬を使って伊奈石を切り出した。火薬をつめる穴の深さも切り方によってちがったようだ。切り出された石は地車（木

製の厚い二輪に、山の自然の木を使用して作った）を使って山からふもとまで山道を引きずり下ろした。平らなところは大八車に乗せて運んだ。石之助さんは石臼の目切りがうまかった。」

次に三内の三内石材店を訪ねた。

私の同級生の岸政美さんの三内石材店は、信州高遠町藤沢郷との関係があるとのことだが、いつごろから石工としてこの地域に住んだかは分からないらしい。

文政3年（1820）ごろ生まれた孫七さんのころは、信州から石工が仕事に来ていたようだ。

昭和3年（1928）に72才で亡くなられた繁蔵さんは、大正時代、今日の出団地の所にあった伊奈石を火葉を使って切り出していた。ふいご（金属の精錬に用いる送風機）の仕事は女性の仕事みたいで、おばあさんはよくやったそうである。当時は職人が何人も寝泊まりして大変だったそうだ。

昔の道具はふいごでおこした火で焼きを入れ、ハンマーでたたいて作り直したが、今の道具は先にタンガロイ（炭化タングステンとコバルトとの合金、硬度は鋼玉よりまさり、ダイヤモンドに次ぐ、切削工具材料）を使っている。石工の仕事は石の粉が出て、それを吸うので職業病（珪肺病）になりやすい。

政美さんの叔母さん（82才）は語る。

「家の仕事はあまり手伝ったことはなかったが、墓石に文字を彫った溝に朱の色を入れる仕事を手伝ったことがある。生前に文字を入れる時に朱を入れる。お彼岸などの忙しい時は学校から帰ってくると手伝った。」

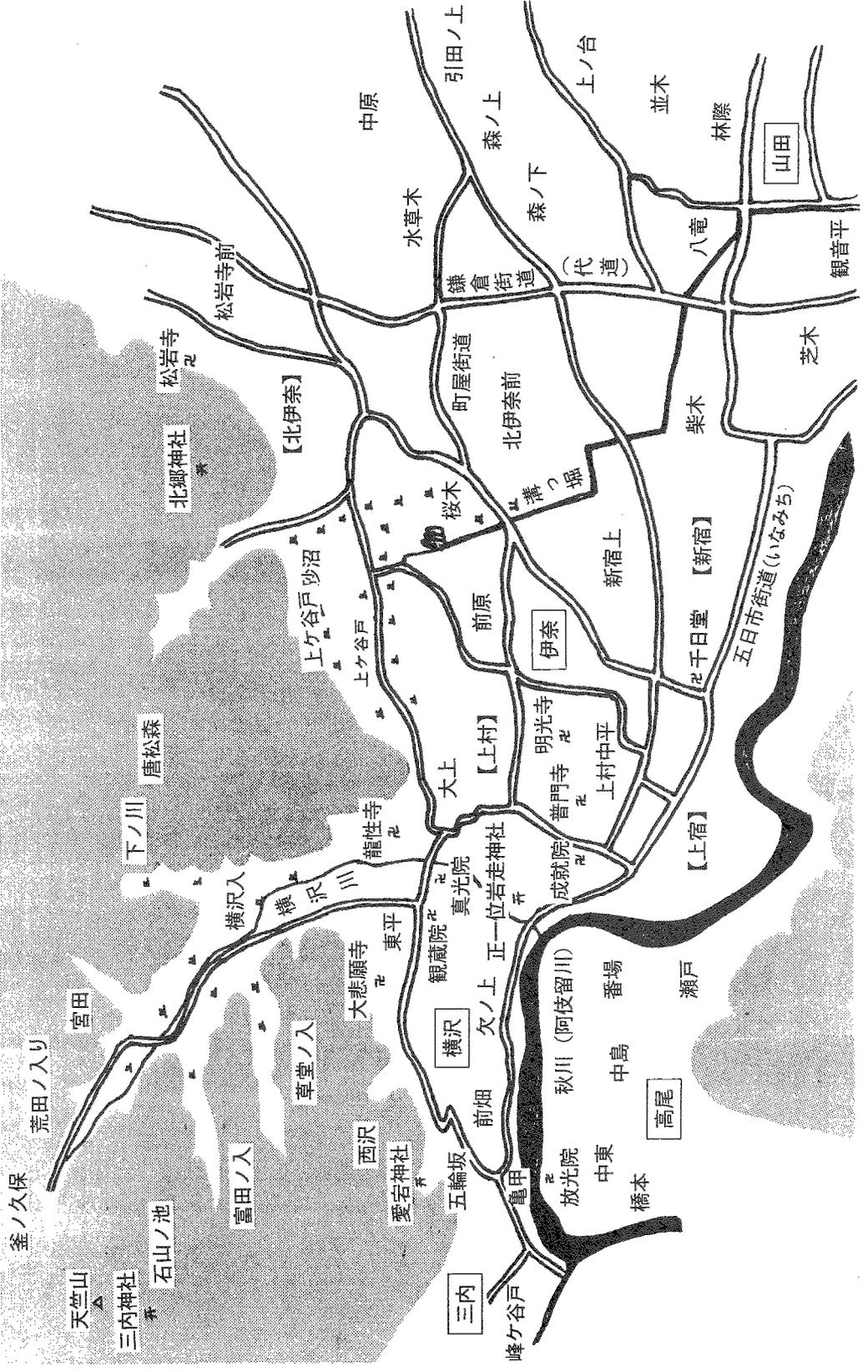
長野県高遠町郷土史家の春日太郎さんの話によると「高遠の石工がどうしてそんなにたくさん集団的に出現したか、特に北原、荒野、片倉といった地区は山間の部落で耕地が狭く、水が冷たいために百姓だけでは生活が成り立たなかった。山から石を切り出す仕事はそれほど資本もかからないことから、百姓が副業としてはじめたらしい。高遠の石工はこのように、出稼ぎにいっても石山から石を切り出す仕事を中心にやったようだ。そのうち細工もできてきた。」と言う。

伊奈の石工が、仁平2年（1151）信州伊那郡から12名が来た時に、一緒に来たというが、その当時の石工の家はどこだったのか、わからなくなってしまっている。

伊奈上村地区の南、中平地域は「かじや平」とも呼ばれている。昔は鍛冶屋が今の明光寺入口の甲野宅の庭にあったと聞いている。その他に鍛冶屋があったかわからないが、鍛冶職人がその地域に集まって住んでいたのかもしれない。

伊奈、横沢には「筏道」とよばれていた道がある。増戸駅に行く南北の道は鎌倉街道で別名筏道とも呼ばれていた。日の出村大久野あたりから材木が運ばれ、秋川の山田のせき付近で筏に組み、大田区の六郷まで流したらしい。

伊奈村、横沢村は、石工たちが伊奈石で作って残してくれた墓石や石臼などが、当時をしのばせている。



伊奈村・横沢村付近の地名図（江戸時代）

X 信州高遠石工と伊奈石工

1. 信州伊那の石工調査記録（メモ）

唐澤 慶行

取材日：1994. 8. 17（水）～ 19（木）

取材先：①文化財保護委員・高遠町図書館古文書担当 中村文彦氏

②高遠郷土研究会会長・文化財保護委員 春日太郎氏

③「伊那谷の石仏」著者 竹入弘元氏

④北原石材店（高遠町花畑）

高遠町一満光寺、建福寺、遠照寺、検校塚、桂泉院、高遠城跡、郷土館

三峰川高遠石丁場跡、黒沢高遠石丁場跡、元酒屋旅館（藤沢栗田）

駒ヶ根市一善福寺蓮台場（東大久保）、観音寺（北下平）

辰野町一沢底入稲荷社

(1) 高遠周辺の石切り場（丁場）跡（記事中丸付き英小文字は取材先。以下同様）

①神明団地 花崗岩 → 藩で使う石、^{かこみいし} 冪石（役人が交代しても大切に守れという文書）

②（他には）花崗岩の転石を割ったことはある、掘ってまでやったとは聞かない

③弁財天橋上高遠石石切り場跡：三峰川川原露頭（矢穴確認）建設省の発破により除去

④藤沢郷黒沢2か所 閃緑岩 江戸時代（部落の裏山・山に入っすぐの平）高嶋石材

⑤黒沢の高遠石（青石）：高嶋氏自宅下田端の山、高嶋氏が北原石材従業員中に採石

⑥高遠石は範囲が狭くこの辺はほとんど花崗岩、黒沢で蛇紋岩が出たという話がある

⑦高遠石は幅1間半～2間のごく限られた範囲、高級な石、貞治以前から石塔に使ったと思う、安山岩よりは風化しにくい（目が細かく硬い）

⑧水上の安山岩：特に名はないがあえていえば「砥川石」（諏訪）

⑨その他藤沢には小規模な丁場がちょいちょいあった

⑩辰野町平出 高德寺2m石仏8体延宝8年（50～100年の間で作る）寺の裏山の安山岩

⑪辰野町沢底 日本で一番古い道祖神（永正2年）安山岩（守屋山？）

（霧が峰安山岩＝灰色、高遠＝SiO₂少なく黒い、玄武岩質）

⑫沢底の安山岩：見た目は（水上の安山岩に）似ていた

⑬流溪石 辰野町横川 江戸時代留山 昔から石仏にはなっていない（品質良、希少）

⑭辰野町川島方面 元禄3年 山石

⑮南箕輪村大泉から切り出すということが書いてある（木下コウタイ寺守屋貞治仏）

⑯伊那大泉の青石：砂岩、色は高遠石によく似ている、目もよく似ているが柔らかい

⑰石質区分は「山石」「川石」「安山岩」ぐらい、産地を調べることはない

- ①句碑、庚申塔を建てるという記録があるが、だいたい川原に行って拾ってくる
- ①石がたくさんあるところでは特別集中して掘り出す必要がない
- ⑤この辺りはあまりいい石は出ない

(2) 高遠藩内の石造物

- ⑥満光寺 高遠最大の五輪塔 江戸期山形より左遷された鳥居氏母子2基（石質不明）
保科左源太五輪塔 寛永4年（高遠では最古）
- ⑥建福寺（石造物最多）・桂泉院・藤間不動大明王石像（守屋貞治作 閃緑岩）
諏訪御料人の石碑 元禄のもの（安山岩?）
- ⑥高遠城は石垣そのものがなくなってきた
- ⑥墓石：高遠石＝青石＝閃緑岩
- ⑥石臼：高遠周辺はほとんど花崗岩 → 高遠花崗岩（学名）雲母が大きく、風化が早い
- ⑥陽石：高遠花崗岩 自然石に近い 2石1体 陰石は破損 江戸時代坂本天山が漢詩に詠う
所在地 文化センター北山中斜面 古東山道沿い（中村氏推察）
上部直径2m 周囲4m／長さ90cm胴回り3m 下石長さ2m／胴回り3.5m

(3) 江戸期以前の高遠石工製品

- ①笠原 五輪塔 中世? 銘なし
- ⑥長谷村一ノ瀬城 宝篋印塔 室町様式（年代推定天文8年）
- ⑥中世の石造物（高遠藩内）竹入氏著書『伊那谷の石仏』参照
- ⑥長谷村には中世のものはない、駒ヶ根にある（東伊那大久保善福寺墓地）
*伊奈村（東伊那）と高遠とは昔から高遠道と言って交流が深かった、ほとんど地元といっ
てよい。高遠道（高遠→富県→火山峠→東伊那）
- ⑥長谷「検校塚」『古今著聞集』、一ノ瀬「宝篋印塔」ともに年代不明
- ①五輪塔、板碑は数が少ない
- ①板碑は岡谷に意外とあるが、これは製糸が盛んなころ買ったらしい
- ⑥信州には板碑はほとんどない → よそ（関東）から持ってきたものはある

(4) 江戸期の高遠石工製品

- ①庚申塔で一番古いもの 高遠町北原（明暦2年）板碑型、荒町（明暦4年）申待供養
- ①庚申信仰は武蔵からだんだん来たのではないかと思う、（こちらに）飛び抜けて古いものがあったらおかしい
- ①辰野町小野 石祠型庚申一更埴（市）など北の方に多い
- ①高遠町樹林寺 庚申塔（＝板碑型）3基（寛文12、延宝3、8年）舟型がみごとにできている
- ①笠原（寛文12）時代の法則のようなものがあるようだ
- ①水上1、伊那里浦2、杉島1の道祖神は意匠が同じ、同じ石工の彫ったもの

- ①宮田 大小 自然石ばい ユニークで類例がない
- ①東春近中殿島 五輪塔 殿島城主の墓? (何か書いてあるようだ)
- ①辰野町川島に古いがあるということで見たが、あまり感心しない
- ①熊本城の石垣(銘ありと聞いた)、遠照寺入口に熊本の某名石塔
- ①遠照寺寛文2年石塔は北原石材のもの
- ①かじ村弥勒森林組合工場裏 広瀬銘 自然石石塔(寛文元年)が高遠最古

(5) 近代の高遠石工製品

- ①国会議事堂の一番上の部分はこの石工でなければということだった

(6) 高遠石工

- ①山里は耕地が狭く、水が冷たいため農業だけではやっていけない
- ①いつのころか山の石を捜して切り出す仕事をするようになった
- ①石工は農民(水呑み百姓)の次・三男が多かった
- ①もともと高遠石工の仕事は城の石垣造り
- ①割り石屋、積み石屋、仕上げ石屋の三つ、ある程度は三つを兼ねていた。仕上げ石屋は自分で山をさがし割り出して作る
- ①藩が貧しく、藩内では大物は造らなかった
- ①(石工の)歴史は古くてもそういうもの(古い石造物)が残ってなくても当然、石がない。
- ①旧高遠領では新しい(ものしかない)地元では名前はわからないが庚申様・地藏・馬頭観音ぐらいをちょっと手軽にこしらえ、後はみんな旅に行った
- ①後に残る立派なものは地元ではできなかったのではないか(金がかかるし、関心ある人もいなかったかもしれない)
- ①(高遠では)石工の扱いには特別優遇もなければ差別もない
- ①並木先生の調査では伊奈の地名は高遠に限らない、ほうぼうにあるとのことだが

(7) 出稼ぎ石工

- ①ここは単なる出身地(地元)でここでは作らず他所で作る(出稼ぎ)
- ①その時代出稼ぎできるのは職人だけ(山崎石、塩山花崗岩)、出稼ぎ先で広める
- ①石材と仕事のどちらかがあれば定着・石橋、石仏、石臼はそこに(専門で)住んでいれば注文があったであろう。
- ①江戸市中の石工はかなり高遠から出ていった
- ①旅稼ぎでは、石山を先ず捜して、切り出す仕事を始めたらしい
- ①石工の技術を身につけるのは、出稼ぎをする親方であればそれについて習う
- ①細かい仕事 → いくらで請けたかによって違う(かかる費用、日数が違う)
- ①現在石臼を作るとしたら手間はそれほどかからない、3~5万円でできる

⑩出稼ぎ先の石屋とのトラブルが相当あった、石工文書（江戸後期）ほとんどトラブル

⑪対等ではだめ、地元の石工より腕が良いことが条件 → やむをえず受け入れた

⑫血縁をたよって旅稼ぎに出かけていったと考えるのが妥当（城主保科正之 高遠→最上→会津）

* 保科正之：徳川秀忠が奥女中に生ませた子 八王子上恩方金照庵（仁科五郎の妹が落城時に行った先）に隠す→高遠へ来た、家光が知り 高遠3万石→最上在城7年→会津若松城20数万石（めでためでの若松様）と転封時格式を整えるため、読み書きのできる浪人、百姓、町人をにわか侍に仕立てて連れて行った（優秀な者を全員）その中に小原庄助もいた

⑬出稼ぎ北原 → 福島

⑭出稼ぎ最古：江戸期以前（窪八幡→北原の先祖？＝元豪族）

⑮北原の先祖：山梨、系図中常陸介あり→足利の系統かと栃木まで調べたが足跡なし

(8) 高遠石工銘石造物

⑯地元作品には銘なし、一步高遠を出ると銘あり（殿様への遠慮？）

⑰藩内の石造物には石工銘なし → 大物を造らなかったからではなく、遠慮から

⑱他所へ行けば「高遠石工銘」をつける＝カンバン

⑲名前がわかっているもので古いもの → 町誌にある窪八幡神社（天文）より古いもの見当たらない

⑳甲州窪八幡神社の高遠石工銘入り石橋が（春日氏の研究では）一番古い（天文4年）

㉑平井無辺墓高遠石工銘 秋山姓－藤沢谷荒町に何軒かある、棕田－初間、橋本－不明

㉒平井宗剣寺荒町石工銘秋山姓は、今でも荒町に2軒（本家・分家）ある

(9) 街道

㉓参勤交代道（高遠・飯田の殿様）高遠→御堂垣外→金沢峠→金沢→青柳→

㉔塩の道 鰍沢塩 富士川遡上（舟）→鰍沢（牛馬）→金沢峠→高遠

足助塩 名古屋方面→高遠

日本海 松本→塩尻

*（藩内の塩は）商取引で（各地のものが）入り組んでいた

(10) 石工文書

㉕元禄以前のものなし

* 伝承：保科以後、鳥居か内藤かわからないが藩主が来て、百姓をだまして（褒美を与えて）文書を集めて焼いた、前のがメッタあると治めるのに邪魔、普通の家にはない、寺あたりにたまにあるかもしれない

曾我兄弟（仇討）工藤祐経の息子犬坊丸がこちらへ流されてきて墓がある

㉖文治3年藤原氏石屋高遠御料藤沢の内御堂垣外村保科氏所持の文書（元禄）高遠町誌

* 石工持ち歩き由緒書、旅行用に身分を保証するためのもの、信憑性疑問文治3年の裏付け必要、

由緒書中藤原姓を名乗ってよいとのことがあり「藤原石工」という

⑤石破元祖 文治三歳五月十一日 藤原姓屋 信州高遠郷藤沢松倉村 向山善左衛門

⑥他国稼御改帳 水上村 昭和四丁亥 正月日（武州3名記載）

⑦荒町村石切人別御改帳 嘉永三庚戌年正月

⑧荒町村石切人別御改帳 嘉永四辛亥年正月

⑨荒町村石切人別御改帳 安政四丁巳年正月

⑩石切人別御改帳荒町村 萬延二辛酉年正月

⑪他国稼御改帳石切下書水上村 文久三癸亥年正月（武州玉郡五ヶ市宿2・青梅宿1）

(11) 石工の道具（北原石材）（図版46）

・矢締め

・げんのう：（柄が）面に斜 真っ直ぐの柄を入れると（矢、のみなどが）曲がる

・矢：幅の小さい方が効率が良い（穴が小さくてすむ、力がかかる）

昔は大きなものを使っていた

幅の小さいものはごく最近、江戸時代とそう変わっていない、硬い石ほど小さい

柔らかい石に小さい矢を使うと周りのはぜて飛んでしまう

エジプトではかなり大きなものを使っていたらしい（ピラミッド＝石灰岩）乾燥するから木

の方が効率がいい、木を使うのは日本ではあまり聞かない、むしろこの辺りでは（冬）水

を入れて凍らせて割る

・飛び矢と締め矢：矢を繋ぐことはしない、藁を入れるのは矢が浮く状態で使うため

・たがね（矢穴彫用）：（矢）穴は角をつけるが、矢が入って丸くなる

・びしゃん、片びしゃん

・ちょうな

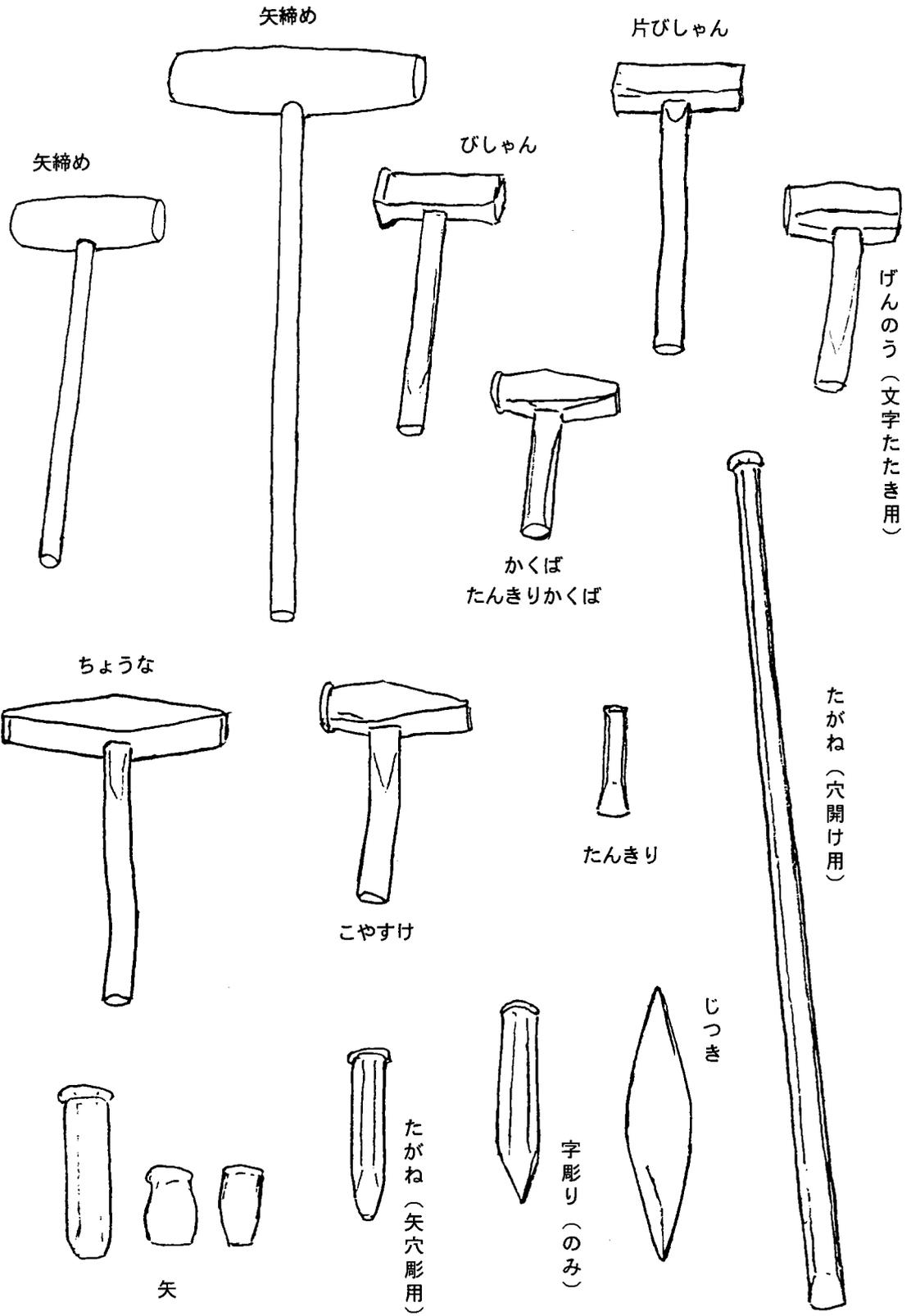
・こやすけ

・たんきり、たんきり角刃、柄なしのもの（たんきり）

・じつき

・字彫り（のみ）：小さなたがね

・穴開け用たがね：長さ90cm余り（現在金てことして使用）



矢締め

片びしゃん

矢締め

びしゃん

げんのう (文字たたき用)

かくば
たんきりかくば

ちょうな

たがね (穴開け用)

たんきり

こやすけ

じつき

矢

たがね (矢穴彫用)

字彫り (のみ)

2. 高遠出稼ぎ石工文書

樽 トキ

(1) 石切人別改帳について

(高遠藩では、石工の収入にかかる運上(税)を目的として旅稼ぎを奨励した。藩では一方、出稼ぎに出る石工たちには請人(身元保証人)を立てさせ、村役には毎年、出稼ぎ人の人別改帳を差出すことを義務づけ、国元の年貢の確保、旅先での行動などを規制し、厳しくのぞんだ。前書で心構えを読み聞かせ、出かける石工たちの出稼ぎ先を記した改帳には本人と請人が名を連ね、村役が連判した上で藩に届出をさせた。

この人別改帳は高遠町の石佛研究家、春日太郎先生が集められた古文書の一部から、石産地、伊奈、秩父、七沢に関係のありそうな行先武州などあるものを拾い出してコピーさせていただいたものである。(各村々、時代によりその形式に違いはあるものの、大体似たような内容である。)

① 他國稼御改帳 水上村

明和四丁亥年(1767年)正月日

他國稼ぎに罷り出で候請人の事

一、 他國へ当分稼ぎに罷り出で候に付き、五人組切に吟味仕り人別請人相立て、御年貢御役等滞り無き様に仕り差し遣し申す可く候御事。

一、 御公儀様より仰せ付けられ候御法度の儀は申し上ぐるに及ばず、常々仰せ付けられ候御法度先々にても相背き申すまじく候。その段申し聞けその意を得奉り候御事。

一、 この者共、前書に相記し候通り、その年に罷り帰らざる者これ有るに於ては、請人ならびに五人組より詮議を遂げ、行衛榷に承り届け其品早々御注進仕る可く候。滞り無く罷り帰り候ても、その段名主組頭五人組迄申し達す可く候御事。

附、 少しの高持なりとも田畑荒れ申さざる様に預け作らせ申す可く候。手前持申し候田畑は耕作の時分罷り帰り候て仕付け、麓相に仕らざる様に妻子にも申し付け可く候。他國稼ぎに罷り出で候上は、当秋不作仕り候ても、小検見(役人が収穫前の田を見て年貢高を定めること)御引方書き上げ申すまじく候御事。

右の趣少しも相背き申すまじく候。後日の為依って件の如し。

石切稼ぎに罷り出で候者

- | | |
|-----------|------------|
| 一、 駿州へ参り候 | 友右衛門 |
| | 請人 七郎兵衛 ㊤ |
| 一、 甲州へ参り候 | 久左衛門 |
| | 請人 安右衛門 ㊤ |
| 一、 豆州へ参り候 | 直左衛門 |
| | 請人 七郎左衛門 ㊤ |

一、 駿州へ参り候	又左衛門	
	請人 孫兵衛	㊦
一、 同國へ参り候	善兵衛	
	請人 孫兵衛	㊦
一、 郡内へ参り候	藤右衛門	
	請人 忠左衛門	㊦
一、 駿州へ参り候	七右衛門	
	請人 八郎兵衛	㊦
一、 上州へ参り候	覚右衛門	
	請人 斧右衛門	㊦
一、 武州へ参り候	平右衛門	
	請人 平六	㊦
一、 駿州へ参り候	重左衛門	
	請人 忠左衛門	㊦
一、 武州へ参り候	与市	
	請人 利兵衛	㊦
一、 同國へ参り候	相果 庄左衛門	
	請人 理兵衛	㊦

(武州へ行くと申し出ている平右衛門、与市、庄左衛門は、もしかしたら伊奈村へ来ていたかもしれない。武州内での細工石の産地は伊奈村だけではなく秩父なども含まれるので、武州即伊奈という断定はできないが、おおいに興味をそそられる。そして庄左衛門は出稼ぎ先で病を得たか、あるいは突然の事故かによって、この武蔵の国で命を終えたものと思われる。)

一、 郡内へ参り候	長左衛門	
	請人 団七	㊦
一、 同國へ参り候	与兵衛	
	請人 団蔵	㊦
一、 上州へ参り候	清蔵	
	請人 八郎兵衛	㊦
一、 下野へ参り候	茂右衛門	
	請人 市右衛門	㊦
一、 郡内へ参り候	文右衛門	
	請人 仲八	㊦
一、 同國へ参り候	甚左衛門	

- 請人 市右衛門 ㊤
- 一、 同國へ参り候 文左衛門
- 請人 源二郎 ㊤
- 一、 豆州へ参り候 伊右衛門
- 請人 伊左衛門 ㊤
- 一、 相州へ参り候 利右衛門
- 請人 清左衛門 ㊤

ノ式拾老人石切

源蔵

右の通り石切り老人なりとも相違御座無く候、その為書上げ件の如し。

- 水上村 名主 孫右衛門 ㊤
- 組頭 数右衛門 ㊤
- 同断 清左衛門 ㊤
- 長百姓 五兵衛 ㊤

明和四丁亥年 正月日

富崎善左衛門様（藩の役人）

（そしてこれには、翌年新に参加した石工を書き加えたものであろうか、次の貼り紙がしてある。）

^{まのほろ} 子春（1768年）石切に罷成申候	
相州参候	清左衛門
武州参候	五右衛門
駿州参候	市左衛門
甲州参候	平六
石切式拾五人	

② 荒町村石切人別御改帳

嘉永三^{カノエイヌ}庚戌年（1850年）正月

名主 作右衛門

他國稼ぎに参り申し候請人の御事

- 一、 他國へ当分稼ぎに罷り越し候に付き、五人組切に吟味仕り人別相立て、御年貢御役等滞り無き様差出し申し候御事。
- 一、 御公儀様仰せ付けられ候御法度の儀は申し上ぐるに及ばず、常々仰せ付けられ候 先々にても相背^{そむ}き申すまじく候。其段申し聞かせ其意を得奉り候御事。

一、 此者共、肩書に相記し候通り其月成るに罷り歸らざる者これ有らば、請人ならびに五人組詮議遂げ行衛ゆくゑたしかに承知仕り其品々御注進仕る可く滞り無く申し上げ候御事。

一、 他國へ稼るすぎに罷越し留主にて妻子等にてても耕作そろう鹿相に致させ申すまじく候。然る上は当秋不作に付き小検見引方書き上げ申すまじく候御事。

武州榛沢郡中瀬村参り申候 久右衛門

大屋 喜太右衛門 受人 勝右衛門

武州榛沢郡中瀬村参り申候 宗七

大屋 喜太右衛門 受人 善兵衛

上州勢多郡苗ヶ嶋村へ参り申候 三郎兵衛

大屋 久右衛門 受人 勝右衛門

相州大住郡日向村へ参り申候 彦右衛門

大屋 太郎右衛門 受人 利右衛門

甲州山梨子郡等々力村へ参り申候 文左衛門

大屋 市左衛門 受人 沢右衛門

上州新田郡大田宿へ参り申候 増治郎

家主 安右衛門 受人 重左衛門

甲州八代郡石村参り申候 戊年八月不縁御願差上置候

宿 甚右衛門 受人 善三郎

此者不縁願仕り候

相州大住郡日向村参り申候 戊年三月止御願申候事

大屋 太郎左衛門 受人 岩右衛門

此者戊年戻願仕り候

甲州山梨子郡等々力参り申候 市太郎

大屋 市左衛門 受人 沢右衛門

武州榛沢郡中瀬村参り申候 亥年正月欠落候 同年同月石切相止御願

此者行衛ゆくゑ相分らず願出候 受人 彦四郎

江戸稼 源兵衛

右同断 勝兵衛

右同断 丈兵衛

度稼たび 仲八

人数ノ拾四人 内三人江戸稼 内一人度稼

右の通り吟味仕り少茂相違御座無く候、以上

嘉永三庚亥年 正月日

荒町村 組主 利兵衛
同断 市右衛門
長百姓 沢太郎
名主 作右衛門

伊藤奥右衛門様

(上記の大屋、家主、宿等は出稼ぎ先のそれである。)

③ 荒町村石切人別御改帳

嘉永四^{カノトイ}辛亥年(1851年)正月

他國稼ぎに参り申し候請人の御事

(この前書の内容文は、前掲のものと殆ど変わらないので省略する)

武州榛沢郡中瀬村参り申候

大屋 喜太右衛門 久右衛門
請人 勝右衛門

武州榛沢郡中瀬村参り申候

大屋 喜太右衛門 宗七
請人 善兵衛

上州勢多郡苗ヶ嶋村へ参り申候

大屋 久右衛門 三郎兵衛
請人 勝右衛門

相州大住郡日向村へ参り申候

大屋 太郎右衛門 彦右衛門
請人 利右衛門

甲州山梨子郡等々力村へ参り申候

大屋 市左衛門 文左衛門
請人 沢右衛門

上州新田郡大田宿へ参り申候

家主 安右衛門 増次郎
請人 重左衛門

甲州山梨子郡等々力村へ参り申候

大屋 市左衛門 市太郎
請人 沢右衛門

武州榛沢郡中瀬村へ参り申候

大屋 喜太右衛門 亀次郎
請人 善兵衛
江戸稼 源兵衛
右同断 勝兵衛
江戸稼 丈兵衛
たび度稼 仲八

人数ノ拾式人 内三人江戸稼 内七人度稼
右の通り吟味仕り少も相違御座無く候 以上
嘉永四辛亥年 正月日

荒町村 組頭 軍蔵
同断 市右衛門
長百姓 伴右衛門
名主 作右衛門

伊藤奥右衛門様

④ 荒町村石切人別御改帳

安政四丁巳年（1857年）正月

他國稼ぎに参り申し候請人の御事

（前書省略）

武州榛沢郡中瀬村へ参り申候

大屋 喜右衛門 久右衛門
請人 勝右衛門

同国同郡中瀬村へ参り申候

大屋 喜右衛門 宗七
請人 重兵衛

武州榛沢郡中瀬村へ参り申候

大屋 喜右衛門 国三郎
請人 十兵衛

上州勢多郡苗ヶ嶋村へ参り申候

大屋 久右衛門 三郎兵衛
請人 勝右衛門

相州大住郡日向村へ参り申候

大屋 太郎右衛門 彦右衛門

上州新田郡太田宿へ参り申候
家主 安右衛門
請人 寅三郎
増次郎
請人 重右衛門
武州榛沢郡中瀬村へ参り申候
大屋 喜右衛門
弥七
請人 勝右衛門
上州勢多郡前橋本町へ参り申候
大屋 庄次郎
銀平事伝三郎

請人 重左衛門
江戸稼 勝兵衛
右同断 大兵衛
人数ノ拾人 内式人江戸稼
右の通り吟味仕り少も相違御座無く候 以上
安政四丁巳年 正月

荒町村 組頭 彦兵衛
同断 庄左衛門
長百姓 三郎兵衛
名主 伴右衛門

松井周蔵様 他

- ⑤ 石切人別御改帳 荒町村
萬延二辛酉年^{カノトリ} (1861年) 正月
名主 甚三郎 控

他國稼ぎに参り申し候請人の御事
(前書省略)

武州榛沢郡中瀬村へ参り申候
大屋 喜右衛門
久右衛門 此人酉の春落命と相成り申候
請人 勝右衛門
同国同郡中瀬村へ参り申候
大屋 喜右衛門
國三郎
請人 十兵衛

相州大住郡日向村へ参り申候

大屋 太良右衛門	彦右衛門
	請人 寅三郎
上州新田郡大田宿へ参り申候	
家主 安右エ門	増次郎
	請人 重左衛門
武州榛沢郡中瀬村へ参り申候	
大屋 喜右衛門	弥七 戌休
	請人 勝右衛門
上州勢多郡前橋本町へ参り申候	
大屋 庄次郎	伝三郎 戌休
	請人 重左衛門
上州勢多郡苗ヶ嶋へ参り申候	
大屋 久右衛門	三郎兵衛
	請人 勝右衛門
同国同郡苗ヶ嶋村へ参り申候	
大屋 久右衛門	庄蔵
	請人 彦四郎
上州勢多郡苗ヶ嶋村へ参り申候	
大屋 久右衛門	善次郎
	請人 善兵衛
上州勢多郡苗ヶ嶋村へ参り申候	
大屋 久右衛門	兼太郎
	請人 達右衛門
	江戸稼 勝兵衛

〆人数拾老人 内老人江戸稼
 右の通り吟味仕り少も相違御座無く候 以上
 萬延二辛酉年 正月

荒町村 組頭 徳重 (戌 金太郎)
 同断 善太郎
 代判 庄左衛門
 名主 甚三郎

荒川瀬兵衛様
 上州新田郡大田宿へ参り申候

大家 安右衛門

長五郎

受人 善兵衛

上州勢多郡苗ヶ嶋へ参り申候

大屋 久右衛門

兵三郎

受人 利兵衛

戌の改 拾人 内老人江戸稼

文久二壬戌年 (1862年) 正月

(万延二年の改帳控に翌年文久二壬戌年の移動分を書き加えて、名主基三郎が覚としたものらしい。)

⑥ 他國稼御改帳 石切下書 (水上村)

文久三癸亥年 (1863年) 正月

名主 弥惣右衛門

他國へ罷出候請人の事

(前書省略)

石切稼ぎに罷り出で候者

一、武州玉郡五ヶ市宿

彦三郎

大屋 万兵衛

一、上州群馬郡高崎在

鷹蔵

西明村大屋下田吉右衛門

一、甲州山梨郡甲府魚町

喜十

四丁目白木屋庄八

一、上州群馬郡高崎在

勝三郎

西明村大屋下田吉右衛門

一、武州玉郡青梅宿

弥左衛門

大屋 高田屋長兵衛

一、武州玉郡五ヶ市宿

久治郎

大屋 万兵衛

一、居細工仕り候

新右衛門

拾七人 内半役老人

右の通り他国稼ぎの者老人成り共相違御座無く候。後日のため書き上げ仍って件の如し。

文久三癸亥年 正月

組頭 嘉治郎

同断 半左衛門

代判 甚右衛門

名主 弥惣右衛門

柿木三十郎様

(ここに至り、ついに武州玉郡五ヶ市宿と記載のある文書を発見して我々は声を上げた。それは、伊奈石工のルーツを信州伊那谷に求めた今回の旅の大きな目的の一つであったからだ。確かに伊那谷から五日市を目指して石工が旅立っている。このことは、伊奈石に刻まれた石工名から、とうに分かっていたことではあるが、こうして文書を目の前にする喜びはまたひとしおだ。横沢入の伊奈石にかける信州石工の心意気が伝わってくるようだ。

この上望むことは、大屋万兵衛、高田屋長兵衛、石工彦三郎、弥左衛門、久治郎などの名前を、五日市、青梅辺の古文書や石造物に見つけられることである。

それに、青梅宿と並んでいる、五ヶ市^{*}村ではない五ヶ市^{*}宿という表記にもひきつけられてしまった。この宿という文字には、当時、はるか信州の高遠の人々にまで五日市の隆盛の様子が伝わっていた事実が、確たる証として表現されていると思われるからである。

またこのことから、特殊な技術や特産物を通して、考えていたよりも深い交流が、両地間に存在していたのではなかろうかとも思えるのである。)

⑦ 石破^おり元祖(高遠石工の由緒書)

一、そもそも石破^おりと申す者は、かたじけなくも黄帝の時、御殿の庭に高さ五丈広さ十町餘りの大石有りて、天子を始め奉り臣下大臣いろいろ評定遊ばさるといへども詮ずる方なし。其の時いづくともなく大鳥飛び来たりて、口ばしを以て五つに打ち破^おりて飛び去れり。

夫より鳥のくちばしをまなびて矢とノミとを作り、鳥の頭^{かしら}をまなんで玄能^{げんのう}と槌^{つち}を作れり。夫より唐土の石細工生まれり。之に依り石屋には天子より官位を下され、日本の五位の官位の内なり。さるに依りて職人第一の上座たるべき者なり。

さて又、日本は国常立^{くにとこだちのみこと}の尊より天神七代始り、いざなぎ、いざなみ、地神五代は、天照皇大神、天^{あまの}の御銚^{おんぼこ}を降し給うに陰陽の精は和合となり給うところ石となる。その時日本は浮嶋^{うきしま}なるとて、日本春日大明神、要石を打ち給うより石細工生まれり。神代より伝わり、人皇始まり目出度き御代となりて、欽明天皇の御代に聖徳太子は佛法を志し給う。衆生^{しゅじやうせいど}済度(佛が、衆生を迷いの苦海から救済すること)のため、津國に天王寺を御建立遊ばされ、其の時唐土より百濟國^{くだら}へ天下り給う。

ノミ、玄能を以て舗装敷盤を破り出し、夫より諸人教え給う。今に至りて石細工の職人に伝わり給うなり。天子たる聖徳太子の御弟子なれば出家と石割は職人の中の上座たるべし。軍陣に向いて石自由は石細工人に過ぎたる事なし。城の用意武家の助けとなり給う。其の外、禁中御用、

公郷宮殿ことごとく神佛御建立に至る迄、石細工たるべし。是日本には春日大明神要石を打ち給うに依りて、鎌足大臣より藤原氏を給わり、職人の上座たると云えり。

御書言

一、石細工の職人は、日本は申すに及ばず、浦々嶋々山嶽々迄も、滞り無く石細工の商賣仕る可きものなり。

一、此の書、頼朝公より給わるといへども、本書消失す。

然る処に御代代々續き渡り、石工の職人は日本國中滞り無きものなり。

一、右前書の通り御朱印^{これある}之有ものなり。

文治三歳（1187年）五月十一日

藤原姓屋

信州高遠郷藤沢

松倉村

向山善左衛門

出子全氏

（これは信州高遠石工の由緒書の写しである。江戸期、高遠からは多くの名石工が輩出され、彼等は日本全国に足跡を残した。彼等は他所への入国に際し、また石工の職を得るに当り、自らの手で書き写し携えて行ったこの由緒書を示して、その身元を明らかにしたという。

巻紙にしたためられたその内容は「信州高遠石工は、その昔、天から石細工の技を伝授され、天子から職人の中でも最高の位を賜り、日本国中くまなく石細工を広めよとの御朱印状を授かった」というものである。

彼等は、この由緒書通りの仕事に誇りと自信を持って、どこ土地へ行っても石細工の職に打ちこんだものと思われる。

現存している数通の由緒書の写しの一つを、春日先生からコピーさせていただいた。由緒書の元本は文も文字も正しく書かれたものであったろうが、何度もくり返し書き写されているうちに誤ったり変えられたりしたらしく判読し難い部分があったが、その部分は春日先生の御解釈を参考にした。）

3. 伊奈石工・高遠石工関係年表

唐澤 慶行

西暦	和暦	伊奈石・伊奈石工関係事項	その他関連事項	高遠・石工関連事項
637	舒明09		この年蝦夷反乱	
645	大化01		東国などの国司に戸籍作成、田の調査を命じる	
652	白雉03		班田終わる・戸籍作成	
663	天智02		白村江の戦日本大敗百濟滅亡	
666	天智04		百濟人2千余を東国に置く	
684	天武13		武蔵国に百濟人を置く(日本書記)	
689	持統03		防人の制はじまる	
701	大宝01		大宝律令つくられる	
716	靈龜02		武蔵国に高麗郡を置く	
721	養老05		国分(臣)寺建立の詔	
731	天平03		壺田永年私財法を公布	
741	天平13		東大寺大仏鑄造始まる	
743	天平15			
747	天平19			
794	延暦13		平安京に遷都	
795	延暦14		東国防人を廃止	
861	貞觀03		群盗により武蔵国郡ごとに梟非違使を置く	
884	元慶08		武蔵国畔切(阿伎留)神社、徒四以下を授かる	
939	天慶02		平将門の乱	
1152	仁平02	信州伊那郡の者12名武州伊奈の地に来住(岩走神社社伝)		
1158	保元03	伊那郡の者信州戸隠明神を分祀し岩走神社とす(同社伝)		
1180	治承04		源氏挙兵、平氏南都焼打	
1186	文治02		大悲願寺観音堂、平山季重創立(同寺日記)	
1191	建久02			黒河内藤沢の庄年貢未進につき頼朝から催促される
1195	建久06		このころわが国石工の始祖伊行末南未より渡来	
1205	元久02		東大寺再建供養	
1211	建暦01		「喫茶養生記」成る	
1272	文永09		大悲願寺三世秀海没後無住約100年間廃寺状態	駒ヶ根市北下平観音寺十王像(玄武岩)銘

西暦	和暦	伊奈石・伊奈石工関連事項	その他関連事項	高遠・石工関連事項
1291	正応04	五日市現存板碑の上隈（青石・養沢竹縄家）		
1333	元弘03		戸倉光厳寺開創（同寺由緒書）	北条高時の子時行諏訪に逃れ伊那藤沢刃にかくれる
1334	建武01			
1338	暦応01	旧増戸村役場跡伊奈石五輪塔39基・宝篋印塔9基の上隈		高遠桂泉院の梵鐘、下伊那開善寺にて鑄造／このころ諏訪氏分流信員高遠城主となり高遠氏の祖となる
1355	文和04		四代澄暹、大悲願寺を再興	
1360	延文05			
1396	応永03	五日市現存伊奈石板碑の上隈『五日市町史』		
1409	応永16	旧増戸村役場跡（塩地藏堂）伊奈石板碑10基の上隈	鎌倉公方持氏武州南一揆に甲州凶徒討伐を命ず	駒ヶ根市東伊那大久保運台場宝篋印塔（花崗岩）銘
1413	応永20		上杉禪秀の乱おこる、南一揆出陣	
1415	応永22		南一揆、持氏より年貢免除の恩賞をうける	
1416	応永23		持氏、南一揆に禪秀の与党を討たせる	
1417	応永24			
1418	応永25			
1419	応永26			
1421	応永28		南一揆、上杉憲実より結城合戦参加要請を受く	
1440	永享12		南一揆、瀬谷原で足利成氏を襲う	
1455	康正01		大悲願寺古鐘の銘小宮中務沙弥憲行	
1461	寛正02			
1479	文明11	旧増戸村役場跡（塩地藏堂）伊奈石板碑10基の下隈		高遠の諸族と諏訪の諸族争う 三義遠照寺廻口、美濃国高山天神宮で鑄造
1482	文明14			
1483	文明15			三義遠照寺の釈迦堂内多宝塔造立
1486	文明18	旧増戸村役場跡出土の伊奈石宝篋印塔9基の下隈		
1494	明応03	五日市現存伊奈石板碑の下隈（北伊奈松岩寺）『町史』		
1502	文亀02			
1504	永正01			
1505	永正02			
1510	永正07		南一揆、上杉憲房に属し権現山に北条早雲囲む	辰野町入沢底稲荷社下道祖双体像（安山岩）銘
1519	永正16			辰野町川島瑞光寺無縫塔銘
1520	永正20	旧増戸村役場跡出土の伊奈石五輪塔39基の下隈		

西暦	和暦	伊奈石・伊奈石工	伊奈石工関連事項	その他関連事項	高遠・石工関連事項
1535	天文04				山梨市窪八幡神社石橋奉納（神社本記）高遠石工銘
1542	天文11			後北条氏、阿伎留神社に1500貫文の社領を寄進	武田信玄、高遠頼継と通じて諏訪頼重を討つ
1545	天文14			北条氏康、河越の夜戦で上杉軍を破る	信玄、杖突峠から攻め入り高遠城主頼継を追う
1546	天文15			大石定久（道俊）小和田の広徳寺領を安堵する	信玄、高遠城を大改修する（現在の城郭）
1547	天文16			北条氏照、戸倉の宮本称直職を安堵する	
1551	天文20			北条氏照、青梅の三田氏を滅ぼす	
1559	永禄02			「五日市」の名称上限（大久野佐久間家文書）	
1561	永禄04			後北条氏、領下に動員準備を指令	武田勝頼高遠城主となる
1562	永禄05				
1574	天正02			6月八王子城落城、8月徳川家康江戸入府	織田信忠高遠城を攻める／保科正直信城主となる
1582	天正10				
1587	天正15				
1589	天正17	八王子西笑院内田家伊奈石五輪塔銘			
1590	天正18	八王子城跡出土伊奈石挽き白片一上白3下白2／こぼれ目			
1600	慶長05				
1617	元和03			伊奈村、五日市村の市立中止訴願	関ヶ原の戦、保科正光家康に属し高遠城主となる
1636	寛永13			このころ秋川の筏漕い行われる（高尾家文書）	将軍秀忠の命で家光の弟正之を正光の養子とする
1653	承応02				保科正之奥州最上に、鳥居忠春最上より高遠に移封
1654	承応03				
1663	寛文03			三田領・小宮領伐師、日野領15村の妨害に出訴	藩主忠春の暴政に苦しむ農民数千人が天領へ逃散
1678	延宝06			伊奈村石工第1回門開21人（大福、宮沢、石川家文書）	忠則藩主、領地伊那郡75村・筑摩郡19村3万2百石
1681	天和01			土屋勤兵衛、阿伎留神社へ伊奈石灯籠奉納	藤沢御堂垣外宿整備され伝馬賃銭となる
1690	元禄03			山田瑞雲寺参道地藏銘匠人信州高嶋住小兵衛友右衛門	松代藩主真田氏、高遠領内総検地3万9千余石
1691	元禄04				内藤清枚3万3千石で入封、高遠城主となる
1694	元禄07				高遠石工由緒書一石碓元祖根本之巻（文治03）写す
1704	元禄17				高崎市付近で元禄年代より高遠石工活動を始める
1706	宝永03				
1712	正徳02				
1713	正徳03				
1714	正徳04				
1722	享保07				幕府大奥の大年寄松島、高遠へ遠流

西暦	和暦	伊奈石・伊奈石工関連事項	その他関連事項	高遠・石工関連事項
1727	享保12			高遠勝間竜勝寺聖観音、安右門彫刻
1729	享保19		静岡県芝川町本門寺石灯籠高遠石工銘	
1735	享保20		伊奈村惣家数211軒(多摩郡伊奈村差上帳) 炭雲上徴収始まる、五日市に炭雲上改番所設置	
1737	元文02	横沢村石臼運上新設 永35文×5名分=175文/石工10余人	大悲願寺24世如璣「横澤村図」作成	高崎市付近の高遠石工活動、宝曆～文政最盛
1746	延享03	伊奈村石臼運上新設 永35文×18名分=630文/石工40余人	大悲願寺24世如璣活字を作って版本を印刷	高遠藤沢郷石切人数21人(20～60男人口の50%)
1750	寛延03	伊奈上村普門寺伊奈石庚申塔廃棄一件(大悲願寺文書)	東京都町田市大泉寺石祠(七沢石)高遠石工銘	高遠藤沢郷石切人数25人(20～60男人口の58.1%)
1752	宝暦02	高尾村法光院川除岩売却一件→信州石工(大悲願寺文書)		高遠藤沢郷石切人数34人(20～60男人口の113.3%)
1760	宝暦10		五日市大火/養沢村、伊奈村へ炭出荷を企てる	
1767	明和04		松原村炭雲上の村請を嘆願	
1768	明和05		多摩川・秋川の筏年間5070枚	
1770	明和07		松原村・養沢村、五日市以外への炭出荷を訴願	坂本天山郡代となり木曾駒ヶ岳に登り勅銘石を刻す
1768	安永05	伊奈村石工第2回門開20人(大福、宮沢、石川家文書)	伊奈村惣家数209軒(伊奈村宗門人別書上帳註)	
1774	安永08		松原村、五日市市場の不買運動を起こす	
1778	安永07			
1778	安永07			
1784	天明04			
1797	寛政09	伊奈村石工第3回門開39人(大福、宮沢、石川家文書)		
1805	文化02	横沢村名主孫左衛門が村内石山の石を三内借宅の信州石工へ売却しようとして大悲願寺住職慈明と対立(慈明日記) 大悲願寺長屋門石橋竣工、石工高遠松倉一ノ丞(同) このころ横沢村方石工は庄兵衛1名		
1808	文化05	三内帯在信州石屋和介・繁八等網代入会山採石開始(慈明日記)		藤沢、三好産の石灰を諏訪地方へ移出始める
1808	文化05	五日市百姓市兵衛網代散地の石工商売申請『網代家文書』		美濃の陶工を呼び、勝間河原の窯で高遠焼を始む
1812	文化09			山室石工北原佐吉東海道由比宿桃源寺七観音を造る
1814	文化11			塩供石仏師守屋貞治高遠建福寺・桂泉院の石仏彫刻
1815	文化12	三内石材店先祖孫七氏誕生(孫七氏の代に信州石工帯在)		高遠藩財政窮乏し、百姓一揆(興津騒動)起こる
1820	文政03			
1822	文政05	日の出町宗綱寺平井無刃墓石供養塔(伊奈石)高遠石工銘		
1828	文政11			
1830	天保01		五日市大火	
1831	天保02		松原村、五日市市場に対し不買運動	高遠藩、産物会所を建て産業振興を計る
1832	天保03			

西暦	和暦	伊奈石・伊奈石工工関連事項	その他関連事項	高遠・石工関連事項
1833	天保04		秋川市正勝神社水鉢(安山岩) 高遠石工銘	高遠大火、この年飢饉、殿坂にお救い小屋を建てる 美濃の紙漉工を招き、笠原・芦沢の農家紙漉を始む
1834	天保05		小宮領役出高、年間2743枚	
1836	天保07		おさかき(蔵置) 商売門開一札(河野家文書)	高遠藤沢郷石切人数 241(作間6) 石切目付手控
1842	天保13	大悲願寺仁王門右脇地藏石工銘 田野倉藤兵衛		高遠藤沢郷石切人数 243(作間3) 石切目付手控
1843	天保14	網代禅昌寺高遠石工の墓石銘 信州高遠北原村俗名伊藤國藏		高遠藤沢郷石切人数 239(作間3) 石切目付手控
1845	弘化02		ペリー浦賀に入港/幕府、品川沖に砲台施工、 予定11か所完成5か所、人員2千人動員	高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1847	弘化04	伊奈岩走神社秋紅翁之碑石工銘 伊藤信吉		高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1850	嘉永03		武州農兵取り立て/水上村石工1 青梅宿に出稼 多摩地区の米価三倍に騰る	高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1852	嘉永05	田野倉石材店先々代田野倉藤兵衛氏大悲願寺水鉢作製		高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1853	嘉永06	小中野子生神社自然石洗手鉢銘 香具方世話人高水佐右衛門		高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1857	安政04		打毀五日市襲う/秋川谷放年20万2千俵余出高	高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1859	安政06			高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1860	安政07			高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1862	文久02			高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1863	文久03	高遠水上村石工彦三郎・久治郎、五日市大屋万兵衛方出稼		高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1865	慶応01			高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1866	慶応02			高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1869	明治02		秋川流域村々に公立学校開設(観能学舎発足)	高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1872	明治05		西多摩郡役所青梅に開設	高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1873	明治06		11月五日市町となる(神奈川県布達)	高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1876	明治09	星竹善光寺二十三夜塔世話人黒山儀三郎田中銀蔵石工同人		高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1877	明治10	田野倉藤兵衛氏国内勲業博覧会で大久保利通より賞状受く 戸倉726小峰家三日月供養塔銘石工星竹寺向願主小峰豊吉		高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1878	明治11		千葉卓三郎ら五日市憲法草案作成	高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1879	明治12			高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1881	明治14			高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員
1882	明治15	秋川市菅生菅生高校入口道標横沢村石工田野倉藤兵衛氏銘		高遠藤沢郷石切人数 228人中 100人御台場普請に動員

西暦	和暦	伊奈石・伊奈石工工関連事項	その他関連事項	高遠・石工関連事項
1888	明治21	小庄阿伎留神社灯笼銘石工三内村小峰孫七		
1889	明治22		増戸・三ツ里・明治・戸倉・小宮の各村誕生 甲武鉄道、新宿-八王子間開通	
1893	明治26		三多摩東京移管、町長役場を閉鎖して反対 青梅鉄道、立川-青梅間開通	
1894	明治27		五日市乗合馬車、五日市-八王子平岡町開通	
1895	明治28	養沢熊野神社灯笼銘石工小峰孫七	五日市銀行開店	
1896	明治29			
1897	明治30	乙津神明社灯笼（右）銘石工三内小峰孫七		
1907	明治40		戸倉村優良村として内務大臣より選奨される	
1912	大正01	戸倉三嶋神社安山岩灯笼銘増戸村字三内石工岸繁蔵	五日市郵便局電話業務開始	
1916	大正05	三内石材店先々代茂蔵氏（1856～1928）大正時代に今の日の出団地付近より火薬を使用して伊奈石採石、墓石等作製	秋川水力電気会社設立、電灯ともる	
1920	大正09		五王自動車営業開始/厚木市七沢石産出最盛期 関東大震災	
1923	大正12		五日市鉄道、五日市-拝島間開通	
1925	大正14			
1934	昭和09	田野倉石材店先代田野倉石之助氏大悲願寺報恩塔作製		
1936	昭和11			現国会議事堂竣工中央上部高遠石工造作（春日談）
1937	昭和12	～昭和15年田野倉石之助氏天竺山下で採石搬出、石臼作製		
1940	昭和15	戦中増田組が横沢入より骨材としてズリ搬出、野口氏従事	秋川水電、東京電燈に買取される	
1941	昭和16	終戦前横沢入に陸軍物資用防空壕20余掘削（野口氏談）	五日市鉄道、南武鉄道に買取される	
1945	昭和20	田野倉石材店当田野倉政雄氏大悲願寺報恩塔作製	戦後しばらく石臼の利用増	
1984	昭和59			

【参考文献】父が語る五日市人のものがたり（石井道郎1994）大悲願寺日記上下（五日市町郷土館1983、4）伊奈石のあらまし（下島 彬 多摩のあゆみ44号）五日市町史（1976五日市町）山里に花開く高遠の石工（春日太郎1990）高遠町誌（高遠町誌編纂委員会1983）伊那谷の石仏（竹入弘元1976）信州高遠の史跡と文化財（高遠町教育委員会）石臼の謎（三輪茂雄）白（三輪茂雄）日本史辞典（高柳光寿・竹内理三編1994角川書店）多摩郡伊奈村“石工門開き”一件（承前）（片山述夫1971武蔵野50巻第2号）

XI 伊奈石雑感

下島 彬

伊奈石雑感

石工たちは、高遠にしろ、伊奈にしても、みな集団をつくるものらしい。それは石材の産出地の関係なのか、技能を継承していくためなのか、あるいは重量物運搬のために協同作業が必要のためなのか。

次によく判らないのは伊奈の石工たちの突然の廃業（門開き）の理由である。『五日市町史』では安政9年(1797)11月に残っていた39人全員の廃業を最後として、それまでの2回にわたって廃業して来たものたちと合計81名が廃業した。これだけの人数の廃業は現在でもかなりショッキングなことである。原因は需要の減退、良質の原料石材の不足、ライバルの出現だという。それだけだろうか。

第3に伊奈の石工たちの出現もはっきりしない。伝承では正一位岩走神社は仁平2年(1152)伊那郡の住民が移住し、戸隠大明神を勧請したのが始まりであるという。伊那よりの移住者は12名であるが、石工がどうかは明らかでない。戸隠神社は岩の伝説を持つ神社である。

岩と言えば、古来石と樹木は神の依り代とされて、信仰の対象ともなった。大悲願寺の裏山の横沢と三内の境の山頂には、三内神社がある。石は石器、縄文時代には生活の必需品としても尊重されて来た。

伊奈石研究会の研究テーマの一つである伊奈石のシェアは会員たちの努力で大変明らかにされて来た事は有難い事である。

私の住む八王子市打越町から野猿峠を越えて由木村へ入ると、相模川沿いの石工たちの石造品が散見される。絹の道で有名になった八王子市鎌水の八木下要右エ門屋敷跡（現絹の道資料館）の石垣は石垣大尽の名称が残っているように立派なものであったが、伝承によれば厚木在の七沢石を馬の背につけて運んだという。資料館の建設に当たって石垣は積み換えられた。隣の相原の諏訪神社の常夜燈は相州の石工銘であった。石工たちには縄張りがあったのだろうか。

滝山城跡本丸の北隅に祀ってある金比羅神社は江戸期に秋川を下る筏師たちが主になって航行の安全を願い、周辺の村々の人と一緒に建てたものようであるが、東側より上る98段の石段は伊奈石であった。昨年(1994)3月廃墟となっていたのを建替えた時に石段も新しくしたので、伊奈石の石段はなくなった。僅かに下の入口の敷石となっているのが伊奈石ではないかと思う。前の伊奈石の石段は筏師たちが伊奈より秋川を筏で運んだものであろうか。

さて伊奈石の石造品としては板碑、墓石、石臼が主なるものであるが、その他には、石祠、敷石、石段、石橋、手洗石、土台石など見られるが、珍しいものや古いものの発見を期待する。

伊奈石調査に参加して

秋川の自然に親しむ会 船田 雅男

横沢入の里山的自然を、開発の手から守るための詳細な資料の蓄積を目的とした調査が始められてから間もなく、開発予定地域内に規模の大きい伊奈石の採石・加工場跡地が発見されたことは、横沢入の自然環境保護活動上、自然の豊かさのみならず、歴史的重要性をも添加したと言う点に於て、意義深いものでした。

仕事の都合上、調査に参加できたのは、往時の石材搬出路や垂直な採石場跡地、一次加工場周辺から谷に向かって形成された膨大な砕石屑のズリ斜面などの確認をおこない、これらを覆う夏草や藪の刈り払い作業を実施した際ぐらいでしたが、従来動植物だけを調査研究の対象にしてきた身にとって、著しく啓蒙的な体験でした。ご指導下さった十菱、樽両先生に深く感謝申し上げる次第です。

伊奈石のこと

秋川の自然に親しむ会 鈴木 和子

伊奈石という名前だけは聞いたことはありました。でもその石がどんな石でどのように使われていたかは、あまり知りませんでした。先に調査した人達に案内していただきました。

まず驚いたのは、採石した跡の大きな穴でした。今は水が底の方に溜っていましたが、石の屑は残っていました。石くずの中に切り出すために使った矢穴の型がついた石も見られました。

少し先に行ったところに大きな石が転がっていたので、引繰返して見ると臼を半分にしたような石でした。少し離れたところに同じような石があり、そばにいた人が引繰返してさきの石と合わせると一個の臼になったので、皆でおおよろこびをしました。

調査日が他のことと重なったりしてあまり参加できませんでしたが、その後あちこちで採石した跡などが見つかったようです。

こんなみじかな所に昔の人達の仕事のようにすが見られるなんて楽しいですね。

伊奈石のズリは生物の宝庫

秋川の自然に親しむ会 大森 雄二

伊奈石の調査のとき、何気なく伊奈石を持ち上げたらガロアムシがいた。氷河期の生き残りと言われるだけに冬にも拘らず、素早く動いていなくなりました。

大正の頃、フランス人の外交官のガロア氏が見付けたのでガロアムシと名づけられたと言う。同じガロアムシ科で長崎県だけにしかないイシイムシは絶滅危惧種となっている。

イシイムシは石井さんが見付けたのだろうか？ ガロアムシは東京都レベルの貴重種で、JRの調査報告書にも出ている。その後、ガロアムシを見付けようと、作業場跡の伊奈石やズリを幾つもひっくりかえしてみたが、見付からず、ヘビ、カエル、ムカデ、ミミズ、ヤスデ、クモ、アリの巣など多

種多様な生き物が出て来て、ねずみなどの通路もあった。隙間の多いズリは生物にとっては住み易く、一つの生態系を作っていると言える。丘陵地にこのような所はめったにないため、よく探せば新種が見付かる可能性もある。

伊奈石雑感

小宮小学校 福田 教将

伊奈石で思い出す一番の出来事は、網代の山のやぶこき。雨降る斜面を、枯れ葉に足をとられながら少しずつ下りていく。少し傾斜が緩いところを、伊奈石のかけらを探してくまなく見て回る。膨大な量のかけらとほんの僅かな矢穴石。大物の臼を発見したときは欣喜雀躍。『おーい、あったぞー』の一声で汗に光る顔が集まってくる。数百年の時空を越えて、当時の石工にふと同化している自分の不思議な感覚。はたから見れば3Kを絵に書いたような作業は、実に歴史のロマンに満ちた過去への道程であった。

山に転がる石に何を物語らせるか。矢穴の大きさから、私たちは石切り場の年代と盛衰を知った。草深い遺跡の場所から、当時の搬出方法や作業工程を頭に描いた。石の組み方や積み方の違いから、江戸城の伊奈石工の活躍の舞台まで想像した。伊那谷の石工の歴史と伊奈。粉引き臼と江戸時代の農民のしたたかさまで、多くの生活文化の姿が苔むした伊奈石から解きあかされていくその痛快さは、名探偵ホームズなみであった。

貴重な体験をさせていただき、関係の皆様には深く感謝の意を表したいと思います。

伊奈石遺跡の現地見学会とシンポジウムに参加して

三内神社氏子 栗原 良一

去る4月1日に行われた石山の池遺跡～大悲願寺～五輪坂～亀の甲下川原石切り場遺跡の現地見学会、翌日増戸会館を会場として行われたシンポジウムに参加させていただき、たいへん貴重な勉強ができましたことを、主催者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

私は、石山の池遺跡の西側、天竺山の頂上にお祀りしてある三内神社（本社）の氏子の一人として、80年近い人生を農業一筋に過ごしてまいりました。ですから、石切り場遺跡の池も子どもの頃から知っております。本社からずーっと下にある三内神社拝殿前の石段、拝殿の裏山に鎮座する金毘羅様に至るまでの石段、また金毘羅様の木造社殿の格子戸から見える石祠。

これらの切り石の石段や石の祠は、みな本社東崖下の石切り場で採掘された伊奈石が使われているものと思います。樽先生の現地でのお話によりますと、この石切り場は今から250年以前に採石作業が行われたとのことでした。

私が子どもの頃の三内部落の戸数は、僅か19戸。石切り作業が行われていた江戸時代中期前後に、数少ない氏子の力では到底できるものではありません。それでは一体どのような人たち・どんな力

(後ろ楯)で行われたのでしょう。

樽先生のお話では、五日市町周辺にも活断層が何本も通っているとの事。もし直下型の地震でも起きて石段が崩壊してしまったら、復旧費だけでもたいへんなことでしょう。こんなことを考えてみるにつけ、何百年も前に立派な切り石の石段や祠が集中的に造られていたということについての真相の解明を、是非どなたかにお願いしたい気持ちで一杯です。

これら三内神社の石段や石の祠は、過日現地見学した大悲願寺門前の石橋や境内の井戸枠、旧家の墓地の五輪の塔、あるいは大悲願寺歴代住職の墓地等と共に、誇りうる伊奈石遺跡群として保護し、後世まで語り伝えるべきものではないでしょうか。

4月2日に増戸会館で行われたシンポジウム会場には、非常に大勢の人たちが集まりました。南側の窓辺には、『伊奈物語』作者中村清作氏の、往時を想わせる石工たちの作業風景その他の絵画、石臼その他の石造物、石切り場付近で発見した石造物半製品等も展示されており、たいへん参考になりました。

午前の部としては ——

- 伊奈石と地質 …………… 樽 良平先生 (地質学者)
- 伊奈石石切り場遺跡のようす …………… 十菱 駿武先生 (山梨学院大学教授)
- 石工文書と大悲願寺 …………… 石井 道郎先生 (郷土史家)

午後の部 (シンポジウム) としては ——

- 伊奈石石造物の分布 …………… 伊奈石研究グループ
- 石 臼 …………… 三輪 茂雄先生 (同志社大学教授)
- 石工加工技術と矢穴 …………… 北垣聡一郎先生 (榎原考古学研究所)
- 高遠石工と石仏 …………… 春日 太郎先生 (長野県郷土史家)
- 各地の石切り場 …………… 十菱 駿武先生 (山梨学院大学教授)

どの先生のお話も私たちにとっては耳新しくまた興味深いお話で、時のたつのも忘れて聞き入りました。たいへん有意義な1日でした。

この2日間で学び得たことは、私たち常日頃仕事に追われるまま覗いてもみられない分野のことで、いろいろ研究をされておられる方々が大勢いて、古代の人々の生きざまや遺跡、遺物等を解明し、歴史上大切なこれらのものを必死に守ろうと頑張っておられることを痛感しました。

そして最後に、自然の生態系の宝庫ともいえる横沢入をはじめ、秋川流域の自然を少しでも長く乱開発から守りたいものと考えます。

<追記>

参加者からの寄稿を依頼されました機会に、過日の現地見学会には先生方に見ていただけなかった『三内神社の石段』構築への疑問について書かせてもらいました。なにとぞ後日折がありましたらご調査願いたいと存じます。これは、私 (および氏子衆) が長年抱きつづけてきた疑問です。

家・仕事のルーツ

三内石材店 岸 伸恵

私の嫁いだ先が石屋だったのでそのルーツなどを勉強してみようと思ったのは、ある新聞で伊奈石研究シンポジウムが開催されるのを知り参加したのがきっかけでした。

この家の4代前の先祖“繁蔵”という人は信濃国伊那郡高遠藤沢郷、現在の長野県上伊那郡高遠町藤沢から来ています。また、それ以前の先祖も高遠からたびたび出稼ぎに来ていました。

何故こんなに遠く離れた場所まで石工として来ていたのか、私はずっと疑問でした。しかし、今年の4月1日増戸会館で行われた講演会で、高遠の郷土歴史家＝春日先生の話では、高遠藩は小藩で耕地が少ない上良質の石切り場も少なかったため、藩の税収を確保するために、農業の片手間に石工の出稼ぎを奨励していたということが分かりました。また石工の稼ぎ高に運上金をかけたとも言われています。

そのことから、伊那の石工が全国に散らばり、例えば群馬県安中、東京では西多摩郡五日市町伊奈など各地に住みついたことにより、出身地の名が残って現在に至っています。高遠の石工はどこに行っても歓迎されていたのですね。

五日市町伊奈には、「江戸を築いた石工の宿場よ」と歌われた唄があります。往時、あれ程栄えた石屋が何故伊奈宿にないのでしょうか。その周辺には今2～3軒あることを考えると疑問が残ります。また、江戸城と伊奈の石工の関係がどの程度の関わりだったのか、その辺のことも知りたいと思っています。

伊奈は「伊奈臼」でも有名です。これも伊奈石を使って伊奈の石工たちが加工して作っていました。家の裏にある天竺山の頂に近い三内神社。その東側の所に石切り場跡があります。今年の4月2日に初めて見学させていただきました。その石切り場跡は、直径10m深さ7m位の“大きな穴”という感じのすり鉢状に石がえぐりとられていて、底は小さな池になっています。この池は250年前には既にあったということです。

ノミと槌で矢穴を開けた跡、運び出さないまま残っている石もそこには有りました。山は伊奈石の破片（ズリ）がたくさんあり、臼に加工した一部も残ったりしています。

矢穴を開ける時も、石の目を読みながらそれに沿って矢を入れないときれいには割れない。その為、石の割り方・石の掘り方が違ってくる。石工には高度な技術と経験が要求されます。

わが家では、大正時代末まで日の出団地の近くで、自分で火薬を作り伊奈石の鉋脈を爆破して掘り出していました。その後は、交通運輸の発達や品質の向上が求められる中で、伊奈石の価値が徐々に落ちていき、取り扱わなくなりました。

悲願寺の裏から天竺山にかけての山はズリがいっぱいあったので、東京湾埋め立ての際に、その一部をトラックに積んで持っていったということです。それほど伊奈石がとれたという証拠になると思います。

また、矢穴1つにしても、穴の幅で年代が分かるということ、山梨学院大学考古学の十菱先生が講義してくださいました。

シンポジウムに参加し勉強していくうちに、歴史の重み、伊奈石の広がり、先祖のこと、石工の道具などいろいろなことが分かり深さを増してきたように感じています。また、長野県伊那郡の「那」と五日市町伊奈の「奈」の字の違いはどうしてでしょうか。

わからないことはまだまだたくさんありますが、これからも自分なりに勉強していきたいと思っています。ありがとうございました。

伊奈石巡検に参加して

山田主婦 岡本 幸子

「横沢入」、幾度訪れても変わらぬ風景が今もそこにあります。

「空」・「風」・「火」・「水」・「地」が、織りなす風景。この丘陵地の中に伊奈石の岩脈があります。天竺山東尾根の壑坑。石臼や五輪塔の未製品。ズリ場とテラス。山腹にある石山池。山神社碑。岩盤に打ちこまれた「矢穴」の数々。かつて石工達の仕事場であったこの場所も、今はひっそりとしています。

この地区、中世には鎌倉街道が通り、十六世紀の後半には定期的に市も開かれていたと言う。

「臼は伊奈臼 新町小麦 ひけばひくほど粉がでる」と歌われた臼ひき歌。

切出しから成型・目立と、手先の器用な石工達が沢山いたことだろう。完成品は今の精密機械にも値するという。無駄のない理にかなった機能には脱帽するしかありません。自然も歴史も深い横沢入の魅力は尽きません。

伊奈石調査の感想

山梨学院大学考古学研究会 名越 恵志

“山中を駆けまわる”これが伊奈石調査の基本だと思うのは私だけでしょうか。

私がこの調査に初めて参加したときには、“山中を駆けまわる”だけで一日が終わってしまうようなことが多かったと思います。石を加工するためのテラス、採石跡、石臼の未成品、半製品など見つけ出すために山の中を踏査することがほとんどでした。さらに発見場所まで行くだけでも大変な労力を消耗するにもかかわらず、20kg位ありそうな石臼を背中にしょってハハハ言いながら山を降りてきたこともありました。

今度、この調査が一通り終了したわけですが、ほんの一部だけでも参加させて頂いたことは私の中で大きな経験となりました。また私達を指導して頂いた諸先生方には、この場を借りて、お礼を述べさせて頂きたいと思います。

いろいろ御指導ありがとうございました。

五日市の調査に携わって

YGU 考研 伊藤文次郎

私が五日市の伊奈石調査に初めて参加させていただいたのは、1993年の春、大学一年次の春であった。五日市は最初の印象が強烈で、とてもここが東京都とは信じられなかった。私はこの調査を通して、遅まきながら石、特に石造物に注意を向けるようになった。そのおかげで、考古学に関しても自分のなかでハバが広がったように思う。そしてなにより、五日市の自然と皆さんの自然に対する真摯な心にふれ、自然に対してやさしくなれたと思う。その点でも、この調査に参加させていただいて非常に感謝している。

最後に、今回の調査結果の成果が、五日市の自然にとって良い選択となるように願わずにはられない。

伊奈石調査を終えて

YGU 考研 北嶋 宏一

「昔の人は苦勞したんだな。」と身に染みて感じたのは、伊奈石製の石臼を採集に山に入った時であった。普段は人が入っていかないような高尾・網代山奥に伊奈石の採石場があり、そこにかつての石工達によって加工された石臼未製品が転がっていた。

そこまで来るのでさえ大変であったのに、帰りは石臼を持って降りるのである。自分も担いで降りたのだが、重さが30kgはあろうかという石臼は、腰が砕けるのではないかと思ったほどだ。

調査を通じて、自分はこの伊奈石のザラザラ感が忘れられなくなってしまった。機会があれば次も是非調査に参加したい。

伊奈石の石造物には何か暖かさが感じられる。石に柔らかさがあるし、石臼を見てもその当時の生活感が表れている。今後この伊奈石遺跡群と石造物が文化財として保存され、みんなが触れ合って行けるようになって欲しい。

五日市の伊奈石の感想

YGU 考研 小宮山博彦

私が伊奈石調査に初めて参加させていただいたのは1994年5月3日のことでした。この調査に参加する前に、五日市の山歩きをして石臼やテラスを探すときいていました。今までこのようなことを経験したことがないので、「東京に行くのだから」と軽い気持ちで行きました。実際歩いてみると、私の住んでいる甲府盆地よりずっと山奥で、城山沢や高尾山の急斜面は、とても足場が悪く自分の想像を超えていることを知らされました。

その日は石臼を持ち帰った日でした。普通に歩くだけでも大変な道でしたが、石臼を交代で担ぎ、汗と泥にまみれながらやっと秋川南岸の道路にたどりついたのが、とても印象的でした。

この調査に参加させていただいて、伊奈石や石造物等を学ぶことができました。とてもおもしろく勉強になったと思っています。そして諸先生方には、多くのことを教えていただきました。私にとって、伊奈石調査は一生忘れられない思い出になりました。

調査を終えて

YGU 考 研 綱 島 勝 利

私は伊奈石研究グループ1994年度末調査に参加させていただきました。9日間の連続調査は、樽良平先生の別宅にYGU考研の仲間と合宿し、石造物の調査の為、大田区や江東区、港区といった寺院や神社を廻りました。調査に廻らない日は、別宅で石臼や矢穴石の実測・写真記録・トレース作業を行っていました。

調査の為、寺院などを地図を片手に探し歩いていますと、目的の寺院が灰色のビルになっていて過去の石造物が1つも無い所や空襲により、石造物が焼かれてしまい昭和前の墓石が1、2個しか残っていない所もありました。最近建てられた寺院は、建築基準法により昔風の木造建築ではなく、鉄筋コンクリートで作られたものになっていて、建物に冷たい感じを覚えました。今回の調査で感じた事は、都市の発展と共に古いものは壊されていくという、ごく普通のことです。しかし、自分たちの住んでいる傍から過去の物が消えていくというのは寂しいことだと感じます。現代の建物や町の空間のなかに、昔からの石造物や木造の寺院などを残していくということが、大切な課題ではないでしょうか。

XII 各地の石切り場遺跡と石工

十菱 駿武

石切り場については西日本で民俗学・考古学分野の調査例が多く、長崎県大瀬戸町石鍋ホゲット遺跡、香川県小豆島大坂城丁場、兵庫県高砂市龍山石、大阪府阪南市和泉石、滋賀県伊吹町曲谷石、福井県福井市越前笏谷石、長野県高遠町高遠石、静岡県伊東市・戸田町伊豆石、神奈川県厚木市・伊勢原町七沢石、東京都五日市町伊奈石、群馬県笠懸町天神山石などがある。このうち調査報告書・文献により現地踏査できたものについて報告する。

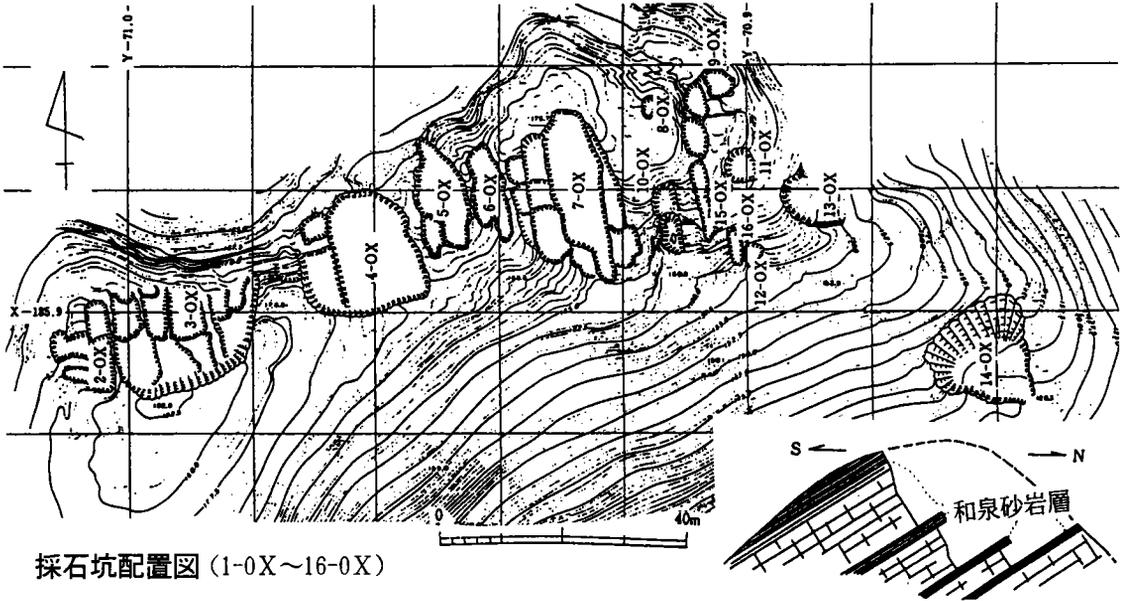
●和泉砂岩と泉州石工

大阪府阪南市周辺の阪南丘陵に分布する中生代白亜紀の和泉層群の砂岩部層を和泉砂岩という。青白色で細密・硬質の和泉砂岩は和泉層群に塊状に堆積し、海岸部に近く和泉砂岩が分布する阪南市箱作、黒田が代表的な産地である。江戸時代の「和泉名所図絵」では、和泉石の特産地として和泉国島取荘と箱作村をあげ、石臼・石碑・灯笼が多く作られていることを和泉石匠の図とともに掲げている。この阪南丘陵一帯が関西新空港の採土地として選ばれ、丘陵尾根部に残された阪南市箱作ミノバ石切り場跡が、1985～1987年に(財)大阪府埋蔵文化財協会によって緊急発掘調査された。

ミノバ石切り場跡では、標高170m、幅20～30mの痩せ尾根の約4,000㎡の調査範囲に、採石坑13カ所と石材加工場21カ所が発見された。採石坑は直径5～30m深さ4～14mの、半円形や溝状の堅坑になっており、和泉砂岩塊の良好な石材を、30度以上の急勾配をなす尾根をえぐって採石したもので、坑内には碎石と砂礫土が埋没していた。坑底や壁面には矢穴が連続して残り、屑石・コツパとともに石臼未成品などが多数出土した。採石坑の周辺部には面積3～10㎡の帯状に平坦な加工場所があり、10～20cm前後に切り出された石材が集積され、矢穴石・石臼未成品・鉄製工具が廃棄されて出土した。出土遺物は石臼・茶臼未成品193点、手洗鉢未成品15点、柱状石材28点、矢穴石材471点、槌1点、鶴嘴1点、先鑿2点、楔2点、矢26点、煙管3点である。矢穴は幅3.7～9.8cm深さ3～10.3cm、コの字状または舌状で、幅1寸の小型の矢と3寸前後の中型の矢を用いている。石工の工具は民俗例とほとんど変わり無い。さらに石臼の加工工程は荒加工から調整までの4工程を経ていることが、未成品の分析からわかっている。

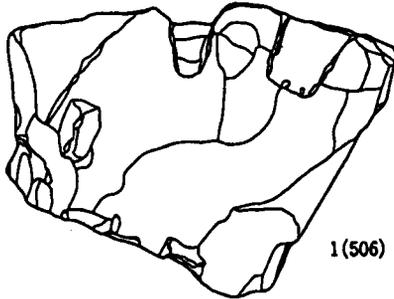
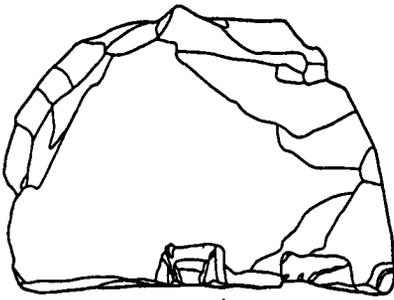
遺物の年代と、石工が居住した箱作飯ノ峯畑村の和泉石製墓石の年代から、ミノバ石切り場跡の操業年代は17世紀後半に始まり18世紀前半・中頃を最盛期にして近代昭和戦後までと考察された(岩崎・田中1988)。操業時期は採石坑内の砂層の存在が石切りの断絶時期を示すことから、おそらく冬季の農閑期に採石がされ、農繁期には兼業石工は農作業に戻る形態が想定された。そして150戸近い石工集団によって、箱作ミノバ石切り場や箱作細谷石切り場、箱作仏屋谷石切り場が操業されていた。また和泉砂岩製品の流通範囲は泉州地域に中世末から江戸時代までと推定されている。

江戸時代中期の美濃や信濃の石鳥居・石仏に「泉州箱作村石工」の銘文があり、中部地方にも和泉の出稼ぎ石工が来ていたことがわかっている（阪南町史編集委員会1983）。江戸前期の恵林寺武田晴信供養塔は和泉石工によって製作されている。稀少な江戸時代の石切り場遺跡の調査により、石切りの歴史復元に示唆されることは大きい。

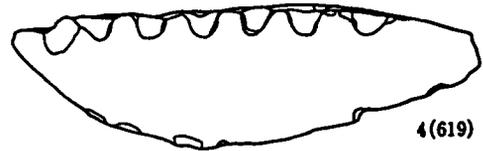
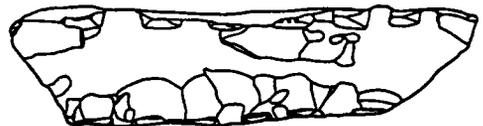
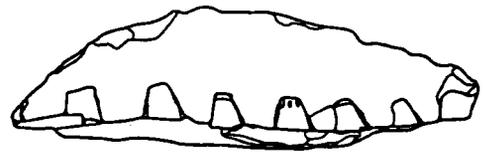


採石坑配置図 (1-0X~16-0X)

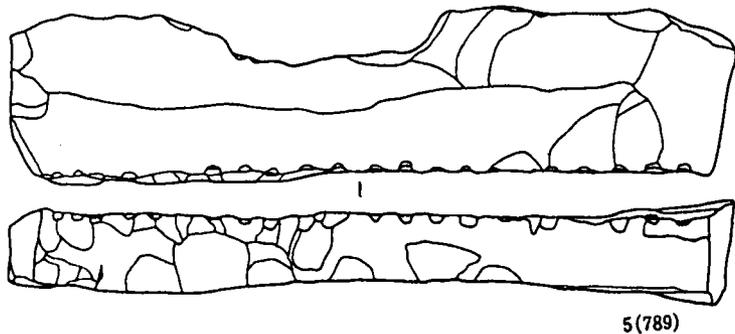
採石坑の模式断面図



矢穴石・中型

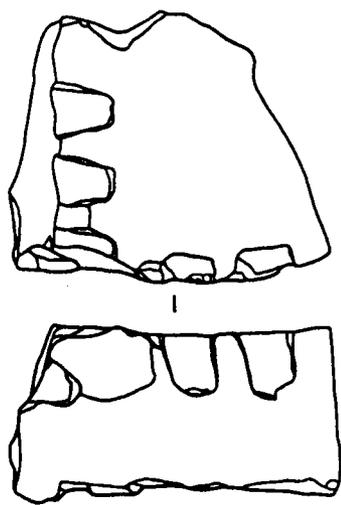


矢穴石・小型



5(789)

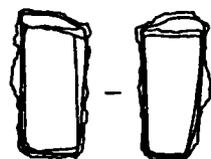
矢穴石・豆小型



9(370)

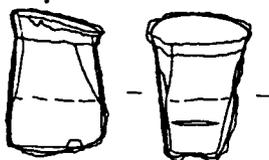
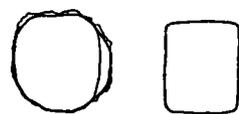


7-0 X 出土石製品



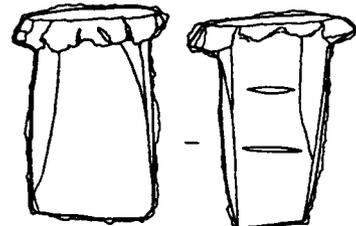
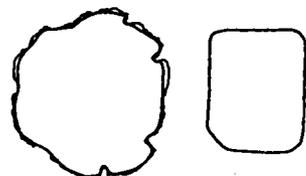
1(752)

マメヤ



2(891)

中型ヤ



8(877)

オオヤ

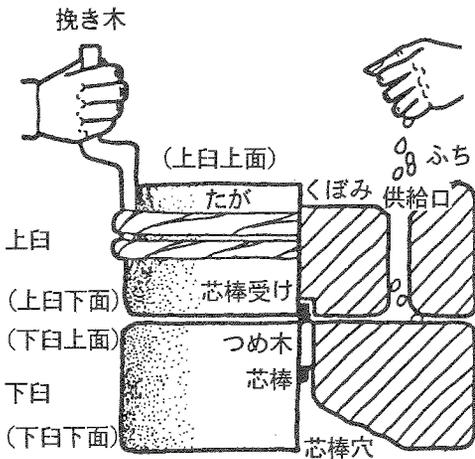


7-0 X 出土鉄製品

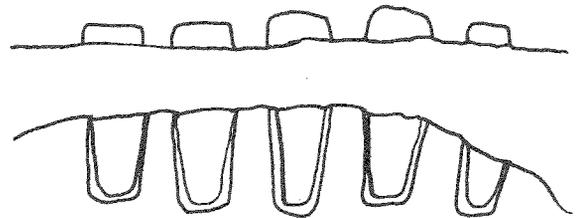
●曲谷石丁場と曲谷石工

滋賀県坂田郡伊吹町曲谷の姉川上流から伊吹山地に、「曲谷石」と呼ばれる黒雲母花崗岩（諸家花崗岩）が分布し、曲谷は中世以来石仏・墓石に使われ、近世から近代にかけては「曲谷臼」と呼ばれる特徴的な石臼が製作された石工の里となっていた（三輪1975・1978）。曲谷石の最古の石造物は、鎌倉時代末（1310年代）の阿弥陀三尊浮き彫りの板碑や、南北朝時代の宝篋印塔未成品が曲谷白山神社にあることから、曲谷の石材加工は鎌倉時代末に開始すると考えられている（高橋1994）。室町時代中期・後期には、曲谷石の組み合わせ式五輪塔・一石五輪塔・石仏が広く製作された。戦国時代になると、石臼が作られ始め、曲谷臼の形式ができる。

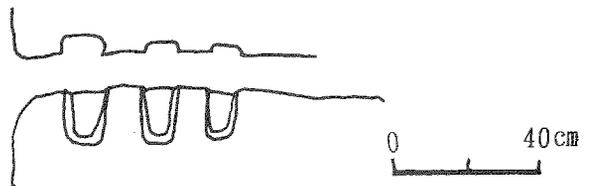
曲谷石の石切り場は曲谷集落から北へ3～4 kmの起し又川のサナギ谷（ミズガタニ）、寺谷の岩イ谷に点在している（伊吹町史1994図）。町史編纂室福永円澄氏の教示により、曲谷集落の石臼生産遺跡や石造物・石垣と寺谷の石切り場跡を踏査した。寺谷の岩イ谷とイモチ谷の沢には、花崗岩露頭から転石した石塊、矢穴をもつ円柱状の石臼未成品、矢穴の残る岩塊、石屋のテラスが残っている。5×3 mの巨岩に矢穴（16×8 cm深さ24cm U字形）が14個連続するものや、2.5×2 mの石に矢穴（9×6 cm深さ12cm U字形）三個連続するものなど、矢穴が大きく深いものがほとんどであった。このような矢穴の型状は江戸時代前期以前と推定され、古い時期の石臼工房跡とすることができる。石臼の工房としては、姉川の沢の転石を採取して石材とするのが普通であるが、急峻な山腹を切り出す露頭掘りもされていたようである。石切り場のテラスは数カ所認められるが、まだ町の文化財調査は石切り場までは及んでないため、石切り場やテラスの構造、デポ（石材置き場）の位置については未解明である。寺谷・起し又の現地は今、姉川ダムと林道工事によって開発工事中であり、曲谷石石切り場遺跡の十分な調査と保存が望まれる。



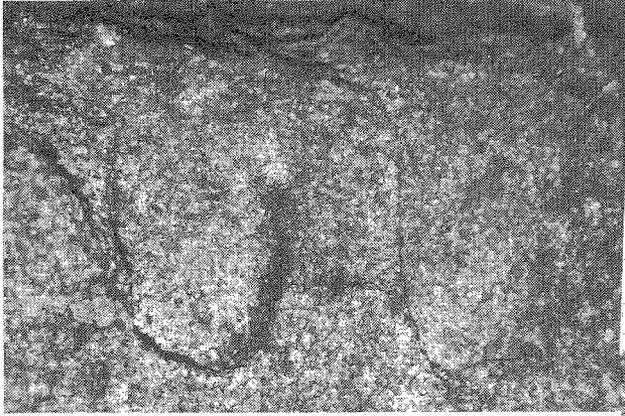
たが締め式の石臼



矢穴石見取図（幅16cm深さ24cm厚8 cm）



矢穴石（幅9 cm深9 cm厚6 cm）



岩イ谷の花崗岩巨石の矢穴



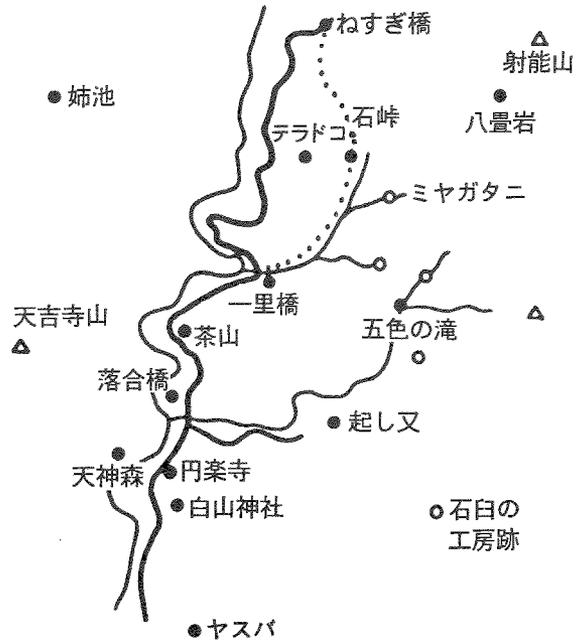
曲谷臼未成品の集積（曲谷集落）



曲谷石板碑（鎌倉時代・曲谷白山神社）



岩イ谷の石臼未成品
(矢穴幅 6 cm)



曲谷石分布図（伊吹町史1994）

●高遠石工

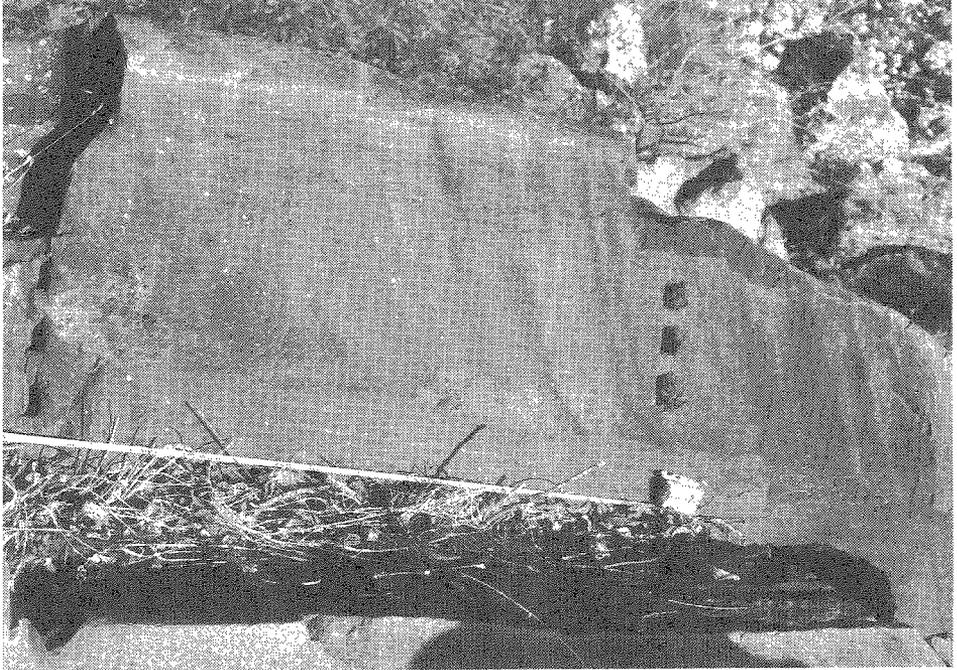
長野県上伊那郡高遠町を中心として、江戸時代中期に信濃国伊那郡高遠領藤沢郷・入野谷郷に多数の石工が輩出した。小藩で耕地の少ない高遠藩はこの高遠石工に旅稼ぎを奨励し、石工の稼ぎ高に運上金をかけた。文化文政期の石切り運上金は高遠藩の収入の大きな割合を占めた。また江戸中期には石仏・石塔の造立が流行し、都市・町・農村の庶民には石材の需要が増した。

高遠石工の起源については、鎌倉時代に大和国から相模国に来た大蔵派の石大工が、高遠藤沢郷出身の鎌倉幕府御家人藤沢清親のついで、南信伊那谷に入ったものと推定されている。私たちが春日太郎・竹入弘元氏の案内で実見した、駒ヶ根市下平の観音寺の十王像（元久2年銘・1204）や、駒ヶ根市蓮台場善福寺基地の宝篋印塔（応永22年銘・1415）重制六地藏石幢（応永28年銘・1421）は、石質が高遠の水上に産出する安山岩であった。諏訪・伊那に産出する砥川石を使っていることから、伊那の石工の歴史が鎌倉・室町時代にさかのぼることは確実にになった。また辰野町沢底入村の、日本最古の道祖神である双体道祖神（永正2年・1505 入沢底中銘）は同じ安山岩で作られており、中世の伊那地域では、高遠石より軟質で加工しやすい安山岩（守屋山東西に広がる熊久保安山岩）が用いられていることが明確になった。

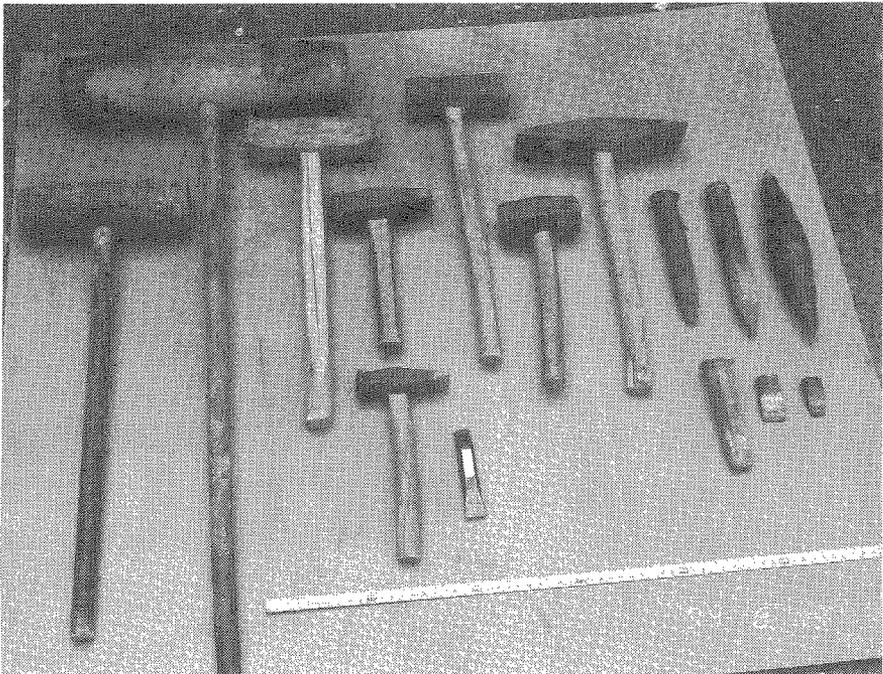
中世の石造物を制作した石工は遍歴する石工で、高遠には定住はしていなかっただろう。安土桃山時代以降、社会が安定し、石造物についての需要が増すにつれて、高遠藩領内に定着するようになったと見られる。高遠藩領内では慶長18年（1613）の鍛冶村五輪塔を初め、石殿・宝篋印塔・無縫塔・庚申塔が見られる。石造物のほとんどは石工の名は記されず、高遠領内では石工銘の刻字は禁じられていた。例外的に高遠相願寺の六面石幢（延享四年・1747）には高遠水上村石工久右衛門の名が記され、高遠竜勝寺の聖観音像（享保12年・1727）には石工安右衛門の名が刻まれている。数少ない名前の残る江戸時代の石工のうち、芸術作品といわれるのが高遠藩藤沢郷の守屋貞治である。貞治の石仏340体のうち、山梨県須玉町の海岸寺の百体観音像（文政5年・1822）・延命地藏大菩薩は、甲斐に貞治が出かけて制作した名作である。

このほか多数の出稼ぎ石工が信濃国、甲斐国、上野、美濃、相模、武蔵、駿河、三河、会津、飛騨へ出ており、江戸時代末の文久2年（1862）の文書記録では、高遠領藤沢郷・入野谷郷からの出稼ぎ石工337名のうち、甲斐には97人という多数が出ている（春日1990）。

しかし高遠領には良質の石切り場は少なく、出稼ぎ石工は良質の石の産地に行って現地の石を切り出していたようである。高遠では高遠石と呼ばれる青緑色の閃緑岩産地がある。私たちは、花畑、猪鹿、小原、黒沢の産地のうち2カ所を踏査した。花畑の三峯川河原では閃緑岩の巨岩に矢穴（幅6cm 深さ5cm U字形）を発見した。これは江戸時代後期の割石工によるものと見られた。また黒沢の奥の石丁場では閃緑岩の露頭をえぐった跡と細かい碎石の集積したズリ場を発見した。しかし全体に規模は小さくテラスを大きく作るほどのものではないようで、高遠石工の本拠地では典型的な石切り場遺跡は発見しにくいようである。



高遠町花畑三峯川の高遠石巨岩の矢穴



高遠石工の工具（現代・北原石材店）

●伊豆石と戸田の石丁場

静岡県伊東市、東伊豆町稲取、沼津市西浦、戸田村などに伊豆石（安山岩）が産出する。伊豆石は江戸時代に徳川幕府や大名によって、江戸城・駿府城・大坂城の石垣や江戸の町の石造物に大量に利用された。伊東市宇佐美の石丁場については谷筋や海岸にあらわれた巨大な転石を割り取って、安山岩系熔岩の切り石を船で搬出したもので、採石坑はないそうである。戸田村では田代山、柳ヶ窪、大浦、袖、たもとなど13箇所の石切り場がある。田代山では矢穴石と刻印石が調査されている。戸田湾に面する袖・たもとの矢穴石は幅9cm深さ5cm平均で、江戸後期文化文政期という紀州藩御用留などの石切り文書と対応した。沼津市西浦の高丁場では、断崖に切り込まれた露頭掘り跡や石垣のある石道、矢穴石、伊豆石のこっばが山積みされたズリ場、1680（延宝9）年の石工銘のある不動明王像がある。



駒ヶ根市
観音寺の十王石像
（元久二年）

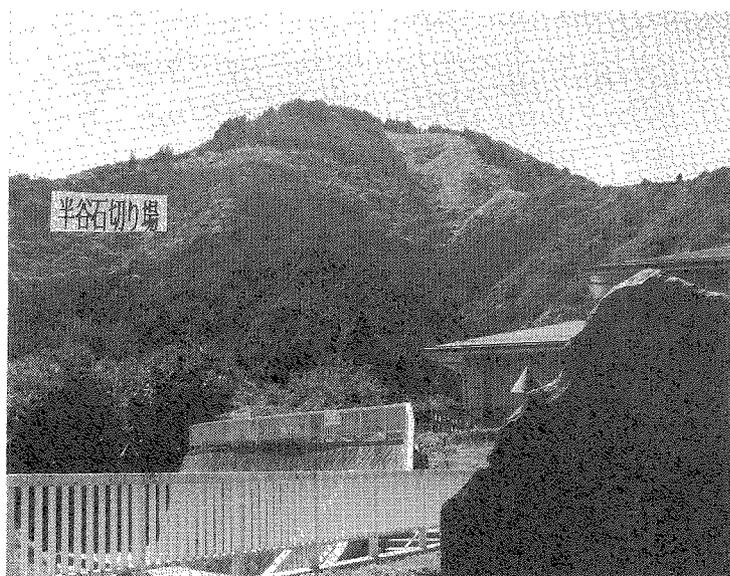


駒ヶ根市
善福寺墓地の
宝篋印塔
（応永二二年）

●七沢石

神奈川県厚木市七沢、清川村^{すすがや}煤ヶ谷、伊勢原市日向^{ひなた}に連なる、丹沢山系の鐘ヶ嶽^{かねがたけ}の北東部南部に産出する灰色・暗黒色の凝灰岩を七沢石という。七沢石の開発は江戸時代元禄・宝永年間に高遠領の出稼ぎ石工が、甲州経由で七沢に来て、石切り場を開拓したのが初めといわれる。その後、宝永7年・享保4年・明和6年・安永7年・寛政6年・文化3年・嘉永6年などの、厚木・伊勢原・海老名の石塔に信州高遠石工の銘がある。また、七沢広沢寺墓地や鍛代家^{きたい}（伊勢原市日向洗水^{あろうず}）に、18世紀前半～19世紀後半の石工の墓が多数あることから、高遠から数十人の石工が江戸時代中・後期に頻繁に来ていたことがわかる。また七沢村や煤ヶ谷村土着の石工も少数いて、高遠石工の技術指導を受けていたこと（鈴木1971）が知られている。七沢石の採石は江戸末に中断されるが、明治中期から再興し大正・昭和16年頃までは続いた。七沢石による石造物は石臼、墓石、庚申塔・地藏・橋供養塔、石鳥居、手洗鉢など多様で、相模川水系の神奈川県中央部を中心にして、町田・八王子・西多摩地域へも江戸時代には浸透している。

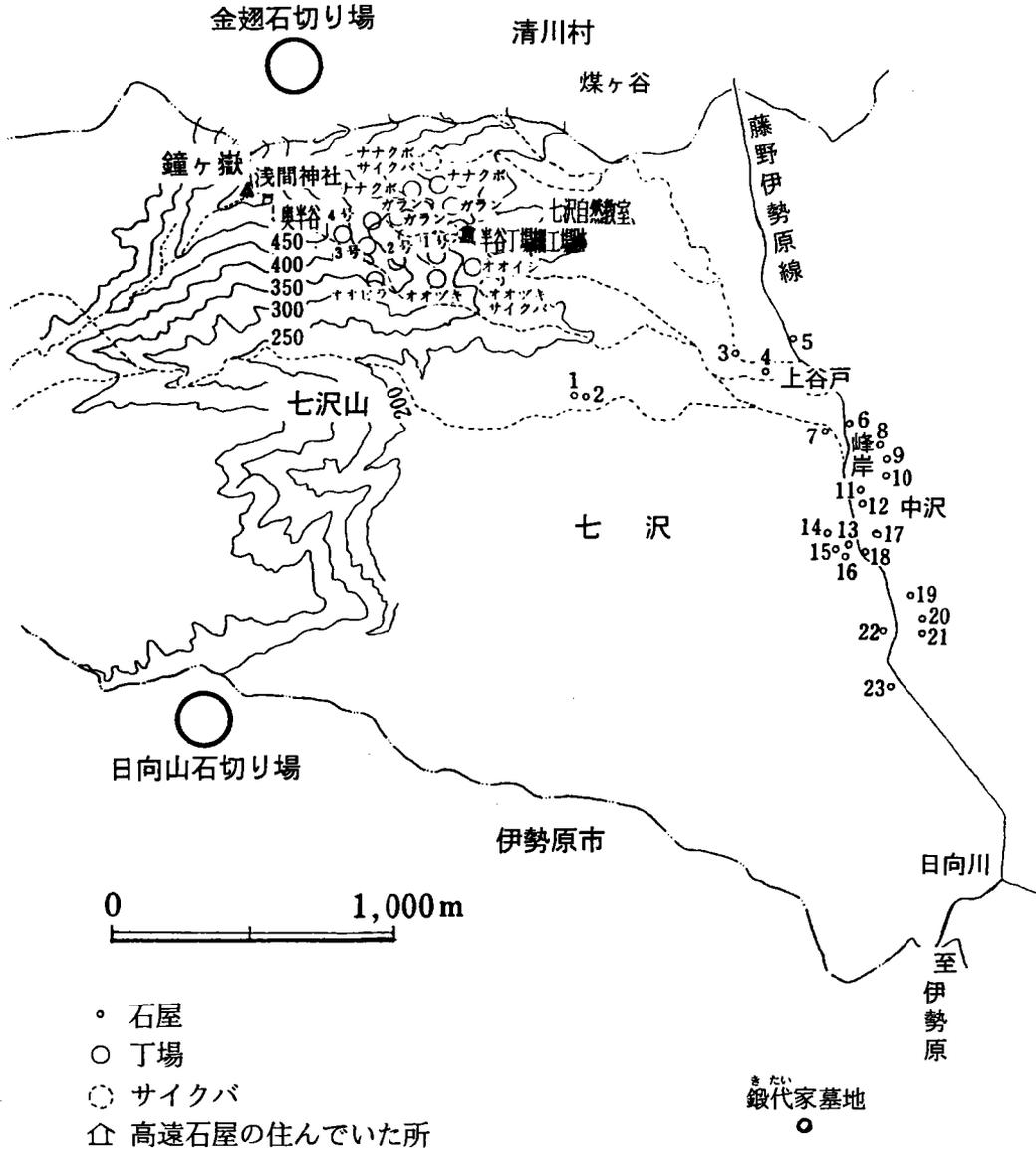
七沢石の石切り丁場は、鐘ヶ嶽山腹の煤ヶ谷^{こんじ}金翅、七沢山、日向山に広がっているが、七沢山の厚木市七沢自然教室奥に点在する数十カ所の石切り場のうち、半谷^{はんや}丁場と細工場跡を踏査した。標高250m前後の玉川の源流の谷に面した東斜面に10カ所のテラス（約10×5m前後の三日月形）があり、大きな七沢石の石塊には中型（幅6～9cm深さ3cm位）の矢穴が連続している矢穴石がごろごろしていた。またテラスをつないで幅90cm前後の斜路があり、石工が地車で石材を運んだ道と思われる。沢地は猪のぬた場となっていた。七沢石の石切り丁場については、1939年当時の13カ所の丁場（七久保、ガラン、半谷、大平、オオツキ）と3カ所の細工場が記録されているが（厚木市文化財協会1981）、この半谷石切り場は江戸時代後期のものと思われ、七沢石最盛期の未調査の石切り場遺跡である。



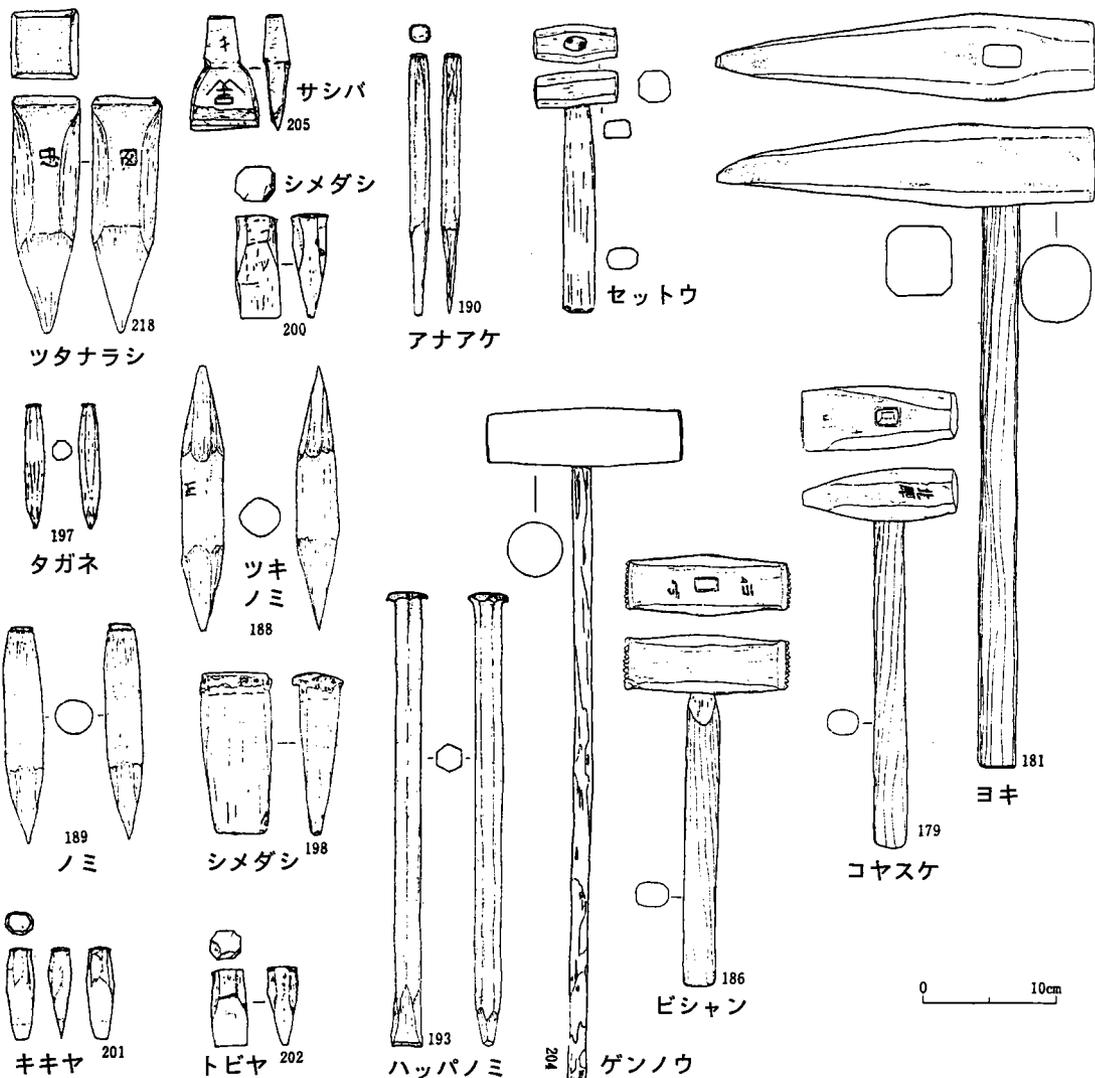
鐘ヶ嶽 石切り場跡遠望

江戸時代には鐘ヶ嶽東北の奥半谷で高遠石工が専門的に採石していたので、半谷より標高の高い鐘ヶ嶽の谷には江戸中期の石切り場・テラス細工場の遺跡が残っているものと見られる。

なお七沢石の加工技術については、北原照治・柴幹雄氏から石工道具の実測図や石臼の製作工程の記録がされており（厚木市文化財協会1981）、私も前場石材店や細野茂氏から聞き取り調査をすることができ、石工の歴史復元をするためには、民俗学的調査方法が大変参考になると痛感した。



七沢石の石切り丁場（厚木市文化財協会1981を改変）



七沢石工の加工道具 (厚木市文化財協会1981)

●天神山の石切り場遺跡

群馬県笠懸町天神山の凝灰岩は中世鎌倉南北朝時代に採石されている。石切り場遺跡は径10~20mの段切り状の凹地となる露天掘りの採石坑が20カ所あり、伊奈石石切り場遺跡と比べると小規模なことが注意されている(渋江1993『伊奈石採掘遺構分布調査報告書』)。天神山の凝灰岩製板碑・石塔は群馬県南東部に流通したことが国井氏によって研究されている(『よみがえる中世5 浅間火山灰と中世の東国』)。遺跡の年代と流通圏は伊奈石の研究に大変参考になりそうだが、私はまだ実見していない。

XIII ま と め

十菱 駿武

(1) 伊奈石石切り場遺跡群と矢穴石

2年半にわたる伊奈石研究グループの五日市町横沢入を中心とする伊奈石石切り場分布調査の結果、天竺山東尾根に知られていた、富田ノ入の石切り場竪坑以外に、伊奈石が伸びている地層には、人工的な石切り場遺構が、横沢入地区の東西1.6km、南北1.4kmの広範囲に広がることを確認した。その範囲は富田ノ入、釜ノ沢、釜ノ久保、荒田ノ入、宮田、下ノ川の尾根筋から山腹、沢筋にまたがっている。とくに宮田から下ノ川にかけては、伊奈砂岩部層が南傾斜で広がっているために、伊奈石の遺構は南北180mに広がっていた。天竺山東尾根と宮田東沢の長径96m短径38m深さ7mのすり鉢形の竪坑（採石坑）3カ所や露頭掘り（山腹を斜めにえぐり削った採石遺構）などの採石坑44カ所、石を積んで平場とした石工の作業場と見られるテラス96カ所以上、碎石の投棄場であるズリ場14カ所以上、石を運搬した古道4カ所などの遺構がある。採石坑やテラスの表面には、石臼未成品、五輪塔未成品、矢穴加工石、ズリ（碎石片）が多数発見できた。石臼は径33～36cm高さ15～30cmの円盤形で、上臼の窪みや供給孔の開けかけの未成品である。五輪塔は20cm角の直方体の石で、火輪未成品である。矢穴石は幅18～15cm、13～9cm、逆台形またはU字形で、大型のものは戦国～江戸時代初期の矢穴、中型の矢穴は江戸時代中～後期の矢穴と思われる。このほかにテラスでは石切りに関わる工具類などの遺物は採集されてない。

また高尾・網代地区にも南北1.3km幅0.4kmにわたって、伊奈石石切り場遺跡を新発見し、多数の露頭掘り、テラス、ズリ場、石臼・墓石未成品、陶磁器・寛永通寶を発見した。

矢穴石は、安土桃山時代の大坂城跡、江戸時代の甲府城跡、松阪城跡など各地の城郭の石垣と比較研究すると、古い矢穴ほど幅広で深い。

矢穴は北垣聡一郎氏の研究によると、室町時代に足利義政によって明応5年(1496)に造営された京都東山の銀閣寺礎石の花崗岩に矢穴があるのが最も古く、矢を連続的に打ち込む石割りの技術は室町時代から20世紀昭和34年頃まで使われた技法である。

また、江戸時代中期以前とみられる伊吹町曲谷石石切り場で実見した矢穴は大型の矢穴であり、臼石を割り取る際にも大型の矢穴を穿孔している。さらに阪南市箱作ミノバ石切り場跡の矢穴石は中型・小型の矢穴で、江戸中期・後期の砂岩採石に伴うものであり、より新しい時期になると砂岩でも小型矢穴が多くなる。

以上の矢穴の形態と寸法の対比から、不確実な部分を含んでいるが、大まかな年代の編年基準ができると思われる。

伊奈石石切り場遺跡の矢穴石は安土桃山時代から江戸時代後期のものと考えられる。横沢入地区の宮田東沢に大型の矢穴石があることから、この地区が比較的古い戦国時代から江戸初期前後で、天竺

山東・富田ノ入の採石遺構は江戸時代初期～中期、そして高尾・網代地区の採石は石臼をほとんどの目的で江戸時代後期以前というように変遷するようである。

次にテラスのことについて言及する。伊奈石採石遺跡について、渋江芳浩氏は「高く切り立った岩壁を呈し、あるいは尾根をえぐるような採掘坑、累々と積まれ谷へも流下するおびただしい量のズリ、各所に展開するヒナ段状の平場（テラス）といった伊奈石採掘遺構群の光景は、もしかすると伊奈石採石に独自の様相といえるかもしれない。」と述べている（伊奈石採掘遺構調査会1993）。しかし私達が調査した七沢石丁場でも伊奈石と同様の多数のテラスや採石坑を実見することができたし、箱作ミノバ石切り場跡でも21カ所の加工場（テラス）が尾根筋にできている。そして山梨県湯之奥金山遺跡の鉾石を粉成したテラスは124カ所、島根県大田市の石見大森銀山遺跡では実に500カ所を越える安土桃山時代から江戸時代初期のテラスが石銀山・仙ノ山の山腹に階段状に築成されている。新潟県佐渡相川金山の初期の鉾山町も数10カ所の広いテラスが遺存している。

むしろテラスをつくることは戦国時代～江戸時代の鉾山採石遺跡に通有のことで、山側を削り、切り出した碎石・屑石を積んで三日月形や長方形の平場を作り、加工作業や生活のための場をつくるものである。

ズリについては鉾山用語を転用したが、和泉石工はコッパ（木端）と大工になぞらえて屑石を呼んでいたようである。ズリの中には矢穴石や石造物未成品・欠損品を多数含み、縄文時代集落でいえば土器投棄場に等しいものである。ズリ場の厚さや年代などについては表面的な観察ではできかね、発掘による綿密な遺物全点収集と記録調査が必要になってくる。文化財保護行政や一般の理解の中に、ズリ場のような投棄場は遺跡の範囲外であるかのような理解が一部にあるが、そのようなことはなく、考古学的な遺構として十分に調査研究すべきである。

(2) 伊奈石石造物の流通分布

伊奈石製の板碑・道標・石橋・墓石など石造物は、中世南北朝時代から近世江戸時代後期にかけて、東京都多摩地域の秋川流域から南武蔵（今のところ川越から川崎まで）そして相模川流域の山梨県上野原町桐原・西原、神奈川県藤野町、相模湖町、城山町に流通したことを確認している。

中世の伊奈石板碑の分布圏は秋川流域から多摩市に至る多摩地区であり、従来縣敏夫氏による、伊奈石板碑の生産と流通に、武州南一揆を担った秋留郷の地侍層が中心となったという解釈がされてきた（五日市町史1976）。しかし千々和到氏は、伊奈石板碑が多摩川北にないこと、南多摩まで計50基に及ぶ広い分布圏があることから、武州南一揆説を排し、伊奈石板碑の生産管理に14世紀に中興した新義真言宗大悲願寺が寄与したとする説を提起している（伊奈石採掘遺構調査会1993）。

江戸時代においては横沢入の伊奈石採石には大悲願寺が大きく関わっており、慈明住職が伊奈村・横沢村の村役や石工との調整に関わっている。このことからすると伊奈石の採石については江戸時代においても大悲願寺が大きく関わっている可能性は高いであろう。

石造物の分布圏については、①大悲願寺の末寺や同宗派の寺院への石材供給、②秋川・多摩川の筏流しを経ての伊奈石供給、③五日市街道・古甲州道を経由しての陸路での伊奈石・石材の流通の3方向を考えることができる。①については西多摩地域の寺院ではほぼ整合する。②については筏流しについての六郷渡しの史料から、大田区六郷や川崎市川崎大師などの石屋を通じて供給されていたことが証明できた。多摩川の水路を通じた文化の広がりといえる。③については、五日市→秋川→福生→羽村→昭島→立川あるいは五日市→桧原→上野原といった街道筋での馬や荷車を通じての石材・伊奈石製品の流通が拡大していたことを跡づけた。しかし、江戸市中から伊豆石などの安山岩が供給されやすいこと、甲州側には対抗できる甲州みかげや山崎石の石屋があり、相州側には高遠から出稼ぎしてきている七沢石があることなどから、さらに伊奈石の流通圏を広げることはできなかつたとみられる。

いずれにせよ伊奈石石造物の悉皆調査のためには10年以上の丹念な調査が必要となる。群馬県笠懸村の天神山石や牛伏砂岩については利根川流域一帯に中世石塔類の分布圏が広がっていることが明らかにされている（国井1989、秋池1988・1989）。

しかし現状では石造物・石仏調査報告に石質・産地が判別されているのはきわめて少なく、石造美術・民俗分野を中心としたこれまでの石造物調査に、地学・考古学分野研究者の参加が必要なることを示している。今回の伊奈石石造物調査によって、多摩川流域に限らず南武蔵一帯に室町～江戸時代の伊奈石石造物が流通されていたことを論証することができた。

伊奈石石切り場遺跡群の調査は、東日本初の石切り場遺跡の学術調査であり、伊奈石の遺跡の調査研究は忘れられた多摩の産業と近世史を掘り起こすだけでなく、日本の土木史、鉱山史研究のモデルになる。横沢入だけでなく、日の出町平井・五日市町高尾・網代にもひろがり、多摩地域を中心に南武蔵全域にまたがる伊奈石石造物流通の発信地であることでも重要である。

(3) 環境保全の問題

このような里山の景観を歴史的に残してきた横沢入丘陵が今回初めて開発計画にさらされることになった。

ともかく、伊奈石石切り場の遺構がこれほど良好に遺存していたのは、伊奈石の石切りが近代で途絶え、大型の機械や削岩機などによる現代の工作を受けていなかったためである。厚木市の七沢石の場合は昭和初期まで採石が続けられていたが、石の分布が丹沢山塊の浅間嶺各所に丁場があり、新しくなると山裾に採石場が下りてきたために、やはり伊奈石と同様に遺構が良く残存している。しかし七沢石では石丁場の分布総合調査が未着手で、全容は伊奈石石切り場遺跡ほどはつかめていない。また神戸市御影石の江戸時代の石切り場は、その後近代に及ぶ長期の採石によって五介山石切り場を除き消滅している。岐阜の恵那市の花崗岩石切り場は現代の大型機械による露天掘りが数100m～1km四方に広がり、近世～近代の痕跡などは探すこともできない。

横沢入や高尾・網代の石切り場遺跡が遺存してきたのは、大悲願寺の保護や入会地としての薪炭林共同利用などの管理策がとられており、近代・現代の開発が届かなかったからに他ならない。

このような位置づけから伊奈石遺跡群はぜひとも現状保存が必要である。仮に「記録保存」の場合には横沢入の遺跡発掘調査には、少なくとも6年間11億円の調査経費がかかるものと見積もられる。

伊奈石石切り場遺跡群のうちズリ場を含め、採石坑とテラスは緑地として保存すべきである。なおほかの遺跡、地名・文化財についても横沢入らしい里山の歴史的環境を構成しており、できるだけ保存すべきことはいうまでもない。仮に「記録保存」の場合は近代の遺跡・耕地や地名まで慎重に調査すべきである。

むしろ横沢入・高尾・網代の石切り場遺跡は史跡として指定保存し、「秋川流域エコミュージアム」のコアまたはサテライトとして、里山の自然環境・地質・動植物とともに住民主体で保存活用すべきものだと考える。

横沢入の自然・歴史景観は一旦消滅したら再び同じものは再現できない。地域の特性を生かす文化の見直しのためにも、伊奈石遺跡群の文化的価値は非常に高いものだと信ずる。

XV 秋川流域エコミュージアム構想と

五日市のまちづくり提言

1. 自然と人間の共存への課題

樽 良平

自然史学会連合設立宣言

戦後50年、わが国ではめざましい経済発展とは裏腹に人々の自然離れが生じ、その影響は自然に関する教育・研究にも顕著に現れている。近年の入試制度に象徴される偏差値教育の世相にあって、体験的に自然に接して正しい自然観を培う教育は著しく軽視されてきた。これは多くの優れた若者が目標や心のよりどころを見失う大きな原因になっている。一方、21世紀に向けて自然と人間の共存をはかるには、教育者・研究者だけでなく、国民一人一人がかげがえのない自然の多様性や仕組みについて理解を深めることが不可欠である。このような社会問題に対するわが国の教育と研究の体制は非常に立ち遅れていると云わざるを得ない。

我々27学協会はこの現状を深刻に受けとめ、自然史の教育・研究の重要性を広く訴えてその活性化をはかることが緊急に必要であるという認識で一致した。この課題を推進するためにここに自然史学会連合を設立し、共通の認識に立って活動を行うものである。

1995年6月3日

種生物学会、植物地理分類学会、植物分類地理学会、地学団体研究会、(株)東京地学協会、日本遺伝学会、日本衛生動物学会、日本貝類学会、日本花粉学会、日本魚類学会、日本古生物学会、日本昆虫学会、(株)日本植物学会、日本植物分類学会、日本人類学会、日本生態学会、日本蘚苔学会、日本藻類学会、日本第四紀学会、日本地質学会、日本地理学会、(株)日本動物学会、日本動物分類学会、日本鳥学会、日本ベントス学会、日本哺乳類学会、日本霊長類学会

自然史科学に関連する学協会による自然史科学連合の総会が、1995年6月3日国立科学博物館分館で開催され、上記の宣言がなされた。

最近、自然と人間との共存について考え直そうという気運が高まってきている。自然史に限らず、すべての研究や学習は体験が基本となる。自然史においては一層それが重要であることはいうまでもない。しかし、戦後50年、日本では人口の都市集中化と自然環境の破壊が計られ、机上だけの勉強や研究は自然を軽視し、自然から遠ざけ、人々から自然を正しく理解する目をなくさせてしまった。

自然史の教育は、国民の自然観と文化的意義を向上させ、野外での体験学習を通して青少年に感動と探究心を呼びおこし、若者の「心のよりどころの喪失」を防止する上にも大きな効果をもつと考える。

自然環境は大地をもととし、大地の基盤である地層は長い時間を経て構成された。日本列島の骨格形成は古生代中期に始まり、末期にほぼ完成する。本文、地質の項で述べたように、五日市の地層は日本列島骨格形成期から中生代、新生代とその過程を刻み、その経た各地質時代の跡を克明に残しながら現在に至っている。

この間、地層は隆起、沈降等の造山運動をくり返し、あるいは褶曲で押しまげられ、断層でずたずたにひきちぎられるなど数々の変動を経て地質構造を複雑にしていった。その結果、現在の変化に富んだ複雑な地形が形成されたのである。この間、岩石は長い年月風雨にさらされ、繁茂する植物の根にくだかれたり、激流によって細分されたり、砂や土は植物の腐敗物、動物の糞や死骸とまじり合って肥沃な土壌をつくってきた。

この土壌はその地域の岩石からなる特有の性質をそなえた土であるため、そこに生える植物はその地域に適応して特殊化してゆくことは当然なことである。このことは動物にも同様に云えることで、あまり広い範囲を移動しないような動物には特殊な進化がみられ、その地域に適応した種が生まれてくることになる。

日本の中でも特殊な存在として認められる秋川流域の地質が、このような複雑な構造を形成し、その結果複雑な地形が生まれ、そしてそこにすむ生物は流域独自の生態系を育むこととなる。

自然環境については、その地域の地質とその構造、地形や土壌等の基盤を考慮することなくして正しい理解は得られないのである。このような自然の仕組みを理解するための様々な条件をそなえた地域がこの秋川流域なのである。

横沢入を中心とする秋川流域は都心に近く、しかも地質、地形、動物、植物等、生態系の整った自然の宝庫であるので、自然の仕組みの不思議さ、すばらしさを身体で感じることでできる最もふさわしい地域である。今後長く未来にわたり保全し、かつ、自然を真に理解させるための教育の場として活用させたいと願うものである。

2. 自然史博物館又はエコミュージアム構想提言の理由

- (1) 都心に近く、1日の行程でも学習が可能である。必要に応じ宿舎も用意できる。
- (2) 五日市は自然史のあらゆる分野にわたって学習できる条件を具備している。例えば地質学の分野では、五日市は古生代から新生代にかけての地層が集中して観察できる地域であるばかりでなく、豊富な化石の産地でもあるため、この地域の特性を生かした体験学習の場を提供することが可能である。
- (3) 横沢入を含む五日市丘陵は谷が浅く、山もなだらかで親しみやすく、しかも自然環境や生態系が充分残されていて、地学、地形、動物、植物の体験学習に最適である。
- (4) 谷の中央部の谷田は日本の古い田んぼの形態を残し、稲作体験学習もできる。
- (5) 伊奈石石切場の遺跡は学習場としての条件を備えている。

- (6) ソバ、小麦を作り、水車あるいは人力で、伊奈臼を使って粉を挽いてソバ、うどん、マンジュウなどをつくる体験学習をする。
- (7) 五日市丘陵を中心に秋川谷全域の自然史および歴史等、広範な自然とのかかわりについて理解を深める学習ができる。
- (8) このほか五日市は歴史が古く自然史のほか、考古学、歴史的にも価値も大きい。
- (9) 五日市の特産品（例えばノラボウ）などの売店を置く。
- (10) 案内人、語りべ（ボランティアなら一層良い）を育て、流域各地のガイドと自然についての教育をしてもらう。
- (11) 風光明媚な秋川谷は精神的にも憩える安らぎの地でもある。

参 考 文 献

- 秋川流域自然保護団体協議会 1994 「秋留台の自然」ブックレット 都政新報社
- 厚木市文化財協会 1981 『厚木市の民俗1(生業1)』厚木市文化財調査報告書24
- 飯島亮・加藤栄一 1978 「原色日本の石」『産地と利用』大和屋出版
- 石井 道郎 1987 『五日市の石仏』五日市町郷土館
- 石井 道郎 1992 「伊奈の石工伝説」『五日市郷土館だより第35号』
- 石井 道郎 1993 「武州南一揆の話」『五日市郷土館だより第41号』
- 石井 道郎 1994 「江戸末期の五日市」『五日市郷土館だより第43号』
- 石井 道郎 1994 『大悲願寺日記下』五日市町郷土館
- 石井 道郎 1994 『父が語る五日市人のものがたり』
- 石井 博司 1978 「石工に想う」『日本の石仏第8号』日本石仏協会
- 石原 章次 1987 『御坂町の石造物』御坂町教育委員会
- 石和町文化財審議会 1984 『いさわ路傍の石造物』石和町教育委員会
- 石田茂作編 1972 『日本の美術No.77塔』至文堂
- 磯貝 勇 1962 「石屋」『日本の民具』民俗民芸双書59巻 岩崎美術社
- 五日市町伊奈石採掘遺構調査会 1993 『伊奈石採掘遺構分布調査報告書』五日市町教育委員会
- 五日市町教育委員会 1983 『化石は語る 五日市むかしむかし』五日市町郷土館
- 五日市町史編纂委員会 1976 『五日市町史』
- 五日市盆地団体研究グループ 1981 「五日市盆地の新第三系」『地球科学』35巻4号
- 五日市盆地団体研究グループ 1981 「鮮新-洪積統の五日市砂礫層基底にみられる不整合の意義」
『地質学論集』20.177-185
- 伊藤 好一 1965 「甲州大工仲間の成立」『甲斐史学特集甲斐地方史の諸問題』甲斐史学会
- 稲城市教育委員会 1991 「多摩川中流域の川舟」『稲城市の民俗四』
- 猪郷久義・菅野三郎・新藤静夫・渡辺景隆編 1980 『日本地方地質誌関東地方』朝倉書店
- 伊吹町史編纂委員会 1994 『伊吹町史文化民俗編』伊吹町
- 岩崎次郎・田中晋作 1988 「ミノバ石切場跡発掘調査報告書」『大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』18
(副)大阪府埋蔵文化財協会
- 植松 又次 1978 『甲斐の石造美術』山梨郷土研究会
- 内田 和子ほか 1982 「多摩川の渡しと橋」『多摩のあゆみ第28号』多摩中央信用金庫
- 瓜生 卓造 1977 『桧原村紀聞』東京書籍
- 青梅市教育委員会 1980 『青梅市の板碑』
- 青梅市郷土博物館 1974 『青梅市の石仏』

- 大田区史編纂委員会『大田区史』
- 大月市文化財審議会 1993 『大月市の石造物』大月市教育委員会
- 大穂耕一郎 1993 『風は僕の案内人・人と甲州街道と中央本線』のんぶる舎
- 小沢 国平 1978 『板碑入門』国書刊行会
- 小沢 秀之 1988 「石工」『山梨県の諸職』山梨県教育委員会
- 小山 一郎 1931 『日本産石材精義』龍吟社
- 小山田了三 1986 『民俗資料の技術史－江戸時代までの資料の発掘とその技術的研究－』
東京電機大学出版局
- 春日 太郎 1975 『高遠の石仏』高遠町誌編纂委員会
- 春日 太郎 1977 『石仏師守屋貞治』小松総合印刷
- 春日 太郎 1990 『山里に花ひらく高遠の石工』
- 春日太郎・北原通男 1983 『高遠町誌上巻歴史』高遠町誌編纂委員会
- 片山 迪夫 1968 「多摩郡伊奈の石工」『武蔵野47巻1号』
- 片山 迪夫 1971 「多摩郡伊奈村“石工門開き”一件」『武蔵野50巻2号』
- 金森 敦子 1986 「石工」『日本石仏図典』国書刊行会
- 金子 史朗 1955 「東京都五日市第三系の地質構造」『地質学雑誌』11.128－134
- 金子 浩之 1955 「生産遺跡－伊豆・石切場」『季刊考古学第53号』雄山閣
- 川勝政太郎 1957 『日本石材工芸史』綜芸舎
- 川勝政太郎 1967 『石造美術入門 歴史と鑑賞』社会思想社
- 川勝政太郎 1981 『新版石造美術』誠文堂新光社
- 菅野三郎・新井重三 1964 「五日市盆地の新第三系について」『秩父自然科学博物館報』
- 菊池 俊彦 1988 『図譜江戸時代の技術』恒和出版
- 北垣聡一郎 1987 「石垣普請」『ものと人間の文化史』法政大学出版局
- 北垣聡一郎 1979 『日本城郭大系別巻3 城郭研究便覧』新人物往来社
- 北原 通男 1967 「信濃高遠石工の他国出稼ぎについて－相模・上野に現存する作品を踏査して－」
『信濃』19－3 信濃史学会
- 窪田 成円 1989 『墓と石塔』知道出版
- 小泉輝三郎 1980 『桧原・ふるさとの覚え書き』武蔵野郷土史刊行会
- 庚申懇話会 1975 『日本石仏事典』雄山閣
- 甲府城総合学術調査団 1969 『甲府城総合調査報告書』山梨県教育委員会
- 小平市教育委員会 1993 『小平市石造物調査報告書』
- 齊藤 與七 1936 「鉱物資源とその利用状態」『山梨県総合郷土研究』山梨県師範学校
- 酒井 彰 1987 『五日市地域の地質』地質調査所

- 坂詰秀一編 1983 『板碑の総合研究2・地域編』 柏書房
- 三省堂 1987 『江戸東京学事典』
- 自然史博物館整備検討委員会 1986 『自然史博物館整備検討委員会報告書』 東京都
- 十菱 駿武 1993 「伊奈石石切り場遺跡の歴史的意義」 秋留台シンポジウム「流域の開発計画と自然」
資料
- 鈴木 淑夫 1994 『岩石学』
- 鈴木 茂 1971 七沢石「野だちの石造物」『厚木市文化財調査報告書』13 厚木市教育委員会
- 全国寺院大鑑編纂委員会 1991 『全国寺院大鑑』
- 高橋 順之 1994 「伊吹町内遺跡発掘調査2」『石臼生産遺跡』伊吹町教育委員会
- 立川市教育委員会 1977 『立川の野仏をたずねて』
- 立川市史編纂委員会 1969 『立川市史』
- 田淵 実夫 1975 『石垣』法政大学出版局
- 樽 良平 1985 『東京都自然史博物館（仮称）設立案』
- 樽 良平 1988 「水」『新立川市史研究』第五集 立川市教育委員会
- 樽良平・小森長生・菊地隆男ほか 1982 「多摩の3億年」『多摩のあゆみ』27号 多摩中央信用金庫
- 都留市文化財審議会 1977 「都留市の石造物」第1集盛里地区『都留市文化財調査資料』
都留市教育委員会
- 都留市文化財審議会 1980 「都留市の石造物」第2集禾生地区『都留市文化財調査資料』
都留市教育委員会
- 東京学芸大学日本史研究室 1990 『日本史年表』東京堂出版
- 東京都教育委員会 1979 『東京都板碑所在目録』
- 道志村文化財審議会 1987 『道志七里野仏』道志村教育委員会
- 並木 米一 1984 『五日市町の古道と地名』五日市郷土館
- 日本石仏協会 1986 『日本石仏図典』
- 羽村町教育委員会 1976 『羽村町の板碑、石仏』羽村町史資料集第1集
- 阪南町史編纂委員会 1983 『阪南町史』上巻 阪南町役場
- 日の出町史編纂委員会 1992 『日の出町史文化財編』
- 桧原村史編纂委員会 1981 『桧原村史』
- 桧原村文化財保護調査委員会 1977 『桧原村の石仏第3集』
- 福島 義明 1990 『甲斐路ふるさとの石造物』山梨日々新聞社
- 藤井正雄編 1981 『墓地墓石大辞典』雄山閣
- 藤本 治義 1926 「関東山地東縁部の地質学的考察」『地質学雑誌』33. 119-142
- 藤本 治義 1952 『日本地方地質誌関東地方』朝倉書店

- 福生市教育委員会 1988 『福生市石造遺物総合調査報告書』
- 町田市立博物館 1992 『町田市の板碑』
- 三輪 茂雄 1975 『石臼の謎』産業技術センター
- 三輪 茂雄 1975 「近江曲谷臼を訪ねて」『民俗文化』145号
- 三輪 茂雄 1977 「近江曲谷臼産地報告」『民俗文化』169号 滋賀民俗学会
- 三輪 茂雄 1977 「粉碎機の元祖西仏房－滋賀県曲谷遺跡第2次調査」『粉体と工業』9-7
- 三輪 茂雄 1978 『ものと人間の文化史25・臼』法政大学出版局
- 三輪 茂雄 1978 『石臼探訪』産業技術センター
- 持田 友宏 1988 「甲斐国の板碑」『1 郡内地方の基礎調査』クオリ
- 持田 友宏 1992 「甲斐国の板碑」『2 国中地方の基礎調査』クオリ
- 望月 友善 1978 「中世の石工」『日本の石仏』8号
- 山梨日日新聞社 1989 『山梨百科事典』
- 桐原中学校 1980 『桐原の石造物』上野原町教育委員会
- 湯之奥金山遺跡学術調査団 1992 『湯之奥金山遺跡の研究』

朝日新聞の姉妹紙

毎週土曜日発行



1部45円 郵送送料 半年1500円... 発行所 アサヒパブリッシング社

発行部数

205,000部

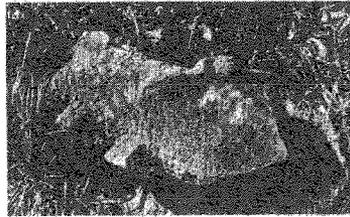
本紙のおもな配達地域

八王子 立川 青梅 昭島 小倉井 小平 日野 東村山 奥多摩 国立 出雲 那生 奥大井 奥久保 武蔵村山 多摩 秋川 羽村 昭島 日の出 五日市 奥多摩 松沢

五日市町歴史で、600~800年の歴史があるといわれている伊奈石の採石、加工場跡の総合的な調査が始まった。

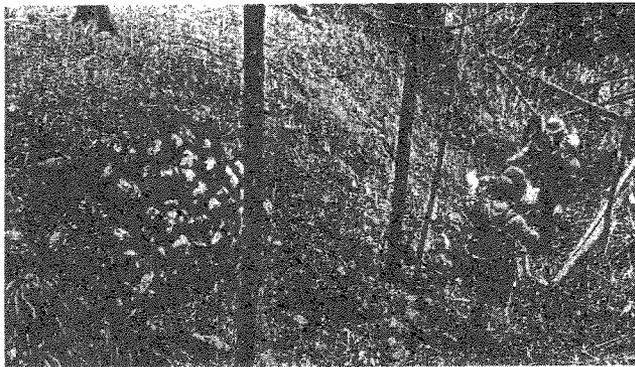
全国でも数例しかなく、伊奈石産地の調査がまとまれば、多摩地区の地域史としてだけでなく、歴史考古学や鉱山史の面からも両面的な研究になるだろうと、調査を担当する山梨学院大学教授で考古学が専門の十藤武志さん、14日は初めて、加工場跡の調査が行われた。

五日市に 伊奈石採石跡



石片には、穴の跡が生々しい

すぐれた採石跡 伊奈石は、調査報告書、王子五輪塔建設工場の跡地を、自給地として、調査が開始された。伊奈石の採石跡は、五日市町伊奈石の地帯にあり、伊奈石と称される。伊奈石の採石は、五日市町伊奈石の地帯にあり、伊奈石と称される。



加工場跡とみられるテラス。乱積み石垣も残っている

細工しやすい 硬度は4度 石臼や五輪塔などに利用

伊奈石産地の採石は、加工場跡とみられるテラス。乱積み石垣も残っている。伊奈石の採石は、五日市町伊奈石の地帯にあり、伊奈石と称される。



細加工され、放り出されていた石臼の寸法をとる十藤さん

細加工され、放り出されていた石臼の寸法をとる十藤さん。伊奈石の採石は、五日市町伊奈石の地帯にあり、伊奈石と称される。

蘇る貴重な遺跡の宝庫 市民団体が調査団 3年計画スタート

伊奈石産地の採石は、加工場跡とみられるテラス。乱積み石垣も残っている。伊奈石の採石は、五日市町伊奈石の地帯にあり、伊奈石と称される。

1993年4月5日

東京都教育委員会教育長 殿

秋留台地域調査研究会 伊奈石研究グループ

代表 樽 良 平

(西多摩郡五日市町入野1112)

横沢入地区の遺跡の発見と保護について（依頼）

文化財保護について貴職が尽力されていることに、敬意を表します。

私たち秋留台地域調査研究会は、秋留台・秋川流域の自然・文化財・生活環境について、数年にわたり研究調査を重ねてきている生物学・地学・生態学・水質学・農学・考古学・産業考古学・民俗学・文献史学の研究者・教育者・記録作家の市民団体であります。

今般、計画決定された「秋留台地域総合整備計画」の核となる五日市町の横沢入地区の文化財・遺跡について、私たちは自然環境保全活動の一環として、全労災環境研究助成をうけて、1992年12月26日～1993年3月31日の17日間、現地の詳細分布調査・踏査を行い、周知の遺跡2カ所に加えて、新しく中世～近世の遺跡3カ所を発見しました。

については、文化財保護行政機関として、文化財保護法にもとづく文化財保護措置をとっていただきたく、下記の事項について御依頼申し上げます。

記

1. 文化財保護法第57条6項にもとづく遺跡発見通知を別添調査資料によって、五日市町教育委員会名義で通知、進達し、周知の遺跡として登録してください。
2. 伊奈石石切場遺跡群は、天竺山から横沢入の北部山頂・日の出団地にかけて、山頂から山裾・平地にわたる広い範囲を占めます。石臼・墓石未製品、矢穴加工石片が見られ、江戸時代および中世の石切り場の生産遺跡であり、東日本では、総合調査をされた唯一の遺跡です。この遺跡の稀少性にもとづき、十分な確認・学術調査ができるよう、ご高配ください。とくに開発計画に先行して十分な確認調査がされるよう行政指導ください。
3. 伊奈石石切場遺跡をはじめとして横沢入の遺跡、文化財について、文化財保護法にもとづく現状保存の保護措置を講じ、横沢入の自然環境と共に保全してください。

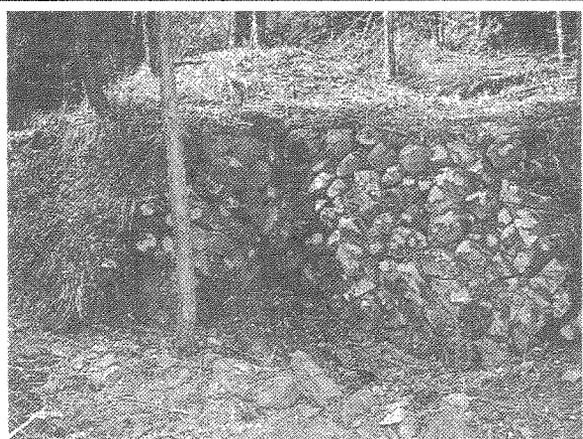
南北朝から江戸中期の作業場など

秋留台開発予定地

石切場遺跡群を発見

伊奈石研究グループが発表

西多摩郡の秋留台・秋川流域の自然や生活環境、文化財を調査・研究している市民団体、「秋留台地域調査研究会」の「伊奈石研究グループ」（代表＝榎良平・八王子実践高校教諭）は五日、五日市町横沢入地区で、これまでに、中世の南北朝時代から江戸時代中期にかけての伊奈石石切場遺跡群を発見した、と発表しました。あわせて、都教育委員会にたいし、同地区で予定されている開発計画に先行した確認調査の実施、現状保存の保護措置、自然環境の保全などを申し入れました。



五日市町横沢入地区で発見された石垣のテラス

都教委に 現状保存など要請

同地区は、五日市町が「高所得者用」住宅の建設計画を策定し、開発主体のJ.R.東日本が買収をすすめている地区。都が二日に発表した「秋留台地域総合整備計画」では、「秋留台開発」の一部として、住宅地を前提にした「新市街地」に位置づけられています。一方、同地区ではこれまで伊奈石が、古くは南北朝時代から採石され、五輪塔、石臼（うす）、墓石などとして、多摩川流域に流通していたと伝えられていました。

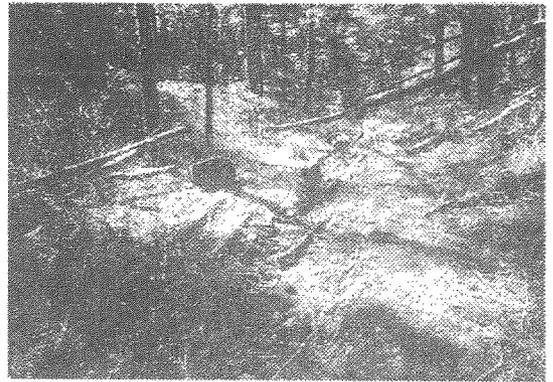
この日、同研究グループが発表したのは、自然環境保全活動の一環として、昨年十二月末からことし三月末まで実施した同地区の遺跡、文化財の調査結果。それによると、同地区を中心に、東西一・六キロ、南北一・四キロの範囲にわたり、一群の石切場壁坑、露天掘り、石垣のテラスなどを発見。当時の作業場であったテラスでは、石臼未製品、墓石、五輪塔など加工石材を多数みつけた、としています。発見された遺跡群の一部は、同地区の開発区域内に含まれており、同日、同研究グループは、都教委にたいし、①文化財保護法にもとづき遺跡として登録すること②開発計画に先行して十分な確認調査が実施されること③遺跡の現状保存の保護措置をとり、横沢入の自然環境の保全すること―などを申し入れられました。

開発計画撤回も検討すべき

同研究グループの十藤駿武・山梨学院大教授の話。今回発見したのは、江戸時代および中世の石切場遺跡で、こうした遺跡を総合調査したのは、東日本でははじめてといえる。さらに調査、研究すれば、当時の流通の仕組みや石工の労働、生活の姿などが明らかになり、土木史や産業史のうえでもモラルとなる遺跡になるのではと思う。非常に価値ある遺跡であり、（同地区の）開発計画の縮小ないし撤回も検討すべきだ。

赤旗 1993年4月6日

富田ノ入の採石場へむかう古道。
馬車が通るほどの道幅がある



多摩の産業史を 知る貴重な遺跡

五日市町横沢入の伊奈石石切り場遺跡は、約5万もの面積に分布していることが明らかになった。秋留台地域調査研究会（代表＝東京経済大学教授、広井敏男さん）の伊奈石研究グループ（調査責任者＝八王子実践高校教諭、樽良平さん）の調査でわかったもの。中世から近世にわたって採石、加工されており、多摩の産業史を知るうえで貴重な遺跡だ。同研究会では、遺跡の保全を求めて5日、東京都教育委員会教育長に史跡指定の保護申請を提出した。

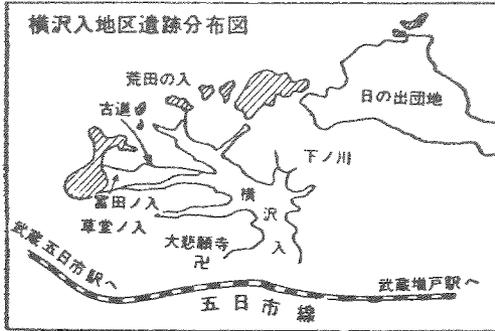
石切り場は 5畝に分布

横沢入の伊奈石遺跡

伊奈石石造物の大生産地

横沢入の伊奈石の石切り場については今まで、本格的な調査研究はされておらず、伝承として伝わっていただけだった。しかも、JR東日本によって横沢入が住宅開発されることが決まり、全容が明らかにならないまま、破壊される可能性も高まった。同調査会は、遺跡が壊される前に分布を確認しようと、自主的に研究グループを組織した。昨年未からの、全国でも数例しか行われていない石切りの総合学術調査に取り組んでいる。

延べ17日間に行われた分布調査で見つかった遺跡群は6カ所。横沢入の沢地を囲む五日市丘陵の一部、天竺山から北部山頂・日の出団地にかけて、山頂から山裾、平地にわたる広い範囲だ。それぞれには、加工場テラスや石切り場堅坑、露天掘跡、ズリ場などの遺構が広がっており、石垣に囲まれたテラスも数カ所見つけた。遺構には矢穴のある加工石材や石臼、臺石（五輪塔地輪）などの半製品、未製品も残されている。伊奈石石造物の大生産地であったことは明らかだという。



東日本唯一の総合調査

伊奈石は硬質粗粒砂岩。加工しやすいことから、南北朝から江戸中期にかけて徐々に細工され、多摩川流域に流通していた。横沢入周辺の伊奈石砂岩層は地殻変動で40〜90度に立つっており「伊奈石の露出地ではほとんど採掘された形跡があった」と、調査に参加している唐沢慶行さん。横沢入の北東、日の出団地の造成地からも露出細りの遺構が発見されたという。考古学、歴史学の専門家として調査に参加している山梨学院大学教授、十菱駿武さんは「このような総合調査が行われる遺跡は東日本では唯一。遺跡の稀少性も含め、十分な確認、学術調査が行われるよう東京都の指導に期待したい」と語っている。

横沢入の遺跡調査報告は、18日10時から、秋川市中央公民館で行われる秋留台シンポジウムで発表される。問い合わせは☎0425-19614882唐沢さん、5812596大森圭一さん、9713490堤崎昭文さん。

（酒井善久子記者）

秋留台の採石場 遺跡保存申し入れ

都に民間調査研究会

都が先に発表した秋川市など多摩地区の四市町にまたがる秋留台開発マスタープランに関連し、歴史学者などで構成する民間の調査研究会は五日、「対象区域には貴重な採石場の遺跡がある」として、保護措置を取るよう都教委などに申し入れた。

問題の地区は五日市町の横沢入地区。同地区では中世から江戸時代にかけて砂岩の「伊奈石」が採石され、加工用に搬出されていたことが知られている。同研究会の十菱駿武山梨学院大学教授らがこのほど行った調査で、同地区内には江戸時代以前に使われたとみられる露天掘りの石切り場や加工場などが広い範囲で残っていることが確認されたという。

十菱教授は「保存状態は良く、伊奈石の加工産業の様子を知ることができ、開発せずに歴史遺産として活用すべきだ」としている。

東京 93. 4. 6

93. 6. 25 西の風

今秋にも発掘調査

横沢入の石切り場跡

五日市町の住民や学者などで構成される「秋留台地域調査研究会」の「伊奈石研究グループ」が昨年からの調査を進めている同町横沢入地区の「伊奈石」の石切り場跡について、五日市町では専門家による調査機関を編成し、今秋をめどに発掘調査を始めることをこのほど決定した。

この石切り場跡は、南北一・四キロ、東西約一・六キロにわたる広い範囲の、中世から近世にいたる採掘穴や搬出路などの遺構で、石くずを捨てた「ズリ場」などが見つかったという。

同研究グループでは、横沢入地区に大規模な住宅開発が計画されていることから、今年四月、同町教育委員会と都教育委員会に対し、保存を要請していた。

町ではこの発掘調査で、遺跡の現状を把握し、聞き取り調査により、石切り場の戦前、戦後の利用状況を調べる予定。補正予算に調査費四百万円を計上している。

「伊奈石」は砂岩の一種で石うすや墓石などに利用され、当時の庶民の生活に欠かせない五日市の特産物のひとつだった。



調査が決まった横沢入の石切場跡

五日市の「石切り場遺跡」

今秋メドに発掘調査

大規模開発前にまず現状確認

五日市町は、秋留台開発で大規模な住宅開発が予定されている同町横沢入地区の「伊奈石」の石切り場遺跡について、専門家による調査団を編成し、秋をめどに発掘調査を始めることになった。

同町は、民間研究グループ「秋留台地域調査研究会」の「伊奈石研究グループ」が、昨年からの調査に乗り出し、南北約一・四キロ、東西約一・六キロにわたる広い範囲から、中世から近世の採掘穴や搬出路などの遺構、石くずを捨てた「ズリ場」などが見つかった。同町は、民間研究グループ「秋留台地域調査研究会」に保存を要請している。

「伊奈石」は砂岩の一種で、石うすや墓石などに利用された。同町は、この発掘で遺跡の現状を把握し、保存の必要性を検討する。補正予算に調査費四百万円を計上している。聞き取りにより、石切り場の戦前、戦後の利用状況を調べることも考えている。

同グループ代表の樽良平さんは「我々の要請を理解してもらえたようだ。庶民の暮らしに密着した貴重な遺跡であり、町にはきちんとした調査を望みたい」と話している。

横沢入地区開発

里山の保全を要望

自然環境調査が報告書 検討委員会

五日市の横沢入地区の開発計画をめぐり、事業主体のJR東日本東京工務所と地元自然保護団体のメンバーで構成される「横沢入地区自然環境調査検討委員会」(委員長は立川聖子東京経済大学教授)が審議してきた基本計画に関する報告会が十三日、同町立増戸小体育館で開かれた。報告会では、同地区の土地利用について十二の案が検討され、最終的に現状の里山環境の保全を中心とするエコミーシム(環境博物館)案と、JR側が提案した規模を縮小させた住宅地開発案の二つに絞り込まれたが、結果的に一本化はならず両案を併記して提案するかたどとなった。JR東日本は十一月から環境アセスの手続き入り、今回の報告会を反映させていく。

横沢入地区の宅地開発は、JR東日本が事業者となり、開発面積は約六十五万平方メートルに九割近くの用地買収を終え、平成十一年までに山林などの造成工事を終え、住宅九百戸を建設する計画。

同調査検討委員会は昨年四月、JR東日本の呼びかけで発足。同地区の自然の現状を正確に知り、地域社会も含めた総合的な評価をし、開発と保全のあり方に対する指針を得ることを目的に、地元の自然保護団体のメンバー、JR東日本、学識経験者の計十一人で構成される、三分の二が

自然保護団体のメンバーで占められ、環境アセスを前に開発の事業主体と保護団体が合同で基本指針づくりを進める例は全国でもめずらしく、注目されていた。

委員会ではこのほか「地質・文化財」「博物館」「水生生物」など九つの現状調査作業部会を設け、それぞれの専門家が調査にあたった。調査結果をもとに、これまで十回の検討・審議を重ね、自然と共生した開発のあり方を探

り、このほど調査会提議を報告にまとめた。

調査では、カンアオイ、クロムコウラン、エビネなど八百種類を超える植物、ムササビやテンなど十五種のは乳類、オオタカをはじめ約六十種の鳥類、トウキョウサンショウウオなど十種の両生・爬虫類、オオムシクサなど約八百種の昆虫を調査し、なかでも国内から絶滅したと思われていたヤマトモズブリ(ヘビトンボの仲間)の残存状態地であることも発見されるなど貴重な自然が残っていることが明らかにされた。

JR東日本、11月から の環境アセスに反映へ

報告会では、保全の目標としての横沢入地区を「里山の環境」の半面とし、新たな手法の開発や開発制度の検討をも含めて保全目標を具体的に進めていく必要がある、としている。

十地用のあり方については、自然放牧型行政計画型別荘・休憩型など十二の案が出され、自然環境の保全、事業の採算性などの観点から検討評価を行い、最終的に自然保護団体の提案したエコミーシム案と、宅地開発を主体としたJR東日本の事業案案に絞り込んだ。エコミーシム案は、現状の里山環境を維持し、初後沢地区に自然史博物館を建設するほか、休耕田や雑木林を利用して体

験学習、レクリエーションの場として利用、地域のまちづくり、まちおこしの方策とする計画。

一方、JR東日本の事業者案は貴重な生物環境を一部保全して開発を行うもので、計画対象面積六十五万平方メートル、造成面積は十九万平方メートル、計画戸数は一戸建て住宅が七百四十戸、集合住宅百七十戸、三十九万平方メートルを緑地として残す計画。

エコ案は採算性が低く、事業主体の同意を得にくいこと、住宅開発案は計画通りに実施されれば現状の自然環境を維持することは困難なことなどを調査に大きな隔りがあることから、報告後の質疑応答では「環境保全型住宅共済型を折衷案を採り、一本化をめざせなかったのか」「JR

は自然保全型に進み寄るのか」などの意見が相次いだ。委員会では、調査と行政の理解と協力が不可欠、町や秋留台地域という枠の中で、開発と自然環境の保全が調整可能な横沢入地区の土地利用案の一本化を目指して引き続き検討すべき、今後と事業者、地域住民、行政の三者の間の協力が必要としている。

今後、JR東日本では十一月から環境アセスの手続きに入り、報告書の提議を反映させながら事業計画を進め、来年秋には開発許可を取り、文化財調査の後、造成工事に着手、平成十一年には第一期分の住宅販売に着手し、用地の用地買収と造成工事二百七十億円の仕事費を見込んでいく。

弓形におよそ4kmの長さにわたって分布していることが判明した。しかも、この地域ではほとんど必ずと言って良いほど人工的な加工、石切場、作業場、ズリ場などが確認されたという。つまり伊奈石石切場遺跡群の範囲は100,000㎡にも及ぶものであったことが確認されたのである。

また、2カ所確認されている竪坑は、直径30mという大きな穴で、この竪坑は数百年間にわたって掘られ続けたものであろうという。さらに、露頭掘りをしている下の所では掘り取った伊奈石の破片（ズリと呼ぶそうである）を集めて作業がしやすいような平場（テラスと呼ぶそうである）を作り、石工の作業場としていたそうであるが、この作業場からは石臼の未成品などが多数発見されていることから、山中の石切場で粗加工までやって、半成品になったものを下に降ろし、製品加工したのであろう、というようなことまで解明されているのである。

今回の発表を伺い、分布調査という限定された調査ではあるが、その成果は実に大きく、今後の地域の歴史、生活文化の解明に計り知れない恩恵をもたらすに違いないと確信した。なかでも、伊奈石石切場の消長についてその始まりを戦国時代あるいは安土桃山時代に遡るものとし、その実質的終焉を江戸時代中期におくことから、中・近世の産業遺跡として情報の残存状態が非常に良いということを知った。石切場は、近・現代さらに現在に至っても採掘され続けることから、過去の作業の痕跡などは掘り取ってしまい、遺構として残りにくい、むしろ残らないが普通なのである。このような石切場の遺跡群が一括して見つかったのは関東以北では初めてだそうである。

伊奈石石切場跡は、山中であるがゆえに今まで開発の魔の手から逃れ、藪に覆われ、人々にも忘れられ静かに眠っていた。しかし、数年前より石切場遺跡群の所在する横澤入地区の山林に63ヘクタールに及ぶ大規模な宅地開発計画が持ち上がり、眠りを覚まされたのである。グループの歴史的風土を大切にしたいという熱意によって、この開発予定地には10ヘクタールにわたる範囲に石切場遺跡群が分布していることが確認されたのである。出来るならこのまま保存という形で静かに後世に伝えたいものである。すでに、香川県の大坂城石垣に用いた石切場と長崎県の石鍋ホゲット遺跡という石切場は国の史跡に指定され保存されているそうである。

なお、「五日市の自然を大切に作る町づくりを考える会」（事務局・唐澤慶行、西多摩郡五日市町伊奈1215の4、☎0425(96)4882）では、現地見学会や調査発表会もときおり開催しているので、伊奈石に関心、興味をお持ちの方はご参加されてはいかがでしょうか。

石奈伊



- ◎弁当持参
- ◎小雨決行



現地説明会

7月11日(日)

[集合場所]

むさし増戸駅前 9:30
横沢入看板前 10:00

主催 五日市の自然を大切にすまちづくりを考える会

伊奈石の生活絵

伊奈石・石切り場(横沢入)

絵・文 中村清作

直徑十メートル、深さ五

メートルほどのすり鉢状の

石穴を初めて見た時、それ

が石切り場の跡だとほ到底

思えなかった。私が頭の中

で描いていたものは、時代

劇などでよく出てくる露天

掘りの石切り場だったから

だ。横沢入りの石切り場には

露天掘りのところも数ヶ

所あったが、どれも風化し

てしまっていて、説明を聞

いてもよく分からなかった。

それが私が初めて伊奈

石調査に参加した時の感

である。

伊奈石の出会い

伊奈石地区にあった私

の本家を建て売りにした

い、という話を聞き、久

々に本家を訪れた時、伊奈

石の細工場であったとい

う。裏庭にころがっていた

や石仏の破片を買ってき

た。この頃は伊奈石に特別

の関心があったわけではな

いので、家の玄関に無造作

に並べておいた。二十年ほ

ど前のことである。その後

伊奈石の生活絵を描き進め

行くうちに、伊奈石に関心

を持つていった。

伊奈石調査

大悲願寺の裏山に石切り

場があることは、五日市町

史等によって知られていた

が、石切り場の遺跡は調査

されてなかった。伊奈

石研究グループの考古学者

、地質学者、郷土史家を中心

に構成されて、いもによつ

て、初めて本格的な調査が

なされた。私は当初からの

メンバーではなかったが、

その後六回は調査に参加

した。参加するたびに山梨

学院大学の十藤先生から指

導を受け、それにより斜面

にいくつか点する平地が

自のものではなく、テラ

ス(作業場)であったこと

や、ただの石の破片と思

っていたものが、矢穴(ク

サヒを打ちこむためのミ

のあと)であったことが

分つてきた。

絵の中には大きな石切り

場が三方所ある。山の斜面

を平らにならし簡単な小屋

をたてて作業場とした。石

を小さく、運びやすくする

ために、かなりのとこまで

この作業場で加工したよ

うだ。大きいものは本石

を用い、小さいものは割

り砕かれて運んだらしい。

伊奈石は、五日市町伊奈

、横沢、高尾に産出す粗粒

砂岩である。地質学者の柳

良平さんは、高尾山

から横沢入り、日の出町に

露出している粗粒砂岩は、

一五〇〇万年ほど前に海底

に溜っていた粒の荒い砂層

が隆起してできあがったも

のである。

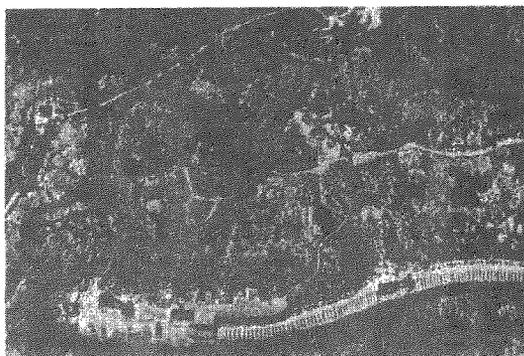
伊奈石は、古くは一三三

八年の五輪塔に代表される

のであり、日の出町では伊

奈の遺の化石も見つかつて

いる。



1993年4月7日完成

よつに、中世結構からの

附近一帯で相対利用されて

いたらしい。

五日市町だとすると、江

戸初期、伊奈にはたくさん

の石工がいて、江戸城築

土木工事に雇われていた

が、その後需要がなくなつ

たため、次々と廃業し農民

になつていったということ

である。

伊奈石は石臼、磨石類、

井戸用いななど多く用いら

れた。軟らかく加工し易い

ので石臼には適したが、反

面風化し易いという欠点

あり、磨石としては次第に

適さけられていった。

伊奈石の調査は秋から春

にかけて行われた。夏場は

生葉の草木によつて石切り

場跡が見えにくくなるし、

またまじしむいのでちよ

つと危険だ。秋になったら

また訪れてみたい。

伊奈石の歴史は中世までさかのぼる

1995. 4. 28

西の風

伊奈石の生活絵

伊奈石・石切り場(五日市・高尾山)

絵・文 中村 清作

伊奈石の調査は横沢入りから始め、秋川の三内、そして五日市の高尾山へと降りた。伊奈石の地層は高尾山の尾根の東から網代の城山まで露出しており、そこで終っていた。

高尾山を降りたい尾根に向って登って行く、伊奈石が無難作にしろがっていた。その中に臼の未成品と思われる荒けずり石が混じっていた。直経三十三、三十六センチ、厚さ十五

、二十センチ位の大きさの円柱状にしたものである。このあたりは樹木がうっそうと繁っており、夏場は快晴の日でもうす暗く、葉の落ちた冬場でないと思われないだろうと思われ

るような谷間であった。その谷を離れようとして石を積み上げ、土をもつて平な場所を作り作業場にしたものと思われる。

ノミやハンマーを使ってくさびを打ち込む溝を掘った。石臼を作るまでの荒加工をしていた。それはとても手間のかかる骨のおれる仕事である。

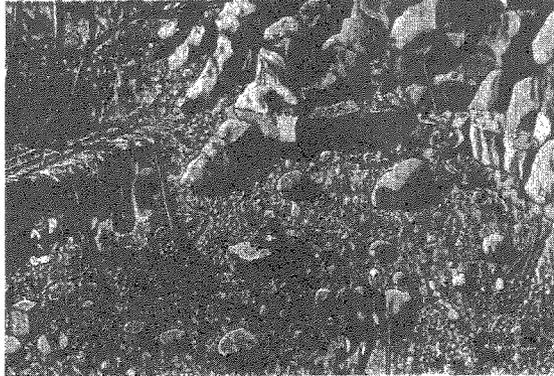
石切り作業においては、石の目を見極めることが大切な仕事の一つである。目に沿って、くさびを打ち込む溝を掘らないとゲンノウ(大きなノミ)で打つてもうまく削れないから、くさびを打ち込む溝は

ノミで掘る。古い時代は標の本で作ったくさびを使ったので溝の幅が広く大きかったと言っ、鉄製のくさびになってからは幅が小さくなってきた。くさび跡の大きさを見ればいつ頃の石切り跡だったかがおおよそ分かる。高尾山のもものは江戸時代の後期のもものと推察されている。

私たちが調査グループも臼の未成品を背負い、山道を下つてみたが、ずしりと鈍鈍の音が胸に響いて、昔の石工の姿を思いまいた思いであった。

伊奈石はその流通経路も調査した。伊奈石は常に乗せられ秋川を下り、多摩川の途中の昭陽、立川を多摩川の下つて川崎、六郷へと運ばれた。昭陽では伊奈石(五日市街道)を伝って江戸へ、また北は青梅、飯

能、川越へと牛馬や大車に繋せて運び出されたと思われる。私も伊奈石調査で飯能市の寺社を訪ねてみた。そこでいくつかの伊奈石製品の墓石や土台石を見つけた。とができた。



1994. 4. 12完成

地質学者の樽さんは「伊奈石工」の調査で、伊奈石の石臼は六分画の臼の目が入っているが、黒色の配岩が混じっており、伊奈石の特徴に現れる白色の石英がほとんど見られない。伊奈石はガラス光沢をもつ。白色石英が混じっているのが一番の特徴であるが、石によつては見分けがなかなか難しい。高尾山では、一枚ずれた異なった地層を掘っていた。このことも今度の調査で分ったことである。そしてこの層はとてむ七沢石に似ている。

また山梨学院大学の十賢先生は「伊奈石は、青灰色(青灰)を帯びた色をしていて、仏教の方ではこういう青い石を神羅石とよぶ。墓石や板碑に使われた石です」

「伊奈石研究」ボジウムでの、同社大学の三輪先生の話によると、「伊奈の石臼は六分画の臼の目が入っているが、黒色の配岩が混じっており、伊奈石の特徴に現れる白色の石英がほとんど見られない。伊奈石はガラス光沢をもつ。白色石英が混じっているのが一番の特徴であるが、石によつては見分けがなかなか難しい。高尾山では、一枚ずれた異なった地層を掘っていた。このことも今度の調査で分ったことである。そしてこの層はとてむ七沢石に似ている。」

「伊奈石研究」ボジウムでの、同社大学の三輪先生の話によると、「伊奈の石臼は六分画の臼の目が入っているが、黒色の配岩が混じっており、伊奈石の特徴に現れる白色の石英がほとんど見られない。伊奈石はガラス光沢をもつ。白色石英が混じっているのが一番の特徴であるが、石によつては見分けがなかなか難しい。高尾山では、一枚ずれた異なった地層を掘っていた。このことも今度の調査で分ったことである。そしてこの層はとてむ七沢石に似ている。」

1995. 6. 2
西の風

伊奈石見学会

4月1日(土)

集合場所

まさし
増戸駅
AM.10:00

大悲願寺

石山の池

横沢入

五輪坂

PM.4:00
解散

亀の甲下

河原石切り場遺跡

(弁当持参・小雨決行)



問い合わせ先

樽良平 (伊奈石研究グループ代表)
TELFAX 0425-96-1674
住所 五日市町入野1112

4月2日(日)

ふるさと五日市文化講演会

伊奈石研究シンポジウム

会場

増戸会館
F2 集会室

会費500円(学生無料)



展示・絵・写真・他

(弁当持参)

AM.10:00~12:00

- ・伊奈石と地質
- ・伊奈石石切り場遺跡群
- ・伊奈石石工文書と大悲願寺

PM.1:00~4:00

- ・伊奈石石造物の分布
- ・石臼
- ・石工加工技術と矢穴
- ・高遠石工と石仏
- ・各地の石切り場遺跡と石工

主催

伊奈石研究グループ

五日市の自然を大切にする
まちづくりを考える会

共催

秋川流域自然保護団体協議会
三吉野・瀬戸岡の文化財を守る会

後援

日本環境学会
文化財保存全国協議会
とくまの環境浄化財団

地方史の窓

◆消滅の危機にある「伊奈石石切場跡」

東京都西多摩郡五日市町の横澤から高尾地区の山林に大規模な石切場遺跡群が遺されている。この地域に産出する伊奈石と呼ばれる硬質粗粒砂岩を用い、板碑、五輪塔、石仏、墓石、石臼等々に加工された石製品は多摩地域に分布がみられる。そのなかで板碑は造立時期が室町初期より中期に限定され、その分布も十数キロメートル範囲に限られるという非常に地域性のあるもので注目される。その後、十六世紀以降は墓石や石臼に加工され流通していたが、近世中期には石工の多くが廃業したため、石切場としての役割は大きく減じたが、細々と昭和の初年まで石の切り出しが続いた。しかし、今は、石切場は藪に覆われ人々にも忘れられてしまっていた。

ところが数年前より遺跡群の所在する横澤入地区の山林に63ヘクタールに及ぶ大規模な宅地開発計画が持ち上がり、同地域の自然の破壊を心配する人々によって自然にとどまらず歴史的環境の調査が始まった。その結果、この開発予定地には十ヘクタールにわたる範囲に石切場遺跡群が分布していることが確認された。遺跡は露頭掘りの跡や塹坑、作業場としたテラス、加工後の屑石を捨てたズリ場などであるが、露頭には「矢穴」が露出して見られ、また半製品の石造物もたくさん発見されている。このような石切場の遺跡群が一括して見つかったのは関東以北では初めてであり、しかも近世中期に石切場としての役割を終えているため、近世の産業遺跡としても重要な存在であると思われる。現地見学会や調査発表会もときおり開催されているので是非とも一度参加していただき、その史跡としての価値を認めていただけた方々には、保存活動にご賛同いただき、ご支援を願いたい。連絡先は、「五日市の自然を大切に作る町づくりを考える会」代表・宮下力、東京都西多摩郡五日市町留原899-17、☎0425(96)3556です。 (宮田 満)

「伊奈石研究シンポジウム」における講演の要旨 (1995.4.2 増戸会館)

石臼の再確認

同志社大学教授 三輪 茂雄

石臼のことは20年前の1975年にやりはじめ、その時に初めてここ五日市へも来た。その時に柴田さんから聞いた話を自分の著書の中に入れておいたのに今まで忘れていた。たまには自分の本も読んでみるべきである。その時の話に「トッチャーナゲ」というのがある。「トッチャーナゲは旨かったナー」というてこのへんのおばちゃんとおしゃべりしながら話してくれた。これは小麦の粉で作った団子だが「挽き割はな」といって、小麦を挽く時にいっぺんに挽いてしまうとフスマの混じったそのまま食えないやつができる。それをもう一度挽くと出てくるやつが「挽き割はな」というわけだが、これは普通は捨ててしまうものである。

これは実に非常に大事なことなのだが、臼があれば普通なら食べられないものを食べられるのであ

る。江戸時代、百姓には物凄い年貢がかかり、白米など食べられなかった。私のじいさんたちも「白い御飯なんか食べられなかったよ。あれは全部年貢に出すんだから」なに食ってたんやと聞いたら、それはなにか残っているものを食うんで、小麦粉のかすなんかをまた挽いて食うわけだ。庶民が石臼を本当に必要とした時代があったのである。江戸時代という時代はそういう百姓の工夫というか働きが基本にあって栄えたのだと思う。

そのあと京都で石の職人さんたちを調べたのだが、最近は石臼など作らないという人が多い、その中に一人、ずっと石臼をやっておって今でも作っているという人がいた。息子はサラリーマンになっていて跡継がんからおまえに教えるから習え、という。で、目立て師というのは石屋とは違い目立てを専門にやる人があるのだそう。それから学校の一角に場所をかまえて鉢巻きしめてコンコンやりだしたら法律の先生が通りかかって、「今時そんなことさせる先生がおるんか」「先生の中には変なものもありますよ」っておしゃべりしていたらそのうちむこうも気づいて「あんたおかしいな、先生ちゃうか」

石臼は精密機械の分野の学者がびっくりするほどの精密機械の機構を持ったものであった。しかしそれは「臼師」という目立て師がいた時代の話。

資料に小難しいことをいろいろ書いたが、肝心なことは石臼で挽くとおいしい、ということだ。ソバは石臼で挽いたものでなければ食べたもんじゃない、というのはソバ屋さんの常識である。京都に粉屋があって、そこでは石臼のソバと普通のソバと並べ、下手な職人の店はこっちでいいんや、上手な職人の店はこっちや、と分けている。そこへいくと「あそこのソバだめや」と教えてくれる。

なぜ石臼で挽いたソバでなければためか、ということ資料に書いておいたが、ケンブリッジ大学のパウデン教授が鋼鉄の機械で瞬間的に摩擦するとある一部分に500～1,000度というものすごい高熱が出るという実験をやっていて、ああ、石臼でなければだめなわけはこれだな、と思ったのである。でもうどん粉の場合は機械で挽いてもダシを変えればわけがわからなくなっちゃう。ごまかしがきく。だから、日清製粉とか大会社ができるのだ。

資料に臼の目がかいてあるが、これは八分画という。このへんの臼（伊奈臼）は六分画である。天竜川から東の東国は六分画で、西国、近畿地方から中国はすべて八分画である。ところが不思議なことに九州に行くともた六分画があらわれる。

紀元600年、推古天皇の時代に「日本書紀」に九州大宰府の観世音寺^{てんがい}碾磑が載っている。これは江戸時代からずっと謎の物体とされて来た。私はこれを調べてみてびっくりしたのだが、これは日本に一つしかない1mを超える臼で、上の表面は風化しているが、上臼と下臼の間がピッタリして一分の隙もない立派なものだった。これが日本に一番最初に入って来た臼で、なぜこれが入って来たかというシルクロードまで話がいつてしまう。これが入った後日本では結局これを使うことができず放たらかしになっていた。だから奈良時代、平安時代と、日本では搗き臼を使い、石臼は使われなかったのだが、鎌倉時代になって「石磨」というのが現れる。「石臼」という言葉は間違いで本当は「石

磨」と言うべきだ。これがはじめて出たのは京都奈良の有名なお寺で、当初は一部の高僧くらいしか持てなかった。

臼はかならず左回りに回す。これは世界中同じである。ほかの機械がみな右回りのせいかテレビドラマなどでは逆にやっているが、テレビ局に抗議するべきである。ところが、佐渡島では逆回しに回す。私は慣れてしまえばどちらでも良いと考えている。

伊奈石研究シンポジウムレジュメ 1995年4月2日(日) 東京都五日市町増戸会館

石臼の再確認

同志社大学工学部 三輪 茂雄

一見単純で原始的な形をしているが、基本的には石臼は精密な機械の機能をそなえていた。臼の調整は精密機械並みに行われていた。臼師がいた時代のはなし。

なぜ石臼か。高速で粉碎するとなぜ局部的発熱現象が起こるのであろうか。この説明には次の事実がわかりやすい。

1936年にケップリッジ大学のパウデン教授は巧妙な装置を作って、2つの金属摩擦面における瞬間的溫度上昇を熱電位差によって測定して驚くべき実験結果を発表した。

「普通速度と荷重の条件であっても、金属表面は局部的に、摂氏 500~1000度という高温を発生する。しかもこんな高温になっている気配はどこにもない。金属全体は、一見全く冷たいままである。加熱の激しい部分は、実際に摩擦している薄い層に限られている」

金属ですらこうである。熱の不良導体であるソバではもっと高い温度になるかもしれない。どうしてこ

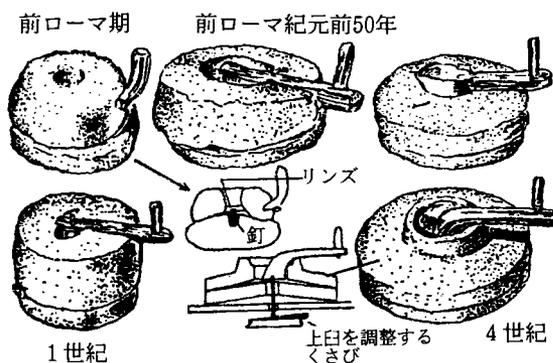


図1 ローマ時代のカーン(石臼)

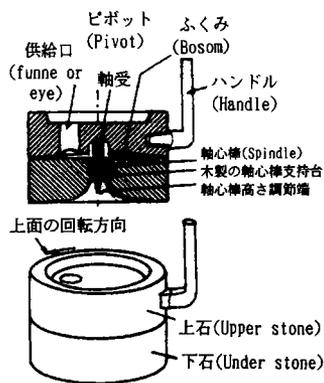
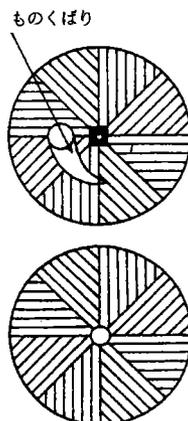


図2 石臼の構造と目

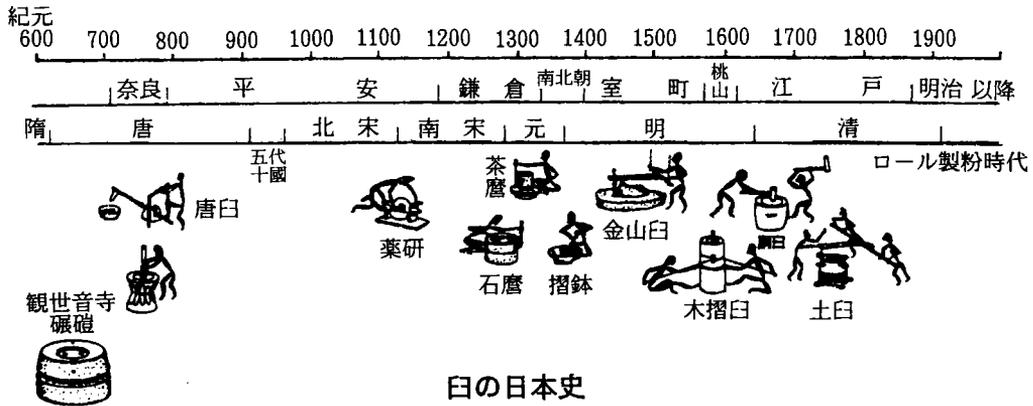


ういうことになるのであろうか？それは固体と固体との接触面は、ミクロに見れば凸凹があって、お互いの突起部だけで接触することになる。ここにすべての荷重がかかって、局部的に激しい摩擦が起こる。ちょうどハイヒールのかかとで踏

み付けられた時の様子に似ている。その結果、金属や鉱物なら局部的な溶融が起こり、植物ならばいわゆる“焼け”ないし“熱変性”が起こる。

だが、パウデン教授がいうように、その変化は薄い表面に限られていて、一見何の変化も認められない。しかし人間の香りと味の感覚は微妙だから、この変化を感知するのである。

一見温度変化がなくても、局部的な数百度の温度上昇が実測された。



臼の日本史

なぜか臼の日本史の最古の観世音寺碾磑（九州太宰府のお寺にある）が最大でもっとも完全な加工方法なのか。その謎は？ どこまで解けていて、なにが課題として残っているのか。

石臼には粉挽き臼と茶磨とが併存する。どちらも鎌倉時代に日本に伝来した。宮中や京都五山のお寺や将軍家などにしかなかった石臼（茶磨）が戦国時代に武士の手に移り、茶道を通じて、火薬製造道具となった過程ほど興味深いものはなからう。

そのヒントは鉄砲伝来から信長の長篠の戦いでの鉄砲使用までの鉄砲秘史にあるが、いまだ公表されていない事実である。

火薬は硫黄と木炭と硝酸カリウムの粉をまぜあわせて作った。硝酸カリウムはトイレにあった。火薬の歴史は石器時代からあったが、それを解く鍵は火の発見にかかわるが、現代人は火起こしの技を失っている。まず火起こしの技を習得し、つぎに茶道の作法の前に茶を挽くことを習得すべきだ。また石臼で粉を挽く体験ももつべきだ。現代人では長続きはしないが、体験しておくことは必要だ。

石臼に関する15問（石臼に象徴される日本の生活文化とは）

- 1、石臼はどこでいつ発見されたか？（ルーツ）
- 2、なぜ臼の日本史の最古の観世音寺碾磑（九州太宰府のお寺にある）が最大でもっとも完全な加工方法なのか。その謎は？
- 3、臼の技術はシルクロードをどちらに進んだのか？
- 4、日本の在来の石臼と西洋の臼との基本的相違は？
- 5、石臼の日本史と西洋や中国の歴史との基本的相違は
- 6、石臼の目のパターンを書け？

- 7、目のパターンの日本地図からなにがわかるだろうか？
- 8、上臼はどちらに回すべきか？（例外と機械まわしは別）
- 9、未解明の石臼のなぞとは？
- 10、自然破壊とならぶ生活文化の破壊とは？
- 11、石臼は機械工学の原点だ（含まれている機械要素10を挙げよ）
- 12、塩ふき臼伝承が世界中にあるわけ？
- 13、食物はなぜ石臼でなければならないのか？
- 14、石臼と戦国武将、火薬はどこに接点があるのか？

石工加工技術と矢穴

檀原考古学研究所 北垣 聡一郎

石を「積む」ということと「組む」ということについてお話しするが、石を「積む」事例がどんなところにあるかということ、だいたい5世紀の後半から7世紀、古墳時代である。古墳の中でも横穴式石室に使われている技法がそれで、大和の石舞台古墳の中に入ると玄室という遺体を置くところが高さが高いところで3m以上、両側壁は自然石の長さが2m以上あるような大石を大きさをうまく取り合わせながら一つの四角い長方形の部屋を作っている。自然石であるから一つ一つ石質も大きさも違うわけだが、これをうまく組み合わせて一定の高さにし、天端の部分ではピッタリ一致させるというのだから技術以外の何ものでもない。従って、「積む」技術は本来は自然石を積む技術である。この自然石を積むことを「素積み」と言うらしい。これは昨日樽先生からはじめてうかがった。素積みの「す」はすうどんとかすそばとかの「素」で、何も入っていない、ということだ。最近の石垣などを見るとききれいな加工した石でコンクリートで目地をピシッとつめてしまっているものが多いが、そうではなくその辺にゴロゴロころがっている大小さまざまな石を自在に扱いながら一つの石垣の形に積んでいく。「野面積み」とも言う。さきほどの石舞台古墳などはまさしく「素積み」であると言える。

一方、「組む」方だが、実は横穴式古墳より一つ前の竪穴式古墳に見られる。遺体を横の口を通して入れるのが「横穴」、上から下向きに入れるのを「竪穴」というのだが、その場合にも石棺を作って入れる。石棺は一つの箱であるが、その作り方はくりぬいて作る場合と組み合わせて作る場合がある。昨日大悲願寺で伊奈石の井戸杵を見たが、あれは4枚の板をスポンスポンとはめこんでいったものだ。こういう、石材を加工する技法というのはだいたい4世紀頃からある。加工する技法の方が古い、ということだ。

「積む」技法の方で他の例をあげると信長の安土城、秀吉の大坂城がある。この時代の城の石垣は大小凹凸のある石を全体としてバランス良く積んでいく技法が見られる。古代の自然石を積む技法が再び近世の初頭に復興したものだと言えると思う。

「組む」方が本題なのだが、一般に「組む」技法というのは、山からもともと自然の石を切り出し、

粗加工からはじめてだんだんと精緻なものに仕上げていく。そうやって石がある目的のものにできあがっていく過程、これを「石作り」と言っている。だから、私たちが昨日みたさまざまな石造美術品はすべて「石作り」という言葉であらわすことができる。

「玉作り」とか「鏡作り」「木作り」などと言う古代の言葉がある。例えば「玉作り」とは玉類を完成品にするように磨きあげていく技術のことで、ある段取りに従って素材を製品化していくことが「作」なのである。古事記の中に、崇神天皇の妻である日葉酢媛が亡くなった時、媛のために石棺を作った男に対して崇神天皇が「石作りの連」という名前を与えたという記事が見える。こういうことから、「石作り」という言葉の語源は石棺を作ること、であることがわかる。で、石棺とはふたを作り、中をくりぬくかあるいは4枚の一枚岩を組み合わせるかして箱を作った、まさに石を「組む」技法の完成品である。

奈良の寺院には石造美術品が多いが、その中である時期から「伊」一族という石作りを行う技術者集団が登場して来て、鎌倉以降のある時期全国を席捲するようになる。彼らの製作の中心は磨崖仏や石仏などの仏像が中心であった。こういう一族に対して与えられた名前が「石大工」である。木を扱う人に対して私たちは「大工」というが、大工に対して「小工」という言葉もあった。これらをまとめると「工」といい、大工が親方になった。こうした「木工大工」に対して石作りを行う大工を「石大工」と言ったのである。従って、石大工とは自然石を扱う者のことではなく、加工したものを使う技術者である。現在、そういう墓碑を作るような人のことを「細工石工」と言っている。

運搬具についてお話しするが、昨日、大悲願寺観音堂の裏の軒下に木造の車輪が二つあった。石山寺縁起絵巻の中に車の上に木を積んで牛がそれを引ている絵がある。これは「八葉車」といって本来は京都の平坦部の道で貴族が乗る乗り物の「牛車」の構造なのだが、14世紀になると材木を運ぶようになり、そして江戸時代になると石材を運搬する車に変わっていく。それと同じものを昨日私は大悲願寺で見たことになる。これはみなさんの伊奈石の研究のためにも重要な資料となるものだし、町にとっても貴重な文化財なので、ああいった雨ざらしの場所ではなくきちんとした管理を望みたい。

最後に、伊奈村の石工が江戸城に入ったという伝承がある。本当にそうなのか、ということだが、小田原に関八州の石工の総元締めという家柄で、江戸城を作ったときの大將であったという青木さんというお宅がある。江戸城には伊豆石が使われているので、それを運ぶ棟梁だったようだ。その御先祖の名前は石屋善左衛門（田中善左衛門）といった。この場合「石屋」という言葉は「石大工」ということだろうと私は考える。この人は石垣を積む仕事ではなくて石作りの仕事をしていたのではないか。

私は、江戸城に入った伊奈の石工たちも、石垣を積むこととは別の、石造美術品を作る仕事に従事したのではないと思う。この当時石垣を積む仕事には専門のグループがいた。積むことと石大工とはまったく性格の異なるものだったのである。

高遠石工と石仏

信州・高遠町郷土史家 春日 太郎

高遠に石工の技術が伝播したということをもまずはじめに考えてみたい。東大寺が焼けて、重源が再建を図った。そのころ宋の国からやって来ていた商人に重源は石大工を斡旋してくれと頼み、数名の石工が日本に渡って来た。そして東大寺のいろいろな石造物の製作をした、というのは歴史上の事実である。一方、箱根の芦の湖畔にたいへん立派な宝篋印塔があり、川勝先生が関西から渡って来た関東石工の元祖のものであろう、という考察をされている。その宝篋印塔を作った大蔵系の石大工が鎌倉時代に鎌倉の方に移っていった。そして鎌倉街道は高遠にも通じていたわけである。

高遠は鎌倉の御家人つまり家来として鎌倉と往来し、つまり鎌倉と直結していた。吾妻鏡にも、高遠の藤沢郷の藤沢清親という立派な御家人が出てくる。そういう顕著な例もあるので、鎌倉街道を通して鎌倉の大蔵系の技術が伝わったことは明らかである。北原村の出身の二人の石大工が、山梨県の窪八幡という八幡様の、門の前の小さな溝にかかる石橋を作っている。これは国の重要文化財になっている素晴らしいものだが、こういう立派な石工が出ているということは中世には既に石工の技術が入っていたことをあらわしていると思う。昨日もちらの旧宗剣寺墓地ではっきりと「信州高遠荒町石工秋山和助 義兵衛」と銘の入ったものを見せていただいた。荒町というのは北原集落と続いている。これは江戸時代だが、窪八幡神社の石橋は天文年間のものである。天文の銘があるということは、それ以前から高遠には石工がいて、技術が伝わっていたということがわかる。

次に、高遠の石工がどうしてもそんなにたくさん、集団的に出現したか、という点の考察だが、特に北原、荒町、片倉といった地区は山間の部落で耕地が狭く、水が冷たいために百姓だけでは生活が成り立たなかった。一方、高遠領には小規模ではあるが石の出るところがあった。花畑地籍からは花崗岩、片倉の輝石安山岩、それから去年水上というところの石切り場が発見されている。山から石を切り出す仕事はそれほど資本もかからないことから、百姓が副業としてはじめたらしい。高遠の石工はこのように、出稼ぎにいってもはじめは石山をみつけてその石山から石を切り出す仕事を中心にやっていたようだが、そのうち細工石工もできた。

資本がかからないし日当も割合高く取れた、ということに加えて高遠藩自体も貧乏であったために村人に石工を奨励した。石工は出稼ぎして稼いだ分運上金、つまり税金を藩に収めたのである。そんなわけで、おやじも石屋だし、いともおじさんも石屋だ、だからおれも石屋になろうか、というような村の雰囲気ができ、石屋になることが一つの流行になった時期もあるようだ。現在、出稼ぎ先で残っているものに、自信作の大作には必ず「信州高遠石工何某」と名字まで記しており、誇示しているような感じが見える。一家の生活を背負って旅に出たからには手ぶらで帰るわけにはいかない、命がけの仕事である、という気負いが出ているように思う。

高遠藩は旅稼ぎを奨励すると同時に旅に出る石工に対し非常に厳しい掟を課し、大酒を飲むのだ、けんかをするのだ、博打をするのだといった行為を厳しく禁じた。石工は必ず法度を守って帰ってく

るという一札を入れて出発し、実際真面目に良く働き、腕も良かったので、高遠石工の名声が上がっていったのであろう。

当時、江戸時代にはたびたび凶作があり、洪水があり、干ばつがあるということで災難から守るために神仏を信仰するということが庶民の中に広まっていき、石工の仕事が繁盛するようになって来た。また、特に江戸初期には都市造りが進められ、石材の需要が増し、各地で石山の開発が行われた。こんなわけで、高遠の石工にとっては旅稼ぎに出ればあぶれることがない、必ず仕事がある、という条件ができていたのであろう。

中央史での活躍を見てみると、武蔵風土記稿という書物の中に高遠からこの伊奈村に来て移住した石工のことが出ている。ちょうど家康がお国入りで江戸城を築く、その時に伊奈村からこれらの石工が動員されて石垣を積んだのか他の仕事をしたのかわからないがとにかく江戸城で働いたという。もう一つは、これは時代がずっと後だが、ペルリが来航した時に、出稼ぎに出ている高遠の石工の中から100人選ばれて品川の砲台を作る仕事に動員された。この砲台は当初七つ作る予定だったが今残っているのは一つだけである。

細工石工として高遠の石工で最高の存在は守屋貞治である。九つの時に兄が亡くなり、十九の時に父が、二十の時に妹が亡くなるというように多感な時期に肉親を相次いで亡くした。で、石工になるにはだいたい十五の頃から旅稼ぎの師匠に付いて二十まで修業したようで、貞治も同様だったと思うが、一本立ちしてからは亡くなった肉親の菩提を弔うため、また、押し寄せる情熱にまかせて細工の道を突き進んだ。22才の頃には既に岐阜県瑞浪の禅躰寺という尼寺に33体の観音を残している。これが彼の製作のはじめだと思う。30代の頃までは駒ヶ根で寂応という和尚さんに非常に大事にされた。そして諏訪の温泉寺の願王和尚—この人は非常に傑物で地藏経や観音経を広めるためにほとんど素足で全国を旅した—の下で仏道に深く帰依したという。こうして貞治の作品も全国的に残っている。高遠の石工はあまり関西へは行かないが、貞治は遠く山口県まで行っている。

彼は67才の時に粉が目に入ったことが原因で目を痛め、仕事ができなくなったのでその時期に若い頃からの自分の製作を思い出して「石仏菩薩細工」という記録を書いている。これを頼りにして訊ねていくと彼の特徴のある仏菩薩を見ることができる。これには333体が記録されているが、個人からの依頼は記録されておらず、私が探して見てまわった感じではもっとずっと多くの作品を残していると思う。

貞治が伊勢の宝珠院という寺で地藏を作った。その細工帳に次のような言葉を書いている。「それよりだんだん思い思案などめぐらし、いろいろと工夫をなし、—ただ今日明日をつとめ、今日の日いくばかり」まあ、いろいろ悩みもあるけれども、ただ今日、あるいは朝早くから、自分の道を黙々と行くだけで、ほかには何も考えない。非常に無欲で真面目な一生であったことがうかがえるのである。

図版 1

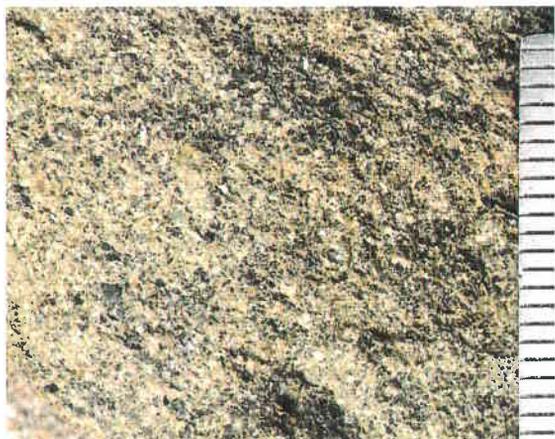


横沢入の航空写真 西から東を見る



五日市町高尾地域上空から北を見る 秋川が流れ、上に横沢入が見える

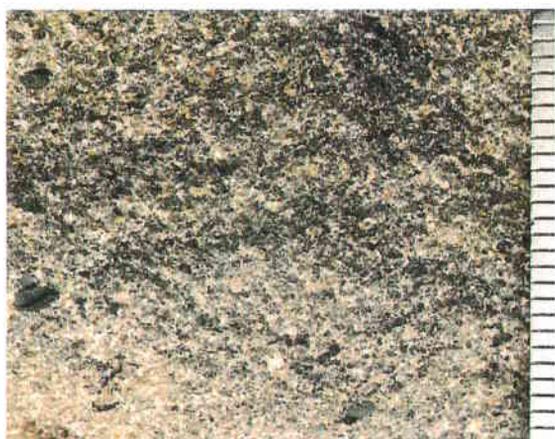
图版 2



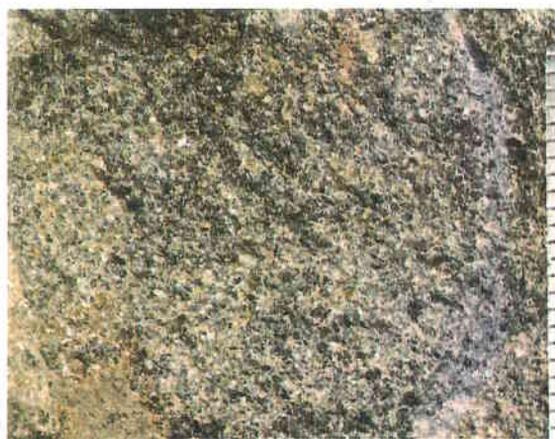
伊奈石（横沢入）表面拡大



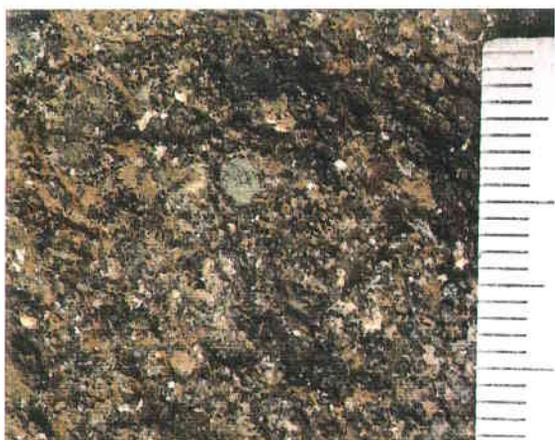
伊奈石（横沢入）表面拡大



伊奈石（樽石）表面拡大



伊奈石（高尾石）表面拡大



七沢石表面拡大



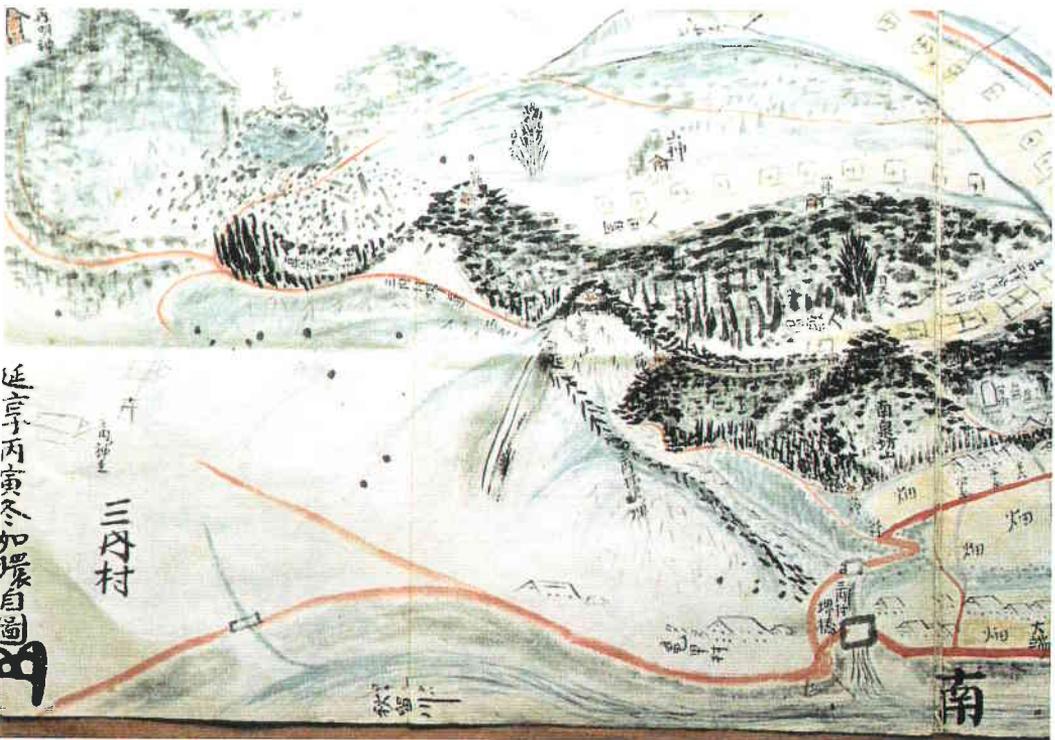
七沢石表面拡大



横澤村图 延享3年(1746)大悲願寺24世住職如環作



横澤村図部分 石山ノ池、富田ノ入



横澤村図部分 三内村、龜ノ甲村、愛宕山

図版 5



横澤村図部分 深入道、杵八谷戸



横澤村図部分 大悲願寺、油ヶ谷戸

図版 6



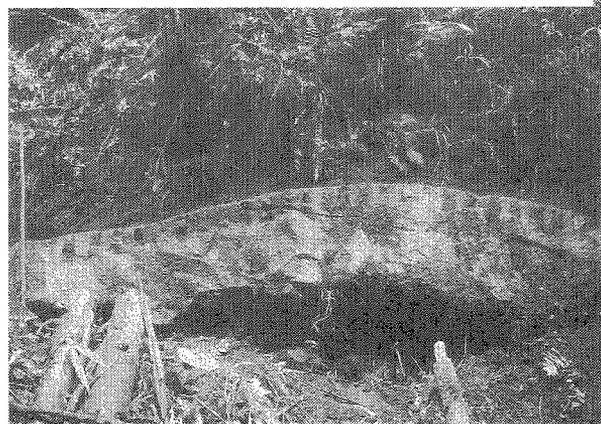
横沢入天竺山



天竺山 東豎坑



天竺山東
豎坑北
山神社



石山ノ池 矢穴石

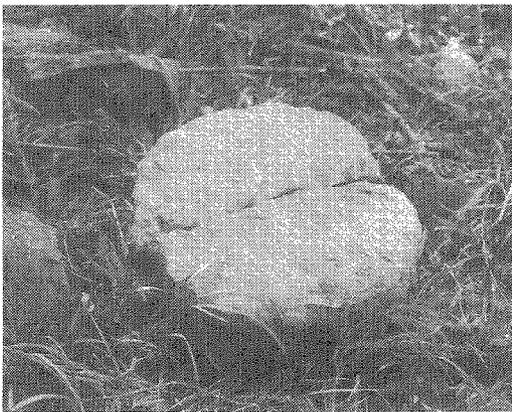


石山ノ池 山神社下 野積み石垣

図版 7



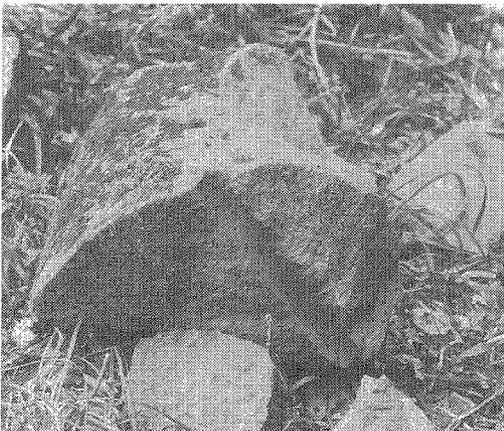
現在の石山ノ池 現地見学会



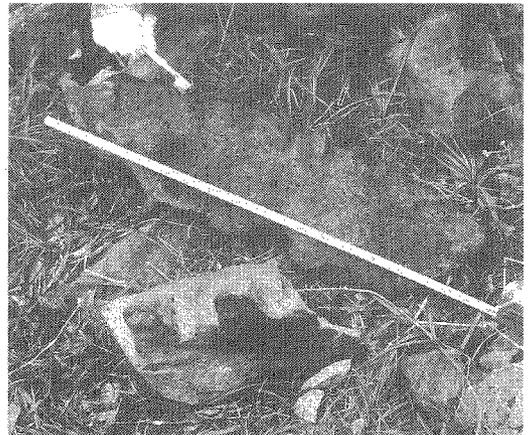
天竺山東壑坑北テラス 石臼未成品



石山ノ池南テラス

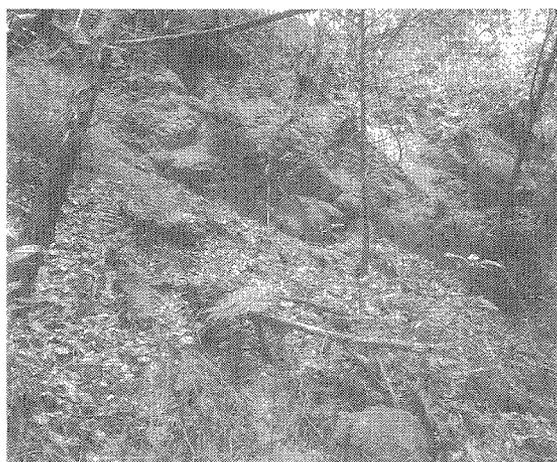


石山ノ池南テラス 発破用ドリル穴跡



石山ノ池南テラスの矢穴石

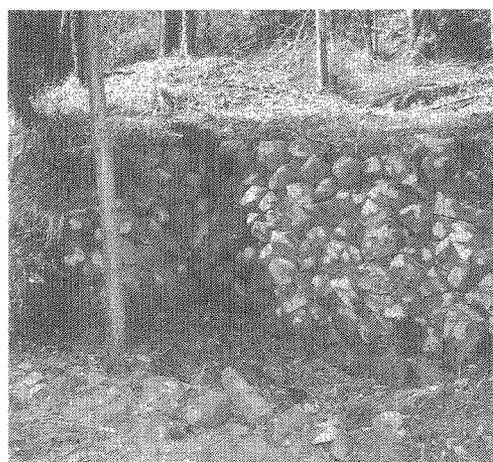
図版 8



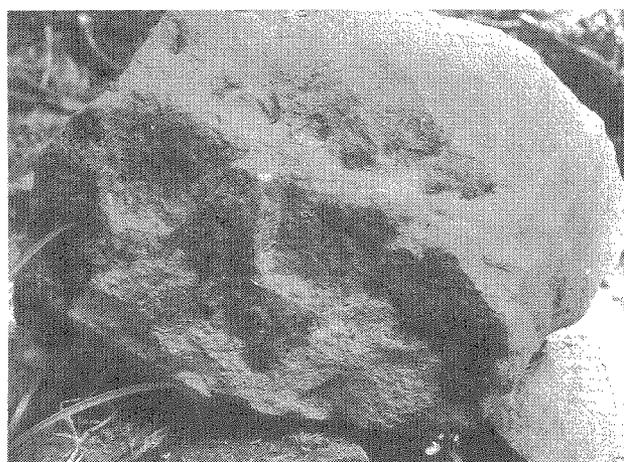
釜ノ沢上 露頭



釜ノ沢上テラス 墓石未成品



富田ノ入奥 野積み
戦時中のズリ積み出し用



富田ノ入奥 矢穴石



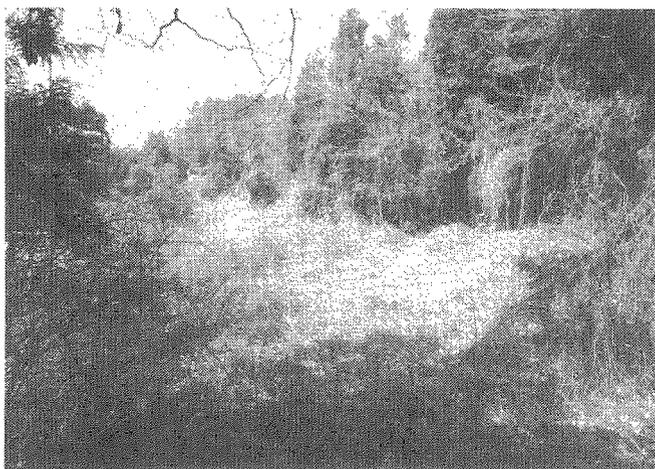
富田ノ入 古道



富田ノ入北中段豎坑南テラス下ズリ
石臼未成品

図版 9

宮田東沢上テラス



宮田東沢ズリ



▲
◀ 日の出団地 伊奈石露頭

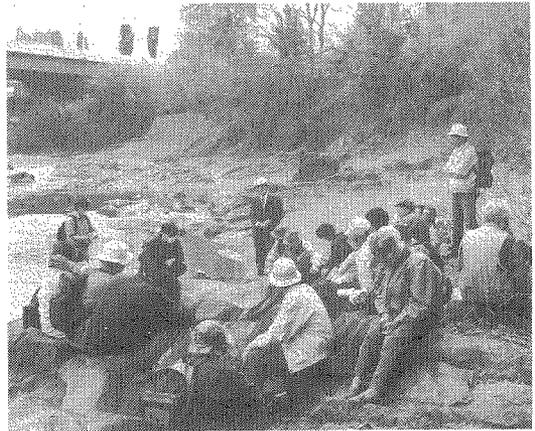
図版 10



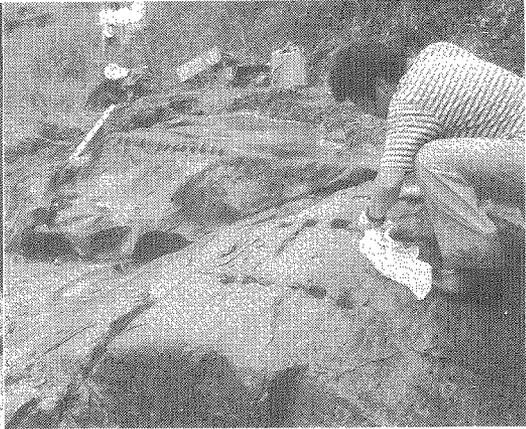
亀ノ甲下 秋川河原 伊奈石露頭



秋川河原 伊奈石露頭 矢穴跡

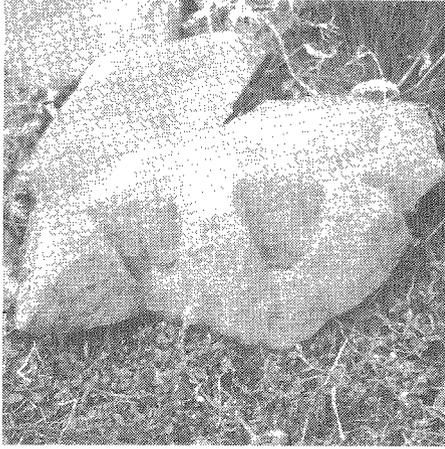


秋川河原 伊奈石露頭 伊奈石シンポ巡検風景

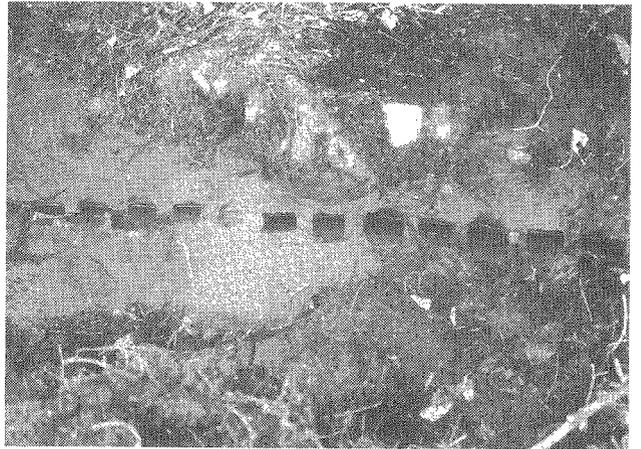


秋川河原 伊奈石露頭 調査風景

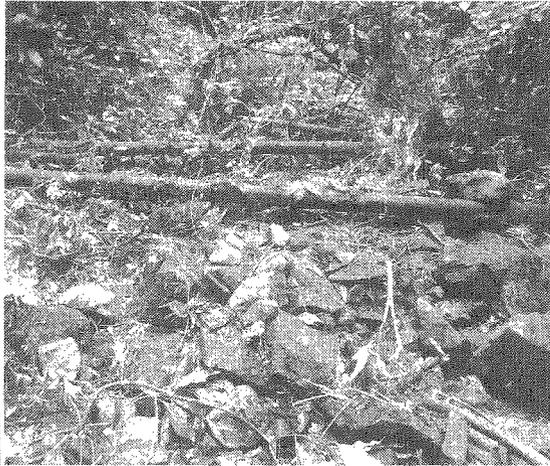
図版 11



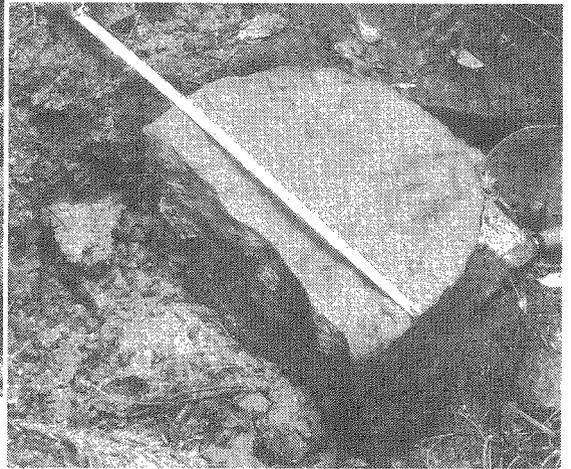
五日市町高尾 法光院跡地 矢穴石



五日市町高尾 法光院跡地下 矢穴跡



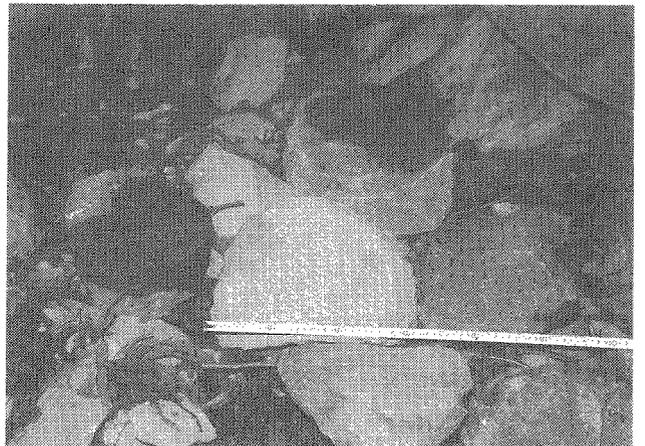
網代城山東北の沢 ズリ跡



網代城山東北の沢 石臼未成品

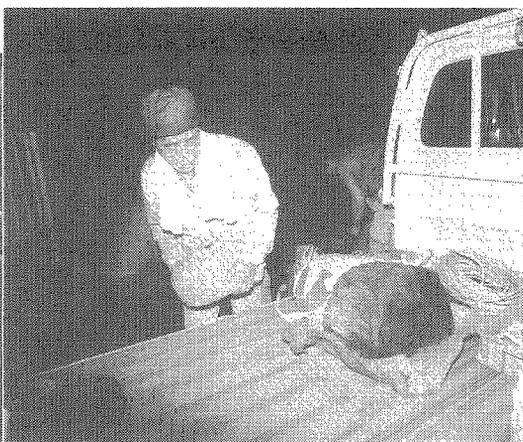


高尾山 瀬戸沢 ズリ跡

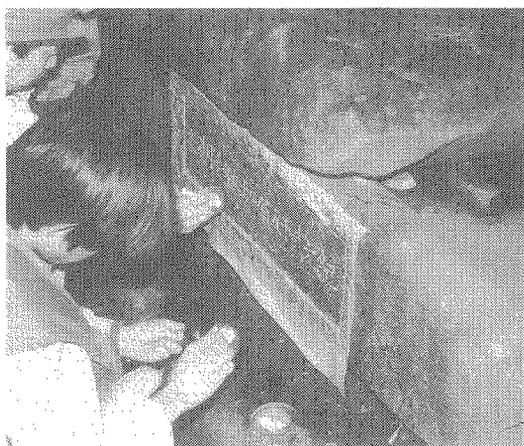


高尾山 瀬戸沢 石臼未成品

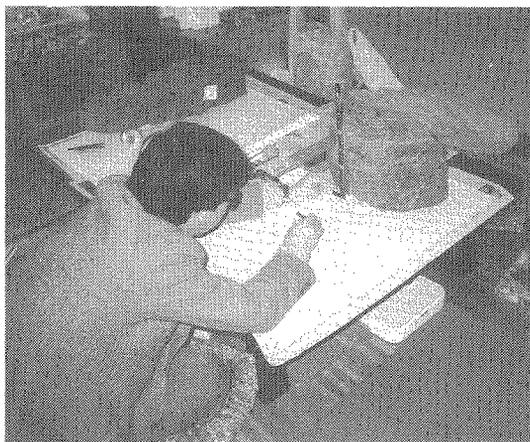
図版 12



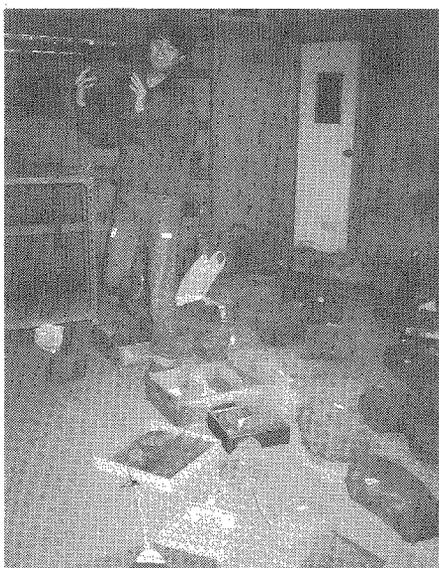
伊奈石遺物の運び出し



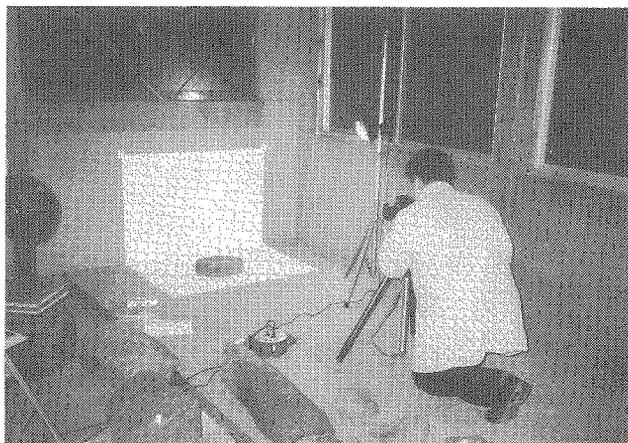
伊奈石遺物拓本どり



伊奈石遺物の実測



伊奈石遺物の整理

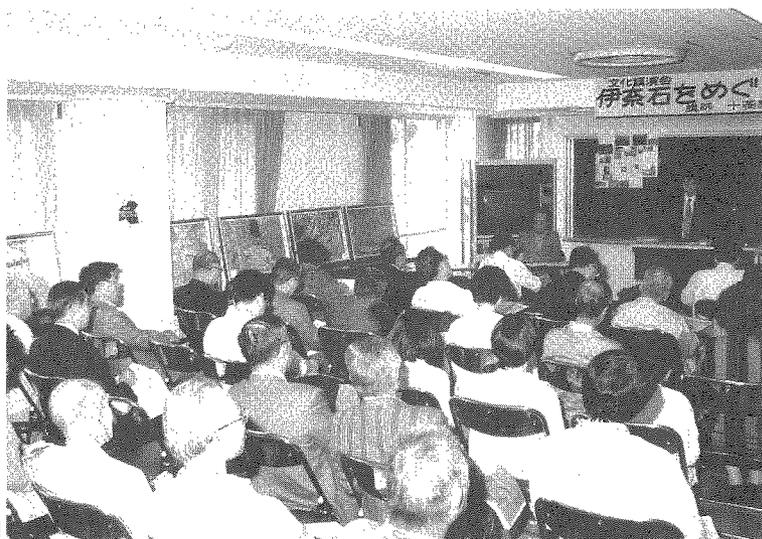


伊奈石遺物の撮影

図版 13



秋留台シンポ 伊奈石展示



文化講演会
「伊奈石をめぐって」



伊奈石研究シンポジウム



Y-1 富田ノ入石山ノ池 矢穴石



Y-2 富田ノ入石山ノ池東 石塔未成品



Y-3 富田ノ入石山ノ池東 五輪塔(火輪)未成品



Y-4 横沢入 矢穴石



Y-5 横沢入 矢穴石



Y-7 荒田ノ入 矢穴石



Y-8 横沢入 矢穴石



Y-6 宮田東沢テラス 矢穴石



Y-10 富田ノ入石山ノ池 矢穴石



Y-11 富田ノ入石山ノ池東テラス 石臼未成品

横沢入伊奈石製品写真



Y-12 富田ノ入石山ノ池 ノミ痕



Y-13 富田ノ入石山ノ池 矢穴石



Y-14 横沢入 矢穴石



Y-15 富田ノ入石山ノ池東 石臼未成品



Y-16 富田ノ入石山ノ池北テラス
石臼未成品



Y-17 横沢入 矢穴石



Y-18 宮田東沢テラス 矢穴石



Y-19 横沢入 矢穴石



Y-20 横沢入 矢穴石



Y-19 横沢入 矢穴石



Y-21 横沢入 矢穴石



Y-22 横沢入 矢穴石



Y-23 横沢入 矢穴石



Y-24 横沢入 矢穴石



Y-25 横沢入 矢穴石

■ ■ ■

横沢入伊奈石製品写真

図版 16



Y-26 横沢入 矢穴石



Y-27 横沢入 矢穴石



Y-28 横沢入 矢穴石



Y-29 横沢入 矢穴石



Y-30 富田ノ入石山ノ池 石臼未成品(矢穴)



Y-31 横沢入 矢穴石



Y-32 宮田東沢テラス 矢穴石



Y-33 宮田東沢テラス 矢穴石



Y-34 富田ノ入石山ノ池 矢穴石



Y-35 富田ノ入ズリ場 加工品



横沢入伊奈石製品写真



H-1 日の出団地 矢穴石



D-12 平井中野 横倉家 石臼 (下臼)



D-13 平井中野 横倉家 石臼 (上臼)

日の出町伊奈石製品写真



S-1 秋川河原三内亀ノ甲 矢穴石

三内伊奈石製品写真

図版 18



T-1 高尾城山沢 石臼未成品



T-2 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品



T-3 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品



T-4 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品



T-5 高尾瀬戸中沢テラス 五輪塔(火輪)未成品



T-6 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品



T-7 高尾 石臼未成品



T-8 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品

高尾伊奈石製品写真



T-9 高尾瀬戸北沢テラス 石臼未成品



T-10 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品



T-11 高尾瀬戸中沢テラス
石臼未成品



T-12 高尾 石臼未成品



T-13 高尾 石臼未成品



T-15 高尾法光院 矢穴石



T-16 高尾法光院 矢穴石



T-18 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品



T-19 高尾城山沢 石臼未成品



T-17 高尾法光院 矢穴石

...

高尾伊奈石製品写真



T-14 高尾法光院 矢穴石



T-20 高尾法光院 矢穴石



T-21 高尾山 石臼未成品



T-22 高尾瀬戸中沢テラス 石臼未成品

高尾伊奈石製品写真



A-1 網代城山沢
石臼未成品 (上臼)



A-3 網代城山沢 矢穴石

網代伊奈石製品写真



D-1、2 中島氏 手洗鉢



D-3 中島氏 石臼 (上臼)



D-4 山下氏 茶臼 (上臼)



D-5 山下氏 石臼 (上臼)



D-6 山下氏 石臼 (下臼)



D-8 水裁荘 石臼 (上臼) 臺台石



D-7 中島氏 石臼 (下臼)



伝世品伊奈石製品写真



D-9 榊 小峰家 石臼 (上臼)



D-10 伊奈新宿 唐沢氏宅付近 茶臼 (下臼)



D-11 榊 小峰家 石臼 (上臼)



伝世品伊奈石臼写真



D-15
三内吉田家
石祠 幡立て台

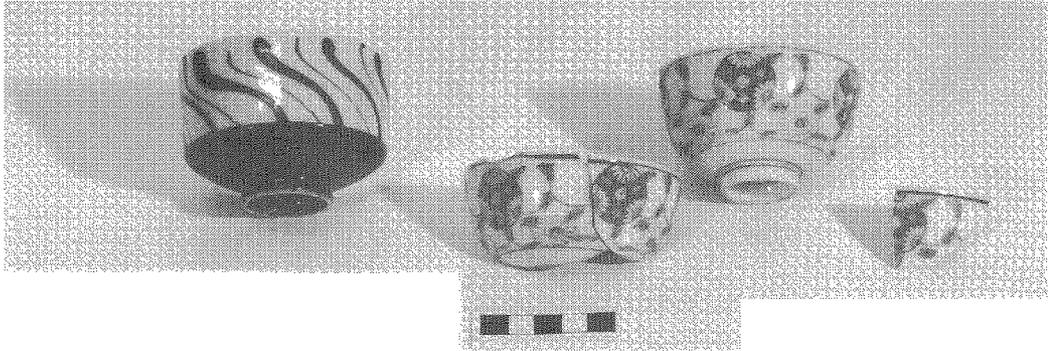


D-14 三内吉田家 五輪塔水輪



S-2
三内自治会館 矢穴石

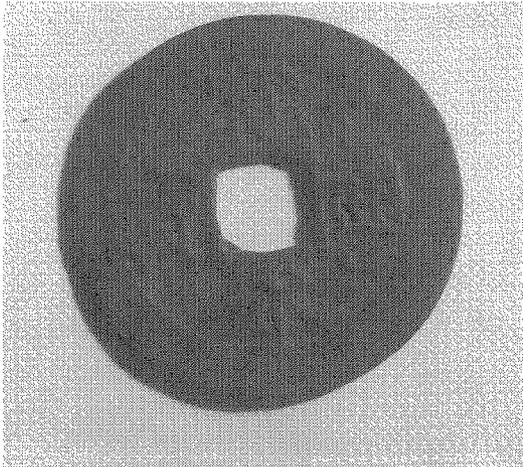
伝世品伊奈石製品写真



網代城山テラス採集
陶磁器 (現代)

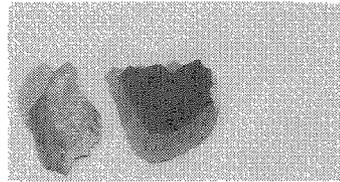
高尾境沢テラス採集
陶磁器 (近代)

高尾・網代採集遺物写真



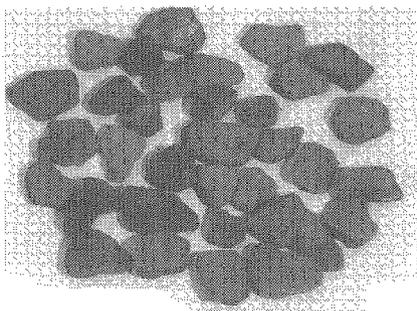
高尾境沢テラス採集
銅銭 (江戸時代、寛永通宝)

高尾境沢テラス採集遺物写真

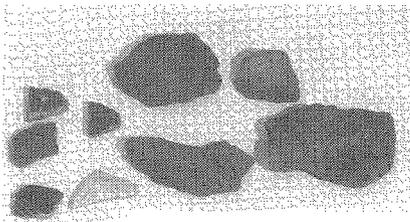


日の出町平井道場
福嶋清宅採集
陶磁器 (近世)

日の出町平井遺物写真

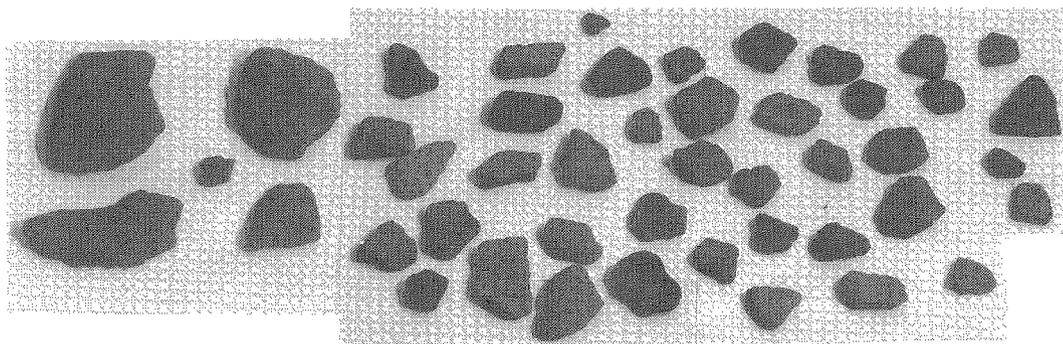


縄文土器



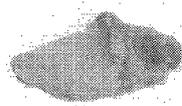
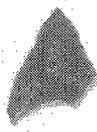
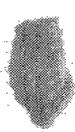
陶磁器

石器

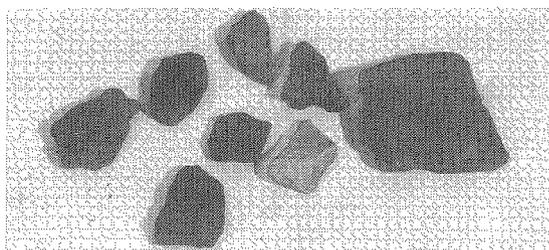


石器

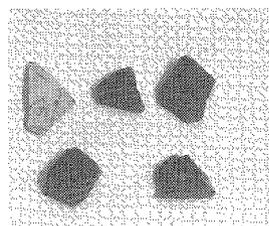
縄文土器



石鏃



縄文土器



陶磁器

横沢入東平遺跡採集遺物写真

図版 25



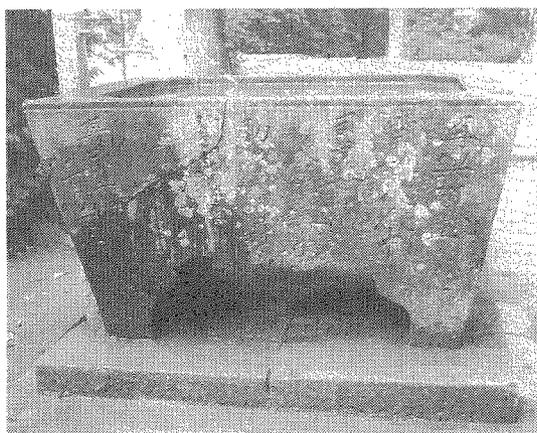
大悲願寺 歴代住職五輪塔



大悲願寺 五輪地蔵



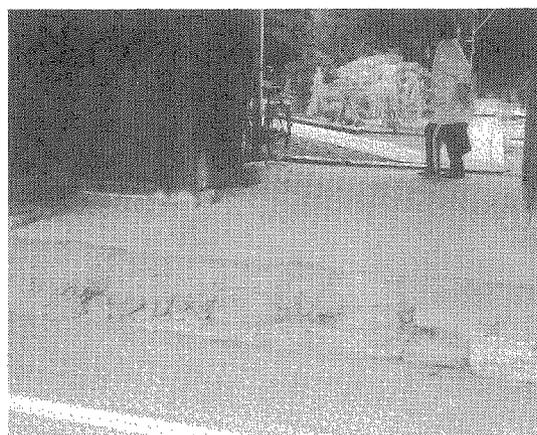
横沢五輪坂 五輪塔と五輪地蔵



大悲願寺観音堂前手水鉢 石工田野倉藤兵衛銘



大悲願寺 井戸枠



大悲願寺 長屋門石橋

図版 26



五日市町樽 八幡山南 樽石 矢穴跡 6×8 cm



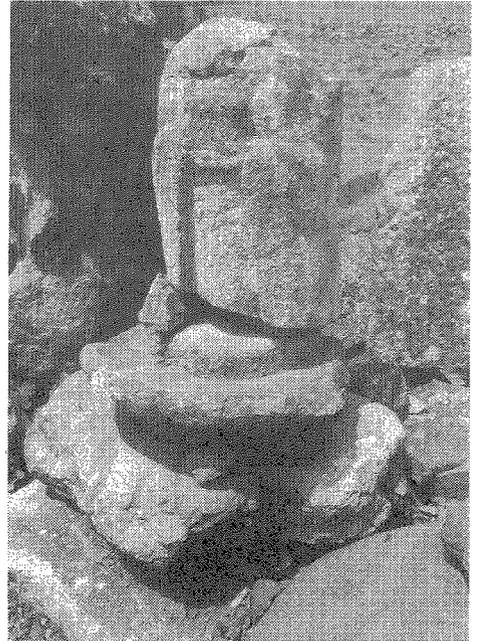
五日市町樽 樽規夫家 樽石 手水鉢



五日市町樽 採石場跡ズリ



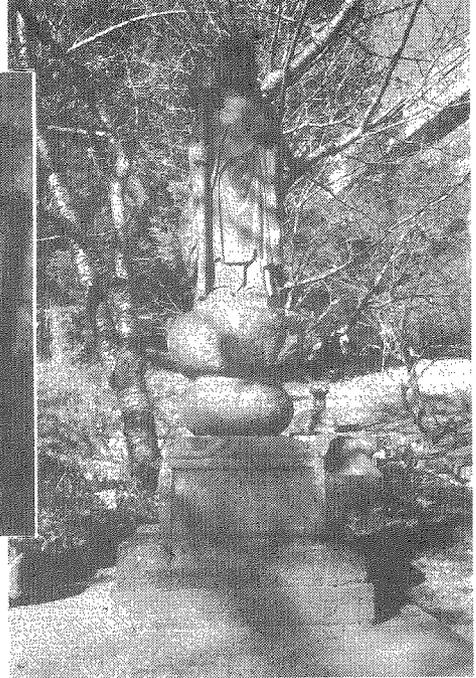
五日市町小机 福寿院入口 石造物群調査風景



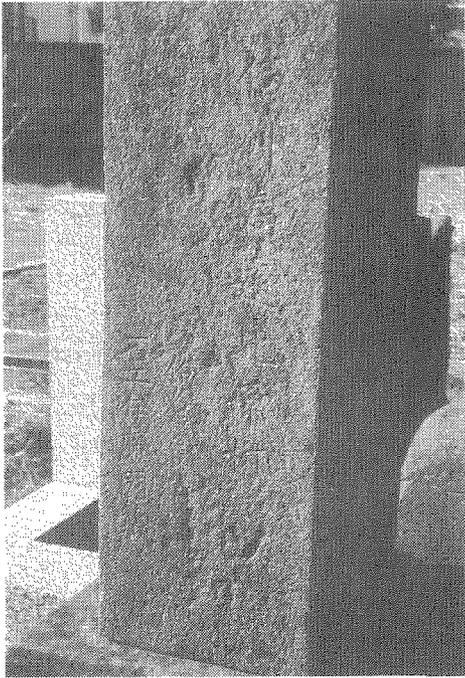
福寿院入口 茶臼（下臼）の上に地藏



五日市町山田 瑞雲寺の地藏



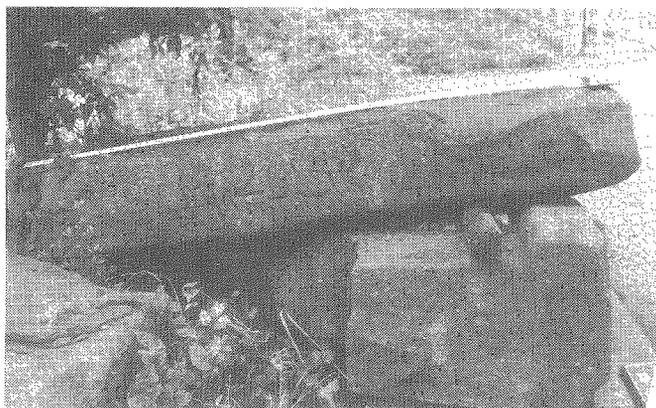
台座左面に 享保七壬寅十一月吉辰
佳山比丘 桂宝叟欽 記之
匠人 信州高嶋住
小兵衛 友右衛門



五日市町網代 禅昌寺の高遠石工本人の墓石

正面に 積相光善信士 右面に 天保十四卯□九月廿三日
左面に 信州高遠北原村 俗名 石工伊藤國藏

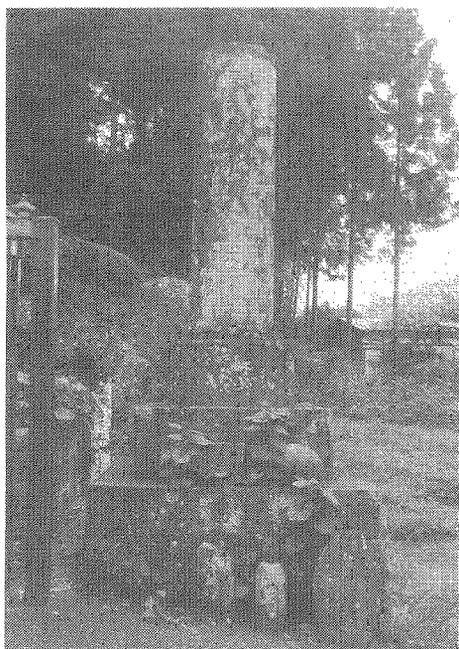
図版 28



日の出町公民館 南橋 橋桁 宝永七年



日の出町 宝光寺 青面金剛庚申塔

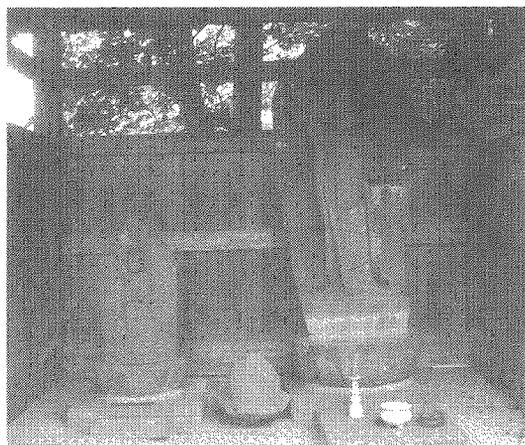


日の出町 宗劔寺跡 平井無辺供養塔

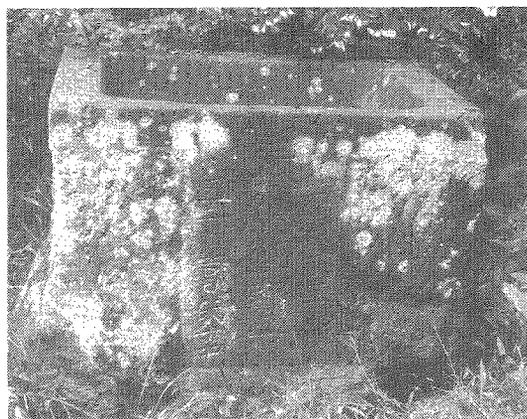


日の出町 宝光寺

図版 29



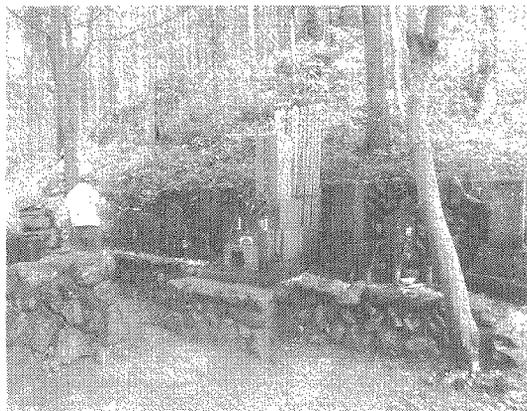
日の出町 子安不動 地蔵



日の出町 子安不動 安永十年手水鉢



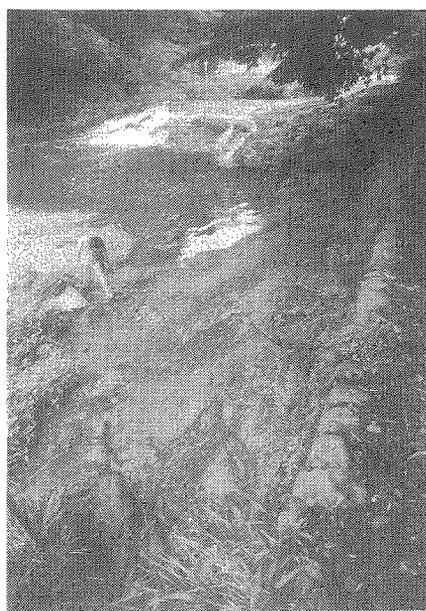
日の出町 子育地蔵



日の出町 川久保家墓地



日の出町宝光寺下 平井川 伊奈石露頭

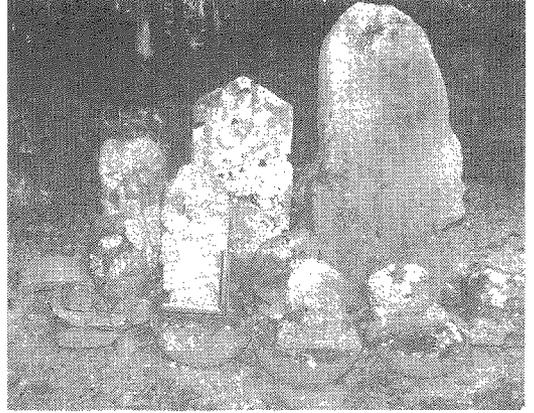


日の出町宝光寺下 平井川 伊奈石露頭

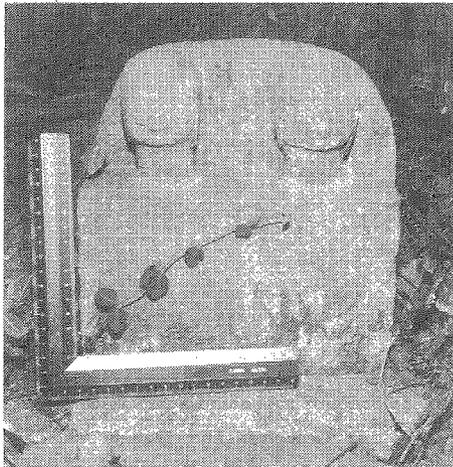
図版 30



桧原村 吉祥寺 五輪塔



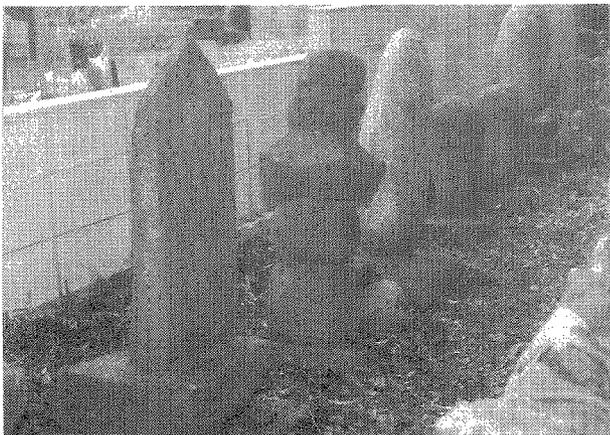
桧原村時坂 地藏堂 地藏他



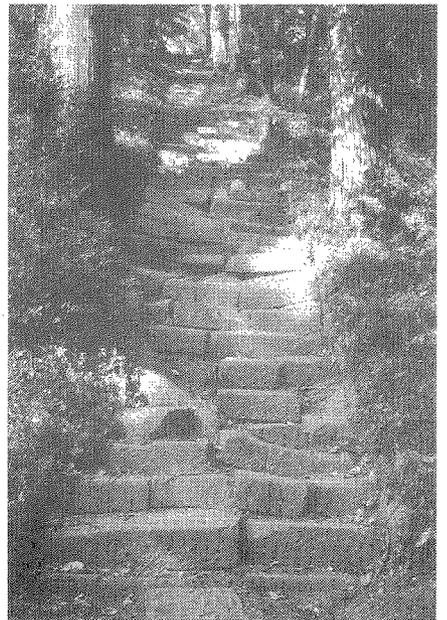
桧原村時坂 地藏堂 双体地藏



桧原村 湧泉寺跡 伊奈石 2基

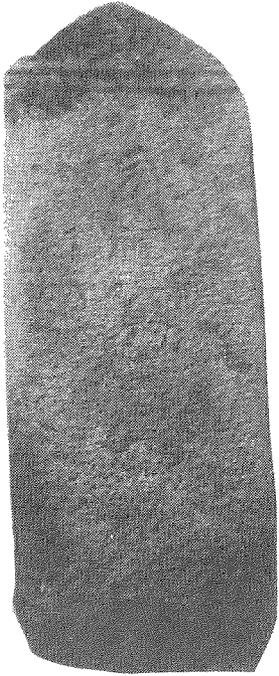


神奈川県藤野町 浄光寺 五輪塔

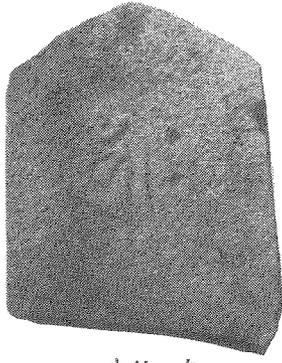


五日市町 三内神社 石段

図版 31



キリーク



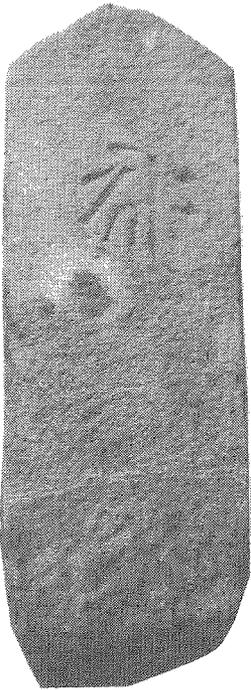
キリーク
二条線なし



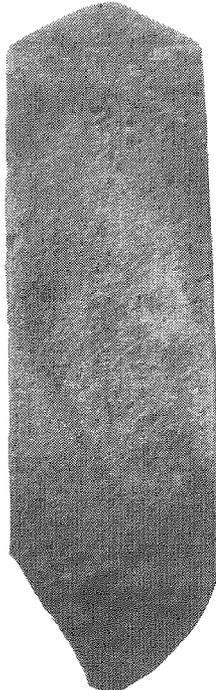
キリーク、サ、サク



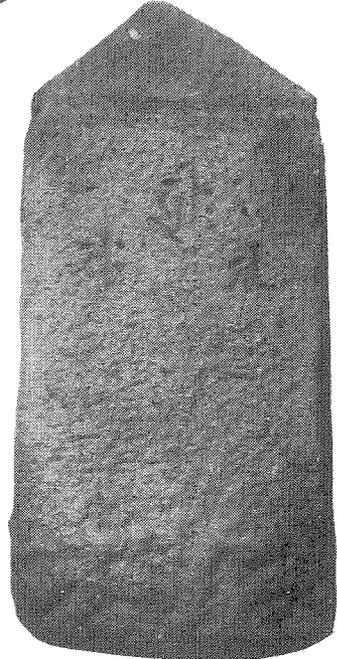
キリーク、サ、サク



キリーク



キリーク

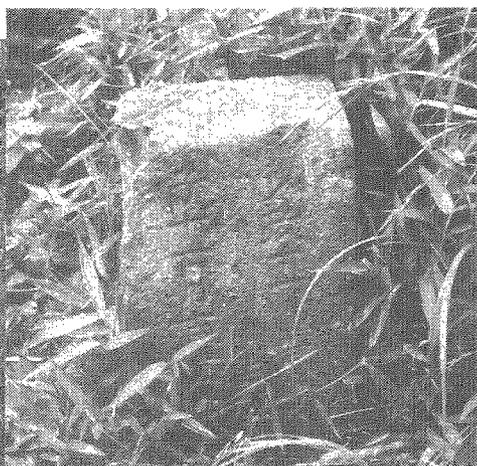


キリーク、サ、サク

秋川市菅生 山上家の伊奈石板碑



秋川市 小宮神社 石段



秋川市 小宮神社 石段下石柱
文久二年銘



八王子市 西笑院 伊奈石・七沢石墓石



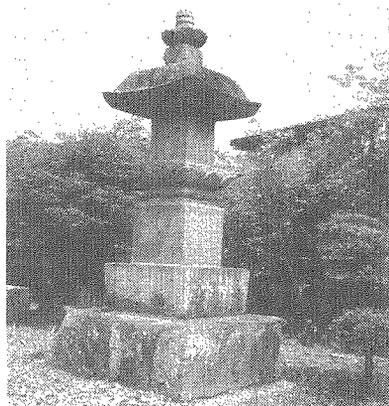
八王子市 滝山城跡入口 沢井家
伊奈臼上下 (六分画こぼれ目)



八王子市 西笑院調査風景



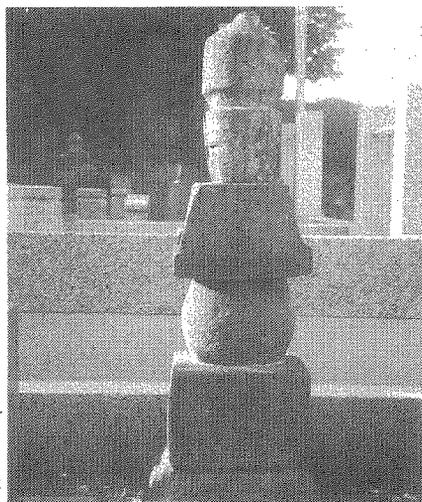
八王子市上川町
戸沢観音堂の
伊奈石板碑



八王子市上川町 戸沢観音堂宝篋印塔
(石工伊奈村金右門)



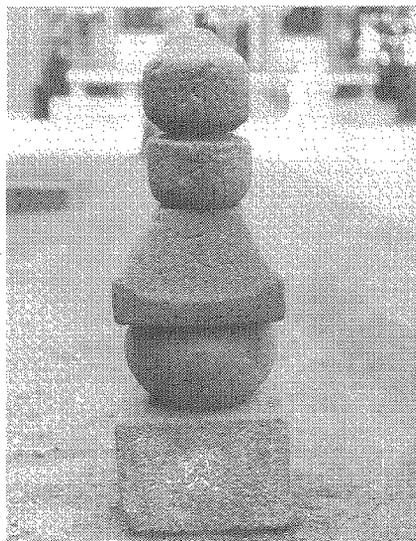
昭島市拝島町
竜津寺の
宝篋印塔
(伊豆石で補修)

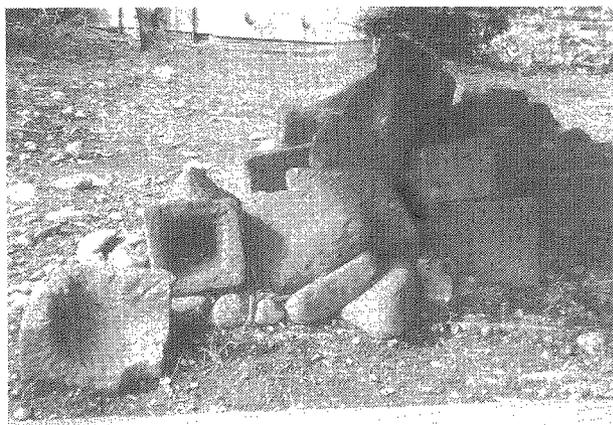


昭島市中神町
福巖寺の
五輪塔

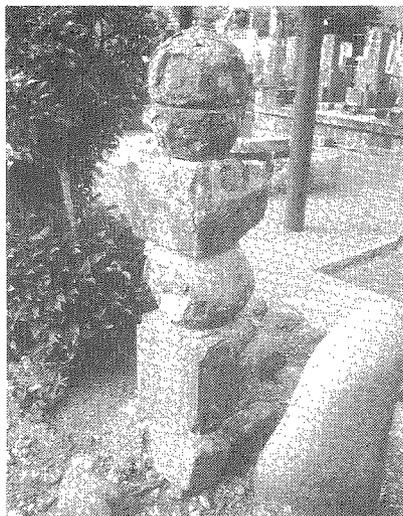


▲ 秋川市 野辺八雲神社の五輪塔 (応永七年十月九日) ▶

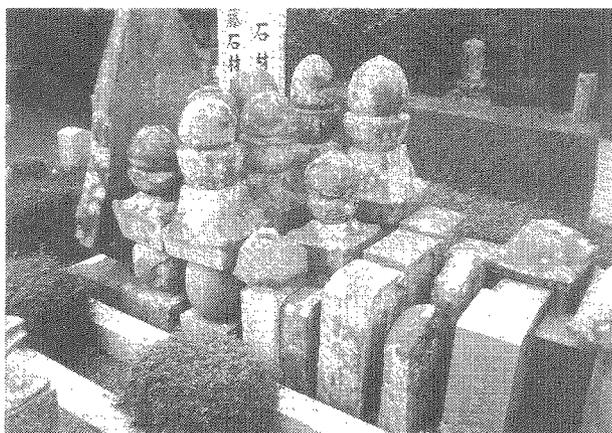




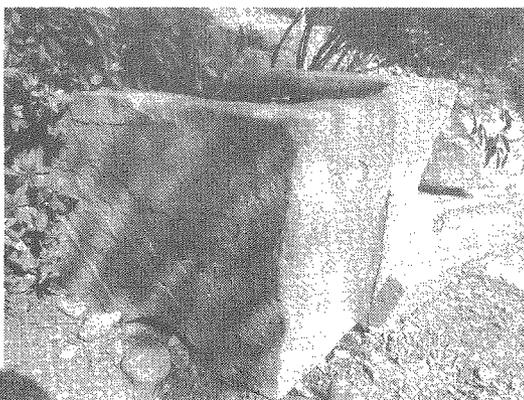
福生市熊川町内出 自治会館西側の石造物群



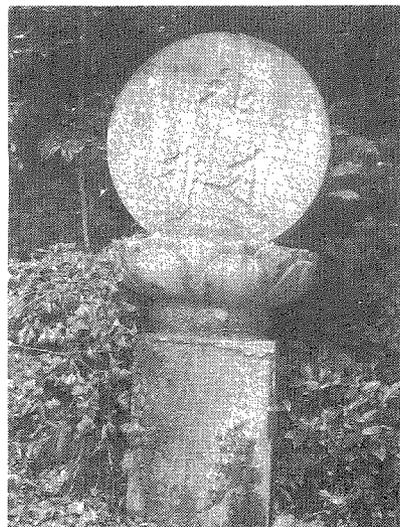
福生市熊川町 真福寺墓地の五輪塔
(□保2)



福生市熊川町 千手院の五輪塔群



昭島市 拝島大師の手水鉢



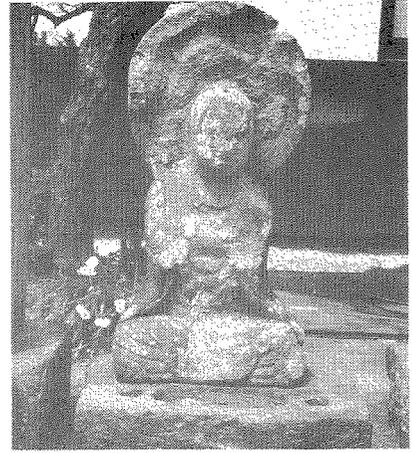
昭島市
拝島大師円形石碑
(阿弥陀三尊種子)

昭島市拝島町
普明寺板碑型墓石
(大日真言)





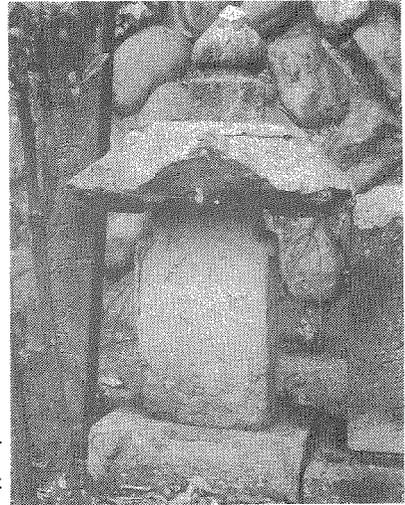
昭島市宮沢町 阿弥陀寺の五輪塔



昭島市中神町 福巖寺の地藏
(94. 5. 21撮影、後、風化進行して崩落)



立川市柴崎町
普濟寺の寶篋印塔
(明曆四、銘文のママ)



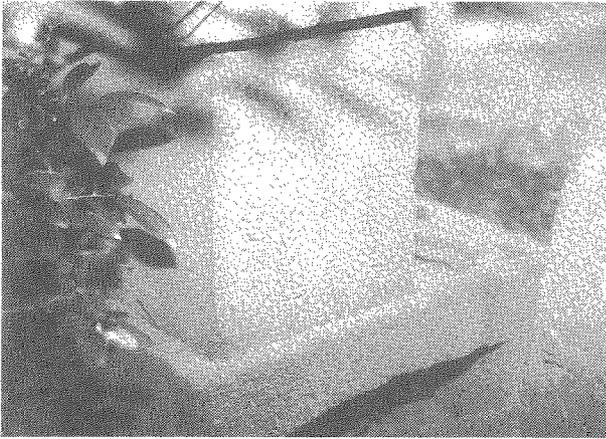
昭島市中神町
福巖寺の庚申塔



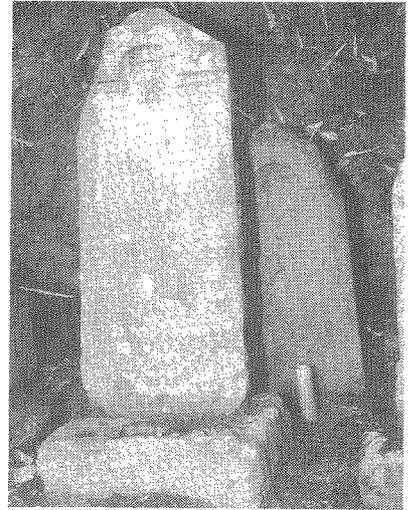
立川市柴崎町
普濟寺前辻の常夜燈
(礎石のみ伊奈石)



立川市柴崎町 普濟寺の庚申塔
(享保年間)



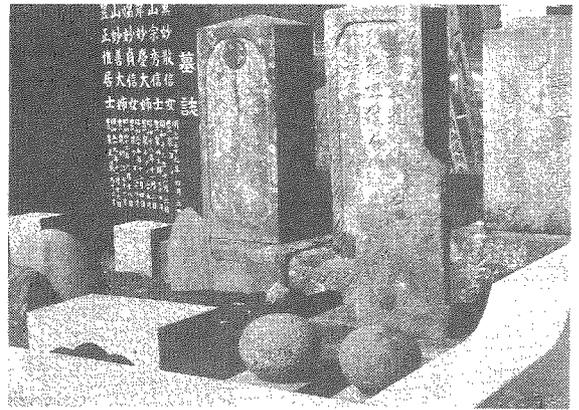
町田市 大泉寺 高遠石工銘石祠 (七沢石)



町田市 福生寺 伊奈石板碑型墓石



青梅市 即清寺
豊泉家墓地 伊奈石板碑

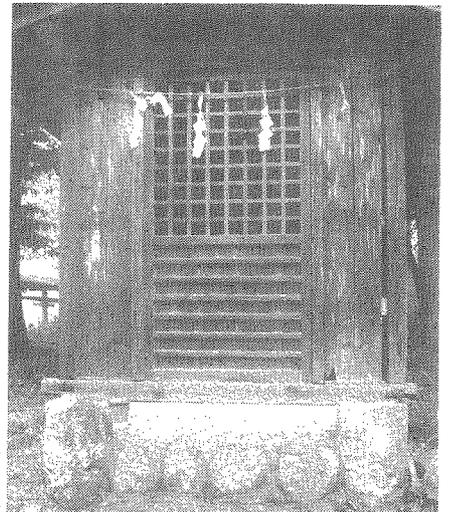


青梅市 即清寺豊泉家墓地 伊奈石板碑

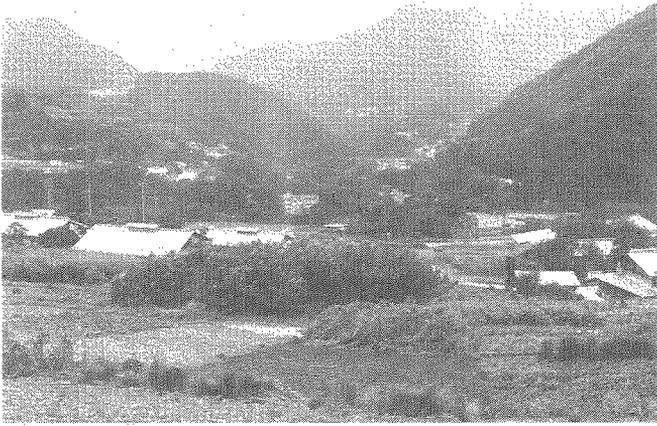


旗立て台

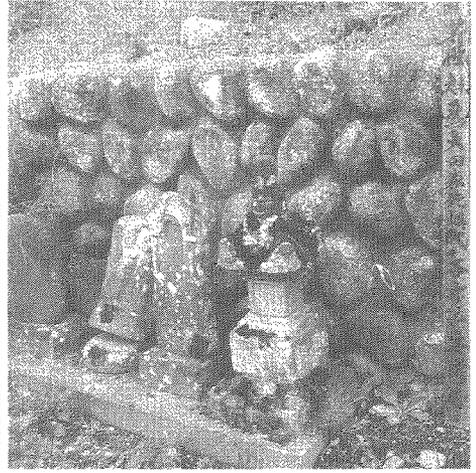
藤野町
石楯尾神社



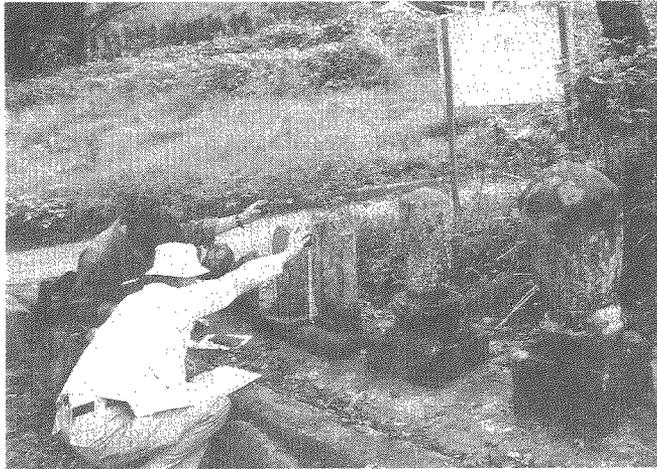
図版 37



上野原町欄原



上野原町欄原 瑞光寺



上野原町欄原 猪丸神社



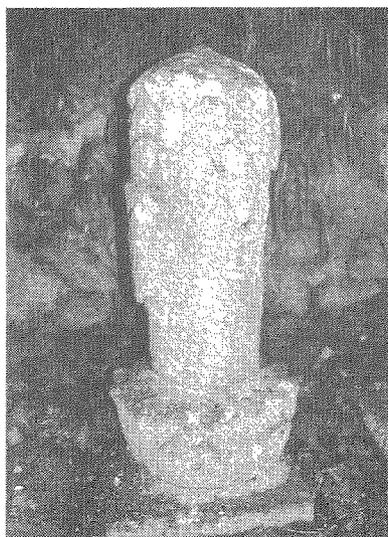
上野原町欄原 瑞光寺



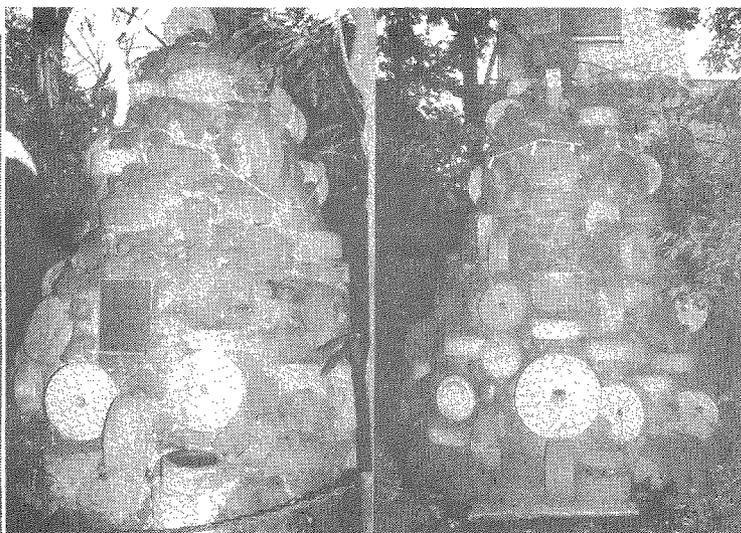
上野原町西原 洞泉寺



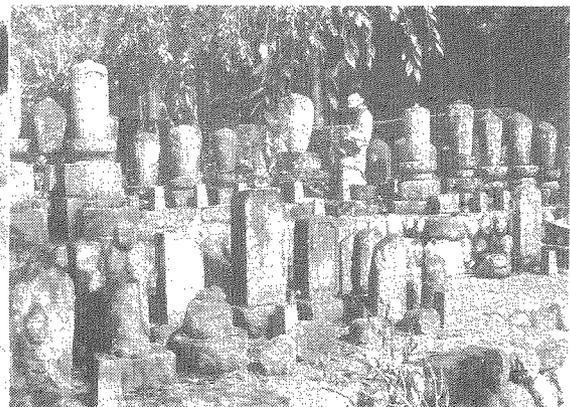
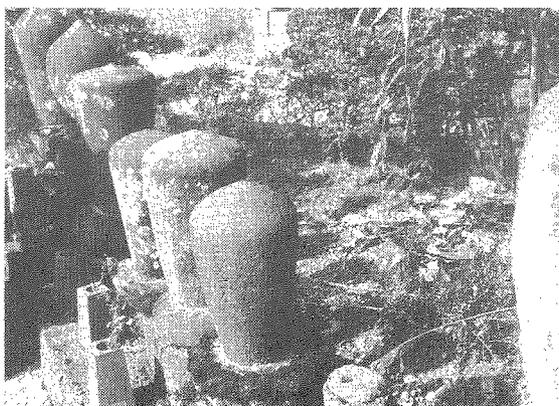
上野原町西原洞泉寺 宝篋印塔



上野原町桐原 地藏院



小金井市 小金井神社 白塚

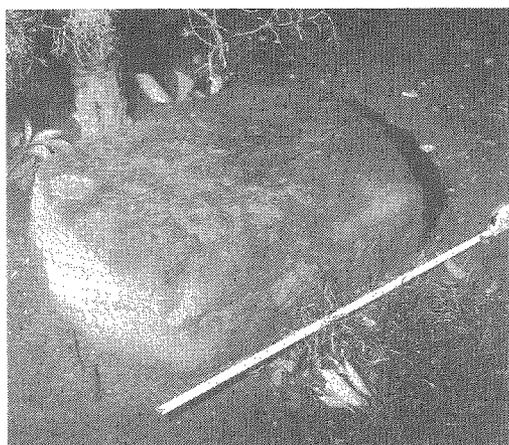


上野原町桐原 竜泉寺



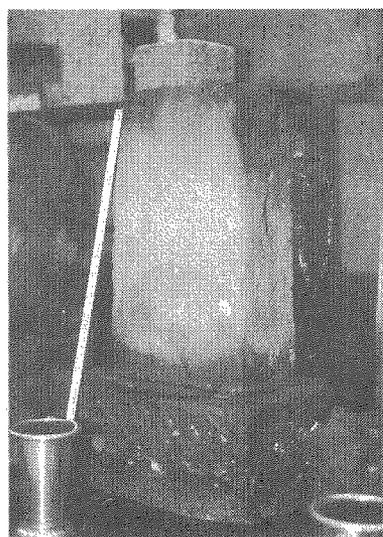
上野原町桐原 竜泉寺

図版 39

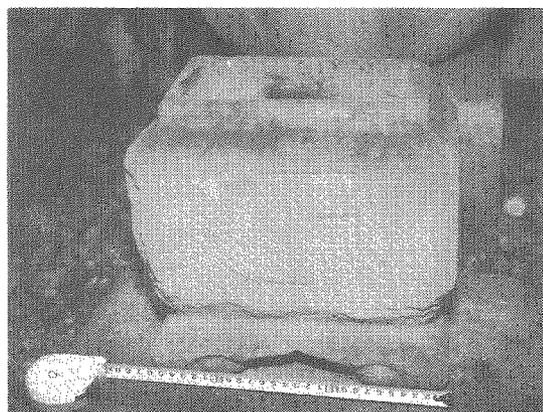


大田区 北野神社

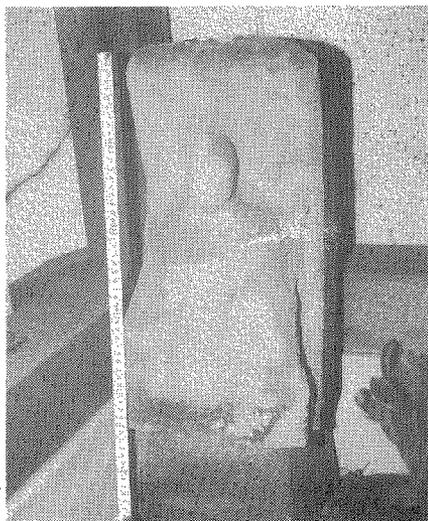
大田区
東陽院



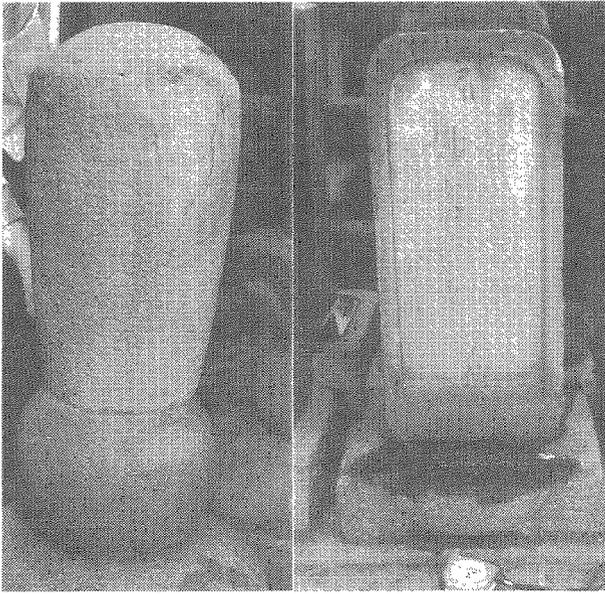
大田区
宝幢院



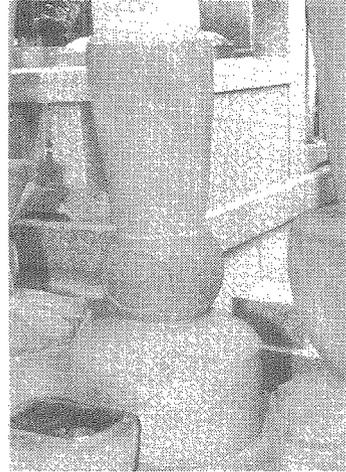
大田区 宝珠院



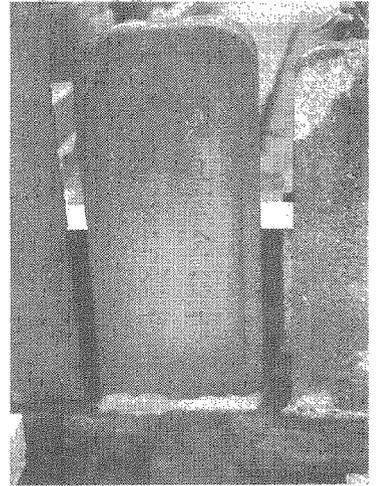
図版 40



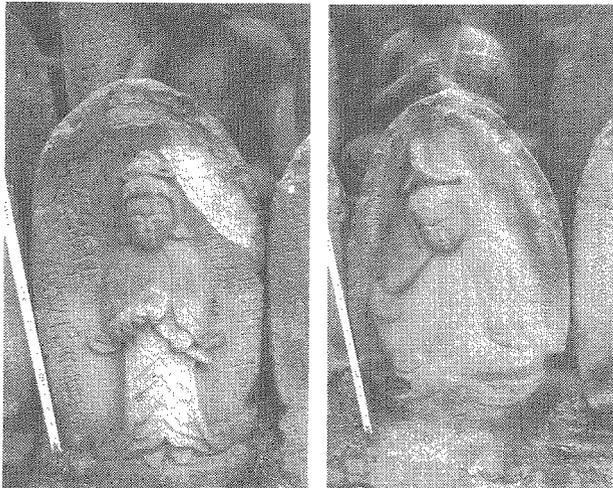
川崎市 泉沢寺



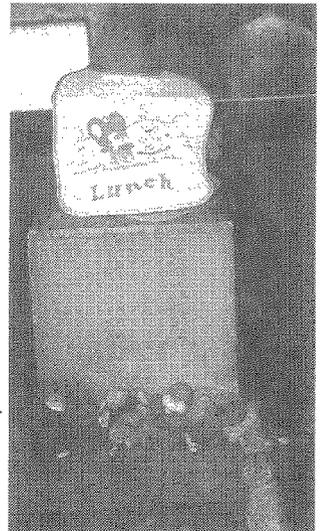
川崎市
泉沢寺



川崎市 平間寺



川崎市
平間寺



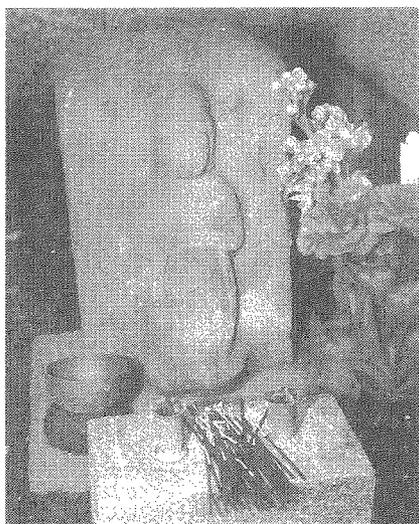
図版 41



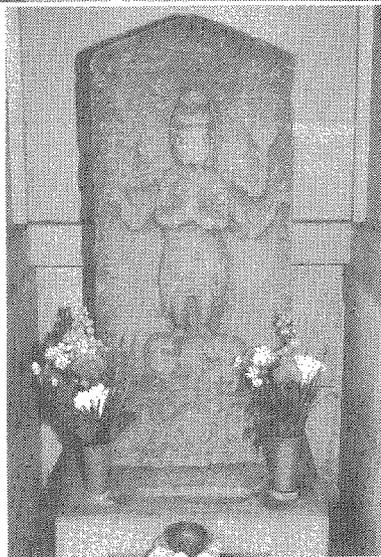
川崎市
一行寺



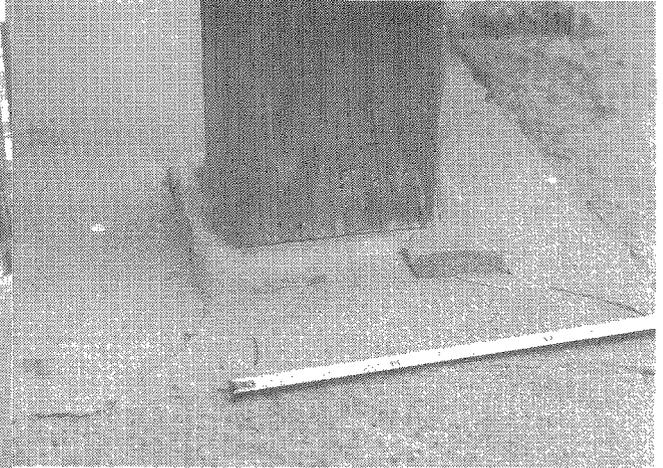
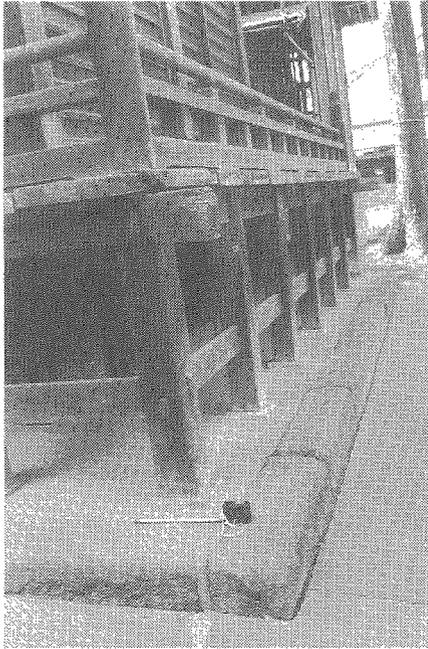
川崎市
大楽院 弁財天



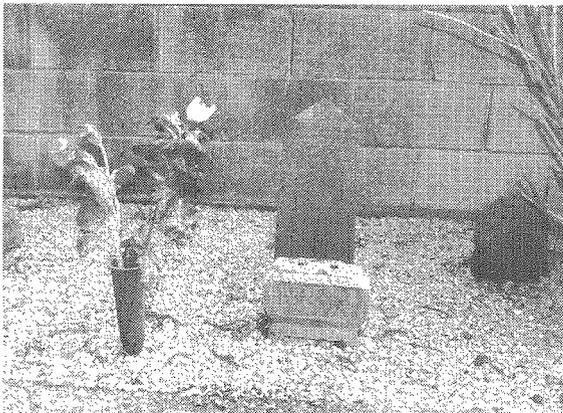
川崎市
大楽院



図版 42



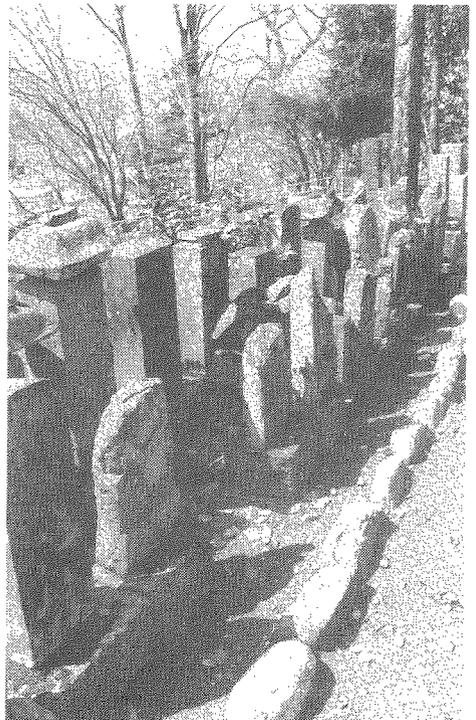
▲
◀ 飯能市 諏訪八幡神社 礎石



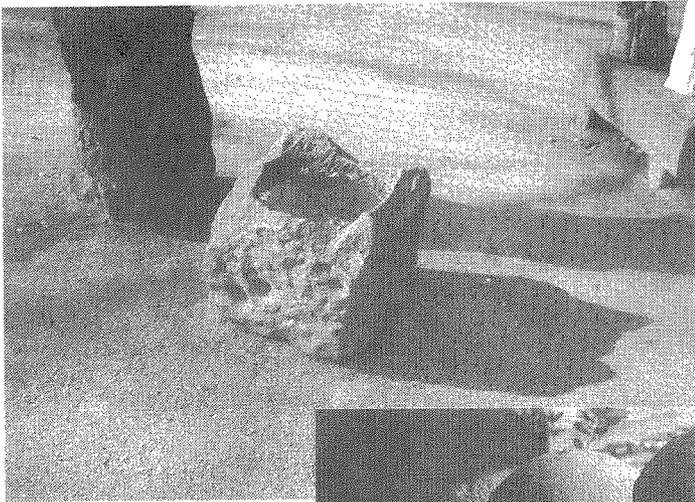
飯能市 宝蔵寺
伊奈石板碑



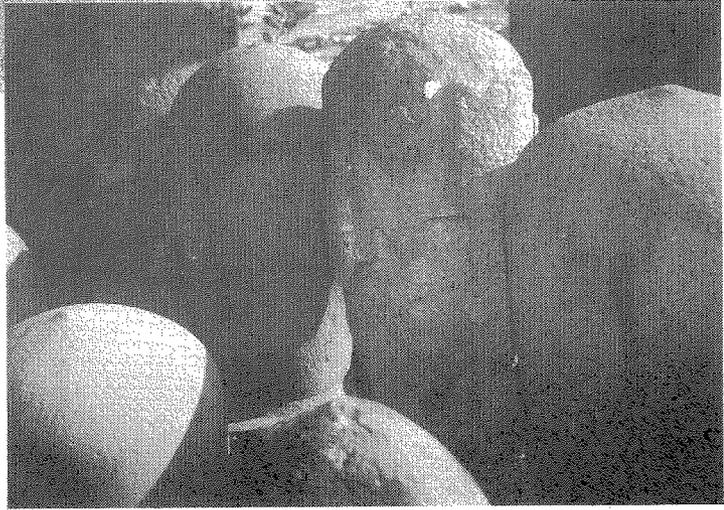
飯能市 無量寺 宝篋印塔



飯能市 能仁寺 伊奈石墓石 (手前崩壊)



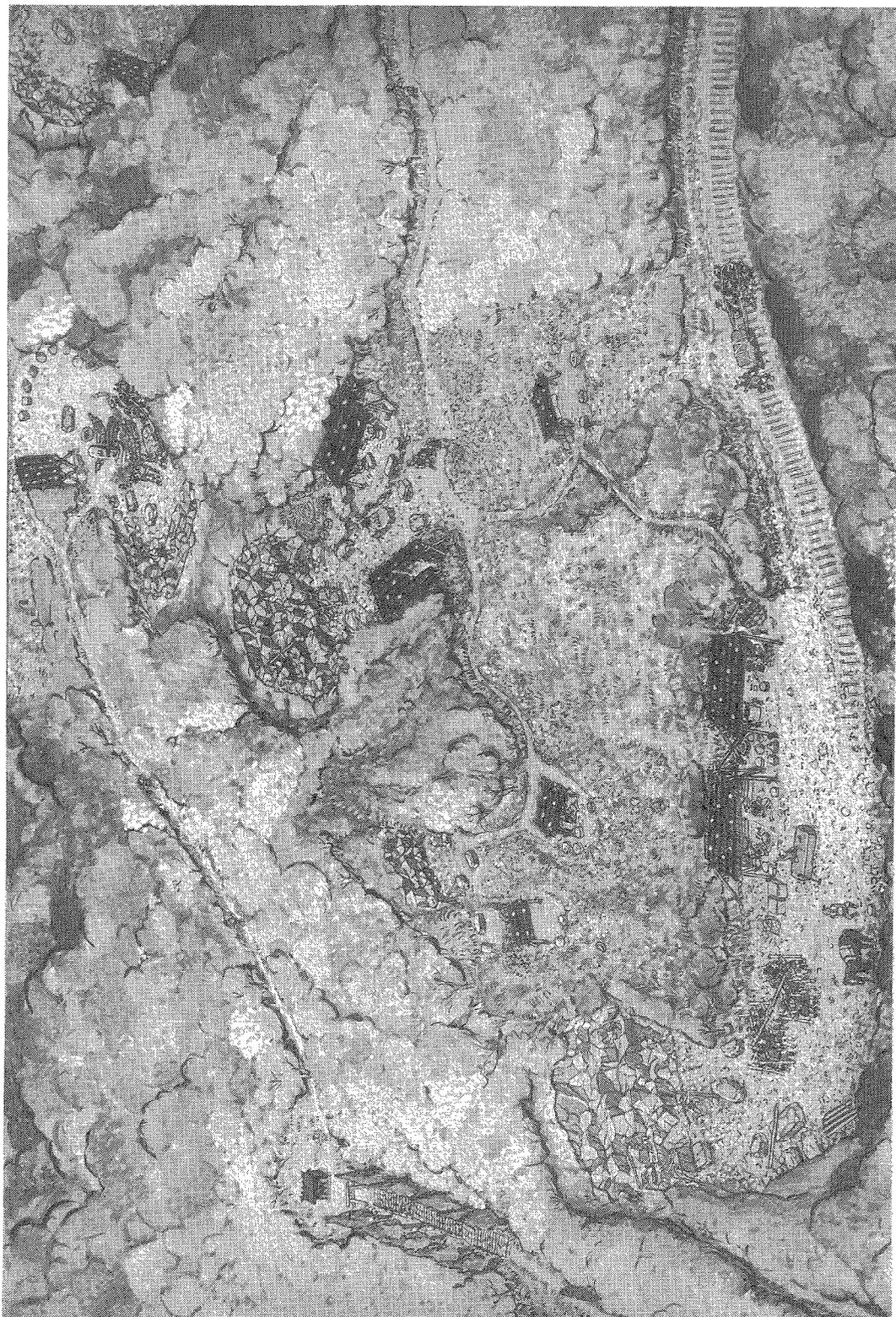
川越市 喜多院 手水鉢



川越市 養寿院 無縫塔



川越市 蓮馨寺 灯籠礎石

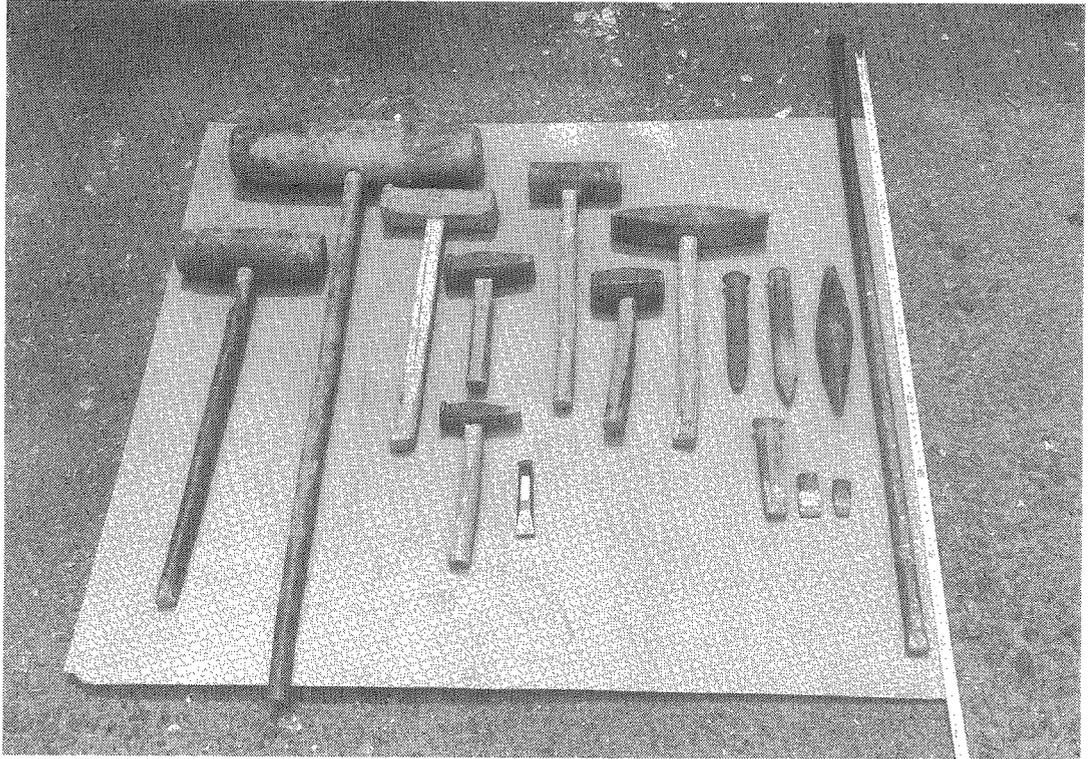


横沢入 天竺山東石切り場風景（江戸期）想像画 中村清作



五日市町高尾 瀬戸沢石切り場風景（江戸期）想像画 中村清作

図版 46



石工の道具 (高遠町北原石材)

